ブラジル学入門

中隅哲郎

無明舎出版

ブラジル学入門◎目次

考察のポイント、社会と文化　１２
成長過程を省略した国
意外に複雑な文化の歴史
奴隷に向かぬ低文化インジオ　２３
強制、拘束を嫌うカボクロ
奴隷用に狙われたグワラニー族
古い歴史ポルトガルの奴隷制　３３
根が深い労働嫌悪の風潮
働かないのが〝罪悪〟の北米
性的天分豊かな？　ポルトガル人　４４
進行する家庭崩壊の風潮

掠奪、遊牧型の植民地農業
勢威振るう〝マラジャ〟大地主　５５
個人、一族の利益が優先
今も昔も高い日本移民の教育熱
歴史的背景違う日・伯の教育　６６
教育の普及嫌ったポルトガル王室
日本と異なる基本的思考
同化しにくい民族の文化　７７
日本移民の歴史は異文化の相克
浸透するアングラ経済
エネルギーの爆発カーニバル狂乱　８８

蹴球は植民地政策の武器
地主と対立〃解放の神学〃　99
セルトン分析が理解の鍵
天国と地獄が交錯のセルトン
今も尾をひく〃一族戦争〃
東北伯の病弊は地方政治　110
カンガセイロは精神分裂症
熱狂的信者の大衆運動
今も残る救世主信仰　121
「カヌードスの乱」の不思議
軍事的にも天才のコンセレイロ　128
伝統的な兵隊への悪待遇

王室直轄だったアマゾン
狂乱頽廃のゴム景気到来　138
利益は外国商社が収奪
国際色豊かな無軌道ぶり
歴史的事実〝アクレ共和国〟　149
〝茶番〟ではじまった辺境開発
成果乏しい「悪魔の鉄道」
王室が独占した〝法材〟　160
跳梁するガリンペイロ
増えるアマゾンの貧民窟（ファベーラ）
深刻な貧民の都市大流入　171

〝ジェイチンニョ〞は裏街道
有名無実の日本移民制限法　１８１
信号無視は思考法の違い
儒教思想は成功の要因
条件良かったポルトガル
放置されていたブラジル　１９２
機を見るに敏のオランダ
世界に分布の日本人奴隷
日本人に驚嘆した宣教師　２０３
明暗さまざまスペインとの合併
多民族国家で共通の米、伯
入れそこなった〞苦力移民〞　２１４

厳しさに欠けた排日政策
実行されない国外追放令
勝ち負け抗争、日本的現象　224
排日は移民側にも原因が
農地取得は世界的例外　231
寛大な日本移民戦時措置
一業種集中は摩擦のタネ
国境を越える移民の子弟　242
〝出稼ぎ〟は送出国側が損
海外同胞にも冷たい日本人
〝喜捨精神〟の思わぬ効用　253

材木の好みにも文化の差
季節感乏しいブラジル人
歴史の珍事、王室のブラジル移転　263
時代錯誤の再植民地計画
皇帝の行動原理は王家の存続
強運の持主ペドロ一世　274
まかり通った奴隷密輸
多大な恩恵、二人の画家
茶栽培はブラジルが最初　284
〝現地調達方式〟の植民者
不可欠だった黒人料理人
多彩な黒人の米食文化

中南米にはない魔女狩り　２９８
激しさ欠くブラジルのテロ行為
失敗に終わったポプリズモ
モラル低い東北ブラジル体質　３０９
一八世紀まではインジオ語が主流
認知されぬブラジル文学
抵抗の文学〃民衆本〃の世界
こわい民衆の衝動的怒り　３２４
権威に反発する母系社会
現在も続く〃植民地〃体制
反米感情の弱いブラジル　３３４

愛国心薄い　〝よそもの〟集団
市民層抬頭で変化の兆し
〝いけにえ〟に狙われる日本　３４５
貴族趣味志向の上流階層
浄化変革は二一世紀に期待
あとがき　３５６
ブラジル歴史年表　３６１２

ブラジル概略図（地名は著者が本文中で使用している表記によります）

ブラジル学入門

考察のポイント、社会と文化

ブラジルの現状はひどいものだ。ほとんどの役所や公社で、考えられるありとあらゆる汚職や不正行為がはびこっている。

目下のところ、社会福祉院や保健省の不正・腐敗ぶりが話題になっているが、こう立て続けに腐蝕の構造が明るみに出されると、ひとつひとつの事例を追う気もなくなり（またか……）と思うだけになってしまう。とにかく、百鬼夜行どころか、白昼堂々と魑魅魍魎（チミモウリョウ）がまかり通るのだから始末がわるい。こういうことには慣れっこになっているブラジル人もさすがに怒り出し、徹底究明を望む声が高まっている。さてどんなことになるのだろうか。

国民の批判や非難が強くなれば、一時は影をひそめるかも知れぬ。が、根絶は難しかろう。ブラジルは昔からこういう国なのだ。

一九八九年、三九才のコーロルがお手盛り昇給の特権議

員や高級官僚など、いわゆるマラジャ族退治、汚職、不正の一掃をスローガンに大統領選挙にデビューした時の姿は見事だった。まさに若獅子の獅々吼を彷彿させる凛々しさだった。なにしろ長身白皙の貴公子である。それに身振り手振りで情熱的に社会悪を弾劾するパフォーマンスがまたよかった。対抗馬のルーラが労働者出身で、なんとなく垢抜けないのと好対照である。

小州アラゴアス州の知事にすぎなかった地方政治家のコーロルが、一躍大統領になれたのは、多分に貴公子的な風貌と情熱的なアジテーションにあることは間違いない。（このブラジルがそう簡単に良くなるものか）という、常識を持っている一般大衆にも（ひょっとして、この男なら……）との期待を抱かせたのである。だからこそ、就任直後に実施した、金融資金の三分の二封鎖といった無茶苦茶な強硬措置も国民はあえて甘受したのだ。

結果は惨澹たる有様だった。国家再建計画が遅々として進まないのはまだわかるとしても、出身州アラゴアスにおけるコーロル大統領や夫人一族の汚職、利権あさり、不正融資、便宜供与などの実態が次々と暴露されたのには唖然とした。更にネポチズム（縁故主義）による、一族の要職就任の実態がマスコミに暴かれ「アラゴアス共和国の出現」などと書かれるようになった。なんのことはない、マ

ラジャや諸悪の一掃をスローガンにしたコーロル大統領とその一族が実は諸悪の根源だったのである。そこで国民大衆は（ああ、やっぱりな……）といつもながらに繰り返す失望と幻滅を今回も味わったのである。まったくこれは「賽の河原」なので、今も昔も変わりはない。

汚職や不正を含め、ブラジルの国がどのような仕組みになっているのか解明してやろうと、身のほどもわきまえず「ブラジル学」に挑戦したのはずいぶん前のことで、最初思い立ってからなら二五年は経っている。

「盲、蛇に怖じず」のたぐいで、今から思えば冷汗ものだ。幸い仕事の都合でブラジル各地、とくに奥地（アマゾン熱帯・サバンナ地帯）を歩くことが多かったので、ありのままの現実をじっくりと「虫瞰図」的に観察するチャンスは多かった。

以来、今日まで「コケの一念」で営々と「ブラジル学」をやっている。現地を歩き、「虫瞰図」的に観察するやり方が正しいかどうかは知らぬ。しかし、私の場合この方法しかとれなかったのである。まだ納得のいく結論は出ていないし、歴史の因果関係が明確になったわけでもない。が、なんとなく、こうではなかろうかということが見えてきた。これからそれを書いてみようかと思う。

不完全なものを書くことは気がひけるのだが、筆者自身のタイム・リミットの問題もあり、そうそう先送りばかり

もしていられない。間違いや不完全な部分は、あとで別な人間が訂正したり、補ってくれればよいのである。

ここで取り上げる内容を簡単に説明しておこう。従来のブラジル論は、どちらかというと、政治的、経済的にとらえたものが多かった。むろんそれも大切だが、筆者はむしろ社会、文化面に考察のポイントをシフトしたい。少し詳しく言えば、まずブラジルを構成している、諸民族や人種の文化や伝統を取り上げるのだ。当然この中には宗教、言語、風俗、習慣、教育、価値観、気質などが含まれる。また、歴史的に見た大土地所有制度、奴隷制度を基盤にした植民地収奪体制や民衆の抵抗にも触れる必要がある。加えてブラジルの場合、地域差が大きいから、地域別の地形、気候、植生といった、自然環境や人口密度からのアプローチも大切である。更に密輸、麻薬、賭博その他の犯罪、贈収賄、不正蓄財や露天商ファーベーラ問題などのいわゆるインフォーマル・セクター（非公式部門）も外すわけにはいかない。これは意外に重要なファクターなのだ。

成長過程を省略した国

ブラジルには現在二六の州と連邦直轄区のブラジリアがある。二六州の中で文明的に遅れているのはやはりアマゾ

ン諸州だろう。アマゾンの中では州面積の大半が北半球に属している、ロライマとアマパが一段と遅れている。

なにしろこの二つの州は、つい先頃の一九八八年まで州として独立した機能を果たすことの出来ない連邦直轄領で、連邦政府の補助金で管理されていたのである。

ロライマとアマパの比較ということになれば、明らかに遅れているのはロライマである。

ロライマ州の首府がボア・ビスタで人口は六万。もっともロライマにはここよりほかに町らしい町はない。住民の多くはインジオ系である。はっきりインジオ系とわかる住民がこれだけいる町は他にはない。雑婚化が進んでいるブラジルとしては珍しい例だろう。

おまけにベネズエラ、ガイアナ（旧英領ギニア）、ブラジルの三国が境界を接するロライマ山（二七七二m）一帯のロライマ高地には、カリブ系インジオであるマクシ、インガリコ、タウレバン、アレクナ族が未開のまま残っている。

更に西隣りのロライマ西部からアマゾナス州、ベネズエラ山地にかけては独立した言語族のイアノマミ族の大集団があり、いまだに文明人との接触を拒否して孤高を保っている。要するにロライマはブラジル一の辺境なのだ。

さて、数年前にロライマに行った時のこと、ボア・ビスタのホテルでテレビを見ていたらローカル・ニュースを

やっており、ボア・ビスタの交通事故の多さが問題になっていた。なんでも、人口六万のこの町の交通事故件数は人口七〇万人のゴヤニア市（ゴヤス州首府）の事故件数に匹敵するのだそうだ。ボア・ビスタは起伏のほとんどない、見通しの良い草原につくられた町で道幅も広くゆったりとつくられている。常識的に考えれば交通事故は少ないはずである。

市の交通局長が交通事故多発の理由を次のように解説した。

「まず、自動車やオートバイのドライバーが交通規則を守らない。左折禁止だろうが、一方通行だろうが平気で突っ込んでくる。信号無視や駐車違反はあたり前だと思っている。それにこの町は平坦だから自転車が多いのだが、これが自動車の運転手に輪をかけたデタラメぶりでどうにもならない。もう一つ、道を歩く通行人が信号や規則をまったく無視して動いている。つまりこの町には交通秩序がないのだ」

インタビュアーが解決の方法は、と聞いたら、

「解決の方法……？　この問題の解決には教育しかないね。子供の時から学校で徹底的に交通規則やマナーを教え込むことが必要だろうね。大人？こりゃあダメだよ。死ぬのを待つばかりさ」

いや、おもしろかった。思わず大声で笑ってしまった。

まったく同感である。インジオの色濃いここの住民はまだ本当には文明社会に馴染んでおらず、文明生活に必要な基礎的な学習や訓練が出来ていないのだ。

自動車を運転するとか、自転車を乗りこなすというのは、身体で覚える技術の問題である。こういうものは、ある期間練習すれば誰でも覚える。むろん未開のインジオだって例外ではない。ところが法律とか規則といった文明社会のルールや文明社会の仕組みを理解するのは、そうかんたんにはいかない。やはり幼児の時から連続した学習が必要なので、この過程を省略した文明人などあり得ない。赤ん坊の時、狼に育てられた〝狼少年〟が、文明社会でいかにリハビリに励んでも、決して文明人になれないのと同じことである。

ロライマ州の例を述べたが、実はこの問題はブラジルや他のラテン・アメリカ諸国、あるいは第三世界の国々に共通している矛盾なのである。これらの国々は進化の過程を段階的に踏まずに、いきなり植民地社会から大衆消費社会に飛び込んでしまったのだ。

イギリスやフランスに代表される先進国は、まあ日本を含めてもよいのだが、封建国家から段階を迫って近代国家に成長している。国王と貴族が支配した封建国家から、民族ブルジョアジーとしての市民層が抬頭して市民革命を成し遂げ、絶対主義を廃して産業革命と議会制を確立する。

その後、数次にわたる選挙法の改正で、徐々に参政権を拡大するという、社会進化の順序を辿る。

ブラジルにはこういう過程は一切ない。奴隷解放後も永い間「文盲に参政権なし」と大衆をシャットアウトしていたのに、いつの間にか二〇才以上の男女は誰でも投票できるようになった。それが最近では一八才に年齢が下がり、一六才からでも本人が望めば投票権を持てるようになったのだから驚いてしまう。

意外に複雑な文化の歴史

よく言われることだが、ブラジルの歴史は一五〇〇年にペドロ・アルバレス・カブラルが発見した後のことを書けばよいのだからかんたんだという説がある。なるほどブラジルが発見された後も、三〇年ほどは放っておかれたし、その後カピタニア制度が導入されたり、それがうまくいかなくて総督府制がとられ、砂糖キビの栽培もはじまりもしたのだが、要するに一六世紀の間は大した動きはなかった。

その当時の事情を考えれば無理もないことで、ポルトガルにしてみれば、染料となるパウ・ブラジル（インドでとれるスオウ＝蘇芳の同属近縁種）以外、大した産物のない

ブラジルなどより香料貿易の拠点となるインドのゴアやモルッカ諸島の方がはるかに大切であり、少し下ってはマカオや日本との貿易の方が利益が大きかったのである。また、貿易と形影相伴って進出したカトリックの布教も、文明度の低い新大陸の住民より、アジア、とくに日本での布教はやり甲斐があった。

それにもう一つの事情としては、人口一二〇万人程度の小国ポルトガルは、正直言ってそう多くの人間をブラジル経営のために送り出すことが出来なかったのである。

ポルトガルが本格的にブラジルに目を向けるのはやはり一七世紀に入ってからである。つまり日本で言えば関ケ原の戦い以後で、ブラジルの歴史はかんたんだと言う根拠はここにある。

ブラジルだけに舞台を限定した植民地の経営や発生した事件だけを編年的に並べるなら、そうした見方も出来ぬことはない。しかし、それでは何故、今日、このようなブラジルが出来上がったかという、肝心な歴史の由来がわからない。

ブラジルの基層文化はおおざっぱに言えば、インジオ文化、ポルトガル文化、アフリカ文化が混じり合った、いわゆる「ルーゾ・ブラジル文化」である。新大陸の先住民族であるインジオの歴史や文化を調べるのは当然だし、アフリカ黒人がもたらした黒人文化の影響力も見逃すわけには

いかない。乱暴な話だが、かりにインジオや黒人はブラジル社会の形成に決定的な影響力を及ぼさなかったとして、インジオ、黒人の歴史をオミットしたにしても、宗主国であるポルトガルについてはそうもいくまい。

今日のブラジルが出来上がった歴史的な背景は主としてポルトガルにあるのだから、ポルトガルの歴史や文化の特徴を検証することはどうしても必要になってくる。

そうすると、ポルトガルやスペインのイベリア半島に最初に影響を与えた、ギリシャ・ローマの文化についてまず知らねばならないし、更に時代が下がって八世紀のはじめに抬頭し、急速に版図をひろげ、北アフリカから南イタリア、スペイン、ポルトガルを征服したイスラム勢力とその文化も調べなくてはならない。

キリスト教国のイベリア半島とイスラム教国のサラセンとは敵対関係にあり、事実、イベリアの悲願、レコンキスタは国土回復運動であると同時にキリスト教徒によるイスラム教徒追放闘争でもあったのだ。ところが、七世紀に及んだサラセンの永い支配の間に、イベリア半島はかなりの程度イスラム化してしまう。食生活の改善から建築技術、航海術までイスラムの息のかからぬものはないくらいなのである。ヨーロッパの後進国ポルトガルが、他の諸国に先駆けて大航海時代の一番乗りを果たせたのは、実はイスラムの航海術に負うところが大なのである。とすれば、イス

ラムとのつながりを調べることは不可欠になる。
スペイン、ポルトガルは一九八六年、ＥＣ（ヨーロッパ共同体）に加盟が認められ、名実共にヨーロッパの一員になったが、歴史的にヨーロッパとはみなされていなかった。
「ヨーロッパはピレーネ山脈に終わる」とか「アフリカはピレーネから」などと言われる。これは地理的にヨーロッパとアフリカの中間地帯ということも意味しているのだが、イスラムの影響力が価値判断の基準になっているとも言える。
だんだん話が逸れていくが、一口にブラジルの歴史といっても、こうしたプレ・ヒストリー（前史）が絡むから、存外複雑なのだ。そうかといって前史の部分を省略したら、ブラジルの実態がわからなくなってしまう。これに加えて、ブラジルは一九世紀から、ドイツ、イタリアを主とした各国移民が入ってくる。二〇世紀には毛色のまったく異なる日本人移民もかなり大量に入った。
移民が入れば、それに付随した移民の母国の文化が当然入ってくる。これがお互い交雑したり、年月を経て変容するからブラジルという国は、文化的には大変ややこしい国なのである。
ブラジルに限らず、植民地だった新大陸はどこでも同じだが紛争のタネもここから生じる。

奴隷に向かぬ低文化インジオ

ブラジルだけに限らないのだが、ラテン・アメリカ文化の具体的特徴の一つに、支配者階層、パトロン階層の怠惰と、労働に対する徹底した蔑視があげられる。もちろんイベリア半島から引き継いだ伝統である。

この労働に対する価値観の差が、南北アメリカの文化の差、奴隷制度に対する考え方の違い、ひいては国の発展力と経済力の差につながってくる。これは大変重要な問題なので後で詳しく述べるが、おもしろいことに「怠惰こそ美徳」の考え方はパトロン階層と原住民インジオに共通しているのである。そしてまさにそれが理由でインジオは奴隷になれなかったのである。

今から五〇〇年前、コロンブスが新大陸を発見した当時、北米に一〇〇万、中南米に一五〇〇万人のインジオがいたと推定されている。圧倒的に中南米が多い。このうちブラジルは二〇〇万位だったらしい。もっともこの数字は学者によって異なり、最低はローゼンブラットの三二八万、最高はボラーの一億人と非常に差がある。一億とは多過ぎると思うのだが……。

新大陸のインジオ（アラスカのエスキモー、北米のアメ

リカ・インディアン、中南米のインジオをすべて含む）は一応、北太平洋種族、北大西洋種族、南太平洋種族、南大西洋種族の四つの群に分類される。これは主として居住地域と身体的特徴によって分けたもので、この四群の他に南アメリカには超短頭のパンパインジオと、中、長頭の「古層アメリカ人」と称される古いタイプのインジオもいた。ブラジルの主流インジオであるツピー族は南大西洋種族に属している。こういう身体的特徴による分類とは別に、新大陸のインジオは文化レベルの差で分類するのが一般的で、この分類の方が社会的には重要であり、またわかりやすい。

新大陸のインジオは文化的には明らかに二つのグループに分けられる。

一つは、現在のメキシコ中央部から中米にかけての高原にいたアステカ、マヤ文明圏のメソアメリカ・インジオとインカ文化で知られる南米のアンデス・インジオのグループである。どちらのインジオも人口稠密で、農業を経済基盤とする階層社会を築いており、絶対権を持つ王、祭事を取り仕切る神官、王に忠誠を捧げる兵士とこれらの人を支える多くの農民がいた。このグループをここでは便宜上、第一グループと称しておく。

もう一つは、カリブ海諸島や大陸沿岸部、アマゾン平原の熱帯雨林、北アメリカの温帯草原に居住した、狩猟と採

取、あるいは低い生産力しかない農業を補助的に行っていたグループである。これを第二グループと称する。第二グループは「マンジョカ圏グループ」と言われることもある。マニオク、キャサバ、ユカなどとも呼ばれるイモ類はカリブ海からブラジル沿岸までの低地インジオの共通した主食だった。

第二グループがマンジョカ以外の栽培植物を持たなかったのに対し、第一グループの栽培植物は多様である。主体はトウモロコシで、これは紀元前三五〇〇年からメキシコ地方の中央高原で栽培がはじまっている。他にはアンデス原産のジャガイモ、オカ、オユコなどのイモ類、キヌア、ソラマメ、中央アメリカのサツマイモなどが主なところだ。

第二グループの低文化インジオは、第一グループの高文化インジオから徹底的に馬鹿にされ、疎外された。冷涼なアンデス高地に住むインカのインジオにとって、灼熱地獄（オマグァ）に素っ裸で住んでいるアマゾンのインジオなど人間のうちに入らないのだ。

しかし、立場を変えると、第二グループのインジオは余りにも自然環境に恵まれていたため、文化的に成長しなかったとも言える。

暑い熱帯雨林では豊富な水と有機分解の早さで植物はどんどん成長する。食料となる種子、果実も多い。鳥や獣も

たくさんいる。河には現在でさえこれだけ魚がいるのだから、以前は無尽蔵に近かったに違いない。その上、マンジョカは茎を切って土中に差込みさえすればよいのである。暑いおかげで衣服はいらないし、住居も簡単な小屋でよい。こういう環境では働く必要はないし労働という概念が生まれてこない。

労働には義務と拘束がつきまとう。しかし〝エデンの園〟にいたインジオには労働の意味がわからない。だから白人の入植者が第二グループのインジオを捕らえて奴隷にしてもうまくいかない。

いかに苛酷な制裁を加えても強制労働に従事させることが出来なかったのは、インジオ側に労働意識が見事に欠落していたからなのである。

労働者になれなかった第二グループのインジオは文明人に迫害され、たちまち絶滅に追い込まれてしまう。

強制、拘束を嫌うカボクロ

第一グループのインジオも、第二グループのインジオも、白人に征服されることには変わりがないが、歴史を眺めると、第一と第二では征服者に対する対応の仕方が違っている。

第一グループの文化程度の高い農耕社会のインジオは、

為政者が変わりスペイン人の支配になっても、徐々に新しい支配体制に順応し、労働者としても、社会の成員としても充分に役割を果たすことが出来た。

ところが、第二グループの狩猟、採取民族である未開インジオは、組織や社会のルールに対する訓練や理解がまったくないからどうにもならないのである。

第二グループに属するインジオを奴隷にする試みとして、砂糖キビ栽培に労働力を必要とした地方ではあらゆる手が打たれた。だが、どうしても労働者としては不適であり、代わりにアフリカの黒人奴隷が輸入されることになる。黒人が多く輸入されたのは、北米、ブラジルをはじめ、ジャマイカ、ハイチ、パナマ、キューバ、ガイアナ、スリナム、トリニダード・トバゴなどのカリブ海や周辺の地域で、北米以外はすべて砂糖キビの単作地帯である。これと対照的なのが第一グループのインジオ居住地域。メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアの中米諸国およびエクアドル、ペルー、ボリビアにはほとんど黒人が入っていない。もともとが農耕民族である第一グループのインジオ居住地域では、あえて黒人を入れる必要はなかったのである。

現在ブラジル領アマゾンにいるインジオは一六〇グループ、二〇万人である。よくもまあ減ったものだが、これでもブラジルはアマゾンという広大な未開発地域があったか

ら残ったので、第二グループのインジオが生き残っているところは他にはない。

カリブ海諸国では純粋のインジオはもちろん、混血のインジオさえいない。一番早かったのはキューバで、スペイン人が入植してから五〇年足らずで絶滅してしまった。

ブラジルには純粋のインジオは二〇万人ほどしかいないのだが、インジオの血は現在でもアマゾンの住民の間にかなり色濃く残っている。黒人やヨーロッパ人の血も混じっているが、地域によっては八〇％以上インジオの血と推定される住民もかなりいるのだ。

この、通常カボクロと称されるインジオの血の濃い住民も肉体労働を嫌う。第二グループ・インジオの労働嫌悪はなにも昔だけに限ったことではない。

しかし、よく観察すると、彼等は労働を嫌うというよりも労働につきまとう強制と拘束を嫌うのである。

私はかつてアマゾンで製材工場の責任者をしていたことがある。従業員数は三〇〇人という、この地方では大きな工場である。製材工場というのは、貯木池よりの原木引揚げからはじまって、帯鋸による大割り、丸鋸による小割り、寸法による小口切り、それに各セクションによる廃材、オガクズ出し、製材品の防虫剤タンクへの浸漬、乾燥場への搬出まで一貫した流れがある。

この工場は設備が二セットのツーライン・システムを採

用していた。こういう流れ作業のシステムは途中のどこが止まっても全体が動かなくなってしまう。

製材工場などというものは、一部の機械オペレーター以外は特別な技術はいらぬ単純労働である。

給料は日給計算で、毎週土曜日に支払われる。労働法にもとづいて月曜から土曜日の午前中まで続けて働けば、それにボーナス分として更に一日分が加算される仕組み。

ところがこの工場、月曜日に二セットの製材ラインが両方共に稼働することがついぞなかった。

従業員が欠勤するので二ライン動かせないのである。これには頭を抱えたが方法はないのだ。

カボクロはインジオではないから、働かなければメシが食えぬぐらいのことは知っている。それに連中はインジオのように原始林の中で自給生活を営んでいるわけでもない。

小さいとはいえ一応町に住んで、食料、衣料その他必要生活物資を町の商店から買っている。そのためには働いて金を稼ぐ必要のあることも充分わかっている。

しかし、働くのが嫌いなのだ。時間も拘束されるし、流れ作業では手を抜くわけにもいかない。

幸い、土曜日に貰った給料で買った食料がもう二、三日分はあって家族の食い分は確保できている。

それに大好きなカシャッサ（火酒）がもう二本もある、と

いうことになれば、（仕事なんざぁ、おかしくて出来るか……）ということになってしまう。

月曜日に休めば、ボーナスの一日分も貰えない。二日分の給料がふいになってしまうのだが、誰にも制約されず、のんびり自由に振る舞える魅力にはどうしても勝てないのだ。

これも一種の〝月曜病〟なのかも知れない。

奴隷用に狙われたグワラニー族

ブラジルでは一六世紀後半から、砂糖キビ栽培に伴う黒人奴隷の輸入がはじまるが、一六世紀を通じて入ってきた黒人奴隷の数は僅か四万人程度にすぎなかった。

この時代、ポルトガルの商人が奴隷貿易を独占しながらもブラジルに黒人が余り入らなかったのは、一つには奴隷商人にとってはブラジルよりスペイン領植民地に売った方がはるかに儲けになったからである。もう一つは、ブラジルではグワラニー族インジオを奴隷化する便法が考えられて、実際に試みられたという事情があるのだ。

一六世紀の末から一七世紀の後半にかけて、サンパウロを中心とした地方からバンデランテスと称される奴隷狩りや金、ダイヤモンド探しを目的とした遠征隊が活躍する。

そして、現在のブラジル、パラグワイ、アルゼンチンの三国国境周辺にあったグワラニー族のレドゥソン（イエズス会神父による教化部落）を執拗に襲い、捕えたインジオを奴隷にした。

一六世紀の後半から一七世紀の前半にかけて、バンデランテスにより捕えられたグワラニー族は二〇万とも三〇万とも言われている。バンデランテスは何故、内陸部に住んでいるグワラニー族を狙い打ちにしたのだろうか。この理由はグワラニー族自身の資質の高さによるところが大きい。つまり、グワラニー族は熱帯低地のインジオの中ではもっとも文化的に進んだ部族であり、狩猟、採取から農耕に移行しはじめた唯一のインジオだったからである。グワラニー族も基本的には狩猟、採取民族である。だが、それだけに終わっていたのではなく、一六世紀の半ばには農耕も開始しており、トウモロコシ、マンジョカ、サツマイモ、フェイジョン、カボチャ、棉などの栽培を焼畑農業で行っていた。原始的な道具ではあるが土を耕す鍬に似た農具もあり、種播きは女の仕事というような分担も一応決まっていたのである。

こうした農業のやり方は、アンデス高地の第一グループのインジオから伝播したもので、現在のボリビア領、スクレ、ポトシからピルコマョ河を下ってパラグワイ河に出るルートで伝わったことがわかっている。グワラニー族は、

言うなれば第一グループの高文化インジオと第二グループの低文化インジオの中間に存在する、いわば第三グループのインジオなのである。

バンデランテスがグワラニーを専門に狙ったのも、グワラニーなら砂糖キビ栽培の労働者として使えると考えたからに他ならない。そして、その考えが正しかったことはバンデランテスがグワラニー狩りを諦めてから、イエズス会の指導の下で一五〇年にわたってユートピアの「グワラニー共和国」をつくったことでも証明される。

三〇の教化部落、一五万人のグワラニー・インジオで構成された「グワラニー共和国」を運営するイエズス会は、いかにインジオを効率よく働かせるかで苦労した。

最初は徹底したスペインの商業主義を取り入れて〝アバンバエ〟（家族の所有）システムを採用してみた。これは家族単位に土地を与え、収益の一部を家族に還元するやり方である。利で釣る方法だが、見事に失敗した。インジオには文明人のような物質に対する欲望がないから、利では働かないのである。そこでイエズス会は次の手として〝タバンバエ〟（グループの所有）制度をとってみる。グワラニー族は未開の時代、二〇～三〇家族のグループからなり一人の酋長によって統率されていた。これを利用し、グループ別に土地を与え、酋長に監督させて働かそうとした。これも駄目だった。インジオには働いて私有財産を増

やすという観念が欠落している。
だから自分たちが食べるのに必要な労働はするが、それ以上のことはしない。
困ったイエズス会は今度は戦術を変え、〝ツパンバエ〟のシステムをとる。ツパン（神）バエ（所有）で、家族の為でもグループの為でもなく、神の為に働くのである。
これはうまくいった。土地は神の所有であり、神が労働と生産を欲するのだから、いやでも働かざるを得ない。〝ツパンバエ〟システムの採用により、生産は飛躍的に上昇する。
「グワラニー共和国」は、一七五五年からはじまるポルトガルの宰相ポンバル侯爵の弾圧で崩壊してしまう。グワラニー戦争で教化部落のインジオの大半は殺され、イエズス会士は追放される。
「グワラニー共和国」は熱帯低地のインジオが組織的に労働した唯一の例でもあるのだが、スペイン領だからこそユートピアが一五〇年も続いたので、王権の強いブラジルではイエズス会にこれだけの力はない。
三〇の教化部落はすべて破壊され、壮大な石造りの建物も瓦礫となった。現在、見られるのは三カ所にすぎない。

古い歴史ポルトガルの奴隷制

よく知られているように、聖書にある「エデンの園」は涸れることのない泉や食べ物をはじめとするあらゆる物に満ち溢れ、労働などはまったく必要としない理想郷であり、パラダイスである。

ところが、アダムとイブが禁断の実を食べたが為に楽園を追放され辛い労働を余儀なくされる。つまり、労働は人間の原罪ゆえに神からかけられた呪いなのである。この思想はキリスト教社会だけでなく、同じセム族のイスラム教社会にも共通しており、エデンの園におけるアーダム（アダム）とハワー（イブ）の楽園追放の話はイスラム社会にもある、というかむしろ労働蔑視はイスラム社会において強烈なものがある。

プロテスタントにおける「労働神聖説」は一六世紀の宗教改革以降に出現した新しい思想で、ヨーロッパでは伝統的に肉体労働は悪であるとの観念が一般的だった。

古代ギリシャの詩人ヘシオドス（前七〇〇年頃）は、その著作「労働と日々」「仕事と日々」の中で「労働（農耕）は恥ではない。怠惰こそ恥である」と怠け者の弟ベルセスを戒めている。

ということは、既にこの時代から労働を悪とする通念があった証拠で、それが奴隷制のはじまる大きな要因となっている。

ギリシャの都市国家（アクロポリス）の市民は本来戦士であったから、生産的労働に携わるのは奴隷の役割だった。あらゆる肉体労働はもちろんのこと、家庭教師、理髪師、外科医も奴隷の専門領域で、アテネでは警官も奴隷だった。もっともこの場合、警官は個人の奴隷ではなく国家の奴隷である。

このオーソドックスな奴隷制は、ローマ帝国の版図拡大と共に各地にひろまっていく。

この時代の奴隷は戦争による捕虜とか犯罪者、捨て子などで、初期には借金のカタになった債務奴隷も存在した。イベリア半島は紀元前一世紀から紀元四世紀まで、五〇〇年にわたってローマ帝国の支配下に置かれるが、この間に伝統的なギリシャ・ローマの奴隷制を継承する。

一方、七世紀になるとイスラム教の予言者マホメットがアラビア半島のメジナに教団国家をつくり、たちまち大発展を遂げる。特に七世紀後半から八世紀前半のウマイア朝時代の拡大はめざましく、東はインドから西はアフリカの地中海沿岸地方、イタリア南部からイベリア半島にまで勢力を伸ばした。この時にイベリア半島に居座っていた西ゴート族は追放される。イベリア半島を支配したイスラム勢力は、人種的にはアラビア人とムーア人（イスラム教に改宗した北アフリカのベルベル人の混血）が多かった。

スペイン／ポルトガルはイスラムとの対決の内にレコンキスタ（国土回復運動）を成就するわけだが、ポルトガルで五四〇年、スペインでは七八〇年もの間イスラムの支配を受けており、文化の領域ではイスラム化が相当進んだ。奴隷制もそうだし、労働忌避も同様である。

スペインとポルトガルは同じような体制の国なのだが、奴隷に対する考え方はやや違い、ポルトガルの方が人種差別がより少ない。

これは二つの理由に起因している。一つは、イスラム支配の時代、ポルトガルの方へより多くの有色ムーア人が入ったことである。もう一つは、一五世紀のはじめ、大航海時代のはしりの時代になると、エンリッケ航海王子の好采配でポルトガルのアフリカ西海岸の探検が進み、アフリカ黒人が奴隷として入ってくるようになったからである。

ポルトガルに第一号の黒人奴隷が入ったのは、公式には一四四二年とされる。以降、黒人奴隷の輸入は飛躍的に伸び、一六世紀に入った頃はポルトガル人の家庭で黒人奴隷を置いていない家はない、と言われるまでになった。

有色のムーア人や黒人がポルトガルに入り雑婚化が進むと、ポルトガル人の有色化が起こってくる。自分自身、有色の血があるのだから「奴隷は人種的に劣等だから奴隷になるのだ」という論は成立しない。

ポルトガル商人は奴隷商としては大ベテランで大量の黒

人奴隷の他、一五二〇年代にはインド、南アジア、シナからも奴隷を買いつけている。要するにポルトガルという国は、ギリシャ／ローマの古代奴隷制からイスラムの奴隷制をも引き継ぎ、中世の黒人、アジア人奴隷、近世の南北アメリカ向けのアフリカ黒人奴隷と一八五〇年まで一貫して奴隷とかかわった国なのだ。

ここがアングロ・サクソンの奴隷制、奴隷観と決定的に違うところで、アングロ・サクソンの場合はローマ帝国の崩壊で一旦奴隷制が切れ、改めて人種差別と重なった黒人奴隷が登場してくるのである。

根が深い労働嫌悪の風潮

サンパウロという町は移民と外国資本によって大きくなった都会である。この点、ちょっと異質であり、典型的、伝統的なブラジルの町とは言えない。だからサンパウロにいてあれこれ見聞してもなかなかブラジルが見えてこない。やはりブラジルを知るには、北東伯やアマゾンに行く必要がある。

例えば、労働蔑視、つまり怠惰の問題でもこういう地方で観察すると地主や金持ち階級だけでなく、いかにこの風習が女、子供を含めた一般大衆に浸透しているかがわかっ

てくる。一例をあげてみよう。アマゾン河口のベレンに住んでいた頃、筆者の家の前にポルトガル系ブラジル人が住んでいた。小さな、貧弱な家である。どう見ても金持ちとは思えない。四〇才ぐらいの亭主はタクシーの運転手を職業としていた。妻君は大柄な派手好みの女で、二人の娘と一人の息子がいる。娘は一五と一三で、上の娘はもう完全に成熟した女である。

この家族、驚いたことに亭主を除いて誰一人として朝から晩までおよそ働くという動作をしない。

家庭の主婦であれば、炊事、洗濯、掃除、買物とか何かしら仕事があるはずだが、そういう労働は二人いる女中に任せ女たちはとにかく何もしない。

アマゾンはもちろん暑い。家の中でハンモックに揺られていても汗が出る。この女たち、暑い日中は家の中でごろごろしている。狭い家でもベッドや余計な家具が一切ないから、割合広く使えるのである。やっと少し涼しくなるのは五時過ぎで、この時間になると女たちはシャワーを浴びて汗を流す。因に、アマゾンでは通常シャワーは水だけである。シャワーを浴びた後、改めてよそ行きの服を着て、きちんと靴を履き、家の戸口の前に椅子を持ち出して座る。すると隣り近所でも同じ様に「盛装」した女たちが椅子や縁台を持ち出して座り、おしゃべりがはじまる。

なんのことはない、戸外のサロンなのである。そして、

亭主が帰ってくれれば亭主も加わり、このうら寂しくも滑稽なサロンの交歓は夜が更けるまで続くのだ。

失礼ながら、タクシーの運転手としての亭主の収入は知れている。貧乏人の多いベレンで朝から晩まで客を乗せて走るなどということはあり得ない。しかし、この家の女たちは頑として自分のライフスタイルを変えようとしない。二人いる女中も給料などはない。食わして、寝かせてもらっているだけである。

だが、食べるといっても、女中を入れて七人家族ではなかなか楽ではない。では、どうするのか。

かんたんなことで、食わないのである。むろん食わないわけにはいかぬ。正確に言えば食事をしないのである。腹が減れば適当にマンジョカの粉を口に放り込んだり、フェイジョンの残りを食べたり、パンを齧ったり、バナナを食べたりで済ませてしまう。

彼女らの関心は食物より化粧品、装身具、衣類で、これは絶対の必需品、なにがなんでも買わなければならないのである。たしかに盛装して入念に化粧した娘などは、どこのモデルかと思われるほどに美しい。

娘に比べると息子は放っておかれる。一〇才の息子はしょっちゅう我家の台所に来て家人から食べ物を貰っていた。そして曰く「うちには何も食べる物がないんだ……」。労働蔑視の風潮はラテンアメリカ、特にブラジルで最も強

いのだが、奴隷制の影響が遺制として現在に残っているとも言える。これについて、歴史研究家の田尻鉄也氏は次のように書いている。

「一九世紀、ポルトガル王朝がリオに移って開港してからは、ヨーロッパの商品が続々と輸入されるようになり、なかでも産業革命のトップを切ったイギリスの商品が他を圧するわけですが、その高品質に驚いたリオの商人たちは『どんな奴隷がこれをつくるのだ……』と聞き、イギリスには奴隷がいないと聞くと『では貴国では誰が働くのだ』と驚いています。つまり長く続くと奴隷制は人間社会のモラルを実に異形なものに変えます。乞食のような貧しいものも奴隷を持ち、奴隷のいない生活というのは想像できないまでになるわけで、そうして『働くことはイヤしいこと』との考えは奴隷にまで浸透し、奴隷は自分の代わりに働く奴隷を買うことまで考えるようになります。

その奴隷社会のモラルとしては、ただでさえ働きたくないのですから、まして『言われたこと』以上をするような感覚があったら不思議でしょう」

奴隷が奴隷の身分のまま金を蓄めて、その金で自分の代わりに働く奴隷を買ったことは、ブラジルでは実際にあったことなのである。

ブラジルで広範にひろがっている労働を嫌う風潮の原因は意外に根が深い。

働かないのが〝罪恋〟の北米

労働に対する価値感は、同じ新大陸でも南、北アメリカでは天地の相違がある。

そしてどうやらこの差こそ南北アメリカの発展の差、国力の差となって今日に至っているようだ。

プロテスタントを信奉したアングロサクソンの移民は男も女もよく働いた。開拓時代のアメリカ女性の働き振りは、誰しもが認めたところで、たとえ奴隷がいても骨惜しみすることなく進んで肉体労働をやってのけた。

ヨーロッパでは一六世紀のはじめ、堕落したカトリックに反対して宗教改革が起こる。ドイツのマルチン・ルーテル、フランスのジャン・カルバン、スイスのツウィングリが主導者である。カトリックをプロテスト（拒絶）するキリスト教だからプロテスタント、または新教と言う。この宗教改革の結果、ヨーロッパの北部、中部はほとんどプロテスタントになってしまい、カトリックは南部だけに限られてしまう。

プロテスタントの中で最も禁欲的で厳格な道徳を持っていたのはカルバンである。当然、ローマ法王や教会組織、教会権力は一切認めず、聖書にもとづく福音を信じた。

カルビニズムは、フランス、ドイツ、オランダ、スコッ

トランド、イングランド、ポーランドの新興市民、中産階級、知識層の間で圧倒的な支援を受ける。オランダのゴイセン、フランスのユグノー、イギリスの長老派やピューリタン（清教徒）はすべてこのカルビニズムの一派である。

一番最初のアメリカ移民ではないが、一六二〇年メイフラワー号でアメリカに到着したピルグリム・ファーザース（巡礼始祖）は、イギリスのピューリタンの中でも非常に厳格な分離派に属する人が多く、そのため宗教的迫害を逃れて一六〇八年オランダに逃避していた人たちなのである。

神の絶対主権を信じ、労働と禁欲の中に神の栄光への確信と喜びを見出すのである。ひらたく言えば、世俗の職業に従事し、その労働を成し遂げることが信仰の証しなのだ。

こういう勤勉な労働を続けると、その見返りとして利潤が生じる。この利潤は、信仰の為に額に汗して得られた報酬なのだから、悪であろうはずがない。

こうして、利潤は労働によって得るものというカルビニズムの倫理観（エトス）が近代資本主義の精神的支柱となるのである。これを指摘したのは、ドイツの社会学者マックス・ウエーバーで、一九〇四～五年に「プロテスタンチィズムの倫理と資本主義の精神」の大論文を発表して、大きな反響を呼ぶ。働かないことを「罪悪」とみなすアメ

リカのカルビニズムと「怠惰こそ美徳」とするイベリア文化圏の労働観とはなんという違い、隔たりだろうか。

犬養道子が書いた本に「アメリカン・アメリカ」というのがある。この中に「レディス・ファースト」という章があり、一読してびっくりする。とにかく、アメリカの女性は今も昔もよく働く。

一八世紀のヴァージニア州の大農場の奥さんなどはまさに千手観音。「言うなれば、女村長兼校長兼女工兼コック長兼ビン詰め工場主。プラス、当時ヨーロッパの中産階級出身者にふさわしい『教養』も忘れずに、ちゃんと身に着けた……」のだそうだ。

もっと感心したのは、辺境開拓時代のモラルに関する犯罪の少ないことで、一八二〇年代、辺境を一人で巡回したフリント牧師の言葉を孫引きすると次の通りだ。

「……彼等の日々は、人倫を守って自由民として土地を耕したい、土地をわが子に与えたい、村をつくりたいという健全にして人間的な理想によって貫かれています。性道徳の水準は、この荒らくれた人々の間で非常に高いのです……」

ブラジルではこうはいかない。同じように辺境を開発し、後の国境設定に大きな功績を上げたバンデランテスの行動もいささかならず不純なのだ。ハンデランテスが労働力を求めてインジオ狩りをしたのはたしかだが、それは同

時に自分の欲求を満たす〝女狩り〟であったことも事実なのである。バンデランテスの場合は、国家の為とか、宗教的情熱よりも、女とか金（キン）とかを欲する個人的なナマの欲望が強かった。

また、同じ農場主でもブラジルのファゼンデイロの性モラルは、残念ながらアメリカのカルビニストのような禁欲的なものではなかった。ブラジルには「白人女は妻にして飾っておくもの、黒人女は仕事をするもの、モレーナ（混血女）は抱いて寝るもの」という卑俗な諺があり、実際、農場主はしばしばこの諺を実行していた。

これではブラジルが立ち遅れるのも、いわば自業自得。彼我の国力の差が開くのは当然の帰結なのである。

性的天分豊かな？　ポルトガル人

一九六〇年代に奴隷制比較論争が起きたことがある。南北アメリカの奴隷制の違いを論じたもので、まず、一九四七年に発表されたコロンビア大学教授フランク・タネンバウムの著書「奴隷と市民」が端緒になった。タネンバウムの主張を要約すると次の通り。

「ラテン・アメリカのスペイン／ポルトガル領植民地において、土着のインジオは砂糖キビ農園の労働に従事する奴

隷としての適性がなかった。反抗的で、まったく順応性がないのである。

そこへいくと、アフリカからの黒人奴隷と入植者の関係は大変うまくいっており、北米では見られなかった友好関係が成立した。これは、イベリア国家が何世紀にもわたるムーア人との戦いの間にムーア人奴隷、ユダヤ人奴隷を使役してきた歴史がある上、一五世紀半ばからは黒人奴隷も輸入され、奴隷制がすっかり社会体制の中に組み込まれたからである。

しかも、これらの国（スペイン／ポルトガル）には奴隷の法的人格、義務、権利を記した奴隷法の法典が存在した。この流れを汲むラテン・アメリカの奴隷制は北米と異なり寛容なものとなった。

人種的偏見がないとは言えぬにしても、それは社会的、経済的、文化的性格に由来するもので、法律によって偏見が正当化されてはいない。社会的平等と機会といった基本的諸条件において、アメリカとラテン・アメリカの違いは大きい」

このタネンバウムの論を更に推し進め展開したのがスミス大学のスタンレー・エルキンズで、一九五九年「奴隷制」の論文を発表する。エルキンズは、合衆国の奴隷は「生涯奴隷」であり、その子や孫も奴隷である。奴隷には法律上のいかなる人権も地位も認められず、単なる財産として所

有者たる主人に完全に支配される、と定義した。
これに対し、スペイン／ポルトガル植民地の奴隷制は、奴隷制度を支配する厳格さや論理に比較的欠けていると主張する。そして、我々（北米人）が見い出すのは、
①奴隷と社会の自由部分との境界が腹立たしいほど惚けていること。
②両者間の多種多様な接触。
①わが国（アメリカ）では決して考えられもしなかったような、困惑するほどの有色人種に対する非差別待遇。が特徴だと考察する。タネンバウムとエルキンズの論文は、実は一九三三年に発表されたブラジルの社会学者ジルベルト・フレイレの古典的名著「カーザ・グランデ・イ・センザーラ」（邸宅と奴隷小屋）が下敷きとなっている。
この著作は、北東ブラジルの砂糖キビ栽培地方におけるファゼンダ（大農場）の構造と、家父長的家族制度を論じたもので、農場主と女奴隷の性生活を率直に取り上げ、親密な共存関係がポルトガル人の環境適応能力にあることを強調した。
「ポルトガル人は、黒人やムラト女性を情婦や妾にしたばかりか、黒ずんだ肌の美人たちのやさしさを楽しむため、時には白人の妻をはねつけた……」
これに対して、ポルトガル人以外の植民者たちは彼らの性衝動（リビドー）がより保守的であったから、ポルトガ

ル人ほど成功しなかったのであり、特に性的天分の貧しかったのが「アングロ・サクソンとプロテスタント」だったと、フレイレは言う。フレイレの著作は英訳もされたから欧米の社会学者にはよく読まれたが、こうまで言われてはアングロ・サクソンでプロテスタントのコロンビア大学教授のマービン・ハリスも黙っているわけにはいかない。ポルトガル人がアンゴラやモザンビークで行った黒人への残虐行為を追求し、いかにポルトガル人が人種偏見を持っていたかを曝いてみせた。また、ブラジルでの奴隷虐待の例をいくつもあげ、フレイレに向かって「いい加減、大人同志で人種的偏見に満ちた性的関係などと言うことはやめようではないか。一般に人間は、力と機会と必要があれば、肌の色や祖先の身許などはお構いなしに異性と交わるものだ」と決めつけている。（以上神奈川叢書４「アメリカ大陸の奴隷制」所収）おもしろいと言えばおもしろい。がハリスの方が正論だろう。フレイレの記述には学問的研究とは別に、情緒的、感情的なとらえ方や「ルーゾ・ブラジル文化」に対する過信があって、どうも純粋な学術論文とは言いがたい。これはフレイレがレシフェ生まれの支配階級に属するポルトガル系のブラジル人であることも影響しているのだろうし、単なる社会学者でなく、思想家、政治家（下院議員）であったことも原因となっているのかも知れない。

フレイレは後年、ポルトガルのサラザール政権に利用され、「ルーゾ・ブラジル主義」を拡大しポルトガルの海外植民地すべてを含めた「ルーゾ・トロピカリズム」を提唱し失敗する。

進行する家庭崩壊の風潮

従来からブラジルの田舎では、貧困階層間の通常な結婚は一般的でなかった。一種の奴隷制遺制である。

現在、どこの国でも法的に結婚が成立するには、婚姻届を役所に提出、受理されることが必要条件となっている。もっと前の段階では法的よりも社会的に認められる方が重要だった。

キリスト教であれば教会で式をあげ、神の前で誓い合う儀式だし、日本式の神前結婚でも佛前結婚でも同じような儀式を行う。その後、親類縁者を集めて披露すれば、それで結婚は社会的に認知され成立した。もちろん、ブラジルも例外ではない。しかし、こういうちゃんとした結婚をするのは都会地の中流以上の階層であり、ファベーラの住民や地方の貧しい住民の多くは法的にも社会的にも認められた結婚をすることは少ない。奥地の労働者階層の多くは、なんとなく男と女が関係を持つだけである。その結果として子供が出来るわけだが、地方では正式に結婚した男女か

ら産まれる子供よりも、婚姻によらざる男女関係の結果として産まれる子供の方が断然多い。

筆者が勤めていたアマゾンの製材工場には、三〇〇人の労働者がいたが、この連中のほとんどは労働手帳、身分証明書をはじめ、それをつくるのに必要な出生証明書を持っていなかった。

必要書類なしに就労させるわけにいかないから、会社側が手続きのすべてを代行し、証明書をつくってやるのである。その結果わかったことだが、八〇％の労働者は母親がわかっているだけで、父親の名前はどこにも出てこないのだ。

ブラジルのような熱帯地では、女子の性的成熟も早く、一五才ぐらいになれば男が出来て子供をつくる。早いのは一三才ぐらいで産みはじめる。男がそのまま父親として定着する場合もないことはないが、大体はその場限りで終わってしまう。もともと男の方も経済的能力のない若い青年であり、女と一緒にいるのが嫌になったり、面倒臭くなればさっさと逃げ出す。

産まれた子供は若い母親が自分で育てるか、母親に預けるかで、女にとっては割りの合わぬことなのだが本人はいたって呑気で「ノン・テン・ジエイト」（仕方ないさ）などとケロリとしている。

そして、女の方もその後気に入った男とくっついたり、

離れたりを繰り返しながらその度に子供が増えていく、というのが普通に見られる現象だったし、今でも多い。

さて、それではブラジルの貧困階層でどうしてまともに結婚し、正常な家庭生活を営むものが少ないか、ということが問題になる。

その原因を住民の意識の低さや未開性に求めることは一応出来る。また、経済的貧困さを理由にあげることも出来る。しかし、未開性や経済的貧困は世界中にあるが、大部分の家庭は正常。

これは、やはり他の社会的要因や歴史的背景に理由を見つけるべきなので、筆者はこれをブラジルの奴隷制時代の後遺症、つまり奴隷制遺制だと解釈している。

植民初期に新大陸の白人男女の構成比が著しくアンバランスであったことは良く知られている。特にブラジルではそれがひどく、一七世紀はじめにおける入植者の男女比は三〇対一と極端だった。

一七世紀に入ってからでさえそうだったのだから、一六世紀には白人女性はいないに等しかった。勢い植民者たちはインジオ女性を求める。

一五四九年、初代ブラジル教区長として赴任したイエズス会のマノエル・ダ・ノブレガ神父は「当地のポルトガル人たちは、多くのインジオ女に囲まれ満悦している。しかし、誰もインジオ女と結婚するものはいない」とイエズス

会本部に報告している。後にアフリカから黒人奴隷が入ると、植民者の性的関心はインジオ女から黒人女、特に混血のモレーナに移る。こうした風潮が長い年月ブラジルでは続いてきたわけで、奴隷解放後もなかなか変わらなかった。

それに、家庭というものは一つの生活文化で、時間的積み重ねを必要とするから、一夫一婦を原則とする家庭を築くことは旧奴隷層の、特に若い男にとっては厄介なことだったのである。

この風潮はこれまで地方部、農村部で顕著だった。ところが現在では、都市のスラムで急速にひろがり深刻な社会問題になっている。具体的には失業によるスラム住民の家庭崩壊や女性の婚姻外出産、それに伴う母子家庭の増加などである。

農村では婚外出産児は親族の誰かが育てた。自給経済なら貧困でもそのくらいはなんとかなった。

だが、都市のスラムにはそうした余裕はない。かくて、犯罪を含めた非合法活動はますます増加の一途を辿ることになる。しかも都市だけでなく全国的に進行しているのだ。

掠奪、遊牧型の植民地農業

一般的にブラジル人が持っている労働嫌悪の風潮が、奴隷制と密接に結びついたイスラム思想に由来していることはたしかである。しかし、それがすべてでもない。農耕と遊牧という文化様式の違いもあるし、気候、風土の問題もある。

農耕社会の特徴は、勤勉さが要求されることである。土を耕し、種子を播き、作物を実らせるのは怠惰ではできない。その折々の季節や気候条件に合わせて、手順よく農作業をこなしていかないと収穫は落ちる。農耕においては手間をかけて働けば働くほど、それに見合う収穫が得られるのだ。

これに対し遊牧の場合は、ラクダや羊を草のある所に連れては行くが、食べたり飲んだりは動物自身が勝手にすることで、人間がするわけではない。

ラクダの妊娠期間は一三カ月とちょっと、しかも人間と同じで一産一子が原則である。いくら草をたくさん食わそうと、腹を懸命に撫でようと、妊娠期間が短くなるわけでも、産まれる子が多くなるわけでもない。だったら、無駄な労力などかけない方が賢明なのだ。

文化の違い以外に、苛酷な自然も働く意欲に大きく影響する。アラビア半島の多くは乾燥と酷熱の地である。こういう環境での肉体労働は相当な苦痛を伴う。生理的に身体が保たないのである。

ブラジルの自然は、地域によって気候も植生も違う。それでもアフリカの自然と共通しているところがかなりある。むろん、ブラジルにサハラ砂漠はないし、アフリカにアマゾン河はない。だが、東北ブラジルの乾燥地帯であるセラードや砂漠一歩手前のカァチンガとアフリカのサバンナは、自然条件が酷似している。こういうところでは農耕のための労働が出来にくく、どうしても遊牧とか狩猟を選択するようになる。

酷熱、乾燥の気候は、労働意欲を削ぐが、高温、多湿も身体にこたえる。ブラジルでいえばアマゾン地方や海岸部の低地帯である。高温、乾燥に強い黒人も、多湿に対する耐性はない。

ブラジルの高温、多湿な地方に入植した勤勉な日本移民は、気候条件を無視してしゃにむに働いて熱射病や欠水病で倒れ、疲労と栄養失調が重なって衰弱したところを風土病に冒されて死ぬケースがよくあった。気候、風土を知らぬ人間の苦い経験である。

ブラジルは長い間、砂糖キビと、時代が下ってからはカフェのプランテーション農業を続けてきた。モノカルチャーで、おそろしく単純な産業形態である。砂糖キビもカフェも農作物には違いないから、それで成り立っていたブラジルは「農業社会」とは言えるだろうが、少なくとも「農耕社会」ではなかった。

ブラジルの農業は掠奪農業なので、日本のような農耕社会とはまったく別な存在なのである。掠奪農業は、文化の型としては明らかに遊牧文化に属している。

土地の肥沃なところに焼畑方式で単作栽培をし、奴隷労働で収穫し、土地が痩せて作物が出来ないようになれば、その土地を放棄して新たに山伐り、山焼きをしてプランテーションを行うやり方である。やらずぶったくりで、収奪専門だから掠奪農業なのだ。

これは規模こそ違えインジオが原始的なマンジョカ栽培をしたやり方と、基本的には同じである。

掠奪農業の伝統は現在にまで続いてお。、ロンドニア州をはじめとするものすごいアマゾンの森林破壊は、世界中から非難の的になっている。

日系農家を主流とする野菜、果樹、園芸といった農耕型の農業も順調に伸びてはいるが、新開地ではまだ圧倒的に掠奪型である。

更にブラジルでは、プランテーション地域に対する食料供給のため、比較的早い時期から牧畜がはじまる。この牧畜もイスラム式で、まったく手をかけない放牧だった。これは自然の牧草地であるセラードが各地にいくらでもあったからである。

とにかく、ブラジルという国は、民族の歴史から見ても、自然条件から観察しても、文化の形態から判断して

も、勤勉とか、努力、秩序、規律、計画性などの言葉とはおよそ無縁の存在だった。

ポルトガルの入植者にとって、ブラジルは富を生む場所、金の儲かる土地でなければならなかった。というより植民地はまさにそのためにあるので、それ以外の存在価値は何もない。

と言えば、いやその他にキリスト教の伝導という宗教的動機があったはずとの反論も出るだろう。だが、それはイエズス会などの修道会が考えたことであり、ポルトガル王室が原住民教化を意図したわけではない。むしろ、植民地収奪の最大手はポルトガル王室で、一七世紀の終わ。にミナスで金（キン）が発見されると、王室は利益の独占に専念、ブラジルに渡航する人間を極端に制限、聖職者でもイエズス会士などはオミットしてしまう。

勢威振るう〝マラジャ〟大地主

インドで大権力を振るったマハラジャ（大王、藩王）の勢力が急速に衰え、歴史に消えようとしている。マハラジャというのは、かつてインドの各地に割拠していた藩王で、その数は大小五〇〇もあった。領主と言ってもよいかも知れぬ。歴史が古く、カースト（身分）制度の厳しいイ

ンドにおけるマハラジャの権勢は大したものであり、またそれにふさわしい富貴も所有していた。

このインドに一八世紀半ばから本格的植民地経営に乗り出したイギリスは、マハラジャの勢力を一掃するより、マハラジャを利用して統治する政策を採用する。イギリス東インド会社による間接統治の一世紀もそうだし、一八五七年の「ポセイの反乱」後、イギリス政府による直接統治の時代も、更には一八七七年ビクトリア女王がインド皇帝を兼ねるようになってからもマハラジャは生き残る。マハラジャに徴税、その他の特権を大幅に認めながら、マハラジャを通じてインド支配を進めるやり方である。イギリスらしい巧妙な政策。そうでなくては、あの人口も多く、広大な面積を持つインドを一にぎりのイギリス人が直接支配、統治出来るはずがない。

インドは一九四七年、イギリスから独立、ネールが首相になるが、ネールもマハラジャには手が出せず、やはり特権を継続させざるを得なかった。マハラジャの勢力はそれだけ強かったのである。

結局、マハラジャ退治を断行したのは、ネールの娘のインジラ・ガンジーで、一九七一年社会的公正の名のもとに、マハラジャの特権をすべて剥奪した。以後、マハラジャの勢力は確実に衰退し、現在では過去の面影はない。

と、まあ、これはマハラジャの本家、インドでのお話。インドのマハラジャは没落かも知れぬが、ブラジルのマハラジャ（ブラジルではマラジャと訛る）は健在で、没落どころか、我が世の春を謳歌している。もっとも、ブラジルでいうマラジャは、お手盛り議決で高給を得たり、汚職、不正行為で蓄財する議員や政府高官のことだから、本来のマハラジャとは少し意味が違う。

違いはするのだが、ブラジルにインド的な大地主のマラジャがいて、特に東北ブラジルを中心に隠然たる大勢力を持ち、地方政治はもちろん、国政にまで強力な影響をおよぼしていることは、紛れもない事実なのである。

地域によっても異なるが、ブラジルでは今日でもラチフンジオ（大土地所有）のところが多い。

いわゆるファゼンダ（大農場）である。ブラジルのファゼンダは時代と地域によっていくつかに分類される。このうち、一六～一七世紀にかけて東北ブラジルで形成された、奴隷労働力を生産の基本とする砂糖キビ栽培と、砂糖キビを絞る設備を持つファゼンダが歴史的にも有名である。

このエンジェーニオと呼ばれる東北ブラジルの砂糖キビ農園こそ、ブラジルにおけるラチフンジオの主流であり、またこの大農場は家父長的、保守的、中世的性格を強く持っているところに特徴がある。

東北ブラジルだけとは限らないのだが、少なくともこの地方には伝統的な形態であり、起源を遡れば、ブラジル最初の統治形態だったカピタニア制度に行きつく。

ブラジルは一五〇〇年に発見されてから、三〇年ほどは放置される。やっと一五三〇年になってポルトガル王室は、貴族のマルチン・アフォンソ・デ・ソウザに探検と入植を命じた。この結果、ブラジルを一五のカピタニア（封土）に分割、一二人の世襲領主に管理権を譲渡する。一五の封土に一二人の領主というのは二つの封土を受けた領主が三人いたからである。

この土地の受贈者である領主をドナタリオと言う。いずれも貴族だった。

領主は自分の封土内での司法、立法、行政の三権を握ったが、封土のすべてを私有できたわけで領主は当然、大面積の私有地を貰えたが、私有地以外の封土はポルトガル王室のものであり、この王室の土地にポルトガルからの入植者を入れ、大土地を無償で提供する義務を負っていた。これがセズマリア制度で、無償で譲渡された土地をセズモと呼ぶ。土地の無償提供を受けた者は、その代わりに、その土地の開拓を義務づけられるのである。しかし、このカピタニア制は、ペルナンブコとサンビセンチのカピタニア以外うまくいかなかった。そこで一五四九年、カピタニア制に代わる総督府制度がとられ、初代の総督（ゴベルナドー

ル）としてトメ・デ・ソウザがバイアに赴任する。総督府制度のもとでもセズマリアは存在した。

このセズマリアで大地主になった者が、砂糖キビ農場主となり、特に東北ブラジルでは現在にまで引き継がれて、マラジャ族出現の温床となっているのである。

個人、一族の利益が優先

ブラジルの地図をひろげ、全国の政治勢力の分布を展望すると、東北ブラジル諸州の力が強いのに驚かされる。貧困のこの地方から有力な政治家が輩出し、大統領をはじめ、政治の主要ポストをがっちり固め、国政を動かしているからだ。

東北ブラジル九州の内、多少とも工業の発達しているのは、バイアとペルナンブコぐらいのもので、あとの州は経済的にまったく立ち遅れていると言ってよい。

コーロル大統領の出身州、アラゴアスなど「アラゴアス共和国」と呼ばれるほど、多くの人間が国政に参与しているが、州自体はほとんど見るべき産業もない貧困州である。

ただ、アラゴアスの名誉のためにつけ加えておくと、この海岸の美しさはすばらしい。特に「水の天国」と言わ

れる首府のマセイオは、二つの汽水湖とリーフ（岩礁）のある海を持ち、その景観はかけ値なしに卓絶している。

東北ブラジルの有力政治家のほとんどは、エンジェーニョ（砂糖キビ大農場）のオーナーであり、しかも、セズマリア時代から続く代々の地主も多い。ブラジルにはエンジェーニョのような、東北ブラジル型ファゼンダだけではなく、一八世紀以降、ミナス州に現れる牧畜とコーヒー栽培主体の大農牧型ファゼンダや、一九世紀に登場するサンパウロ州のコーヒーファゼンダもある。

時代や地域による差異はあるが、大ファゼンダに共通しているのは完全な閉鎖社会で、農場主が絶大な権威を持っていることである。ファゼンダの性格と特徴は、筆者が説明するよりブラジル文化に造詣が深く、一九三四年にブラジル文学の古典的名著〝Ｒａｉｚ　ｄｏ　Ｂｒａｓｉｌ〟（日本語訳＝ブラジル人とは何か）をあらわした、セルジオ・ブァルケ・デ・オランダの文章を引用した方が早い。

「大農場にあっては、農場主の権威は絶対であった。大農場は一つの完全な、しかもおよぶ限り自給自足の行われる有機体であった。礼拝堂を持ち、ミサはそこで行われ、初等教育のための学校もあり、神父の先生が子供たちを教えた。（中略）大農場で、あらゆる組織の基準、中枢として重要な意味を持っていたのは、古いローマ法、教会法の古典的な規範［イベリア半島で数知れぬ時代を通じて維持さ

れてきた」にしたがって組織された家族である。農場や家庭内の奴隷、また奴隷ではない使用人のためにも家族という枠がひろがり、家父長の権威も増大するのである。この極めて特徴的な家族はあらゆる点で、モデルとなった古代の家族と同じように機能している。その古代では、Ｆａｍｕｌｕｓ（奴僕）から派生したＦａｍｉｌｉａ（家族）という語そのものは奴隷制という考え方と密接なつながりを持ち、息子たちさえ家長に完全に服従している巨大な集団内の自由な成員、つまりＬｉｂｅｒｉ（自由人）にすぎなかった」

まあ、こういう絶大なる領主のような農場主を中心とする一族郎党の結束は、非常に固く排他的でもあり、他の一族連合と敵対関係にあることも珍しくない。時には殺し合いになることもあるほどである。その代わり、ファゼンダの中、一族の内部では保守的な家父長制による温情主義がとられ、昔なら奴隷、現在なら使用人、労働者を含めたすべてがしっかりと保護される。奴隷も労働者も同じファミリーなのである。

こうした性格の家父長的農場主が政治家や高級官僚になれば、コネ社会、アミーゴ・ベースが基本にあるために、個人的利益、一族、友人の利益の方が国家や公共の利益より優先してしまう。

これはブラジルだけの現象ではない。ラテン・アメリカ

の政治は伝統的に理念的原理に欠けている。つまり、何が正しい政治なのかについての規範がないのである。

規範がないということは、権力を握ったその時、その時の為政者の個人的な思考や行動が正義になり、政治規範になるということだ。〝朕は国家なり〟である。

これがいわゆるペルソナリズム（権力者の人格主義）で、アングロ・サクソン流のレガリズム（法治主義）とは対極をなすものである。ペルソナリズムは、通例独裁と結びつくから、当然力による支配になるし、市民精神の尊重などは考慮されない。その場しのぎ、汚職、ネポチズム（縁故主義）といった弊害が常につきまとう。

ラテン・アメリカの政治の特徴は、無秩序であり、矛盾だらけで、分裂症的徴候を示していると酷評されるのは、中世的なペルソナリズムから来るものであり、その根源が大農場の一族優先主義に由来していることはたしかである。

ただし、ブラジルの場合は、メキシコのサンターナ、アルゼンチンのロサス、グワテマラのカブレイラ、ドミニカのトルヒーリョ、パラグワイのロペスのような独裁者は出なかった。ポルトガルとスペインの差であろう。

今も昔も高い日本移民の教育熱

労働者に教育はいらないという考え方や信念は、まだ地方の地主層には根強く残っているが、ブラジルの初等教育は着実にひろがっている。しかし、これは以前の状態と比較してのことであり、日本のような教育先進国などとは比べようもない。ブラジルのように国土が広いと、学校に通うのが物理的に不可能な僻地がたくさんあるのだ。

例えば筆者のよく知っているアマゾン河口のマラジョー島にも学校はある。ここもラチフンジオで、地主と多くの零細住民から成り立っており、学校はパトロンである地主の家の近くに建てられている。この地方の干満の差は三mもあるから、建物はすべて高床式である。道路は皆無で、川や水路が交通路となる。通学はもちろんカヌーだ。ところが、カヌーで子供たちが通える距離はせいぜい五kmか一〇kmそれ以上だと往復するだけで一日かかってしまう。ほとんどの児童は通学出来ない状態なのだ。それに、こんな僻地の学校に来る先生がいない。ということで、この学校、つくるにはつくったのだが遂に開校せず、地主の倉庫になってしまった。

「子供が通えない、先生がいない、ということは最初からわかっているじゃないか」と言ったらパトロン氏はにやりと笑って曰く、

「もちろんわかっていたさ。でも、学校をつくると政府からいろいろ補助金が出るからね……」

奥地の場合、通学距離の問題の他に、先生の確保が難しい。だがこれには便法もある。以前、筆者の関係しているエスピリト・サント州の海岸山脈中の農場で、労働者の子弟のために学校をつくることにした。児童が一五人ぐらいなのだから、一教室で充分である。ところが先生が見つからぬ。市役所の学務課に頼んだら、誰か適当なのを探して登録しろということだった。

そこで、どうしたものかと父兄に相談を持ちかけたら、それなら隣の部落の誰々の娘が「フォルマード」だから、それに決めたらよいということになった。

フォルマードというのは学校卒業者という意味で、常識的には高校、大学卒業者を言うのだが、やって来た先生は小学校四年を「卒業」した娘だった。この資格では学務課で受けつけまい、と心配していたら、案に相違してあっさり受けつけた。もちろん「代用教員」ではあるのだが……。

ブラジルの義薪教育は八年である。しかし、こういう田舎では最初のステップとして、まず四年の履修が認められている。四年を終わってまだ続けたければ八年制の学校に五年生として入ればよい。

これに引き替え、日本人の教育熱の高さは日本人の特性の一つで、就学年令に達した子供は学校へ行くものという観念が骨の髄まで沁み込んでいる。だから戦前ブラジルに渡った日本移民は、なにはともあれ学校をつくった。

日本人小学校は、ブラジル語も重視したため、正式の認可を受けるものが多かった。一九三二年の統計によると、一八五校の日本人小学校のうち未公認、未届けが五八校、残りは州立、郡立、私立の公認校だった。

この日本人小学校について「日本移民八十年史」は次のように解説している。

「(一八五校のうち)ブラジル人教師のいない学校が五一校あったが、同時に日本人教師が皆無の学校も一一校あった。この時点で一校の日系生徒平均は四九名で、最大のところの生徒数は二四三名だが地方の小さなところは生徒数一〇名、或いはそれ以下(最小六名)のところも少なくなかった。(中略)これら日本人が設立する小学校は殆どが日本と同じ六年制だったが、それ以上の八年制のところもあり地方で少数のところでは二年制、三年制、更には「不定」というところもあった。

そこでの日本語教育の質についてだが、当時の日本語教師二一一名の中で(男一七二名、女三九名)八五%は中学校かそれ以上の学校の卒業生であり、教師の質としては決して低いものではなかった」

日本人小学校は一九三二年以後、急速に増え、一九三九年には四八六校、生徒三万人に達した。

これにはブラジル側もびっくりした。もともと日本移民は、アフリカ黒人奴隷の代替労働力として入れたのであ

る。その底辺の労働者である日本移民が、なんでこんなに教育熱心なのか、ブラジル人には理解出来なかったし、それ以上にうす気味わるくもあった。

一九三八年頃から外国人に対する規制が次第に厳しくなる。むろん直接の原因は、連合国側に属したブラジルと、枢軸国の日本との敵対情勢が影響しているのだが、そういう政治的背景とは別に、習慣の違いというか、文化の差異がブラジル人に理解されず、日本人に危倶の念を感じたからでもある。

歴史的背景違う日・伯の教育

兵庫県の教職員組合が日伯教育交流をはかるため、毎年ブラジルを訪れたり、日本に招待したりしてシンポジウムを行っている。なかなか良い企画である。

最初からいささかのかかわり合いがあるので、シンポジウムの内容は良く知っているのだが、ブラジルにおける二回のシンポジウムを見ているうちに、日本とブラジルの教師はお互いに相手の立場をさっぱり理解していないことに気がついた。

最初のシンポジウムは日本移民八〇年祭の一九八八年だった。ホテルのコンベンション・ホールに超満員のブラ

ジル側教師（小・中学校）が詰めかけて大盛況だった。

このシンポジウムの討論の中で、一人のブラジル人教師が「日本の教師の初任給はいくらか」と質問、これに対して日本側のパネリストが「一七万円、およそ一三〇〇ドル」と答えた。

会場は一瞬静まり、次に大きなどよめきが起きた。我が身の薄給と比較した、日本の教師の高給に対する驚きと羨望の声である。しかし、いろいろ説明を受けると、授業時間の長さや責任の重さにびっくりする。朝礼やホームルーム、クラブ活動などは、なんで教師がそんなことに関係するのか、まったくわからない。

一方、日本の教師はブラジルの教師の薄給、待遇のわるさ、社会的地位の低さに驚き、義務教育を終える生徒の歩留まりのわるさ（卒業者は入学時の二六％）に目をむいてしまう。

お互いに驚いたりびっくりしたりしているわけだが、どうしてそうなるのかの基本認識に欠けている。認識不足なのはお互いが「教師というものはこういうものだ」という、自分のモノサシで相手をはかっているからなのである。同じ初等教育の先生といっても、日本とブラジルでは歴史的背景も、教師の質も、社会的評価もまったく異なる。この差異を抜きに同じ「先生」「教師」で一括するのは無理なのだ。

良く知られているように、日本では江戸時代から「読み、書き、算盤」の基礎教育が普及していた。寺子屋教育がさかんになるのは、儒教の朱子学が一般に普及したからである。寺子屋の先生は、まず例外なく儒教の信奉者であり、子供たちに論語を教えた。論語に代表される儒教の教えは、仁義忠孝礼智信悌の徳目である。寺子屋教育は、字の読み書き以上に人格教育に重きを置いたのだ。

儒教にあっては、主君や親、師は絶対的な存在である。師は師父であり、謹しみ、敬うべき人なのだ。それは「三尺下がって師の影を踏まず」という言葉があるくらい徹底したものだった。この伝統は明治になって学校法が出来、義務教育制度がつくられても引き継がれる。明治から昭和の第二次世界大戦の終わるまで、教師と巡査は安月給の見本みたいなもので、実際の待遇は決して恵まれたものではなかった。しかし、教師を尊敬するという風潮は、曲がりなりにも今日まで保たれている。

その代わり、日本の場合は、教育は人格の陶冶であるとする考え方が強かったから、教師の側にも人格的な徳性を要求されたのが特徴、教師は聖職者でなければならないのである。一方、ブラジルの教育、というより、ギリシャ・ローマ時代から続いている、ヨーロッパの教育に対する基本的な考え方は日本の場合とまったく対極をなすものなのだ。

まず、教育を知識や技術の習得と限定し、教師はこの知識を教える技術者と規定するのである。教える教師の人格や徳性などは問題にならない。

ヨーロッパでは学校のない時代、金持ちの子弟には家庭教師がついたが家庭教師の社会的地位はおそろしく低く、生徒に気に入られないとすぐクビになった。

実は、ギリシャ・ローマ時代には、家庭教師という職業は奴隷の担当だったのである。あらゆる肉体労働が奴隷の仕事だったことはもちろんだが、家庭教師、外科医、理髪師などもそうであり、アテネでは警官もスキタイ人の国有奴隷だったのだ。

ブラジルも初等教育の教師に対しては、こうしたヨーロッパの伝統的な考え方をかなりの部分継承している。こうした環境では教育は聖職などという考えは出てこないし、待遇や社会的地位の低いのもやむを得ない。だから、ブラジルでは二校、三校とかけ持ちをする教師が多い。学級担任、朝礼、ホームルーム、課外活動、授業参観、職員会議などという余計なものがないから、かけ持ちが可能なのだ。

算数の先生は学校に来て、決められた時間授業して、終わればさっさと帰るだけ。道徳教育とか情操教育などとは無縁である。道徳とか情操とかは教会や家庭の担当なのである。とまあ、これはいささか極論かも知れぬが、大筋で

は間違っていまい。日本では学校の掃除は生徒がする。ブラジルでそれをさせたら親が学校に怒鳴り込むのは必定だ。

教育の普及嫌ったポルトガル王室

それにしてもポルトガル王室は、植民地ブラジルの教育をものの見事に無視した。植民地での教育は不要というより、むしろ有害なものと考えたのである。

ブラジルにおける教育のはじまりは、イエズス会士によるインジオ教化であるが、ポルトガル王室はイエズス会に対して冷淡であり、この風潮は年を追って進む。

イエズス会に対するポルトガルの迫害はポンバル侯爵の宰相時代に達し、一七五九年、ポンバルは海外のすべてのポルトガルの植民地からイエズス会士を追放してしまう。

この結果として、ブラジルの教育は荒廃するが、ポルトガルはまったく意に介さなかった。これは、スペイン領のラテン・アメリカには見られなかった現象である。

スペイン領では、ドミニカのサント・トマス大学（一五三八年）、メキシコ市のサン・パウロ大学（一五五一年）、リマ市のサン・マルコス大学（一五五一年）を皮切りに、各地に大学が設立される。植民地時代が終わった時点で、

スペイン領には一二の大学があり、そのうちの少なくても八校は一流大学だった。

これと対照的に、ブラジルには一八二二年の独立まで、大学が一つもなかった。貴族や大農場主の子弟で、どうしても大学に入りたい者は、ポルトガルのコインブラ大学に留学するより方法がなかったのである。一七七五年から一八二一年まで、コインブラ大学を卒業したブラジル出身者は七二〇名である。同じ時期、スペイン領植民地の各大学を卒業した者の合計は一五万人を超す。

ポルトガル王室や王室の命を受けたブラジルの執政官たちは、教育だけではなく、印刷物をつくることも認めなかった。メキシコ市では一五五三年、既に書物が出版されているのに、ブラジルでは一八〇八年、ナポレオンに追われたドン・ジョン六世がブラジルに渡った時、やっと印刷機が持ち込まれている。実は、その前にも一七四七年にリオで印刷所が出来たことがあったのだが、王令で印刷禁止、印刷所は閉鎖されてしまった経緯がある。いかにポルトガルが、奴隷を主体とする労働者への教育普及を嫌ったかの証拠である。

摂政王子ドン・ジョン六世が、一八〇八年ポルトガル王室をブラジルに移したことは、ナポレオンに追われてのやむを得ぬ仕儀とはいえ、ブラジルの文化興隆に大きく貢献する結果となった。

それまでのブラジルは、ポルトガル王室にとって金を儲けるため、富を収奪するためにのみ存在する植民地にすぎなかった。ポルトガルの王権は強大で、教会は完全に抑え込まれていた。

ところが、王室そのものがブラジルに移転したとなれば、事情は違ってくる。もはやブラジルは植民地ではなく本国なのだ。本国となればそれにふさわしい格式が必要になってくるし、いろいろな文化的装いも整えなくてはならない。教育もその一つで、ポルトガル王室の関係者は慌ててヨーロッパの教育制度をブラジルに持ち込む。ブラジルの教育はこの時からはじまるのである。

一八二二年の独立後、ブラジルにも学校がつくられるようになるが、各種の職業学校や技術学校が多かった。現在でこそ、総合大学には理学部や工学部があるが、以前は大学とは別系統の技術学校だったのだ。一九世紀初期の時代、まだ科学技術という考えはなく、技術は職人の徒弟制度の中か、マニュファクチャーの中にあると考えられていた。つまり、鍛治屋、鋳もの屋、彫金師、大工、彫刻師、塗師、各種細工師など、個々の職人の腕に技術があったということである。

いやしい労働者である職人の腕の中にある技術は、それがいかにすばらしくとも、大学の課目である「哲学」や「神学」のような高等な学問と同列には論じられない。そこで

大学とは別に、医学校、農学校、看護学校、師範学校、技術学校のような、高等技術教育機関が生まれたのである。

これは欧米ではどこもそうだったので、技術教育学校が総合大学に組み込まれるのは二〇世紀に入ってからで、ブラジルでは二〇世紀の半ばに達してからだ。

東京大学の村上陽一郎教授が書いているところによると、

「今から一五〇年前の欧米に理学部を持った大学がいくつあったか。ほとんど皆無である。工学部はどうか。絶無である」

ただ日本だけは例外だと次のように言う。

「明治の初頭に、大学と並んで設立された『工学寮』は、エコール・ポリテクニクなどのコピーだったが、それは間もなくごく自然に東京大学に吸収され、国立総合大学工学部として世界最初の例になった」

外国の技術は何でも吸収しようとする明治新政府の意欲が、技術系分野の学問を差別しなかったので、これが後に科学技術の開花に大きく貢献することになる。

日本と異なる基本的思考

東北ブラジル、セアラ州の首都フォルタレーザはやたらに人の多い町である。現在人口は一五〇万人、レシフェを

抜いてサルバドールにつぐ東北ブラジル第二の都市になっている。中心街の混雑していること、新宿や渋谷の盛り場並みである。おまけに露天商が歩道に店をひろげているから、歩きにくいことこの上ない。それに汚くもある。

この町の名物はカシャッサ（ピンガ、火酒）売りと乞食である。カシャッサ売りは海岸通りに行くと、それこそ五m間隔で並んでいる。木の空箱の上にカシャッサのビンと小さなコップを置き、一杯いくらで飲ませるのだ。脇に水の入ったバケツがあって、飲み終わったコップをちょいと水につけて洗ったことにする。このコップ酒を飲める日本人はよほど勇気のある人と言えるだろう。

乞食もやたらにいる。暑いところだから、海岸のレストランなどはほとんど戸外にテーブルを出し、客はそこで食事をしたり、飲んだりするようになっている。

海岸のココ椰子の下でくつろいで食事をするのは気持ちが良いものだが、乞食には悩まされる。

五分か十分おきに乞食がやって来て小銭をせがむ。この場合、日本人は露骨にいやな顔をしたり、うるさそうに追い払うのが通常である。

ところが周囲をよく観察していると、ブラジル人はうるさがりもせず、乞食が来る度になにがしかの小銭を渡している。これには感心したが、見ているうちに、これはイスラム社会でいうザカート（喜捨）であることに気がつい

た。イスラムはもちろんだが、ブラジルの乞食も金を貰って「オブリガード」（ありがとう）とは絶対に言わない。神様のお恵みがあるでしょうという意味の「デウス・リェ・バーゲ」と言うだけである。

喜捨は金持ちの宗教的義務である。持たざる人が持てる人に喜捨を要求するのは、持てる人の神に対する義務を果たす手伝いをしているのだ。乞食は金持ちに善根を施させているのだから、乞食が金を貰って「ありがとう」などと言うわけがない。

日本の古典的、伝統的なもの乞いは「西や東の旦那さま…」が相手で、神様は介在しない。だから、金を貰えば旦那さまに対して「おありがとうございい…」と言わなくてはならない。結局これも文化の背景の違いなのだが、日本的思考様式ではなかなか理解出来ない。おもしろいことに、日本人が乞食に金をやらないのは乞食の間ではよく知られており、サンパウロなどでは、時々乞食から悪態をつかれることがある。

もう一つ例をあげると、結婚式の披露宴や何かのパーティーにブラジル人を招待したら、招待した当主夫婦の他に、一家全部に来られて困った経験を持つ日系人は多いはずである。なにしろ娘や息子だけでなく、その恋人や友人まで引き連れて堂々とやってくる。中には幼児や赤ん坊まで連れてきて、その子供の世話をする女中やベビー・シッ

ターも一緒などというのもある。

これなども日本的思考や感覚では理解出来ない。「なんて、ガイジンは非常識で厚かましいんだろう……」ということになる。こういうカルチャー・ショックは、相手の思考法がわからないため、時としてとんだ軋轢の種になることがある。この場合、招待を受けたガイジンは、こういうお目出度い席なら、一家をあげて祝福するのが当然であり礼儀だと思っているのだ。

結婚の披露宴や誕生日のパーティーにブラジル人を呼ぶ場合は、よほど注意する必要がある。まあ、今どき都会の狭い家に、一家眷族あげて来ることはないだろうが、地方では今もある。地方のファゼンデイロの結婚式などは、招待される側は一家あげて出席するのが礼儀である。その代わり、設宴も野外でシュラスコだから五〇人や一〇〇人、人間が増えてもまったく問題はない。ただし、万事大ざっぱで、とても日本人のキメ細かさはない。人生で最も大切なのは家族と規定し、家族単位で行動する文化や習慣もどちらかというとイスラムが本家だが、イスラムの影響を受けたラテン世界には大体共通していると見てよい。

つまり、ファミリーとファミリーのつき合いが基本なのである。ファミリーというのは、前にも説明したように、従僕、召使い、助手、奴隷を意味するラテン語のファムルスから来ている。ファミリーは今では家庭の意味にも使わ

れる。しかし、家庭（ホーム、カーザ）はファミリーを構成する最小の単位で、いわばファゼンダ内の一軒の家にすぎない。

ファミリーは、ファゼンダのような連合体で、その中には主人夫婦を中心に、娘や息子、その配偶者、その他の親戚、多くの使用人は当然含まれるし、場合によっては恋人や友人なども成員に含まれてしまうのである。

同化しにくい民族の文化

アメリカではまだワスプ神話が生きている。ホワイト（W、白人）、アングロ・サクソン（AS）、プロテスタント（P）の頭文字をとった〝WASP〟はアメリカ社会の本流を形成する階層である。

とはいうものの、ワスプのすべてが上流階級、富裕階級というわけではない。中には貧しい白人、いわゆるプア・ホワイトもいるのだが、とにかくワスプはアメリカ社会で「我こそアメリカ人」との意識を一〇〇％持っている連中なのである。

ところで、ブラジルにワスプに相当する階層はあるだろうか。ホワイト、アングロ・サクソン、プロテスタントを真似し、ポルトガル人を意識において、ホワイト、ラテン、

カトリックとしても、どうもピンとこない。だいいち、ポルトガル人がホワイトかどうか、はなはだ怪しい。ムーア人の血や黒人との混血もあるから、純粋な白人とはとても言いがたい。二番目のラテン民族も同様の理由で純粋さがなく、いろいろな民族が混淆している。三番目のカトリックはたしかにそうなのだが、これとてポルトガルのカトリックは力が弱く、王権に従属するような形をとったから、スペインのカトリックと比べても教会の力は弱かった。もちろん、こうした力関係は新大陸でもそのまま反映される。

それにポルトガルという国自身、大航海時代以後は列国との競争に敗れ、ヨーロッパの一辺境国にすぎなくなるため、あまり宗主国の自慢をするわけにもいかない。したがって、ブラジルにはワスプのような、はっきりした階層はないのである。しかし「我こそブラジル人」という意識なら、ポルトガル出身のブラジル人はたいてい持っている。特に、東北ブラジルの大地主で、地方の政界、経済界を牛耳っている「名家」にはその意識が強い。

しいて言うならば、これがブラジルのワスプで、先祖がセズマリアで大土地の譲渡を受けたり、もっと上のカピタニアの領主の一族だったりするほど、エリート意識は強くなる。

名前もメンドンサ、アフォンソ、ソーザ、クーニャ、アンドラーデ、コウチンニョ、コスタ、サー、アルメイダなど、ポルトガルの貴族の名前であるほどよい。もっとも、こういう姓はあらゆる階層に浸透しており、貧困階層にもひろがっているから、そう特別にありがたい名前でもないのだが。

ところで、本来のブラジル人というのは土着のインジオのことで、後から入った他の民族や人種は誰であってもよそ者にすぎない。ところが、ポルトガルの文化を主流とする「ルーゾ・ブラジル文化」が、ブラジルの基層文化になったために、ポルトガル人がブラジルを代表する民族になったのだ。

ブラジルには人種や民族のオリジンによって、ドイツ系ブラジル人、イタリア系、アフリカ系、日本系ブラジル人というように、非常に多くのナニナニ系ブラジル人が存在する。これら各国、各民族系ブラジル人は、ポルトガル系ブラジル人（ルーゾ・ブラジレイロ）とはやはり違い、「我こそはブラジル人」との意識をそうかんたんには持てない。

何系であろうとも、ブラジルで生まれればブラジル人だし、まして三世、四世、五世ともなれば純粋なブラジル人になりそうなものだが、ポルトガル系以外は、どうしても「ブラジル人」のワクからはみ出す部分が出てしまう。こ

のはみ出た部分がドイツ系ならドイツの、日系なら日本のエスニック（民族的）な伝統文化と言えよう。

各国移民が持ち込む民族的な文化は、ポルトガル系の「ルーゾ・ブラジル文化」とかけ離れていればいるほど、また、持ち込まれた文化の歴史が浅ければ浅いほど違和感が際立つという特徴を持っている。わかりやすく言えば、ポルトガルと同じラテン民族であるスペインやイタリア移民が持ち込む文化は、ルーゾ・ブラジル文化と共通する部分が多く、理解しやすい。

これがドイツ、スイス、ポーランドになると、かなりの違和感が出てくるし、日本や韓国、台湾のようなアジア系の文化になると、歴史の浅いことも手伝って完全な異文化になってしまう。

ブラジルには第二次世界大戦後の一時期まで、各国移民の文化はブラジル文化に同化、融合して「一つのブラジル文化」「一つのブラジル人」になるべきだとの論が支配的だった。これに全面的に賛同したのが、ラテン系のスペイン、イタリア移民である。

これに対し、ドイツ系、日系移民は独自の文化を固守したため、敵国民という情況もあって、徹底的に弾圧を受けた。

戦後、日系社会では、アイデンティティの帰属をめぐる論議が起こるが、最近ではドイツ系ブラジル人、日系ブラ

ジル人など、各民族系の独自の文化を持つブラジル人がいて当然という風潮になる。

日本移民の歴史は異文化の相克

このシリーズでは、いわゆる「ブラジル論」を展開しているわけだが、実は、現在のブラジル文化の形成には日本文化もかなり影響している。なにしろ第二次世界大戦前に約一九万五〇〇〇人、戦後に五万五〇〇〇人、計二五万人の日本移民が入っているのである。

一九九二年現在、一世移民こそ激減したが、日系人口は一三〇万人と推定されている。むろんマイノリティ（少数）である。が、これだけの数の日系人が、その国の人間として根を下ろして生活しているところはブラジル以外にはない。アメリカ、ペルー、ボリビア、パラグヴィ、アルゼンチン、カナダ、オーストラリアなどでも、日本人や日系人が根を下ろしているが、数においてブラジルにはおよばない。

ブラジル全体から見れば日系人はマイノリティである上、移民の歴史も八〇年余りと、ヨーロッパ移民の歴史に比べて浅くもある。だが、ここ一〇年、経済大国になった日本の影響もあって、ブラジルにおける日本文化は着実に浸透している。ここまでが大変だった。日本文化は、世界

の文化としてはかなり特殊である。したがって、日本移民は異文化、複合文化のブラジルに来ても、その文化を理解し受容する能力がほとんど皆無だった。これは他のヨーロッパ移民には見られない特徴である。

日本移民がつくった戦前の「同胞社会」は、自分たちが持っている固有の日本文化を異文化から守るためのエスニック（民族）社会だった。「小日本」と言ってもよいだろう。

現実にはブラジルの社会制度や法律によって生活しているにも拘らず、そういう意識はまったくなく、あくまでも「お上」はブラジル政府ではなく、出先の日本公館だった。

日本人以外は「ガイジン」であり「毛唐」であって、何を考えているのかわからぬ、度しがたき人間なのである。ブラジルの政治、経済、社会には関心がなく、もっぱら自分たちの属する日系社会や、日本のことに関心が向けられる。ブラジル語が出来ないことも要因の一つではあるが、言葉の問題を別にしても、日本人は本質的に異文化が受容出来なかったのである。このため、ブラジルだけでなく、どこの移住先国でもエスニック・グループとしての日本人社会はかなり特殊なものだった。

日本社会の特徴は、きわ立った同質社会にある。同質社会であることの結果として、排他性、閉鎖性が生じてくる。つまり自分たちと異なる文化や、その文化を有する人

間を〝異物〟として排除する傾向が非常に強いのだ。では、こうした排他性、閉鎖性を特質とする同質文化の日本から、多民族、多文化複合国家のアメリカやブラジルに移住した場合、異文化に対してどのような受容感覚を示すのか、また、その受容感覚は時代と共にどのように変わっていくのだろうか。

アメリカのコミュニケーション学者ベネット夫妻の発表した研究に「異文化センシビリティの分類」がある。日本の新聞に紹介されていたが、（青山学院大学林吉郎教授）大変おもしろく、かつユニークなので、かんたんに内容を説明する。ベネット夫妻は、個人が持つ異文化の理解感覚、つまり異文化センシビリティーには、六つの段階があるとする。

①自己の持つ文化こそが唯一、絶対、最高で、異文化を真っ向から否定する段階。

②異文化の存在は認めるが、好ましくないから受け入れないという段階。

③異文化をやむを得ず受け入れる場合もあるが、なるべく必要最小限にとどめたい段階。

以上の①否定、②防衛、③最小化の三つの段階は、自己文化中心型である。ところが、次の④⑤⑥の段階になると、分水界を越えて、相手の文化を理解する、相対文化理

解型になってくる。

④異文化の価値や行動を認め、受け入れる段階。

⑤異文化とのコミュニケーションが出来て相互理解が出来る段階。

⑥複数の文化体系を認識、理解しながら、どの文化体系とも距離を置き、自分独自のアイデンティティを開発、維持する段階。

④受容、⑤適応、⑥統合である。このパラダイム（理論的枠組み）を、ブラジルの日系移民社会に当てはめると、戦前の移民のほとんどは、①または②のタイプで、③すら稀だった。まして、分水界を越え、相対文化理解型に移行出来た移民は皆無に近かった。

日本移民の異文化理解感覚が①、②にとどまっている以上、日系社会は日本社会のミニチュア版でしかあり得ない。この段階では、相手の文化が理解出来ないから、様々な軋轢や誤解を生ずることにつながってくる。

異文化との衝突、相克は、日本移民の宿命である。「日本移民の歴史は、異文化との衝突、融合、適応、統合の歴史である」と定義することも出来るのだ。日本文化がブラジル文化に参入するようになったのは、ごく最近のことである。

浸透するアングラ経済

エルンジーナ女史がサンパウロ市長になって、カメローと呼ばれる露天商が爆発的に増えた。なにしろ「貧しい者に職を、土地なき者に土地を」というのが、立候補時代からの公約なのだから仕方がない。おかげで町の美観は損なわれる、通行の邪魔にはなる、まともな商店の経営は脅かされるので、大きな問題になっている。

カメローなる言葉は、字引を引くと、至愚の者、阿呆、乱暴者、無法者の意味もあり、また、ガラクタを路上で売る者とも書いてある。

一応、市役所の営業許可を受けることになってはいるが、ほとんどがもぐり。最初の頃は取り扱う商品もキャンデーとかチョコレートとか、ちゃちなオモチャとか。ところがどうして、この頃ではオーディオとかビデオデッキなどの高価格商品まで売るようになってきた。この商品すべて密輸である。ルートはいくつもあるらしいが、サンパウロやリオで売られているのは、パラグワイからのが多いということ。時折はテレビや新聞でパラグワイに買出しに行く連中が紹介されている。たまにはブラジル側に入ってから、警察の手入れで捕まることもあるらしい。しかし、捕まるのはいつも小物、大物はまず絶対に捕まることはない。

ブラジル全国のカメローの数がどのくらいになるのか知らぬ。また、どのくらいの取引額になるのかもわからぬ。おそらく誰もわからないのではないかと思う。が、相当の数字になることだけは間違いあるまい。数字がつかめないのはカメローの商売が、国の経済組織や流通機構に組み入れられていないインフォーマル・セクター（非公式部門）だからである。行政組織による保護もされない代わりに、規制も受けない。カメローもそうだが、インフォーマル・セクターの代表はファベーラ（スラム）の活動だろう。ファベーラは、もともと存在そのものがインフォーマルだし、そこの住民がかかわる経済活動もインフォーマルなものが多い。密輸、麻薬、賭博、売春その他あらゆる犯罪を含めてである。

インフォーマル・セクターで営まれる経済活動は、ほとんどアングラ（地下）経済であり、アングラ・マネーである。リオ名物カーニバルのエスコーラ・デ・サンバの華麗な行進でさえも、アングラ・マネーなしに出来ないことはよく知られた事実だ。

現在、ブラジルから世界中に出稼ぎに行っている人間は一五〇万人、日本には一五万人である。

この出稼ぎがもたらす金は膨大な額に達するものと思われる。この金も正規な銀行送金は別として、腹巻きに入れ

て持ち帰る場合が多い。とすると、この金も表面には出ないのだから、やはりアングラ・マネーなのである。

ラテン・アメリカにおけるインフォーマル・セクターは、確実に増大しており、ブラジルも例外ではない。原因は国の経済が危機に瀕し、というより破産している状態では国や政府を当てにすることも、頼ることも出来ないからである。既に麻薬経済への依存度の高い、コロンビア、ベネズエラ、ペルー、ボリビアなどでは、国民総生産の四〇％を超える部分がインフォーマル・セクターによるものと推定されている。

「ＶＥＪＡ」誌によると、ブラジルでも労働人口の約半数がなんらかの形で地下経済にかかわっていると言われ、その規模は国民総生産の三〇～五〇％、一七〇〇億ドルに達すると見られている。

この数字はアルゼンチンやベネズエラの国内総生産を凌ぎ、ブラジルの対外債務をも超す数字なのである。非常に危険な兆候で、これが進むと国家機能の喪失、無秩序、混沌の事態に立ち至るが、大都市のファベーラ（スラム）化は間違いなく進んでおり、アングラ経済はますます勢力を伸ばしている。

中南米では一九五〇年代以降、急速な都市化が進み、それに伴ってカリャンパス（チリ）、ビラ・ミゼリアス（アルゼンチン）、ランチートス（ベネズエラ）、バリアーダス

（ペルー）、ファベーラ（ブラジル）といった、大都市周辺のスラムも膨脹する。

現在、人口五〇〇万以上の都市が世界で三四あるが、そのうちの一二が北半球、二二が南半球に属している。世界最大の都市はメキシコシティーで、二番目はサンパウロだが、これらの都市はスラムの拡大によって急膨脹している。

スラムのことをブラジルでは一般的にファベーラと言う。しかし、この言葉が登場するのは、一八九六年の年末から翌年にかけて、約一年戦いが続いた「カヌードスの乱」以降だから、歴史的には比較的新しい。バイアのカヌードスで激戦のあったのがファベーラの丘で、戦後、政府軍の兵士がリオに引き揚げ、仮小屋をつくって住んだのがプロビンシアの丘、ファベーラによく似ていたのだ。ファベーラは植物の名前である。

エネルギーの爆発カーニバル狂乱

ブラジルのカルナバル（カーニバル）は、まことにすさまじいエネルギーの放出である。テレビの実況中継でもある程度の雰囲気は伝わってくるが、実際、現場に行くとテレビなどは問題にならない。とにかく、ものすごい熱気の

放散に圧倒されるばかり。

リオの特設会場で催される趣向を凝らした絢爛豪華なディスフィーレは、世界的に有名である。

このうち、トップ・グループ一五チームによって競われるディスフィーレが特に名高い。一チームの構成は四千人平均だから、出場して行進する人間だけでも六万人という大群衆になる。

リオの特設会場でのディスフィーレは、まあ別格なのだが、リオ以外の各地でもローカル・カラーの濃いカルナバルが展開される。路上に繰り出して熱狂的に踊るカルナバルの他に、クラブで踊るのも数は多い。これは入場料一〇〇〇ドルの高級クラブから、スラムの住人が集まる粗末な会場まで千差万別。

いったいどれほどの人間がカルナバルで踊ったり、見物したりするのだろうか。こんな統計などあるわけはないが、ある統計学者は、全人口のうち、踊りに参加するのが一五％、見物はそれより少なくて一〇％、総計二五％がカルナバルに参加すると推定した。

むろん、テレビで観賞する在宅者は、この数には入らない。とすると、ブラジルの人口は約一億五〇〇〇万人だから、踊りに参加する者二二〇〇万人、見物一五〇〇万人、計三七〇〇万人の数字が出てくる。数字の真偽はわからぬ。が、少なくとも、想像を絶する大群衆が路上やクラブ

で狂熱の乱舞に参加しているということは事実だ。

カルナバルそのものの起源は、ヨーロッパでは古く、既に中世には存在したし、ブラジルでもフランスの画家が、一八二五年頃のカルナバル風景を描いているから、ブラジル独立初期の時代には既に、仮装したり、香水をかけ合って騒いだりの習慣はあったようだ。

ただ、リオのエスコーラ・デ・サンバはずっと後で、一九二八年に出来ている。エスコーラ同志の競争は一九三〇年からはじまり、一九三五年にディスフィーレによる競争が公式になっている。

おもしろいのは、一九二六年、外国からカーニバル見物のツーリストが訪れていることで、この頃にはもう見せ物としての価値があったと思われる。

カルナバルの狂乱が抑制された階層のエネルギー発散の機会であることは間違いない。それはリオの各トップ・グループ・チームの成員の多くが、ファベーラの住人であることからも裏づけられている。カルナバルのディスフィーレは、単なるショーなどというものではなく、抑圧された大衆の溜まりに溜まった不平、不満の高圧ガスを抜く「ガス抜き行事」なのである。

今でこそカルナバルは、金持ちや有名人も参加し、年々派手になっているが、本質は大衆のうさ晴らしなのだ。踊り狂うことによって、一時的にしろ浮世の辛さを忘れ、不

満を発散させる効果を持っている。これは宗教的なトラスト（忘我）状態と相通じる。

踊ることによってすべてを忘れるという方法は、世界の各地で見られる現象である。日本でも「くぐつ舞い」「念仏踊り」がそうだし、近世の「おかげまいり」や、明治維新の直前に発生した「ええじゃないか」などは、民衆エネルギーの爆発という点で、カルナバルと共通している。

現在、カルナバルに参加した群衆が、そのまま暴動に移行したり、商店に押し入って掠奪したりすることはない。しかし、ふだん抑圧されているエネルギーの解放という点では、サッカーの試合における暴動、バスのストなどをきっかけに起こる暴動、復活祭の「ユダ叩き」から連動して発生する暴動と共通のエネルギーなのである。

ブラジルのカルナバルが盛んなのは、民族的な要素も多分に関係している。カルナバルのオリジンはアフリカではないが、強烈なサンバのリズムと身体の振りは、完全にアフリカ黒人独特のものである。ただ、彼等の血に流れているアフリカ民族の卓越したリズム感と腰の振りは、ちょっと他の民族には真似できない。なにしろ、１６ビートで激しく動く脚（足）、８ビートで揺らす腰（尻）４ビートの胸（乳房）と腕（手）、それでいて頭（顔）は固定し、正面を向いて動かない。身体の各部位がそれぞれ違ったリズ

ムで動いていながら、全体は一つにまとまっているのだ。まず、日本人には出来ないだろう。

こういうトランス（恍惚）状態で踊ると、踊り手は次第に興奮して、身に着けているものを脱ぎ捨てる傾向が強い。日本の「一遍聖絵」の踊り念仏でも、僧や尼、大衆の男、女が太腿もあらわに衣も乱れて踊り狂い、大変エロチックだが、こういうものは洋の東西を問わないのだろう。

蹴球（サッカー）は植民地政策の武器

世界のサッカー人口は、裏通りで球を蹴る少年まで加えて、競技人口五億、ファン一八億人と言われている。最近は日本もサッカー熱が盛んで、Jリーグが出来、ブラジル出身の選手も活躍している。しかし、サッカー熱ということではブラジルには遠くおよぶまい。ブラジルという国は、多民族国家であるため、その文化は同質性よりも多様性が目立つ。自然環境も多様だし、政治、経済要因による地方格差もひどい。貧富の階級差にもとづく生活様式は様々だし、人種、民族による風習、習慣、価値感などもそれぞれに違っている。一方、同質性のほうは、カトリックの普及、言語の統一性、サンバとカーニバルへの情熱、食べ物のフェイジョン豆と米への嗜好などだが、サッカー愛

好は同質性の筆頭に入れて良いだろう。

四年に一度のワールド・カップでブラジルが出場する日は、まったく仕事にならぬこと周知の通り。この熱狂ぶりは全国どこでも同じで、アマゾンからリオ・グランデ・ド・スールまで変わらない。アマゾンや東北ブラジルの電気のない奥地にテレビはない。が、ラジオはある。ラジオを持たぬ者はラジオのある家まで行って放送を聞く。未開でないインジオだって同じこと。そしてブラジルが勝てば大騒ぎとなる。他の国がどうなのか知らぬが、あらゆる階層の人間が老若男女を問わず熱狂するブラジルは、おそらくサッカー狂国の最たるものだろう。

もっとも中米では、一九六九年七月に、エルサルバドルとホンジュラス（現在のベリーズ）との間で、サッカーの試合がきっかけで百時間戦争が起こったことがあるから、サッカー狂国は他にもあるのはたしか。ただ、サッカー戦争について補足しておくと、この戦争はサッカーの試合が契機となっただけで、両国の間には不法越境者の処置をめぐる根深い問題があったのだ。

ブラジルも最近はバレーボール、バスケット、テニスなどの愛好者が増えているが、なんといってもサッカーで、一〇年前まではスポーツといえばサッカーに限られていたと言ってもよい。

サッカーという言葉は、正式名称であるＡｓｓｏｃｉａ

ｔｉｏｎ　ＦｏｏｔｂａｌｌのＳｏｃを取り出しｅｒをつけたものだそうだ。おもしろいことに、サッカーの名称を使用するのはアメリカと日本だけで、他はすべてフットボール系統の名称を使う。

ブラジルはＦｕｔｅｂｏｌ、メキシコはＦｕｔｂｏｌ、その他の南米はアクセントつきのＦｕｔｂｏｌという具合。

アメリカには独自のアメリカン・フットボールがあるから、混同を避けてサッカーにしたのだ。

サッカーがイギリスでスポーツとしての形が整ってくるのは、一九世紀に入ってからで、イギリスのカレッジ・スポーツとして流行り出した。現在のような規則が一応出来たのは、一八六三年ロンドンにイングランド・フットボール協会が設立された時である。ブラジルへはイギリスのサザンプトンに留学していたチャールス・ミレルが一八九四年、二個のボールとユニホーム一式を持ち帰ったのがはじまり。ミレルは父親がイギリス人、母親がブラジル人だった。

それからの普及はものすごい。ブラジルでコッパ・ド・ムンドと呼ばれるワールド・カップは一九三〇年からはじまるが、ブラジルは現在まで全回出場で三度の優勝をしている。フル出場はブラジルだけで他にはない。ファンが気違いになるのももっともなのだ。

ブラジルのスポーツはすべてクラブ・スポーツである。大学がなかったから、カレッジ対抗など出来ない。しかし、クラブは有産階級でないと入会が認められない。だからブラジルのサッカーも最初は支配階級のためのスポーツで、黒人階級は完全にクラブから締め出されていた。現在は、いわばハングリースポーツで、すべての階級に解放されているから、ペレーのような英雄も生まれるし、第二、第三のペレーを狙う黒人系も多くなる。

通常の方法ではなかなか社会上昇出来ない下層階級にとって、富と名声のサクセスストーリーの夢を与えるのがサッカーなのである。

サッカーがこれだけ世界的に人気があるのは、ボール一個で誰でも楽しめ、ルールがかんたんでわかりやすく、観ていてもおもしろいから。一流チームのゲームには、とにかくすばらしいスピードと躍動感がある。それに、特にラテンアメリカやアフリカの選手は、信じられない身体の動きをする。バネとリズムの感覚が違うのだ。

サッカーは、実はイギリスの植民地政策の大きな武器だった。苛酷に搾取される植民地民衆の不満や怒りをそらすためには、なんらかのストレスの吐け口が必要である。それには道具に金のかか/らないサッカーに夢中にさせるのが一番と考えたのである。ブラジルでも同じこと。サッカーに熱中してくれるほど、ありがたいことはない。

地主と対立〝解放の神学〟

一九六〇年代の終わりから七〇年代にかけて、ラテンアメリカで「解放の神学」が盛んになったことがある。「キリスト教は、貧しい人々の人間解放のための宗教である」とする、カトリック神学の一潮流で、別に理論として目新しいものではない。

イエズス会をはじめとするカトリック伝導会では、伝統的に「弱者の救済」「貧者のための教会」をモットーに掲げてきた。さらに遡れば「インディアス史」を執筆し、インディアスにおけるスペイン国王の支配を批判した、スペインの聖職者バルトロメ・デ・ラス・カサスが「解放の神学」の創始者とも言える。

まあ、そういう古い時代のことはさておいて、解放の神学が頂点を迎えたのは一九七〇年代で、貧者や被抑圧者の土地獲得闘争、資本主義の否定、反独裁闘争など、かなり尖鋭的な動きが各地で起こった。

ブラジルではレオナルド・ボフ神父、ヘルデル・カマラ大司教らが主導者である。この動きはローマ法王庁の方針と相容れず、ボフ神父は著作活動および教育活動を法王庁より禁止される。しかし、一九八六年になって法王庁は態

度を軟化、「解放の神学」を肯定する方針に転換、ボフ神父に対する活動禁止令も解除される。

現在、ブラジルでは各地で貧しい大衆による土地侵入問題が起こっているが、この運動を積極的に支援しているのが神父や教会なのである。土地問題で、紛争の絶えないのは有名なビッコ・デ・パパガイオ（オウムの嘴）地方、すなわちパラー、マラニオン、マット・グロッソ、トカンチンス州にまたがる一帯。地図で見ると、トカンチンス州の最北部がオウムの嘴のように曲がって見えるところから、この名がついたもの。アマゾンの原生林地帯を除けば、ブラジルで最も開発の遅れた地域である。紛争の絶えないのは、この辺りの土地はラチフンジオ（大農場）ではあるものの、開発の歴史が新しく、国有地を金持ち連中が測量し、一件書類を作成して国から合法的に無償譲渡を受けた時は、既に何家族かのポッセイロがそこに住んでいるケースが多いからである。

ポッセイロとは、小土地の占有者という意味である。所有者ではないが、何年、何十年とその土地に住み、僅かばかりの畑をつくり、果樹を植え、自給自足の生活をしている、無学文盲のカボクロだ。大きな土地を取得した地主は、ポッセイロの存在が邪魔にならなかったり、少数である場合は従前通りの居住を認めるが、数が多かったり、反抗する場合は、用心棒を使って実力で排除する。あるいは

警察を介入させ、警察力で排除することもある。もちろん、実力行使の過程では双方に死者や怪我人が出ることも珍しくない。この時、地主側に対抗し、ポッセイロの味方につくのがカトリックの神父で、通常、神父がポッセイロ側のオーガナイザー兼指導者の役割りを果たしている。

この抗争は、殺したり殺されたり、血腥い事件も多いが、地主があこぎなのか、ポッセイロが無法なのか、いろいろケースがあって、いちがいには言えない。

抗争事件が起きると、その土地に住んでいた本来のポッセイロの他に近隣の貧民がどっと入り込んで、紛争を大きくすることが多い。こういう連中をグリレイロと言い、本来のポッセイロと区別するが、グリレイロが多くなると、地主側は対策に苦慮する。

ブラジルの奥地には、こうしたポッセイロやグリレイロが集まって、自然発生的に出来た町がいくつかある。地主がやむを得ず譲渡した土地だが、こうしたところでは神父の果たしている役割が大きい。解放の神学の実践者として、カトリック神父が活動しているのは、なにもブラジルだけではなく、ラテン・アメリカ全体におよんでいる。

解放の神学の実践は「弱者の救済」「貧者の味方」が基本的立場にあるから、どうしても神父と地主は対立せざるを得ない。そうなると、これは一種の戦いとな。、神父側

もあらゆる戦術、戦略を駆使して戦いに勝とうとする。この際、一番狙われるのが日系人の農場である。これはブラジルの例ではないが、つい最近、パラグワイのイグアスー植民地にパラグワイ人のポッセイロが大挙侵入して大問題になったことがある。パラグワイ人大地主の農場を狙うと、地主は一族郎党のほかに用心棒を傭い、実力で排除したり、それでも間に合わない場合は警察や軍隊を出動させるからポッセイロ側の犠牲が大きい。

ところが日系人は、武器をとっての実力行動はまずしない。精々司法当局に訴えたり、日本の駐在公館に仲介を依頼するぐらいだから、神父としては狙いやすいのだ。

治安の良い、法治国家の日本からやって来た移民は、こうした修羅場には弱いのである。

セルトン分析が理解の鍵

ノルデステ（東北ブラジル）、それも奥地のセルトンといわれる地方を何度か歩いているうちに気がついた。ブラジルのすべての問題は、その根源を探ればノルデステに行き着くのではないかと。

しかし、違うだろう。ノルデステがすべてのブラジルを代表しているはずはない。ないのだが、少なくともこの風

土、歴史、人間を抜きにブラジルを語れないのも、またたしかなのである。ノルデステのセルトン地方は、貧困、乾燥、飢餓を特徴とする土地であり、同時に人口圧の途方もなく高い地域である。貧困だけの地域なら、ブラジルには他にもある。国土の半分以上を占めるアマゾンなどは、ノルデステに優るとも劣らぬ貧困地域だろう。ところがアマゾンには貧困はあっても乾燥も飢餓も人口圧もない。つまりアマゾンは飢餓者の出ない貧困地帯なので、こういう例は世界でも珍しい。

そこへいくと、貧困、乾燥、飢餓、人口圧がセットになっているノルデステのセルトン地帯は、世界的な飢餓地域であるエチオピアやソマリアと共通の苛酷な条件を備えている。むろん、旱魃（セッカ）が続けば餓死者も出る。どうやらブラジルを理解するためには、この特殊地帯であるノルデステのセルトン地方を分析するのが必要不可欠のようである。

なにしろ、周期的な旱魃を免れない特異な環境のセルトン、内国移住の人口供給源としてのセルトン、更には抑圧された民衆によって時折引き起こされる抵抗の歴史を持つセルトンは、ブラジルの社会形成と密接なかかわり合いを持っているのだ。

というわけで、ノルデステ問題を取り上げる。

まず、ノルデステの風土について説明しておく。学校の講義のようでおもしろくはないが、これを頭に入れておかないとノルデステがわからない。ノルデステというのは一つの行政区分でもあり、アマゾンに隣接しているマラニオンを最北部に、以下ピアウイ、セアラー、リオ・グランデ・ド・ノルテ、パライーバ、ペルナンブコ、アラゴアス、セルジッペ、バイアの九州で構成される。

面積は一五四万九〇〇〇平方km、ブラジル全土の面積から見ると一八・二%にすぎないが、それでも日本の四倍強の面積となる。ノルデステの地域区分は、植生と降雨量で分けていくのがわかりやすい。まず、ブラジルの肩の部分に当たるリオ・グランデ・ド・ノルテ州のサンロッケ岬から、南に向かって海岸山脈が走っている。ところが、ブラジル南部の海岸山脈が文字通り海岸近くに位置しているのに対し、ノルデステの山脈は海岸からかなり奥地に入っている。海から山脈までの海岸台地が湿潤森林地帯のゾナ・ダ・マッタで、かつては常緑樹が密生していた。この台地は海岸に沿った帯状地で、平均の幅が八〇km、最も広いところでは三五〇kmに達する。年間降水量は二〇〇〇ミリ、しかも雨のない乾季は長くても二カ月ほど。土地は肥えていて、降雨のあるところから砂糖キビ栽培に適しており、ブラジル開発の初期から栽培が行われた。現在ではかつての森林はまったく姿を消している。

ゾナ・ダ・マッタが海岸山脈で終わり、山脈を越えて奥地に向かうと、アグレステという疎林帯が現れる。ゾナ・ダ・マッタとセルトンの中間地帯で雨の降らない乾季が四～五カ月とかなり長くなる。アグレステの奥がセルトンと呼ばれるカァチンガ地帯。ここがブラジルで最も乾燥の厳しいところである。カァチンガとはツピー語のカァ（森）チンガ（白い）で、乾燥で葉が落ち、枯木のように白っぽく見える潅木林のことを言う。

マラニオンを除くノルデステ八州の奥地にひろがる、面積七六万平方km（日本のちょうど二倍）の一大乾燥地帯。もっとも、これくらい広いと、セルトンといっても場所により地形も降水量も乾季の長さも違ってくる。降水量は四〇〇ミリから一〇〇〇ミリ、降雨のない乾季も六カ月から一一ヵ月というようにバラつきがある。植生はカァチンガの風物詩として有名な柱サボテンのシケシケを筆頭にアナナス科のマカンビーラ、樹木ではジュアゼイロ、ウンブーなど有棘植物が多い。ブラジルには本当の砂漠は存在しない。が、砂漠に最も近いのが、このサバンナのセルトンなのである。

さて、このセルトンに一八世紀のはじめから、牛や山羊を放牧するため、ポルトガル人や黒人奴隷が入るようになる。以後人口は爆発的に増え、現在は約一〇〇〇万人である。

定期的に旱魃に見舞われる、この「不毛の地」になにを好んで多くの人間が住まなければならないのかの疑問は誰でもが抱くところ。ところがこれが違う。実際に歩いてみると良くわかるが、セルトンは決して「不毛の地」ではない。作物はよく出来るし、雨季に降雨が順調にありさえすれば、他のどこよりも住みやすいのだ。

天国と地獄が交錯のセルトン

セルトンと言えば、直ちにセッカ(旱魃)が連想される。知らない人はこんな所に人間が住めるのかと思ってしまう。そう思うのも無理はないが、考えてみればセルトンはアラビアやアフリカの砂漠に比べれば、はるかに条件は良い。軽飛行機で飛ぶと良くわかるのだが、大きな山脈の近くの平原に、ところどころ島状になった丘が散在している。これは地理学用語でいうインゼルベルグ(島状丘)で、セルトンのような乾燥地に見られる特徴的な地形である。インゼルベルグは、山地の浸蝕によって削られた大地が最後に残った山で、この山麓には雨季に水が一時的に溜まる低地が必ずある。正式な用語では〝プラヤ〟だが、ブラジルではバイシャーダと言う。

セルトンのような乾燥地では、台地は降雨よりも、気温

の変化や風による機械的な風化作用で崩れていく。崩れた土砂は下に行くほど粒子が細かくなる。これが雨の多い地方だと大雨で流され、土砂は川に入って下流に流されてしまう。ところが、セルトンは水路の発達が悪いから、雨季に雨が降っても水はバイシャーダで消えるか、一時的な池になる程度で土砂の流出が起こらない。土砂と共に有機物も堆積されるから、バイシャーダの土地は肥沃である。

一つのバイシャーダの面積はさほど広いものではないが、いたるところにバイシャーダが出来ている。これが乾燥地、セルトンに多くの人間が住める秘密で、なんのことはない、タクラマカン砂漠などにおける山麓オアシスと同じ理屈なのだ。わかってしまえば別に不思議ではない。その上、セルトンに住むポルトガル人も黒人も、砂漠に生きるイスラム式の生活の知恵を身につけていた。

低地や窪地を利用してのトウモロコシ、マンジョカ、ソラマメ、サツマイモ、カボチャ、マシュシュ、キャーボ、ヤマイモなどの生活用作物の複合栽培は、オアシスの雑作農業をそのまま移したものである。

更に山羊の乳からつくるヨーグルト、バター、チーズ、内臓の料理であるブシャーダ、パネラーダ、牛肉を天日で乾燥させるカルネ・ド・ソール（太陽の肉＝干肉）、アングー、クスクスなどもイスラム起源のものか、その応用ばかりである。

雨季の降雨が順調ならば、天国といわれるセルトンも、雨がなければ一変して地獄と化す。なにしろ雨季に雨がなければ、次の雨季まで間違っても雨は降らない。近年の記録にあらわれたノルデステのセッカは、一八七七年、一九一五年、一九一九年、一九三二年、一九四一年、一九五二年となっている。セッカは一年で終わる場合が多いが、時には二年ないし三年続くこともある。これまでの最大のセッカは、一八七七年から七九年まで三年続いた大旱魃で、セルトンの人口の五〇％に相当する五〇万人が死んだ。一九七七年のフォルタレーザの人口は一二万四〇〇〇人だったが、二年後には六万八〇〇〇人に激減する。

この大旱魃を契機に、セルトン出身者の他地方への内国移住がはじまる。まず、この先駆けとして、折りからブームがはじまろうとしているアマゾンのゴムがあった。一九七七年から僅か三年の間に、ゴム液採取労働者として一〇万人のセルトン人がアマゾンに内国移住したのである。以後、今日までセルトン人がブラジル全国、特に南部に散開して、諸種の肉体労働に従事するというパターンが定着する。ブラジルの開発は、セルトン出身者の労働力なしには考えられない。セルトン出身者の労働力が評価されるのは、つらい労働に堪える忍耐力、即ち、あの苦行僧のような筋肉質の、痩せて骨張った体格と、強靭なバネという独特の資質があったからである。

セッカが続き、あらゆる食べ物、あらゆる救荒植物が食べ尽くされると、セルトンの住民は家を捨て、土地を捨てて悲惨な脱出行を敢行する。現地ではこれをレチラーダ（逃避行）と言う。少しでも水のあるところ、少しでも食べ物のあるところをめざして、骸骨のような避難民が行進するのだ。難民は町の商店に押し入り、食料を掠奪する。それ以外に生きる道はない。

こうした特異なセルトンの天国と地獄が交錯する風土が、セルトン人の肉体や人格形成に大きくかかわっていることはたしかだが、彼らの社会行動、規範、精神構造、爆発的な生殖率とどう関連するのか、そのメカニズムはまだ解明されていない。ただ、こうした風土の中から、ランピオンのようなカンガセイロ（盗賊団）やジュアゼイロのシセロ神父、カヌードスのアントニオ・コエーリョのメシアニズム、あるいは民衆の抵抗が発生しているのは間違いない。そして、飢餓による精神分裂症状、道徳心の喪失や指導者に対する狂信も現れてくる。

今も尾をひく〝一族戦争〟

しばらく前のことだが、テレビで「カンガセイロのランピオンは英雄か盗賊か」というアンケートをやったことが

ある。カンガセイロは盗賊団、ランピオンは、盗賊団の首領だった本命ビルグリーノ・フェレイラ・ダ・シルバのあだ名。一九二六年から首領となり、一九三八年愛人のマリア・ボニータと共に殺されるまで、百人以上の部下を率いてセルトンを荒らし回っていた男である。

アンケートの結果は八対二で、ランピオンを英雄とするものが多かった。史実からすれば大ウソ、ランピオンとその仲間には「義侠」も「仁」も「義」もなく、見境なく殺し、奪い、犯したというのが実情である。むしろ、ランピオンの少し前に登場して勇名を馳せたカンガセイロ、アントニオ・シルビーノの方がロビン・フッド的な義侠心もあり、義賊的な要素を持っていた。

カンガセイロは、一九〇〇年から一九四〇年までの四〇年間だけノルデステのセルトンを舞台に出現した盗賊団で、ざっと数えても一五グループぐらいある。この中でランピオンは部下の数の多さ、活動期間の長さ、凶暴さで断然他を圧しており、それだけに権力に反抗した英雄として民衆から賞賛されるのである。無学の民衆にランピオンが賞賛されたのは詩と歌の伝承である、コルデル（民衆本）が繰り返し、繰り返し伝えたからだ。ランピオンにはマリア・ボニータという美女がいて、ロマンスを展開するから、コルデルとしては絶好の話題になるのだろう。しかし、カンガセイロの問題は、歴史上の出来事としては大し

たものではない。その証拠にブラジルの歴史書の中にはまったく取り上げていない本もある。

ただ、事件そのものは大したことはないにしても、一九〇〇年から一九四〇年までの間に限ってどうしてカンガセイロのような盗賊団が発生したのか、また、何故舞台がセルトンなのかという社会的、歴史的背景は大変興味深いものがある。

カンガセイロまたはカンガッソの言葉は、牛の首につける「カンガ」（くびき＝軛）から来ている。ノルデステでは既に一八三〇年代からカンガッソの言葉が使われており、ファゼンデイロ（農場主）の用心棒の一団を指した。ジャグンソと同義である。歴史家は混乱を避けるため、この時代のカンガセイロを専属カンガッソと呼び、ランピオン時代のカンガッソと区別している。

ところで現在でもそうだが、ノルデステのセルトンは一族中心の社会である。一族といっても、親子兄弟のような狭い血縁集団ではなく、前にも説明したようにファゼンダに働くもの、住む者すべてを含めた地縁、血縁集団なのだ。その長はむろんファゼンデイロ、小領主と考えた方がわかりやすいかも知れぬ。このファゼンデイロ、大抵の場合隣接のファゼンデイロと仲が悪く、常に紛争を起こしていた。紛争が起きるのは、まず土地の境界がはっきりしていないからである。それに放牧の牛や山羊も問題で、勝手

に柵を越えて入り畑の作物を荒らす。怒り心頭に発した一方の地主がカンガッソに相手の山羊を殺させる。相手の地主は直ちに自分のカンガッソを使って報復させる、ということで、両家の対立はどんどんエスカレート、遂には殺し合いに発展する。これを〝ゲーラ・デ・ファミリア〟（一族の戦い）と言うが、セルトンには現在まで百年以上も抗争を続け、いまだに殺したり、殺されたりしている因縁の一族がいくつかある。有名なのはセアラー州のクーニャ家対カルバーリョ・ノブレガ家、ベルナンブコ州のペレイラ家対カルバーリョ家などである。

セルトンには独特の血の復讐の掟があり、「君父の仇は倶に天を戴かず」式の不文律があって、敵討ちが義務づけられるから、一旦敵味方に分かれると和解が難しい。

こういうファゼンデイロはブラジルの帝政時代、大抵コロネル（大佐）の称号を持っていた。奇妙な制度だが一八三四年ブラジル帝国政府は、軍隊に準ずる国家警備隊を創設する。これは、当時ブラジルの奥地にまでは政府の警察力が行き届かなかったので、それをカバーするための制度。地方の有力者であるファゼンデイロや政治家に大佐の称号を与え、といっても実際は買わせたのだが、この人間に警察権を渡してしまうやり方である。

このやり方だと兵隊の任命権は大佐にあるのだから、ファゼンデイロは自分の思うがままに自分のカンガッソを

兵士に取り立て私兵を持つことが出来た。
悪名高い「コロネリズム」の誕生で、これは共和制になって廃止されたにも拘らず、現在まで尾を引き、選挙などでは絶大なる力を発揮している。

東北伯の病弊は地方政治

永年、ブラジルの奥地を観察していて不思議でならなかったことがある。それは選挙である。奥地の住民は町から遠く離れて住んでいるから、選挙の為に町に出てくることが出来ない。そこで住民の便宜の為に居住地域の近くに投票所が設けられるのが普通である。一〇〇年前からとられているやり方。この投票所、大抵ファゼンダ単位につくられている。小さなファゼンダの場合は、二つ、三つのファゼンダを統合していることもある。要するに、住民にしてみればパトロンのところへ投票に行くということになる。さて、選挙の結果はどうなるか……。投票率一〇〇％以上……、時には一一〇％ぐらいにはなることもある。死んだ人も投票するからである。そして、間違いなく全票、同一候補者に投票されているのが特徴。例外はない。最初はびっくりしたし、訳がわからなかった。
正義感にかられ「そんなのありかよ……」と憤慨したこ

ともあった。青二才だった証拠である。これがコロネリズムの一つの特徴なんだ、と気づくまでにかなりの年月を要した。

こういう投票を〝Ｖｏｔｏ ｄｅ ｃｕｒａｌ〟（牛囲いの中の投票）または〝Ｖｏｔｏ ｄｅ ｃａｂｒｅｓｔｏ〟（牛群を先導する馴れた牛による投票）と言う。先導する牛はパトロンで、いずれもパトロンの意のままになるということだ。

ノルデステのセルトンに話を戻す。ブラジルは一八八九年に共和制になってから、地方の行政改革に乗り出す。州を十いくつ、あるいは数十のムニシピオ（日本語では市と訳すが、本来は郡で郡役所の所在地が市なのである）に分け、各ムニシピオに地方行政機関をつくるのである。当然、市役所、市議会が新設されるし、裁判所、警察もつくらなくてはならない。そうなれば、市長、市会議員、判事、警察署長以下、重要ポストに人間が必要となる。

地方の名士で実力者のファゼンデイロが色めき立ったのも無理はない。重要ポストを独占してしまえば、地方政治は意のままに動かせる。しかし、これだけ大きな運動になると、いくら実力者でも一人の力ではどうにもならない。まして同じようなライバルが虎視眈々と狙っているのである。

そこで、気の合ったファゼンデイロ同志の合従連衡が行わ

れ、いくつかのグループに分かれて猛烈な運動が展開される。そして勝ったグループが仲間内でポストを配分し合うのだ。しかし、次の選挙で他のグループに負ければすべてはオジャン。ポストは総入れ替えになる。だから任期中に稼げるだけ稼げという風潮も一般化する仕儀となるのだ。

現在のことを書いているわけではないが、なんと現在の仕組みと共通していることか。

強力な一族主義にもとづく縁故主義、猟官運動、職権乱用、汚職、不正蓄財などの根はやはり深いものがある。ノルデステのファゼンデイロが農場の経営よりも政治に介入、あらゆるポストや権利を欲しがるようになる裏には、ノルデステの不況に伴う経済、社会構造の変化が大きく影響している。

アメリカの南北戦争は一八六一～六五年だが、この戦争のおかげで東北ブラジル、アグレステ地方の棉作者は棉ブームに湧きかえった。また、砂糖の景気も良くゾナ・ダ・マッタ地方の製糖業者もうけに入っていた。だが、これは東北ブラジルに咲いた最後のあだ花だった。南北戦争が終わりアメリカ南部の棉作が回復してくると、アグレステの棉は大きな打撃を受ける。

棉についで、砂糖景気も急速にかげってくる。一八七二年にはヨーロッパでテンサイ糖が出現するし、砂糖キビもジャワやフィリピンなど東南アジア産が新たに市場に参入

してくる。ブラジルの製糖業は人力、畜力に頼る旧式の設備が多いから、産業革命による技術革新でつくり出される新鋭設備や機械に太刀打ちできない。この時に東北ブラジルの多くの製糖業者が破産し失業者も増える。

棉と砂糖の不況は、セルトン地方にも深刻な影響をおよぼした。棉や砂糖キビの栽培を放棄したアグレステやゾナ・ダ・マッタ地方で、トウモロコシやフエイジョン豆などの生活作物の栽培や牛の飼育をはじめるようになったのだ。お株を奪われたセルトンは作物や肉の販路を失う。こうした経済環境にある時、セルトンは一八七七年から七九年まで三年続きの史上最大の大旱魃（セッカ）に見舞われ、事実上セルトンは壊滅する。

唯一の救いは、ゴム液採取の労働者としてアマゾンへの内国移住の道が開けていたことで、セッカの最もひどかったセアラからは三年間で一〇万人、二〇世紀がはじまるまでに三〇万人が移住した。ところが二〇世紀に入ると肝腎のゴム景気が衰え、アマゾンへの移住の道も閉ざされる。セルトンにカンガセイロが横行する社会状況はこうして醸成されるのである。

カンガセイロは精神分裂症

突拍子もない話だが、ランピオンなどのカンガセイロが跳梁したのは、日本移民のせいだとの説がある。この話はフォルタレーザで社会学をやっているブラジル人学者から聞かされた。

カンガセイロの発生、横行は一九〇〇年から一九四〇年までの四〇年で、特に後半の二〇年間がひどい。

カンガセイロの発生した背景は、

①二〇世紀に入って度々起きたセルトンの旱魃（セッカ）。

②ノルデステそのものの構造不況と社会不安。

③高い人口増加率とその圧力。

④ゴム景気終熄による、アマゾンへの内国移民中止。

などで、ここまではブラジル人学者も筆者も同意見だった。

ところが学者先生、五番目があると言う。何だと聞いたら、一九二〇年から四〇年まで、サンパウロや北パラナに入った「日本移民のためにコーヒーや棉の労働市場を奪われた」ことも背景の一つだと主張した。なんだか言いがかりをつけられたようで面白くなかったが、よく考えるとこの説も一理はある。たしかに日本移民がブラジルに入ったのは一九二〇年から四〇年が一番多く、戦前移民の八〇％、移民者の数にして約一五万人が主としてサンパウロの奥地、一部は北パラナに入っている。日本移民の多くはコ

ロノ（雇用農）から出発したから、この分野で一時期ノルデステの内国移民と競合したのは事実。なるほど時代を検証してみると、第二次世界大戦がはじまり日本移民やヨーロッパ移民が来なくなると、セルトンの難民は内国移住でどっとサンパウロや北パラナに出かけている。

奇妙なことに内国移住の増加に付節を合わせて、カンガセイロの跳梁が止まっている。まあ、しかし、セルトンの難民が即ちカンガセイロ、あるいはカンガセイロ予備軍と考えるのはいささか飛躍があり過ぎる。カンガセイロの発生の原因は、いろいろな要因が複雑に絡み合っているから、単純にこれだと指摘するわけにはいかないが、セッカが引金になっていることは疑いを入れない。

ユニークなのは、セッカ時の栄養失調からくる精神分裂症説である。飢餓の旱魃難民に現れる身体症状は昔から知られており、真っ先に現れるのは飢餓浮腫と呼ばれる膨れた腹である。これはしばしば下痢を伴う。結膜炎、夜盲症も飢餓に特有の病気で、難民のほとんど全員がこれに侵されることも稀ではない。皮膚病や口腔内外の粘膜潰瘍、ペラグラ性黒皮症も一般的だ。また、栄養失調により身体の抵抗力、防禦力がなくなるため、天然痘、赤痢、胆汁熱などには極端に弱くばたばた斃れていくし、脚気も広範囲にひろがる。

こういう身体的、肉体的症状の他に、飢餓は人間の精神

構造にも大きく作用し、重大な神経障害を起こすことが知られている。ヤセ型、筋肉質の闘志型セルトン人の場合は、道徳意識がなくなり、残忍で血を好む人格の分裂が起きやすい。

医者で社会学者で飢餓問題の専門家であるジョズェ・デ・カストロは、その著書〝Ｇｅｏｇｒａｆｉａ　ｄａ　Ｆｏｍｅ〟（飢えの地理学）の中でこの問題を取り上げ、次のように述べている。

「精神の安定上、すでに極めて危険なこの極限においては、人格は分裂し、飢餓と無関係な他の環境の要求に対する通常の反応は抹殺される。この自我の分裂過程において自己保全、精神抑制の活動は停止し、ついに道徳上の咎め、禁止の意識は消滅する。（中略）このように旱魃とそれに伴う周期的飢餓は、セルトンの社会的生活における二つの特徴的類型―カンガセイロと狂信者―の結晶化に寄与する。これらの類型は、その文化的な根をセルトンの生活に深く下ろし、また、その社会的作用において密接に結び合っているので、しばしば一つの人格『狂信者―カンガセイロ』として形成される」

一九七三年パリで客死したジョズェ・デ・カストロは、一九〇八年、旱魃による難民の子としてレシフェに生まれただけにセルトンの旱魃、飢餓については実に詳しい観察をしている。

「飢えの地理学」の他に〝Ｇｅｏｇｒａｆｉａ　Ｈｕｍａｎａ〟（人間の地理学）〝Ｇｅｏｐｏｌｉｔｉｃａ　ｄａ　Ｆｏｍｅ〟（飢えの地政学）の著書があるが、邦訳されているのは「飢えの地理学」（大沢邦雄訳）のみ。大沢氏は大蔵省、日本航空に在籍した人で、ブラジルに永く生活した。今は故人だがこの翻訳はきっちりしていてわかりやすい。

余談だが、日本語に訳されたブラジル人著者の本は、大抵わかりにくい。一読してわからず、再読、三読してなお意味がとれず、原書を見たら直ぐわかったという訳書がかなりある。歴史や風土の勉強不足の場合が多いのだが、最近の若手の中南米研究者はしっかりしたものをつくっている。

日本語の訳書も今後は期待してよいかも知れない。

熱狂的信者の大衆運動

カンガセイロは、ノルデステの民衆には人気があり、特にコルデル（民衆本、口誦本）で繰り返し取り上げたこともあって英雄視された。

ところでカンガセイロの問題で興味のあるのは、鎮圧する政府側の態度で、結局政府は正規の軍隊をカンガセイロ

討伐に向けることはなかった。「カヌードスの乱」で一万一〇〇〇人の正規軍を投入したのとは大変な違いである。たしかに警察機動隊は出動するし、この警察軍が最終的にカンガセイロを全滅させてはいる。だが討伐軍のうち、正規の警察官は中尉か軍曹ぐらいのもので、隊員はボランテと呼ばれる志願の民兵だったのである。

帝制時代、国家警備隊の大佐に任命された奥地のファゼンデイロがジャグンソ(用心棒)を私兵にしたのと同じやり方である。したがって、敵、味方に分かれているが、カンガセイロとボランテはもともと同根、精神構造も分裂症的状態も共通しており、凶暴で残忍なところも同じだった。こうした小人数のゲリラ戦のような戦闘には、正規の軍隊より小廻りのきくボランテの方が適しているのはたしかだが、カンガセイロとボランテならどっちが死んでも惜しくない、との判断もあったようだ。

毒をもって毒を制するやり方で、ブラジルは地方の叛乱や暴動には伝統的にこの手を用いてきた。このやり方は、蛮行が次第にエスカレートしていくからひどく血腥い。

カンガセイロの中には、連れ歩く自分の愛人の頬にイニシャル入りの焼印を捺して所有権を主張したのもいた。こうなると愛人も牛並みだが、カンガセイロの異常性格がよくあらわれている。また、最後の戦闘で殺されたランピオンやマリア・ボニータはじめ一一人のカンガセイロの首

は、ミイラ加工されバイアのニーナ・ロドリゲス博物館に三〇年にわたって一般公開された。いかに見せしめとはいえ二〇世紀半ばの常識では極めて異常である。

周期的な旱魃（セッカ）に襲われるセルトンの住民のメンタリティと行動を知る上に、カンガセイロの分析は欠かせないが、それだけでは片手落ちである。セルトン住民全体から見れば、カンガセイロやボランテの群れに投じたのはほんの一握りの人間でしかない。大多数の住民は、セッカに喘ぎながらもそこまでアウトロー（無法者）にはなりきれなかった。その代わり、カリスマ性を帯びた宗教指導者が現れるとたちまち熱狂的な信者となり、運動に参加する。この数はカンガセイロなどはまったく問題にならない厖大な人数で、それだけに社会的な影響力も大きい。

一八九六年から九七年にかけてバイアの奥地で起きた「カヌードスの乱」で知られたアントニオ・コンセレイロの運動や、時代は下るが、ランピオンとも親交のあったジュアゼイロ・ド・ノルテのシセロ神父の運動がそれだ。こうしたカリスマ性の強い指導者によって起こされる民衆運動は、ブラジルの場合、共通したいくつかの特徴を持っている。

まず、第一は、宗教的情熱のボルテージが非常に高いことである。指導者も信徒も熱烈なキリスト教の信奉者で、いつの日にか救世主のドン・セバスチォン王が再来し、こ

の世に〝パライゾ・ダ・テーラ〟（地上の天国）を築くというメシアニズムと奇跡を信じている。

二番目は、信者のすべてが旧奴隷階級を含む被抑圧者で構成されていたことである。この為にともすれば権力者に対する抵抗、反抗の形をとりがちだった。

三番目は、明らかに土地なき大衆の土地獲得運動だったことである。ラチフンジオ（大土地所有）制度の下では、自分の土地を持つことなどは夢のまた夢だったが、この運動に参加することによって自分たちだけのユートピア、共産社会を建設出来ると信じたのである。インジオや黒人、カボクロなど被支配階級のユートピア建設願望の歴史は古く、ノルデステだけでなくブラジル各地に起きている。一七世紀後半に黒人逃亡奴隷がつくった「パルマレス共和国」や、一七世紀から一八世紀後半にかけて一五〇年も続いたイエズス会による「グワラニー共和国」なども、この流れの中に含めてよい。

解放の神学にまでつながるメシアニズムとユートピア建設の運動は、ブラジル中にあったが、やはりノルデステ、それもセルトン地方で発生する運動がもっとも激しく規模も大きい。

純粋無垢の信仰心が、ひとたび転換して外圧への敵愾心になると、狂的な反撥力になり、カンガセイロの精神構造と同様で、死を恐れぬ徹底的な戦いが展開される。この例

として、ブラジル有数の内乱に発展した「カヌードスの乱」がある。

今も残る救世主信仰（セバスチォニズム）

「カヌードスの乱」に入る前に、先にもちょっと触れたメシアニズム（救世主信仰）の一種、セバスチォニズムについて解説しておく。おそらく、日本にはセバスチォニズムについて書かれた本はあるまい。何故ならば、これはポルトガルとブラジルだけに現れたメシア信仰だからである。いや、ひょっとするとかつてのポルトガル植民地にはあったかも知れぬ。が、要するにポルトガルとその植民地だけに限られているのはたしかである。

セバスチォンというのはポルトガルの国王。だから正しくはドン・セバスチォン。架空の人物ではなく、一五五四年に生まれ一五七八年に死んだことになっている歴史に実在した人物。死んだと断定しない理由は後で説明する。一五五七年ポルトガル国王ドン・ジョン三世の死で、僅か三才のドン・セバスチォンが王位につく。三才の幼児に政治のわかる道理がないから、当然摂政となる。はじめはドン・ジョン三世の王妃、つまりドン・セバスチォンの祖母がなり、後には大叔父の枢機卿ドン・エンリッケが摂政を

引き継いだ。セバスチォンが名実共に国王になったのは、一五六九年一五才の時である。若き国王ドン・セバスチォンは、小さい時から風変わりで、嫌人癖が強く、自分の部屋にこもって物思いに耽るのが好きだった。この癖は国王になってからも続く。政務の方は、長老や担当者がいるから別段困ることもないのだが、年頃になっても男女の道に一向興味を示さないのには家臣が弱った。後継者の問題は、王室にとっての一大事である。やきもきした側近は、手を変え品を変え結婚を勧める。しかし「生涯不犯を誓った」と、取りつくしまもない。どうやらドン・セバスチォンは「女は魔物」と考えたらしいのだ。「女は魔物かも知れぬが、無垢の幼女は聖女だ」と、貴族の幼女との結婚を勧められ一旦は承諾もするが、これも後で断ってしまう。

色道にはさっぱり目覚めぬドン・セバスチォンだが、その代わりキリスト教の使命感と十字軍的な異教徒征服熱が次第に高まってくる。ドン・セバスチォンの異教徒征服熱を決定的に高めたのが一五七一年の「レパントの海戦」である。これはキリスト教国のスペイン、イタリア（といってもこの当時はジェノバ、ベネチァなどの都市国家）連合軍とイスラム教国のトルコとの戦い。結果はキリスト教国の勝ち。これを見たドン・セバスチォンは、自分もキリスト教の為にイスラム教国と戦う決意をし、目標を地中海対岸のモロッコに定める。一五七四年軍船を出してモロッコ

を襲おうとするが、この時は味方の兵力不足が明らかだったため上陸はせず引き返さざるを得なかった。そして、一五七八年重臣たちの強い反対を押し切り、一万八〇〇〇の大兵力を自ら率いてジブラルタル海峡を渡り、モロッコに攻め入る。実は下心のあるスペイン国王フィリップ二世が大いにけしかけたのである。

結果は惨敗だった。ポルトガル軍は、モロッコのアルカセル・キビール砂漠におびき出され、ここで荒れ狂うイスラムの軍隊に蹂躙され全滅する。なにより総大将のドン・セバスチォンが砂漠に消えてしまうのだ。戦死なら遺骸はあるだろうし、味方の側近も敵の討手も最後の事情は知っているはずである。ところが、遺骸もなく、どうなったか誰も知らぬまま謎の失踪を遂げる。

国王の行方は不明でも、ポルトガル軍の潰滅は明らかである。それも史上最大の惨澹たる敗戦なのだ。ポルトガルはこの後二年、枢機卿ドン・エンリッケが王室を維持するものの、一五八〇年にはモロッコ征討をそそのかしたスペインのフィリップ二世に攻め込まれ、あっさりスペインに併合されてしまう。フィリップの狙い通りだ。

ドン・セバスチォンに関する史実はこれでおしまい。しかし、これで終わったのではポルトガルの民衆は納得しない。なにしろ不犯の誓いを立てた二四才独身の童貞王で、宗教的使命感に燃えた貴公子なのである。謎に包まれた最

期も神秘的だ。アイドルとしての条件が揃っている。こうしてドン・セバスチォンは死んだのではなく、いつかポルトガルの救国に再来し、地上天国をつくってくれる、というメシア信仰にもとづくセバスチォニズムの神話が誕生、それがブラジルにも持ち込まれた。

セバスチォニズムは、奴隷階層や旧奴隷階層に広く支持された信仰で、現在でも地方にはけっこう多くの信者がいる。ついでにつけ加えておくと、ドン・セバスチォンは国王時代の一五七〇年九月二〇日の勅令で「日本人奴隷売買」を禁止している。日本の歴史と唯一かかわるドン・セバスチォンの事績だ。

「カヌードスの乱」の不思議

「カヌードスの戦い」は一般には「カヌードスの乱」の名前で知られている。狂信的なメシアニストのアントニオ・コンセレイロが一八九六年から九七年にかけてバイアのカヌードスにならず者のジャグンソを集め、蜂起した反乱ということになっている。

この事件はどうも発生した時から最近に至るまで政府側、体制側に都合の良い解釈ばかりなされたきらいがある。というか、故意に事実を歪曲した疑いが強い。

これまでの歴史の記述では、暴徒側が反乱を起こしたので鎮圧の警察や軍隊を出動させた、とするのだがカヌードスの住民が自ら蜂起して反乱を起こしたことなどただの一度もない。しかけるのは常に警察、軍隊側で、住民は防衛一本槍なのである。とはいえ、この事件は相当に根が深く、最期の滅亡までにかなり長い前史があるのだ。

「カヌードスの戦い」は、ある意味で現在のブラジル社会の原型を示しており、興味深い。少し詳しく見てみよう。

一八二八年セアラーのセルトン地方に生まれたアントニオ・コンセレイロ（本名はアントニオ・ビセンテ・メンデス・マシェル）は、なかなかの勉強家で、三〇才を過ぎる頃には代理弁護士、臨時教師、助任司祭などの資格を持っていた。語学も達者でラテン語、フランス語に明るく、数理学にも詳しかった。ただ、性格の方は若い時から相当ファナチック（熱狂的）だったと言われている。

コンセレイロは、一八六五年から約二〇年間セルトン巡礼の旅に出て、各地で大衆を相手に説教する。ごく質素な身なりで、強烈なカリスマ性を発揮して熱狂的に説くメシア思想は、次第に下層階級、特に奴隷層に浸透、信者は増える。コンセレイロは、トマスモアの「ユートピア」を読んでおり、共産的な「地上天国」の建設をめざしていた。コンセレイロの思想の基本は「貧しきを憂えず、等しからざるを憂う」という、後の毛沢東と同じ平等主義にあっ

た。しかし、平等主義を唱え、この世に地上天国ユートピアをつくろうというコンセレイロの主張は、帝政政府の出先機関やファゼンデイロには危険思想以外のなにものでもなかった。そこで政府側は、母親と妻殺しの容疑で逮捕したり（一八七六年）、バイアの司教管区長に働きかけて説教を禁止したり（一八八六年）、果ては気狂いとしてリオの精神病院に入れようとしたり（一八八七年）、迫害を続ける。

ところが迫害されればされるはどコンセレイロは勢いづき、言動もますます過激なものになってくる。コンセレイロのこの頃のスタイルは、大きな帽子に長くて青い僧衣、革の長靴で、手には長い杖を持っている。一度も手入れしたことのない髪は肩に乱れ、長いアゴヒゲが胸に垂れている、というかなり人目に立つ格好である。おまけに鶴のような瘠身、ごく僅かな食べ物しか摂らなかったし、一切の虚飾、贅沢を排した。むろん、金銭に対する執着は皆無。こういうところは東洋の苦行僧に似ている。

コンセレイロの人気が高まるのは、一つには例の一八七七年の大旱魃（セッカ）で望みを失った貧民がコンセレイロの教えに帰依したことも原因となっている。

一八八八年には奴隷解放が実現する。これが原因で翌一八八九年には帝政が倒れ、共和制に移行する。解放されたとはいえ、奴隷の地位は相変わらずで、共和政府には農地

解放の意図は毫もなかった。解放奴隷が土地を持つチャンスはまったくないのである。

ここで共和国をつくった新政府は、地方政治の整備に乗り出し、ムニシピオ（市）という地方自治体を創設し、財源として住民税を徴収する制度をつくる。この時、市長その他要職のポストを巡ってファゼンデイロが暗躍したことは前に述べたが、この徴税制度は、すべての住民から税金を取る、しかし、ファゼンデイロは例外とする、という不思議な制度だった。つまり、市の要職を握ったファゼンデイロは、徴税に関する例外規定をつくって自分たちに当てはめたのだ。ブラジルの伝統的やり方である。

無知の大衆はこの仕組みがわからないが、インテリのコンセレイロは激怒した。この告示が出たとき、コンセレイロはボン・コンセーリョという町にいたが、大衆を動員して市役所にデモをかけ、貼ってあった告示書を燃やしてしまった。

恨み骨髄のバイア州知事ロドリゲス・リマは、アントニオ・コンセレイロを撹乱分子として逮捕しようと三五人の兵士の一団を派遣した。だが、戦いにもならなかった。志気の高いコンセレイロの護衛団、ジャグンソの前には為す術もなく全員逃げてしまった。しかし、このままでは済まぬ予感がコンセレイロにはあった。

軍事的にも天才のコンセレイロ

一八九三年四月コンセレイロの一団は、バイア州北部のセルトン地帯カヌードスに到着する。この土地を一目見たコンセレイロは、ここがユートピアを建設するにふさわしい「カナンの地」であることを見抜き、定着の決意をする。このカヌードスは放棄されたファゼンダで、まだ廃屋も何軒か残っていた。コンセレイロがこの地を選んだのは、なにより要害堅固の地で、外敵の侵入を防ぐのに適していたからである。

ここはカナブラバ、ココロボ、カルンビ、カンバイオ、カイバンの五つの山脈の山あいにあり、バザ・バリス川に囲まれている。汽車の通っているケイマーダの町から二〇〇kmも離れていた。近くの集落へも石だらけの山道を徒歩で行くより方法がない。常識ではどうしようもない山中の僻地だが、共産社会の建設にはこの方が都合良かった。

コンセレイロが遂に「カナンの地」を見つけたとの報は、たちまちセルトン一帯にひろがり、土地なき大衆や旧奴隷階層の人々が続々カヌードスに集まってくる。多い時には一日で一二軒も小屋が建つこともあった。

一八九七年一〇月政府軍がカヌードスを全滅させる。この時、焼き払われた小屋の数は五二〇〇戸とあるから、最盛期二万五〇〇〇人ぐらいの住民がいたらしい。当時とし

ては大きな町である。

このくらい大きな集団になると、組織や規則が必要になるが、コンセレイロは余り細かいことは規制しなかった。税金もなければ、警察もなかった。結婚も自由であり、未婚の母も珍しくないのである。後日カヌードスにおける性関係のルーズさが指摘されるが、コンセイレイロはもともと民法上の結婚を認めないのだから、男女の交際が自由になるのはやむを得なかった。ただし、売春と強姦とアルコールは厳禁されており、禁を破った者は村から永久追放されるのである。またコンセレイロは、日々の労働を重んじ、怠惰を戒めた。仕事は牛や山羊の放牧、マンジョカ、トウモロコシ、フエイジョン豆、カボチャ、サツマイモ、砂糖キビの栽培が主。女、子供は箒や土器などもつくった。ここの山羊皮は品質が良く、ヨーロッパでも評判になったほどである。

一方、ブラジル政府は、国の法律を守らない共産村を潰す機会を狙っていた。地方政治と強く結びついているファゼンデイロも、自分のところの労働者がカヌードスへ流れるため、コンセレイロに対する怒りと憎しみは一通りのものではなかったのである。

国や地方自治体がカヌードス討伐を決意したのは、立場上当然である。法律には従わない、税金は払わない、労働者は流出する、おまけに人気も奪われるということになれ

ば、武力討伐に訴えるより方法がない。それでもいきなり武力攻撃をかけたわけでもなく、一八九五年まずバイアの司教官区の神父三名がカヌードスに赴き、共産村の解散を説得する。

もちろん、コンセレイロが承諾するはずはない。会談はもの別れになったが、これで政府側は討伐の口実が出来たのである。戦闘は一八九六年一一月一二日のウハウハの会戦にはじまり、一八九七年一〇月五日のカヌードス陥落まで約一年、四次にわたる死闘が展開される。

政府が投入した兵力は計一万一〇〇〇人、手持ちの全兵力を投入してなお足らず、最後は募集した新兵まで戦闘に参加させたほどである。いかにコンセレイロ側の抵抗が頑強であったかである。

それもそのはずで、コンセレイロは最初から武力討伐を予想しており、そのために要害の地を選んでいるのだ。それに、カヌードスを守る六〇〇人のジャグンソ（用心棒）を「カトリック防衛隊」の名称で配置、準備を怠らなかった。

戦闘の経過をごく簡単に説明する。第一回がバイア州警兵一〇〇名によるウハウハの開戦、第二回が陸軍と警察軍六〇〇名によるタポレリンニョの会戦。政府軍はまるで歯が立たない。第三回目はモレイラ・セザル大佐指揮の一二〇〇の大部隊。カヌードスを見下ろすファベーラ高地に達

したものの、塹壕に立てこもるジャグンソ軍に阻まれ、遂にセザル大佐も戦死して敗退。ジャグンソ軍は大量の武器を手に入れる。第四回は全国から集めた四五〇〇名の正規軍。例によってファベーラの丘で立ち往生、おまけに後方の輜重部隊が襲われ、食糧と弾薬が奪われる。一八九七年六月から九月まで、ファーベラの丘を動けなかった。

九月二十二日、コンセレイロが死ぬ。これは食べ物を摂らないための衰弱死である。そこへ新たに増援軍四五〇〇名が到着、十月五日カヌードスは陥落する。

コンセレイロは民衆の指導者として偉大な力を発揮したが、戦術、戦略の天才でもあった。これには軍事専門家も舌を巻き、率直に軍事才能を評価している。

伝統的な兵隊への悪待遇

ラテン・アメリカはどこでもそうなのだが、軍隊における下士官や兵卒は余り優遇されない。士官学校出身の将校とはえらい違いだ。この傾向は現在でも続いている。かつてのブラジルのように慢性的な人不足に悩んだところは、一朝ことある時の兵隊の補充は、奴隷階級に頼らざるを得なかった。

パラグワイ戦争はその好例で、身分の自由化を条件に多

くの黒人奴隷が兵士として戦いに参加した。カヌードスの乱の時も最後は新兵を募集したが、集まったのはほとんど旧奴隷階層の若者たちだった。この新兵を投入して、ともかくこのカヌードスの乱はやっと平定される。ところがこの新兵、募集してすぐバイアの戦闘に参加させたため、終わっても帰る兵営がない。そうかといって、もう一度どこかで〝反乱〟が起きたら、今度こそ共和国政府の命取りになるから、うかつに解散もさせられない。思い余った政府は、この兵士の一団を首都のリオに戻し、プロピデンシアの丘の上に仮小屋をつくって収容した。

戦争のない時の兵隊はさっぱり大事にしてもらえない。待遇は悪かった。

当然、兵隊側にも不満が募る。「なんだ、これじゃあ、カヌードスのファベーラの丘で龍城していた時と同じじゃないか」ということで、自分たちの兵舎であるオンボロの仮小屋を「ファベーラ」と蔑称するようになった。ファベーラのことはじめである。以後、今日までスラムの代名詞としてリオばかりでなく、サンパウロやその他の都市でも使われるようになる。ただ、レシフェでは、伝統的にこうした小屋をモカンボと呼んでいる。モカンボ、キロンボはアフリカ語で、逃亡奴隷の集落のこと。バイアではこれがアラガードス（浸水地に建つ小屋の意）となる。

さて、兵隊の待遇の悪さといえば、それが原因で兵士が

暴動を起こし、商店や民家を襲った事件がある。一八二一年六月二八日というから、ブラジルが独立する一年前の年。この日、港町サントスの住民は、サントスに駐留している第一狙撃大隊兵士の暴動に驚かされる。兵隊が兵営から街に繰出して、商店や民家を襲い、掠奪をはじめたのである。原因はまったくお粗末な話で、軍隊に金がなく、兵士の給料が払えない上、食糧さえも買うことが出来ず、空腹に耐えかねた兵隊が暴動を起こしたのだ。商店や民家を襲って腹ごしらえをした暴徒の兵隊は、調子にのって碇泊していたポルトガルの帆船に火をつけ、大暴れをして市民を恐怖に陥れる。

事態を重視したサンパウロの総督府は、七月二日討伐隊をサントスに派遣、暴徒を鎮圧、暴動に加担した兵士全員を検束する。そして取り調べの結果、首謀者七名は死刑、準首謀者二〇名はアフリカのアンゴラへ流刑、その他加担者は罪状に応じ懲役数年の刑が言い渡された。厳しい処置である。そのくせ給料や食糧を支給しなかった、責任者の指揮官や軍の首脳はお咎めなしなのだ。こういうところにも奴隷や下層階級に対する差別がはっきり現れている。首謀者七名のうち、五名はサントス出身だったので焼かれた帆船上で絞首刑にされ、晒しものにされた。二名はサンパウロ出身なのでサンパウロに連行され、現在のリベルダーデ広場である、当時のモーロ・ダ・フォルカ（縛り首の丘）

で公開処刑される。

この事件を世に「サントスの暴動」と言う。事件そのものはこれで一件落着なのだが、後日談がある。サンパウロで処刑された二名のうち、通称シャギンニャという伍長は、実は絞首刑にする時に二度も綱が切れるのだ。偶然が二度重なることはまずあり得ない。見物の群衆はシャギンニャの無実を叫ぶが、役人は三度目のやり直しを強行、今度は処刑を遂行する。シャギンニャの処刑後も、彼の無実を信じる者は大勢いた。そのうちの一人、シッコ・ガーゴと呼ばれる男は、絞首台の近くに十字架を立て、鎮魂のローソクを灯して祈りを捧げる。この時、突然大風が吹くが、シッコは「シャギンニャが無実なら、ローソクの火を消さないでほしい」と神に願いをかける。と、不思議にもローソクは消えることなく最後まで灯った。この奇跡は、黒人や奴隷階層には大変な評判を呼び、十字架にお参りする人が後を絶たなかった。その後一八九一年には十字架の代わりに小さな礼拝堂が建てられ、一八九五年に一度建て替えられた後、一九一七年、教会に昇格して現在の「サンタクルス・ド・フォルカード」教会（絞首刑者の十字架の教会）となる。リベルダーデ広場の角にある教会がそれ。〝ローソク寺〟　〝願かけ寺〟として有名、信者は今でも低所得者層、月曜日がお参りの日である。

王室直轄だったアマゾン

ここらでアマゾン問題に目を転じよう。歴史的に見れば、アマゾンは長い間ブラジルであってブラジルでなかった。おかしな言い方だが、これは事実である。少し歴史に触れてみる。ブラジルのアマゾン進出は、一六一六年ベレンに要塞を築いた時からはじまる。その前年、マラニオンのサンルイスでフランス軍を破ったブラジル軍が、いよいよ北方領土の獲得競争に乗り出すことになる。

行政組織としては、一六二四年マラニオン・グランパラー州を設立、全アマゾンを対象とするグランパラー領をこの州の中に含めた。当時のマラニオン・グランパラー州は、現在のピアウイ、マラニオン州と、アマゾン全域を含む広大な土地で、ブラジル総督府の管轄ではなく、ポルトガル王室の直轄地だった。しかし、実際にはこの時代まで、アマゾンの所属がどこの国なのか、はっきりしていなかった。理論的にはトルデシリャス条約によってスペイン領なのだが、幸か不幸か一五八〇年から一六四〇年まで、ポルトガルがスペインに併合されていたため、スペインが独自に権利を主張することはなかったのである。

その代わりフランス、イギリス、オランダの各国がギアナ地方から南下してアマゾン下流に入り込み、インジオを

使って木材、樹脂、染料、薬草などを集め、本国に送っていた。特に大西洋とアマゾン河に囲まれたアマパ地方は完全に三国の勢力範囲で、海に画した、現在のカーボ・ノルテに基地を設け、牧畜や砂糖キビ、タバコの栽培などを行っていた。ベレンに進出したポルトガル軍は、外国勢力の排除に乗り出し、一六三七年にはカーボ・ノルテの三国の根拠地を攻撃、外国勢を駆逐する。イギリスとオランダはこれでアマゾン進出をあきらめるが、仏領ギアナのカイエンヌを拠点とするフランスは執拗で、一八世紀の後半まで再三アマパ侵入を試みている。アマパには一八世紀のはじめ砂金が発見されたから、フランスとしてもそう簡単に引き下がれないのである。

現在アマパ州の首府マカパ市には、堂々たる構えの「サン・ジョン・デ・マカパ」大城塞が偉容を誇っている。これはフランスの侵略に備えて一七八二年に完成した、ブラジル北辺防衛の大軍事拠点だったのだ。アマゾンは進出の初期から妙に国際性を帯びている。一七七五年アマゾンはマラニオンから分かれ、グランパラー州となる。この時、マラニオンはブラジル総督府の管轄になるが、グランパラー州は依然としてポルトガル王室の直轄領で、この体制は一八二二年のブラジル独立まで続く。つまり、アマゾンは最初からポルトガルの直接支配であり、ブラジル総督府とは何の関係もなかったのである。ブラジルであって、ブ

ラジルでないというのはこれを指している。

ところが、これが後にいろいろな問題を起こす原因にもなる。一八三五年から四〇年にかけて発生、四万人の死者を出した、ブラジル史上最大の内乱「カバナージュン・ド・パラー」（パラーの叛乱）も、元をただせばポルトガル王朝派とブラジル独立派の対立だったのだ。こうした事件はあったものの、全体として見れば、一九世紀はじめまでのアマゾンには大きな変化はなかった。依然として「緑の魔境」であり、人間の力の到底及ぶところではなかった。

アマゾンが脚光を浴び、一躍世界の檜舞台に登場するのは、一九世紀の半ばからはじまったゴム景気のおかげである。これはすさまじかった。一八六〇年に人口三五〇〇人のマナウスは一九一〇年には八万人に急成長している。マナウスには現在でも町の中央に贅を尽くしたオペラハウスのアマゾナス劇場があるが、この劇場ほどアマゾンの束の間の栄光と没落を見事に象徴しているものはない。世界でもっとも未開の地に、世界でもっとも壮麗なオペラハウスというチグバグな組み合わせは、かつてこの劇場で演じられた多くの悲喜劇同様、まさにトラジコメディであり、同時にアマゾンのゴム・ブームの性格をよくあらわしている。

アマゾンのゴム・サイクルは、一八五〇年から八九年までを前期、一八九〇年から一九一一年までを全盛期、一九

一二年以降を衰退期と分けている。この時期は、ちょうどブラジルの政変をはさんでいる。奴隷解放が契機で、一八八九年に帝政が滅び、共和国家が誕生する。しかし、新政府も政変後の事後収拾に追われ、辺境のアマゾンまでは行政管理が行き届かない。

いずれにしても、アマゾンのゴム・ブームは、中央政府の監督の行き届かぬ、治外法権の辺境に勝手に咲き、勝手に散ったあだ花であったことはたしかで、どことなく猿芝居を見ているようなある種の滑稽感がつきまとう。ともあれ、軌跡を辿ってみよう。

狂乱頽廃のゴム景気到来

ゴム質の乳液を浸出する植物は熱帯には数が多く、細かく数えると四〇〇種を超す。しかし、なんといっても多かったのはアマゾンのエベア・ブラジリエンシスというトウダイグサ科の木。新大陸のエベアの存在がヨーロッパに知られたのは、コロンブスの時代だから歴史は古い。ただ使い道がなかった。それでも一八世紀の半ばを過ぎると、ゴム靴やゴム合羽、潅腸器用として少量のラテックス（ゴム液を燻煙して固めたもの）がヨーロッパに輸出されるようになる。

この当時のゴムは硫化加工されない生ゴムだったから、

ゴム靴などの製品をつくっても、冬はカチカチ、夏はベトベトになってはなはだ始末が悪かった。それでも一九世紀に入ってからは、一八二七年に三〇トンを輸出したのを皮切りに、三〇年一五〇トン、四〇年三九四トンと徐々に輸出量が増える。輸出が増えたのは一八三九年イギリスのチャールス・グッドイアが生ゴムに硫黄を加えて加熱する加硫ゴムを開発したからである。以降一九一一年のピークまで数量も価格も上げに上げ、二〇世紀に入ってからは平均三万トン、ピークの一九一一年には四万四〇〇〇トンを輸出した。価格も一八五〇年代のキロ当たり三五セントが、一八九〇年代には六ドル六〇セントに跳ね上がる。一八九〇年代からゴムの最盛期に入るのは、ダンロップが自動車用の空気入りタイヤを発明し、これが大当たりをとったからである。

ゴムの産出は一八五〇年までは、もっぱら下流地方だったが、六〇年代に入るとアマゾン上流の産出がはじまり、次第に産出量が多くなり、遂にはパラー産を追い越すまでになる。

これは一つには、この時代に蒸気船が実用化されて、外航船がそのままアマゾン河の上流やその支流に入ることが出来たからである。風を頼りの帆船では流れに逆行して遡るのは難しい。もう一つは、セルトンのところで述べたように、一八七七年の大旱魃で東北ブラジルからの内国移住

が爆発的に増えたことによる。一九世紀中に東北ブラジルからアマゾンに入った数は約三〇万人で、このうちの大半は上流のアクレ地方に入植した。

ゴム・ブームは一八九〇年から狂乱の黄金期を迎える。ゴム商人の手にはそれこそ金が湯水のごとく入ってきた。商人たちはヨーロッパから大理石や家具、調度品を輸入して大邸宅をつくったり、子弟を競ってヨーロッパに留学させた。それでも金は一向に減らなかった。出る金より入る金が多いのだ。こういう雰囲気の中で、金持ち連中が計画したのが豪華なオペラハウスの建設である。計画は豪華なものをめざして何度も変更され、最終的には一八九二年、アマゾナス州議会を通過して定礎式が行われた。アマゾナス劇場の描写は既に何度か書いたことがあるのだが、もう一度だけ繰り返しておく。

世界で最も富める町にふさわしい劇場をめざして豪華な上にも豪華なものが要求された。金はいくらかかっても構わないのである。劇場の柱、屋根、ドーム、階段、テラスの鉄骨はすべてイギリスで一度組み立てられた後、分解されて船で運ばれた。イタリアからは白大理石が多量に持ち込まれ、ドームの色瓦六万枚は当時ドイツ領だったアルザス地方に特別注文してつくらせた。オペラハウスは六五〇席、舞台は間口三〇m、奥行き一五m、オーケストラ・ボックスは水圧式で三m下がるようになっている。照明は

三八〇基。客席の下には水を通し、水冷式の冷房装置を施したのだから驚きである。

緞帳は、画家クリスピン・アマラルの筆による「水の出会い」で、片側にソリモンエス河、片側にネグロ河を描いたもの。幕が降りると二つの河が出会うという凝った趣向。天井には天国の絵が描かれ、天使が楽園に遊んでおり、壁はジョゼー・アレンカールの名作「オ・グワラニー」や熱帯のジャングルが有名画家によって描き出された。貴賓室は金箔を使用、壮麗かつ優雅に仕上げられた。劇場内部の装飾や座席の上張りにも無制限に贅を尽くし、床でさえも当時すでに入手の難しかったパウ・ブラジルが用いられた。

アマゾナス劇場のこけら落としは、一八九七年一月七日、初演のオペラは当時ヨーロッパで人気のあったポンチリニの「ジュアンダ」、プリマドンナのマリア・ボニー以下、一流オペラ歌手が出演した。オペラ歌手ばかりがマナウスに来たのではない。フランス、イタリア、スイス、イギリス、ポーランドの娼婦が出稼ぎにやってきた。一九一〇年には、マナウスの家屋の六〇％にはこのての女がいた。町には猥雑と頽廃がみなぎり、ゴム成金たちはキューバから取り寄せた最高級の葉巻きハバナに五〇〇ミル・レイス紙幣で火をつけた。

利益は外国商社が収奪

ゴム・ブームを底辺で支えていたのは、もちろんゴム液採取の労働者である。アマゾンの人口は一八世紀末でインジオを除き一〇万人だったが、一九〇〇年には約七〇万人になる。一九世紀の後半、旱魃（セッカ）のノルデステから三〇万人が内国移住し、この連中がゴム液採取労働者の主力となる。アマゾン産ゴムの輸出額は、一八八〇年に八六〇〇トンを輸出した時、コーヒー、砂糖につぐ第三の輸出産物になり、一八九〇年にはコーヒーを抜いて一位になる。当然、労働者一人当たりの生産金額も二二四ミル・レイスと、コーヒー労働者の九四ミル・レイスに比較してはるかに高かった。ところが現実には、アマゾンのゴム液採取労働者は、一レイスの現金も受取ることが出来なかった。この時代のアマゾンに採用された独特の収奪、搾取体制である「アビアメント」にがんじがらめに縛られ、これから逃げることが出来なかったからである。

当時のアマゾンはベレンやマナウスのどんちゃん騒ぎとは別に、貨幣経済がまったく発達していなかった。だいいち銀行がないのである。ベレンとマナウスには、カーザ・バンカリアと称する小規模な金融機関はあったが、こんなもので間に合うわけがない。コーヒーを上廻る生産がありり

ながら、現金（紙幣、貨幣）の絶対量が不足しており、カネが流通しないのである。そこで、前近代的な決済方式である「アビアメント」が登場してくる。

これは一口に言えば、食糧や生活必需品を前貸しして、ゴムで決済するやり方である。

まず、ベレンやマナウスの大商店が食糧、衣料その他生活必需品をサンパウロや外国から仕入れ、これを地方の商店に卸す。代金は金ではなく、ゴムを納入させる。地方の商店は、この商品を現場の小売店である「バラコン」に卸す。これも代金はゴム。そしてはじめて「バラコン」が最終消費者である労働者に商品を渡し、ゴムで決済するのだ。「バラコン」の経営者は、大抵その地方の地主であり、ゴム液採取労働者の直接のパトロンであることが多い。「バラコン」から消費者である労働者に商品が渡される時には、恐るべき高値になっており、いくら働いても返せない仕組みになっている。

「アビアメント」は搾取の方法としては、まことに巧妙、狡滑。一旦このアリ地獄に落ち込んだら、まず抜け出すことは不可能。もともとアマゾンは、セッカのセルトンと違い、小屋の周りに僅かばかりのマンジョカを植え、豚と鶏くらい飼っていれば、最低の自給生活は可能なのである。河には魚もいるし、森にはなにかの獲物も捕れるからだ。しかし、そうのんびり暮らされたのではゴム商人は儲から

ない。その為に、最初に甘言を弄し、強引に品物を貸しつけてしまう。前貸しを受けたが最後で、借りを返すためにはマンジョカ作りも魚釣りも放棄して、ゴム液採取に働かなければならない。そうなると、食糧の自給が出来ないから「バラコン」から借りるということになり、借金は雪ダルマ式に増えて、一家が総出でゴム液を採取しても永久に返せない額になるのだ。

「アビアメント」の原型は、アマゾンで一般的だった行商舟「レガトン」である。語源的には舟を漕ぐ意味、あるいは競艇のレガッタと同じだが、アマゾンでは一七世紀から行商舟をレガトンと称している。レガトンにはものを高く売りつける意味と、ものを安く買い叩く意味の二通りがある。

これは最初アマゾンに入った植民者が、小舟で奥地に入り、インジオを騙して掠奪交易を行ったことに起因している。

ゴム景気時代、ブラジル商人の貪欲さも相当なものだったが、外国商社の凄腕には遥かにおよばなかった。いくらブラジルのゴム商人が威張っても、彼等は海外市場も輸出ルートも持っておらず、自分では一キロのゴムも輸出できなかった。アマゾンのゴム輸出は少数の外国商社に完全に握られていた。英、米、独の外国商社は、買いつけ資金すらも必要でなかった。自国の銀行がベレンやマナウスに支

店を開けたからである。
外国商社がブラジル商人からゴムを買う場合、自国の銀行が保証した九〇日の手形を渡す。商人はその手形を割ってもよいし、九〇日待ってもよい。一方、ゴムの現物は、九〇日経つ頃にはとっくに欧米に着き、売買され、銀行との決済も終わっている。
ゴム・ブームの時代、コーヒーを上廻る輸出がありながら、ゴムはブラジル経済にさっぱり貢献しなかった。オペラハウスや気違いじみた浪費の他に、なんの建設的な投資もされず、利益の大部分は外国商社が自国に持ち帰り、ゴム・ブームは槿花一朝の夢で、荒廃だけしか残らなかった。

国際色豊かな無軌道ぶり

以上、説明したように、アマゾンという場所は〝緑の魔境〟であるくせに、文明人が最初に入った時から妙に国際性を帯びている。狂乱のゴム景気を経て、二〇世紀終わりの今日まで大きなアマゾン開発プロジェクトや、大きなアマゾン問題は、常に外国あるいは外国人が絡んでいるのが特徴。
これにはいくつかの理由があるのだが、整理すれば次の

ようになると思われる。

①一八二二年のブラジル独立まで、アマゾンはポルトガル王室の直轄でブラジル総督府とは直接の関係がなかったこと。

②道路がなく、ブラジルの内陸側からアマゾンに行くルートが皆無だったこと。

③もと海だったアマゾンは帆船時代でも欧米の外国船が下流に入れたし、蒸気船の時代になると、自由に上流まで入れたこと。

④ボリビア、ペルー、コロンビア、ベネズエラおよびギアナ三国と国境を接し、地政学的に紛争が起きやすい地域であること。

⑤木材、ゴム、鉱物のように、魅力のある大きな資源があること。

⑥広大なアマゾンはブラジル一国では手におえず、開発には外国からの投資を必要としたこと。

しかし、こうした理由や事情はあるものの、ゴム景気以前のアマゾンは貪欲な外国勢にとっても、そうかんたんに入れるところではなかった。やはりアマゾンはゴム景気から開発の幕が開くといってよい。

ゴム景気が到来したといっても、誰でもが奥地に入れるほど〝緑の魔境〟は甘くはない。したがって、アマゾンに

やってくる人間は、ブラジル人であれ、外国人であれ、冒険と一獲千金を狙うアウトロー（無法者）が多いのはやむを得なかった。それだけに、ゴム景気時代のアマゾンでは、無秩序で、デタラメで、人間のナマの欲望をむき出しにした好き勝手なドラマが展開された。秩序とか規律、組織、連帯、勤勉などとはまるで無縁の冒険世界である。この風潮は現在でもガリンペイロ（金堀り）の世界に色濃く残っているが、ブラジル政府のコントロールの行き届かないゴム景気時代のアマゾンは、外国人のアウトローも参加し、国際色豊かな無軌道ぶりが現出する。いくつかの例を見てみよう。

まず、アクレ州になっているブラジル最西端のアクレ地方は、ブラジル、ボリビア、ペルー三国の辺境地帯で、一九世紀はじめまでは一部の探検家が訪れたのみの、どこの国の所属とも定まらぬ地方だった。一九世紀半ばからのゴム景気で、アクレ地方もゴムの産地として関心が持たれるようになる。アクレにもっとも関心のあったのがボリビアで、三国の外交交渉の結果、一八六七年ペルーのアヤクチョで国境設定のアヤクチョ条約を結び、アクレ地方は正式にボリビア領になる。ところが、ボリビア領になったものの、住民の九五％以上はブラジル人だった。セアラー州

出身のジョン・ガブリエルがゴム液採取のオルガナイザーとなり、ノルデステからの労働者をどんどん入れた結果である。事態を重視したボリビア政府は、アクレ河のプェルト・アフォンソ（現在のリオ・ブランコ）に軍隊を派遣、税関を開設して、下流に運び出すゴムに一五％の税金をかけた。一八九九年はじめのことである。

このボリビアの措置は、アクレがボリビア領である以上当然なのだが、住民は憤慨、ボリビア軍との間に一触即発の不穏な空気が高まった。当時のボリビアは、歴史的に見れば実に気の毒な状況だった。つい先頃まで、ボリビアは、太平洋に画したアントファガスタ州を持っている海のある国だったのだ。ところが同州から産する硝石をめぐってチリと対立、ペルーと組んだボリビアは一八七九年から一八八三年まで、チリとの間に「太平洋戦争」を起こし、結局負けて唯一海に面した同州を取られてしまう。

太平洋への出口を失ったボリビアは、ゴム景気が到来すると、ボリビア領アマゾンのゴムをアマゾン河経由で輸出することに心血を注ぐ。しかし航行権を握っているブラジルは、税金その他でいろいろ条件をつけ、かんたんには通してくれない。そこで思い余ったボリビアはアメリカに庇護を依頼する。アメリカの力でブラジルを抑える方法で、ゴムの欲しいアメリカはこの話にのり、秘密協約を結ぶことにする。

この秘密協約のボリビア側原文がベレンのボリビア領事館に勤めていたルイス・ガルベス・ロドリゲス・デ・アリアスというスペイン人によって持出され、ブラジル側に暴露されてしまう。調子に乗ったガルベスは、アウトローの一団を率いてアクレを攻め、無血占領する。そしてアクレを独立させ、僅か半年だったが、自ら大統領に就任するという信じられない〝珍事〟〝快挙〟をやってのける。

歴史的事実〝アクレ共和国〟

スペイン人のルイス・ガルベス・ロドリゲス・デ・アリアスがブラジル人を煽動してアクレを無血占領、「アクレ共和国」をつくったことは歴史的事実である。しかし、ここがおもしろいところなのだが、ブラジルの歴史書はこの間題を取り上げないか、取り上げてもほんの二、三行で片づけている。明らかにこの事件を無視、というか、避けている気配が濃厚なのだ。もっとも、最近ではタブーが解禁になったのか、この事件を解説した記述も見られるようになったが、まだ正式に認知されるところまでには至っていない。たしかにこの事件は不思議な事件で、ゴム景気時代の狂乱と無秩序、欲望と冒険が渦巻いたアマゾン辺境ならではの出来事で、ブラジルとしては余り後味のよい事件で

はなかった。

とにかく経緯を辿ってみよう。別に難しい筋ではない。

ガルベスの父親はスペインの貴族とも言われている。ガルベスはスペインのビリア大学で法学と社会学を学び、マドリッド大学で更に法学を修め、セルビアとイタリアのスペイン公使館の書記官を勤めたこともあるらしい。らしい、というのは確証がないからだが、はっきりしているのは一八八九年頃にアルゼンチン駐在スペイン公使館の書記官をしていたことで、これは記録に残っている。

天性の冒険家で放浪癖のあるガルベスは、一八九八年の暮れ、アマゾン河口のベレンに姿を現す。リオ駐在スペイン公使の書いた信用状を持っており、これをボリビア領事に提出、就職を依頼する。当時ボリビアは、自国領のアマゾン上流地方から出るゴムをアマゾン河を通じて輸出していたため、ベレンに領事館を置いていたのである。

ボリビア領事は一目でガルベスが気に入った。なにしろ長身の美男子、それにインテリで、五カ国語に通じており、文章は非の打ちどころがなかった。ガルベスは無事ボリビア領事館に働くことになるが、その前にマナウスを見たいということでマナウスを訪れ、ゴム景気で沸き返るこの町の猥雑さが好きになる。ガルベスはたちまちのうちに社交界のスターになり、シティ・クラブのような高級クラブに出入りして、ヨーロッパから来た美女を相手に派手な

浮き名を流したり、シャンパンを飲んで乱痴気騒ぎに明け暮れた。この金は知り合ったアマゾナス州知事ラマール・ジュニオールから引き出したもので、ガルベスにはどんな人間とも親しくなってしまう独特の才能があった。

結局、ガルベスは三カ月もマナウスに滞在し、ベレンに帰ったのは一八九九年の二月だった。約束通りボリビア領事館に働き、午後は地元の新聞「プロビンシア・ド・パラー」の編集部に勤めた。

二カ月経ったある日、ガルベスは領事から一通の文書の英訳を頼まれる。最初何気なく読んでいたガルベスの目が次第に光り出す。それもそのはずで、この文書こそアクレ地方に関してボリビアとアメリカが取り交わす秘密協約の草案だったのである。

ガルベスはスペイン語の原文を丁寧に書き写してコピーを取り、外出した。そして二度とボリビア領事館に戻らなかった。ガルベスは自分の勤めている「プロビンシア・ド・パラー」紙に秘密協約の全文を掲載、暴露してしまう。内容を要約すると次の通り。

①アメリカは一八六七年のアヤクチョ条約で定められた、アクレにおけるボリビアの権利を認める。

②アメリカはボリビアが戦争状態に立ち至った時、必要資金および軍事武器をボリビアに調達する。

③アメリカはボリビアの要求により、プルス河とジャバ

リ河の間に境界を定めるため、委員会の設置をブラジル側に働きかける。

④アメリカはボリビアのアマゾン河自由航行権をブラジルに承認させ、ベレン、マナウスの税関に関係なくボリビアの輸出入が自由に出来るようブラジルに働きかける。

⑤ボリビアはアメリカの功績に酬いるため、一〇年の期限でアクレにおけるゴム採取権の五〇％を与え、いかなる国への輸出も認める。

⑥ブラジルと交戦状態に入った場合、ボリビアはアヤクチョ条約で定められた国境線を守る。それ以外のアクレ河口かブラジル寄りの地方はアメリカに譲渡し、アメリカの自由な領土とする。

①戦争の場合、アメリカがボリビアに拠出する戦費の抵当として、アクレ税関の税収を当てるものとする。

いやはや、大変な内容の秘密協約である。これが新聞紙上ですっぱ抜かれたのだから、ブラジル国内が騒然となったのも無理はない。

だが、リオの連邦政府は動かなかった。抗議しても、否定されればそれまでだからだ。そこで冒険児ガルベスの個人プレイによるアクレ攻撃がはじまる。

〝茶番〟ではじまった辺境開発

いくら天性の冒険児とはいえ、ガルベス一人でアクレを独立させることは出来ないが、そこはよくしたもので、ガルベスにはアマゾナス知事のラマール・ジュニオールという、これまた相当にボルテージの高い黒幕が控えていたのである。ガルベスはアマゾナス知事から六〇コントという、当時では大金を引き出し、武器、弾薬を購入、義勇軍を募集した。ラマール知事にしてみれば、アクレをブラジル領にすることは大いに魅力があった。なによりアクレを手に入れれば、ゴムの税金が入ってくる。将来見込まれる収入増に比べたら、ガルベスに出す六〇コントなど安いものである。

ガルベスは一八九九年六月四日、募集した三〇名の義勇軍を率いてマナウスを出発する。それにしてもガルベスの集めた義勇軍はまともな連中ではなかった。折りからマナウスに興行に来ていた、スペインの喜歌劇団の団員が中心で、これに山っ気の多い連中が加わった「男女混成」部隊だった。

プルス河を遡り、アクレ河に入ると、河岸に住むゴム採取人が多くなる。いずれもブラジル人で、東北ブラジルのセルトンから来た労働者だ。ガルベスはこの連中から情報を集めているうちに、住民たちがボリビアを敵視している

のは当然としても、何の援助も保護もしてくれないブラジル政府に対しても強い不満を持っていることを知る。ここではじめて、ガルベスはアクレ独立の着想を得る。そして集まった住民に得意のアジ演説をぶち、「アクレ独立の壮挙に参加するものは武器を持って起て」と煽動する。こうなれば時の勢いはガルベスのもの。武器を受け取った住民はカヌーを何十隻も仕立ててボリビア側の本拠地になっているプエルト・アフォンソに一挙に攻め込み、この町を占領してしまう。この町を守備していたのはボリビアの正規軍ではなく、狩り集めの傭兵だった。

ただ、いくら傭兵でもガルベスの義勇兵ではとても勝味はなかったのだが、武装した多数の住民に恐れをなし、あっさり降参してしまったのである。こうしてアクレを無血占領したガルベスは、一八九九年七月一四日フランス革命の記念日にアクレ共和国の独立宣言をやってのけ、自分が大統領に就任する。

ガルベスは外務、大蔵、司法の各大臣などの閣僚の他、四一名のメンバーからなる革命委員会を組織したり、共和国の紋章も制定、先進諸国にはフランス語で新共和国の誕生を通知した。だが、ガルベスのアクレ共和国は半年しか続かなかった。当然のことで、国としての基礎のない〝幻の共和国〟でしかないのだ。ガルベスは財政的に行詰まり、一八九九年一二月二八日に辞職する。ガルベスの独断

専攻はブラジル政府をも慌てさす。一九〇〇年の二月、ガルベスは捕らえられたが、政府は処置に困った。明らかに国事犯だが、一方ではアクレ解放の大功労者でもある。困った政府は、結局レシフェで釈放してしまう。アマゾナス知事のラマール・ジュニオールは二五〇コントの功労金をガルベスに支払う。この時ガルベスの書いた領収書は現存している。

ガルベスはやがてブラジルを去り、ヨーロッパに帰るが、豪華なヨットの船上にはガルベスの粋な姿があり、その傍らには目の覚めるようなブラジル美女が寄り添っていた。ガルベスは一九三五年スペインで死ぬ。

断っておくと、アクレはガルベスの活躍だけでブラジル領になったのではない。この事件の後も、ボリビアン・シンジケートの問題や、一九〇二年から三年にかけて起こったボリビアとの戦争もある。ボリビア軍と戦ったのは、ブラジル正規軍ではなく、アクレの闘士プラシド・カストロに率いられた「アクレ軍」だった。この戦争の勝利でブラジル政府もやっと腰を上げ、一九〇三年のペトロポリス条約でアクレをブラジル領とする。

以上、長々と述べたが、ガルベスの「アクレ共和国」は本来〝茶番〟である。いくらアマゾンの奥地でも、個人が一五万平方kmのアクレを乗っ取り、独立国をつくることな

どはあり得ないハナシだ。だからブラジル、ボリビアをはじめ、世界のどの国もアクレ共和国などは認めなかった。しかし、認めなくてもガルベスの行動は事実であり、それがきっかけでアクレがブラジル領になったことも紛れもない歴史的事実である。

アクレの併合は、ブラジルとしては大義名分が明らかでないため、どうしても後ぬたさが拭えなかった。その証拠に、戦争に勝ちながら二〇〇万ポンドの償金を払ったり、ボリビアのために〝悪魔の鉄道〟こと、マディラ・マモレー鉄道の建設を約束している。

これがまた、新たな悲劇の種になるのだが、どうもアマゾン問題というのは、歴史的にブラジル政府の意図とは異なる要因で発生するケースが多い。

成果乏しい「悪魔の鉄道」

鉄道の出現は、イギリス産業革命による技術革新の総仕上げで、これによって世界の経済は大きく変わる。商業ベースでの鉄道開通は、一八三〇年のマンチェスタ／リバプール間が最初であるが、それからたちまちの間に世界中にひろがった。ブラジルでもリオのマウア鉄道が一八五四年に開通している。

鉄道は、それまでの輸送手段と比較して、スピードも輸送量も桁違いに大きかったから、爆発的な人気を呼び、一躍、鉄道時代が到来する。これによって奥地の開発は飛躍的に進むわけだが、初期の鉄道工事ではどこの国も苦労し、多くの犠牲者を出している。

「悪魔の鉄道」と呼ばれたマディラ／マモレー鉄道、三六六kmは、ブラジルがアクレ地方を領有する代償として、ボリビア領アマゾンのゴム搬出のためにブラジルが建設した鉄道である。この工事は一九〇七年に着工、一九一二年に開通した。世界の鉄道建設史上、最大、最悪の難工事で、主としてマラリヤによる犠牲者の数は一万人を少し超した。純金三二トンに相当する厖大な資本を注ぎ込んで建設した鉄道だが、完成していざ開通したら肝腎のゴム景気が終わってしまったという、とにかく因縁のある鉄道なのだ。アマゾンを語る場合、この「悪魔の鉄道」を外すわけにはいかない。

ゴム景気のはじまる一八六〇年代から、ボリビアは鉄道の建設を熱望していた。自国領アマゾンであるベニ河、マモレー河、マドレ・デ・ディオス河沿岸のゴムは、そのまま河を下ってブラジル領のマディラ河に出す以外方法はない。マディラ河はアマゾン河支流随一の大河で、アマゾン河に合流する河口から一一二四kmのポルト・ベーリョ（現

ロンドニア州首府)迄は、比較的容易に行ける。ところが、ポルト・ベーリョから上流になると。サン・カルロスの滝やテオトニオの滝をはじめ、次々に滝や浅瀬、急流が現れるので舟の航行が出来ない。

ポルト・ベーリョからマディラ河右岸を遡ってアブナ迄行き、アブナからマディラの支流マモレー河右岸を上って、ボリビア国境のグワジャラミリン迄鉄道を通す計画は既に一八六〇年代からブラジルでもつくられていた。ボリビアだけではなく、ブラジルにも鉄道が必要だったのである。

鉄道工事は一八七二年に、まずイギリスのパブリック・ワーク・コンストラクション会社が挑戦、僅か一年で多くの死者と傷病者を出して撤退する。ついで第二回戦に挑戦したが、アメリカのフィリップ・アンド・トマス・コリンズ社。一八七七年熱帯地の鉄道建設に充分経験のある技術陣と、世界各地から集めた労働者を投入、万全を期した工事が再開される。結果は同じだった。投入した五〇〇〇人の労働者のうち、マラリア、黄熱病、脚気、アメーバー赤痢などで死んだものは一〇〇人を超し、逃亡者も多く出たが、文明社会に戻れた者は少なかった。コリンズ社は二年後の一八七九年に破産、たった八kmの鉄道をつくっただけで工事は中止され、トマス・コリンズの社長婦人は発狂する。以後、約三〇年間、鉄道建設は放置される。

断っておくが、これはマディラ／マモレー鉄道の前史で、前史の段階でさえ二〇〇〇人に達する死者および行方不明者を出している。そして一九〇七年からはじまる本史に引き継がれる。工事は最初、ブラジル人の会社が請け負うが、資金が集まらず失敗、結局アメリカの資本家がつくった、マディラ／マモレー鉄道会社が、六〇年の営業権を条件に請け負い、着工する。工事の一番のネックは労働者の確保だった。ブラジル人はいるのだが、苛酷な鉄道工事よりは、まだゴム液採取が良いとみえ、応募者はほとんどなかった。そこで会社側は、当時としては異例の世界的規模での募集をし、なんと二〇数カ国から労働者を入れた。この頃はパナマ運河の工事中だったが、高賃金を条件に運河工事の労働者も入れている。

会社側は一年に平均一万人の労働者を注ぎ込んだが、常時働いている人間は四〇％に満たなかった。アマゾンの大自然は厳しく、マラリア、黄熱病、脚気、アメーバー赤痢が猛威を振るい、劣悪な労働条件は地獄の責苦の連続だった。

世界の鉄道建設史の中で、もっとも悲惨、凄惨な工事となった「悪魔の鉄道」こと、マディラ／マモレー鉄道は六年半の歳月を費やして一九一二年八月一日開通する。

工事中の死者および行方不明者一万一六人、死亡率は投入された労働者五万人の二〇％に達した。

現場の病院に入院した患者数は三万二三〇〇人となっている。

これだけの犠牲者を払った鉄道も、開通した時はゴム景気は下降、たった二年しか採算運転が出来なかった。アマゾンの開発は、最初からどうも歯車が狂っている。

王室が独占した〝法材〟

一九九二年の六月、リオで開かれた「地球サミット」でアマゾンの自然環境もいろいろ取り上げられた。自然環境の形態や規模の大小はさまざまだが、人間が直接手を下して森林を破壊する原型は、インジオの焼畑農業に求めることが出来る。

ブラジルのインジオは自分たちの部落の近くの原始林で、なるべく巨木のないところを選んで伐採し、マンジョカ（マニオク、キャッサバ）やトウモロコシを植えた。巨木を避けるのは、伐り倒す道具がないからである。しかし、巨木でなくてもアマゾンの木はけっこう大きく、倒した木を人力で動かすことは難しい。そこで伐り株や倒した木の幹はそのままにして、枝を伐り、小木や枝を集めて乾燥させ、これを焼いて小農地をつくったのである。幹や株

は焼け切れず残る。これを避けた空地に堀り棒で穴を開け、マンジョカの茎を差込んでいくのだ。かってサンパウロやパラナの奥地に入植した日本移民も基本的にはこのやり方で原始林を伐り、コーヒーを植えていった。

こうした焼畑づくりの作業をツピー語で「コイバラ」と言う。コイバラは日本移民にとっては懐かしい言葉である。ポルトガル語と思っている人も多いようだが、コ（伐採開墾）イバラ（小木、枝）で、要するに焼畑づくりのことなのだ。インジオがコイバラ方式でつくる焼畑は大体三年で更新され、移動するのが普通である。放棄された畑は三〇年ぐらいで森林に戻る。開く面積が小さいから、二次林ではなく、一応原始林になるが、やはり完全な原始林には戻らず、二次林との中間型ぐらいにしか回復しない。

アマゾンの原始林は比較的最近まで、大規模な破壊は受けなかった。材木業者は古くからいるが、業者の伐る樹種は限られており、どんな木でも伐るわけではない。幸か不幸かアマゾンの森林は、シベリアのタイガのような針葉樹の純林とは異なり、広葉樹の多種混成林でヘクタール当たり一〇〇から一五〇種の樹種がある代わりに、同じ種は少なく二、三本しかないのである。アマゾンの木材業者は特定樹種の銘木を選んで伐る間伐方式を採用していたから、大きな森林破壊にはつながらなかったのだ。

余談だが、アマゾンの銘木で思い出したことがある。

ブラジルの日系社会に長い人は、あるいは記憶しているかも知れないが、一〇数年前までの邦字新聞の家具屋の宣伝広告に「当店の家具は法材を用いています」というのがあった。問題はこの「法材」である。法材の意味のわかる人は、よほど木材の専門家か、歴史に詳しい人で、まず、ほとんどの人には「法材」が何のことだかわからなかったに相違ない。これはブラジル語のマディラ・デ・レイ（Madeira de Lei）の訳語なのだ。なるほど、日本語に訳せば「法律で定められた木材」すなわち「法材」になる。少し説明しよう。ブラジルという言葉の語源となった染料植物のパウ・ブラジルの取り扱いが、ポルトガル王室の独占であったことは良く知られている。植民地の儲かりそうな産物や事業を宗主国の王室が独占するやり方は、別に珍しいものではない。ポルトガルだけではなく、スペイン、フランス、オランダ、イギリス、皆そうだったのだ。

「法材」こと、マディラ・デ・レイは、一七九九年にポルトガル王室が出した法令でリストアップされた、ペローバ、スクピーラ、アンジエリン、イペー、セードロなど一四種の銘木なのである。

ポルトガル王室は、この銘木の伐採、販売権を独占し、王室の許可なく伐ったり売ったりすることを禁じた。時期的にはブラジル独立直前で、内陸の金の産出も減り、何か

儲かる代替物を求めて王室が必死になっていた時代である。以後九〇年間、王室の独占が続き、制限される木の種類も増える。一八八九年に共和制になってからは、この規制は当然なくなるが、おかしなことに、マディラ・デ・レイの言葉だけは受け継がれて現在に至っている。第一級の優れた材質の銘木だと解釈すれは間違いない。ついでに言うと、マディラ・デ・レイに対応する語は、マディラ・ブランカ（下級材）である。

アマゾン開発に話を戻すと、一九五〇年代の後半からアマゾン開発は本格化する。有名な「アマゾンの開発なくしてブラジルの発展なし」のスローガンで、まず道路建設がはじまる。ついで、道路と抱き合せた農地の分譲と造成、ＳＵＤＡＭ（アマゾン開発庁）の税制恩典による企業誘致（木材工業や大規模農牧プロジェクト）ブームが続き、更にはダム建設、鉱山開発、ガリンペイロによる金堀りでアマゾンは荒らされる。

アマゾン開発に共通しているのは、無計画と無秩序で、これは昔も今もまったく変わりはない。

跳梁するガリンペイロ

アマゾンのカラジャス鉱山の近くにツクマンという町が

ある。パラー州の南部だ。現在の人口は三万一〇〇〇人、田舎町としては大きな町である。この町の存在は、最新のクアトロ・ローダ社のロード・マップには出ているが、パラー州の地図でも少し古いのには載っていないし、この町に関するいかなるインフォメーションもない。何故か。それはこの町が一〇年前には人口僅か二〇〇人の小集落にすぎなかったからである。急激に人が増えたのは一九八四年、ここに金鉱が発見され、ガリンペイロがどっと入り込んだことによる。

ガリンペイロとは金掘り人夫のこと。ミナス州で金が発見された一七世紀の終わりから存在している歴史的古さを誇る職業である。もっとも、以前はガリンペイロというのは金ではなく、ダイヤモンド掘り、しかも盗掘者のことを言った。金掘りはこれとは別にファイスカドールと呼ばれていたのだが、いつの間にか金掘りも、ダイヤ掘りも、おしなべてガリンペイロと言うようになった。

現在、アマゾン地域には二〇〇個所、約四〇万人のガリンペイロが働いていると見られている。この数字は、鉱山動力省、鉱産物局の推定である。ガリンペイロは移動が激しく、なかなか実態がつかめないが、一番数が多いのはパラー州南部のセーラ・ペラーダとその周辺で、クリオノポリス、エルドラード、クマルー、ツクマンなどで最盛時には一五万人のガリンペイロがいた。その次はロライマ州の

山地で、ここには三万人が入っている。マディラ河に舟を並べ、河底の砂から採金しているガリンペイロも数は多い。

ブラジルのように地質的に古い年代の土地では、金は全国的に分布しており、特にブラジル高原やアマゾン河を越したギアナ高地に金の出ることは、かなり昔から知られていた。とはいうものの、ガリンペイロといえども、道路のない時代にアマゾンの奥地に入り込んで、金を掘ることは物理的に不可能だった。だいいち食糧の確保が出来ない。ガリンペイロがアマゾン奥地に入るのは、内陸部に未舗装ではあるが一応道路がついて、バスや車がある程度の場所まで行けること、食糧や日用品、道具を売る店のある集落が出来たこと、軽飛行機やジープなどで金鉱近くに行けること、というような諸条件が揃ってからのことである。年代的には一九七〇年頃からだ。

金（キン）はどういうものか、人間を惹きつける妖しい魔力を持っているとみえ、いろいろな種類の人間がガリンペイロになる。筆者がセーラ・ペラーダで会ったのは、純然たる日本人のガリンペイロで、自衛隊の出身者だった。外国人でもいっこうに差し支えないらしい。こういう異色なのもいるが、なんといっても東北ブラジル出身者が圧倒的で、この比率はガリンペイロ全体の八五％に達する。だからアマゾンのガリンペイロは、多分に内国移住の性格を

持っており、小農場を求めてアマゾンに入った東北貧民と根っこの部分で共通している。冒頭で紹介したように、ガリンペイロの集落は急激に膨脹するのが特徴である。人口が二万にも三万にもなれば、自然発生的にいろいろな商売をする人間や店が出来る。もちろん売春婦もたくさんやってくる。こういう集落は州政府が計画してつくった町ではないから、いくら人口が増えても行政機構が整わない。市役所もなければ警察もない。いわば無法の町なのだ。州政府もこれだけ人口が増えると放っても置けないから、後では市役所の支所や警察の分署ぐらいは開設するが、警察などはあっても役に立たない。二人や三人の警官ではどうにもならない。なにしろ金の分け前や、酒と女を巡るトラブルは日常茶飯事、毎日最低一件は殺人事件が起きるのである。アウトロー同志の殺し合いは放っておくより方法がない。

アマゾンのガリンペイロは今や大勢力に成長している。アウトロー（無法者）的性格が強く、森林破壊や河の汚染などはなんとも思っていないし、インジオの居住区だろうと平気で侵犯して紛争を起こす。政府も最近になってガリンペイロの跳梁ぶりに驚き、規制する動きに出ているが、こう大勢力になってはどうにもならないというのが本音である。

アマゾンの急激な人口増は、僅かな土地を求めてやって

きた難民と、一獲千金を夢見たガリンペイロによるものであり、正常な発展による人口増ではない。その証拠は、アマゾン人口の男女の比率が六一対三九であることを示せば充分だろう。

無定見なアマゾン開発政策の産物だが、自然破壊の他に、開発に追われるインジオ、都市のスラム化、モラルの低下と犯罪の増加という社会問題をも引き起こした。

増えるアマゾンの貧民窟（ファベーラ）

ＩＢＧＥ（ブラジル地理統計院）発行の「ブラジル統計年鑑」最新版が出た。今回のは一九九一年に行った国勢調査の数字が使われており、大変参考になる。ブラジルのお役所が出す出版物の中ではもっとも役に立つ本である。この年鑑、年々良くなり最新版は所得格差一覧表、若年労働者数、人種別・男女別賃金格差統計、ファベーラ（スラム）の分布と数などが出ているから、こういうことに興味のある人にはありがたい。

この年鑑でファベーラについていろいろ知った。ファベーラという名称の由来については既に述べたから省略する。リオの貧民窟が本来のファベーラなのだが、レシフェのモカンボ、バイアのアラガードを含め、すべての貧民窟

をファベーラで統一している。南米の他の国は、もちろんそれぞれの名称を持っている。カリャンパス（チリ）、ビリャ・ミゼリア（アルゼンチン）、ランチートス（ベネズエラ）、バリアーダス（ペルー）などだ。

ところで統計年鑑に州別のファベーラの分布と数が出ているのだが、ＩＢＧＥは何を基準にファベーラと認足したのだろうか。つまりファベーラの定義は何かということだ。これは年鑑に説明が書いてある。

まず、ファベーラは最低五一以上の住居が密集して、一つの居住区域を形成していなくてはいけないのだそうだ。スラム街という言葉のように、街というか、集団をなしている必要があるのだ。いくらオンボロ小屋でも、山の中にポツンと一軒あるのはファベーラにならない。

次にスラム街を形成している土地が住民の所有する土地ではないことである。言うなれば不法占拠の形をとるのがファベーラなのだ。

三番目は上下水道や電気がないか、あっても極めて不備な状態にあることだ。

ＩＢＧＥはお役所だから、この三つの条件が揃わないとファベーラとは認めない。だから実際にはファベーラに近い居住形態は、統計の数字よりずっと多いことになる。

統計によると、ブラジル全国でのファベーラ数は三二二

一カ所、一四〇万八〇〇〇軒である。さすがに住人の数については調査が出来なかったとみえ、記載がない。ファベーラの絶対数はサンパウロ州一二五七カ所二七万軒、リオ州六六一カ所二五万五〇〇〇軒と群を抜いて多いが、全住宅数に占めるファベーラの割合は、レシフェ四二・二％、マナウス一七・八％、ベレン一五・一％、フォルタレーザ一三・二％、リオ一二・四％の順になっている。

以上は首府の例だが、地方の町にはアマゾンのジャリー河河口にあるラランジャール・ド・ジャリーのように、四六七七軒の全住宅のうち、五九・九％の二八〇二軒がファベーラという極端な例がある。ここは先頃亡くなったアメリカの大富豪ダニェル・ルードウィッヒがつくったパルプ工場のある町だ。このパルプ工場は日本の石川島播磨の工場でつくり、はるばる海上を曳いてアマゾン河に入り、ジャリー河口に据えられた浮ぶ工場である。

ジャリー河口一帯は低湿地で地盤が弱く、工場を陸地に建てられないから浮き工場にしたのだが、実は工場はおろか、普通の住宅ですら川岸には建てられない。

パルプ工場が稼働するようになると、工場の労働者の他にも多くの人間が儲け口を求めて集まってくる。小さな店も次々に出来るし、売春宿もわんさか出来る。この連中の家は川岸に杭を打ち込み、その上に高床式の小屋をつくる

のだ。半水上生活だが、アマゾンの川岸に住む住民なら誰でもやっている方法であり、高床式の小屋自体珍しいわけではない。高床式の住居は桟橋がないと外に出られない。そこで集団居住の場合は、道路の代わりに共同使用の桟橋をつくり、桟橋に沿って小屋を建てるのだ。この場合、小屋を密集した方が通路である桟橋の利用効率が良い。かくて半水上のファベーラという一大奇観が出来上がる。この式のファベーラはベレンにもマナウスにも存在する。

ＩＢＧＥのファベーラの統計は、今回の国勢調査がはじめてで、その前にはない。したがってファベーラ変遷の推移を数字で比較することは出来ないが、ファベーラが年を迫って増えているのは間違いない。それもサンパウロやリオのような大都市ばかりでなく、アマゾン地域の都会で顕著なのだ。なにしろ今やベレン（一二四万人）、マナウス（一〇一万人）共に百万都市なのである。全アマゾンの人口も、九一年で一千万を超えた。ブラジル総人口の七％である。七〇年までは三％台だったことを考えれば、いかに急激に人口が増えているかが分かる。もっと激しいのはロンドニアで七〇年には一一万だったのが、九一年には一一三万と一〇倍になった。問題が起きるのは当然なのだ。

深刻な貧民の都市大流入

これを書いている時点で現職の外務大臣であるフェルナンド・エンリッケ・カルドーゾは知る人ぞ知る社会学者、それもかなり高名な学者である。一九六九年に「ラテンアメリカにおける従属と発展」という論文を発表して注目を浴びた、いわゆる「従属論」者の一人なのである。

従属論をラテンアメリカに限定して、わかりやすく説明すると、

「アメリカ経済に従属する中南米諸国は、強過ぎるアメリカ資本主義に収奪され続けるから、自国はいつまでも低開発状態で、発展しない」という論理である。

つまり、一六世紀に新大陸が発見されてからの歴史を、強いアメリカ側ではなく、弱い被支配周辺国（ラテンアメリカ）の立場から見ようとする史観で、フランク・グンテルが唱導した。カルドーゾも基本的には同じ立場だが、ラテンアメリカ側に内在する独特な社会的、政治的構造や文化的な特徴をも考慮すべきだと考えた。ここがカルドーゾの優れたところである。そしてカルドーゾはブラジル、メキシコ、アルゼンチン、チリのように、国が大きく、人口が多い国や、伝統的に文化程度の高く、外国資本に支配されているとはいえ、一定の国内市場を持つ国は、外国の資本、技術、市場に依存しながらも、自国の資本主義的発展

は可能との結論を出した。卓見である。

たしかにブラジルは多国籍企業、特にアメリカの経済支配の影響を受けているが、そのおかげで工業が育ってモノカルチャー産業から脱却、雇用も増え、消費市場も増大したのだ。

一九七〇年代前半の〝ブラジル経済の奇跡〟と言われた高度成長からもカルドーゾ理論の正しさは証明出来る。ただ、カルドーゾも認めていることだが、このタイプの経済発展は、国内の諸矛盾をそのまま放置、旧体制が改善されぬまま進行するから、発展すればするほど、意識の低い貧民層との経済格差がひろがるという欠陥を有している。それが現在の収拾のつかない社会混乱、貧民の増大、アンダーグラウンド（地下）経済の急伸、犯罪の増加という問題につながってくるのだ。

一九四〇年といえば、ヨーロッパでは既に第二次世界大戦に突入していた時代だが、ブラジルでは全人口の七〇％が農村に住んでいた。一九六〇年でもまだ五五％が農村に住んでいた。逆転するのは一九七〇年で、この年に四六％になる。以後急速に農村離れが進み、一九九一年には二五％になってしまった。都市化率七五％、世界の先進国クラスである。数字だけ辿ると、日本も同じようなものであるが、日本の場合は農村人口の吸収によって強力な経済成長が達成されている。ブラジルは単なる難民、貧民の都市流

入で、生産性にはまったく寄与していない。

こういう貧民の都市流入現象はかつて日本にもあった。但し江戸時代である。一八世紀に入った江戸時代、日本でも貨幣経済が発達し、農村の自給体制を崩していく。ゼニがなくては百姓もやっていけない時代になったのだ。そうかといって、百姓がかんたんに現金収入を得る途はない。となれば農村から逃散する以外、方法はなくなる。かくして農村社会から疎外された無宿者が江戸に流れ、浪人、博徒も増えてくる。当然、江戸の治安は悪くなる。一八世紀の日本で起こったことが、現在のブラジルで起きているのだが、そのスケールとスピードは江戸時代の日本とは比較にならぬほど大きく、速い。

実は現在のブラジルが抱える最大、かつ深刻な問題が貧民の都市流入と、それに伴って発生する諸問題なのだ。しかもこの問題はかつてのようにリオやサンパウロという大都市だけでなく、全国どこの都市でも恒常的に発生している現象なのである。いわば貧民の全国拡散と言ってよい。人口百万の都市といえば大きな都市だが、現在ブラジルには百万以上の都市が一一ある。アマゾンのベレンもマナウスも既に百万都市である。貧民の数はものすごい。

国の経済発展のカギは労働力の量ではなく、質、つまり人的資本である。人的資本の蓄積が物的資本の蓄積と共に、経済成長の重要な要因となる。残念ながらブラジルの

貧民は人的資本を形成していない。特に都市に流入したばかりの貧民は建設作業の下働き労働者としても、女中としてもすぐには使えない。文盲であることの他に、社会訓練がまったく出来ておらず、社会の仕組み、ルールが分かっていないから、組織労働としてはもちろん、家事労働さえ無理なのだ。どうやら旧支配体制が私利私欲に走り、農地解放、教育普及、生活向上というような基礎的問題を一向に解決しなかったツケが、ここへ来て一気に噴き出した感じ。ここが努力をした東南アジアと違うところである。

〝ジェイチンニョ〟は裏街道

かつてブラジルの特徴や性格を一口で言いあらわす言葉として「眠れる巨人」「未来の大国」というのがあった。なんだか清朝末期の中国が「眠れる獅子」と呼ばれたのに似ているが、今では完全な死語、こんな言葉は流行らない。

では現在、ブラジルを表現する適切な言葉は何かというと、これが「ジェイチンニョ」あるいは「ジェイチンニョ・ブラジレイロ」なのだそうだ。この言葉は日本語に訳すのが大変難しい。むろん「ジェイト」なる言葉は、手段、方法、方策、形態、様子、コツ、加減などの意味がある。しかし、どれももひとつピンとこない。訳としては「便法」、

つまり便宜的な方法の方が近いかも知れぬ。また、間に合わせ、ごまかし、その場しのぎの意味に用いられる言葉の〝ケブラガーリョ〟とニュアンスが共通する部分もある。

ブラジルでは法律や規則の制約があって、真正面から進んだのではクリア出来ない時にジェイチンニョが登場する。通常ならどうにもならぬことを、なんとか通してしまう便法である。なにも今にはじまったことではない。ポルトガル人がブラジルに入植して以来、延々と続いてきた、歴史的にも〝由緒〟あるやり方である。だから、ジェイチンニョとか、ジェイチンニョ・ブラジレイロなる言葉も古いだろうと思ったのだが、これがさにあらずで、一九五〇年以降に現れた言葉なのだ。

辞書に出てくるのは更に新しくて、一九六六年頃らしい。この頃からブラジル人の文化人類学者の中にも、社会学としてのジェイチンニョの研究をする人が出てくるのだそうだ。これは受け売りで、数年前にリオの国立フルミネンセ大学の女性学者が発表した論文にそういうことが載っている。

この論文、ある雑誌に発表されたものだが、内容自身は学者の論文だから固く、正直言って余りおもしろいものではない。ところが、見出しと三枚のイラストは雑誌社の方でつくったものらしく、ぐっとくだけた調子で、これが思わず噴き出すほどの傑作なのだ。まず、イラストから説明

しよう。

最初のは、映画館の入場券を買う客が延々長蛇の列をつくりながら、おとなしく順番を待っている。そこへ一人の男が現れ、窓口で今まさに入場券を買おうとしている最前列の男に金を差し出し「あんさん、ワテの入場券もついでに買うてもらえんやろうか」と頼んでいるイラスト。

二番目は、絞首刑になる死刑囚が、首に縄の輪をかけようとしている死刑執行人に向かって「なんとか助かるジェイチンニョはないだろうか」と話しかけているイラスト。

三番目は、一人の男が半身ずつ両側に分かれており、片方は優しい顔をして胸をはだけ、いくつもの乳房（男の乳房とはおかしいのだが、そう描いてある）から、多くの友達に乳、つまり甘い汁を吸わしているイラスト。「アミーゴにはすべてを！」のキャプション（説明）がついている。もう半身は、これと反対に恐ろしい形相をした男が「税金、手数料」と書いた紙を、人々に突きつけて怯えさせているイラスト。こっちの方には「敵には法律を！」のキャプションだ。

次に見出しだが、ブラジル語でＪｅｉｔｉｎｈｏと、踊るような大きな書体があり、続いて小さな字でＯｕａｒｔｅ ｄｅ ｓｅｒ ｍａｉｓ ｉｇｕａｌ ｑｕｅ ｏｓ ｏｕｔｒｏｓと書いてある。これも日本語訳が難しい。強いて訳せば「ジェイチンニョ、特別扱いを

求める特性」とか「ジエイチンニョ、人並みよりもっと便宜を求める手段」というようになるかと思う。

ジェイチンニョに関する論文は先にあげたものの他にもいくつかある。「ジェイトの社会学」ロベルト・デ・オリベイラ（一九六六年）、「権力の源泉としてのジェイチンニョ」クロービス・デ・アブレウ（一九八二年）、また〝The Jeito. Brasil, s Institutional Bypass of the Formal Legal System〟という英文の論文もある。（ジェイト、公式な法治システムに対するブラジルの慣例としてのバイパス）とでも訳すのだろうか。

なるほど、バイパス（脇道、迂回路）とはうまい表現で、言い得て妙である。ブラジルには本道とバイパスが平行して走っているという訳だ。本道は正式な法律によって規制されているから検問所があったり、料金を徴収されたり、スピード制限があったりでうるさい。その点、裏街道のバイパスなら取締りもほとんどないし、規則違反も目をつぶってもらえる。

ジェイチンニョ社会の特徴は表と裏の二元性にある。法の前にはすべての市民が平等で、規準化された道徳のいきわたっている社会が個人主義の確立された近代社会である。ところがブラジルの場合、市民革命があったわけでも、近代的自我が確立されたわけでもない。奴隷制を含

め、封建的な中世社会をそのまま引きずって〝擬似〟近代社会に入った国なのである。

有名無実の日本移民制限法

「ジェイチンニョ」的なやり方はブラジルに限らず、世界のどこにでもあることだ。ヨーロッパや日本のような近代社会だって、この手の便宜供与はもちろん、それ以上の贈収賄、汚職、不正はいくらでもある。しかし金持ちから貧乏人、最上層の支配者から最底辺の被支配者まで、ジェイチンニョが広く社会的に認知され、いわゆる本道に対する裏街道として、まかり通っている国はブラジル以外ないのではなかろうか。

と言えば反論が出るかも知れぬ。「ジェイチンニョは、そんな汚職とか不正という大げさなものではなく、個人ベースで行う、ちょっとした頼みごとと、それに応える人間味豊かな行為宜すぎない」と。そして、その証拠として、ジェイチンニョにおける頼みごとは通常、見知らぬ人同志でやるし、金銭の授受の伴わないものであることを強調する。また、ジェイチンニョを頼むときは礼儀正しく、丁寧な物言いをするものだとも言う。

たしかに、ジェイチンニョを肯定的にとらえると、そういう解釈も成り立つかも知れぬ。が、もともとジェイチン

ニョは自分さえ良ければ他人はどうでもよいという、権力の独占や私物化、あるいは法律無視、軽視、歪曲がまかり通った、中世の封建社会の遺物なので、法の遵守と、法の前の
平等をモットーとする近代市民社会とは異質の存在なのである。

それにしてもブラジル人は昔から法律や規則を守らない、というか守れない珍しい国民である。
これについて、S・Bオランダはおもしろいことを言っている。
「ブラジルの植民者にとっては、規制が世俗的な利益のために即座に役立つ分野以外では、それが厳しさを欠き、不安定なものであっても問題ではなかった。また、生活を非人格的な規律で律することに対する生得的な嫌悪感もこのような態度に一役買っている」（Ｒａｉｚ　ｄｏ　Ｂｒａｓｉｌ）要するに、自分に都合の悪い法律は無視して、ジェイチンニョでやっていくということなのであろうが、このおかげで日本移民が助かった例がある。

古いことだが、一九三四年七月のブラジル憲法改正で外国移民導入の規定が変わり、
「各国よりブラジルに入る移民は、最近五〇年間にブラジルに入国し、定着した人数の総数に対し、毎年その一〇〇分の二の限度を超えざるものとす」という条項が入った。

もって廻った言い方だが、五〇年間に入った移民総数の二%しか認めないということだ。

明らかにアメリカで起こった、日本移民排斥運動の影響を受けたブラジル政府が、日本移民締め出しを意図してつくった条項である。ブラジルの日本移民史上、大変な出来事だから日本移民には良く知られた歴史的事実である。これで一九三五年からの日本移民の入国枠は年間二八四九人に制限されることになった。戦前の日本移民はなやかなりし頃である。日本政府も大いに驚き、対策を講ずるが、なにしろ憲法の規定なのだからどうすることも出来ない。ところが、ここがまことに不思議なところなのだが、実際にブラジルに入国した日本移民の数は三五年九六〇〇人、三六年五六〇〇人と、いずれも制限数を大幅に上廻っているのである。

何故か。それはブラジル移民担当官の解釈で、一二才未満は員数外とか、ブラジル人の農場に入る移民は制限外とか、土地を買って入る移民は適用外とか、例外項目をどんどん増やすからなのである。更にこの憲法による移民制限法は第二次大戦後も改正されなかった。したがって、戦後再開された日本移民の受け入れにも適用されるはずなのだが、これも実際にはそうはならなかった。

ブラジル政府は、戦争で日本移民が途絶えていた期間の導入枠も認めた上で、「ブラジル政府移民機関の統制の下

に、事前に許可を受けて入国する計画移民は、この制限法の適用を受けない」との解釈を打ち出した。これで戦後の辻移民、松原移民、養蚕移民、コチア青年移民などは別枠扱いになり、呼び寄せ移民などの自由移民だけが制限法の対象になってしまった。その後、一九六〇年に日伯移住協定が結ばれてからは、制限法の規制は正式に解除されるが、とにかく、憲法第一二一条に定められた移民制限法が発効していた二六年間、ただの一度も制限法に抵触、入国を禁止された例はないのである。

日本人の感覚からすれば、憲法の規定は唯一、最高、絶対なのだが、ブラジルは融通無碍、法の規定と実際の運用は別ものらしい。法の壁が立ちはだかっていれば、便法、つまりジェイチンニョでクリアしていくというのは便利といえば便利だが、これでは「法治国家」とはとても言えない。

広く国民全般に蔓延しているジェイチンニョの風潮は、ブラジルの特性であると同時に、後進性のあらわれでもあるのだ。

信号無視は思考法の違い

現在のブラジルの国旗は、一八八九年十一月、ブラジル共和国発足を記念してつくられた旗である。世界の国旗の

中でも珍しく字の入った国旗。Ｏｒｄｅｍ ｅ Ｐｒｏｇｒｅｓｓｏ（秩序と進歩）だが、これくらいブラジルの実情とかけ離れた皮肉な標語もないものだ。まあ、反語と解釈してもよいだろうし、そうありたいと、永遠の願望を込めた言葉と考えてもよいかも知れぬ。とにかく、ブラジルの秩序のなさは有史以来なのだから、そうでも考えないと説明がつかない。

ドイツ系とか日系ブラジル人は少し違っているだろうが、旧移住者であるポルトガル人や、その下で使われたアフリカ系主体のブラジル人は、金持ちも貧乏人もおしなべて規則とか約束を守るのが苦手である。時間を守るのも駄目。ただし、これには例外があって、サッカーの開始時間とリオのカーニバルでのエスコーラ・デ・サンバの行進時間は正確である。サッカーの開始時間が遅れると、観衆が騒ぎ出して危険だし、サッカー・チームの行進は時間に遅れたり、超過したりすると減点され、得点に大きく影響するからだ。

約束が守れないのは、一つにはイスラム流の思考が基本にあるからと考えられる。イスラムの世界は現在だけが大切で、未来は〝イン・シャ・アラー〟（神の意志があれば）だから、人間が勝手に決めてはいけないのである。これはなかなか便利な解釈で、例えば寝過ごして約束の時間に間に合わなくても、寝過ごすこと自体、神の意志ということ

になる。ノルデステやアマゾン出身のブラジル人がよく使う〝シ・デウス・キゼール〟（神が望むならば）も、まったく同じ思考法である。

ブラジル人の計画性のなさは良く知られている。前もって詳細な計画を立て、それを系統立てて物事を進めていくということが本質的に出来ない。計画は未来のことであり、未来は神の領域で、人間のかかわることではないのかも知れぬ。もちろん、そんなことばかり言っていたら、この現代では何も出来なくなってしまうから、現実には適当に合わせてはいるが、基本的な行動原理がそうなのだから、先進国と比較するとひどく見劣りしてしまう。

ブラジルにはじめて来た日本人はブラジル人のマナーの悪さ、とりわけ交通規則を守らないのにはびっくりする。信号無視はあたり前、一方交通でも突っ込んでくる、違法駐車は平気、窓からゴミは投げ捨てるで、なんでもありの無法ぶり、他人の迷惑などは一切顧慮しない。後進国のあらわれと言ってしまえば、そうには違いないのだが、思考法が異なるのだ。

例えば、日本では赤信号で道路を横断する人はいない。「赤信号、皆で渡れば怖くない」などとの言葉もあるが、この言葉のウラには、赤信号では渡ってはいけない、との強い認識がある。日本の赤信号は法律並みの拘束性を持っているのだ。この認識がブラジル人にはない。たしかに、リ

オやサンパウロ市の目抜き通りで、赤信号を無視する人は余りいない。だが、それは車の往来が激しく、物理的に横断が出来ないからであって、赤信号だから渡らないわけではない。ブラジル人にとっては、信号は一つの目安にすぎない。したがって、赤信号でも車がちょっと途切れると、さっさと渡ってしまうのである。

もうかなり前のことだが、日本の進出企業がサンパウロ市に歩道橋を寄贈したことがあった。交通の激しいジョン・メンデス広場の交通安全にお役に立ちたいとの好意と善意からである。市側も好意はよく分かるし、断る理由もないので率直に受け、立派な歩道橋が出来た。結果はどうだったか。開店休業、歩道橋の利用者はほとんどいなかった。

折れ曲がった歩道橋を渡れば二分か三分はかかるが、危険を承知で車をぬって渡れば、一〇秒もかからずに横断できる。ブラジル人はこちらを選択するのだ。使われない歩道橋は邪魔なだけ、何年か後、歩道橋は撤去されてしまった。

以上は都会の例だが、地方もひどい。特に悪いのはやはりノルデステで、幹線道路を走っていても、何が路上に飛び出すか分からないので、危なくて仕方がない。牛、馬、ロバ、山羊、豚、犬、アヒル、ホロホロ鳥、鶏など、あらゆる家畜、家禽が出てくるし、人間も多い。馬やロバに

乗った人間、自転車の人間、徒歩の人間がいるが、車など無視しているから始末が悪い。それに、ノルデステの舗装道路沿線の小農家はどういうわけか道路をモミ(籾)の乾燥場と心得て、道路にモミをひろげる習慣がある。さすがに幹線道路の車道は危ないから、車道脇の駐車帯にひろげるが、支線なら車道にひろげてしまう。車にモミを踏ませ、乾燥と脱穀を路上で一度にやってしまおうというのだから恐れ入る。

儒教思想は成功の要因

ブラジルのように天然資源が豊富で、土地も広く、一見無限の可能性を秘めているように見える国をかつては「未来の大国」と言った。ところがブラジルは、何年、何十年たっても大国になるどころか、他の先進国とはますます引き離されているのが現状で、「永遠の未来の大国」的様相を呈している。

一年ぐらい前の日本の新聞に、今後経済が伸びる地域や有望な投資先のアンケートが載っていたが、すべての企業家が共通してアジアと答えていたのには驚いた。ブラジルをはじめとする中南米はもちろんのこと、カナダやオーストラリアのように、資源が豊かで国が広く、しかもその割りに人口が少ない国は入っていないのだ。一昔前までとは

えらい違いである。従来のイメージからすると、アジア、特に東南アジアなどは国が狭く、人口ばかりが多い貧困地帯のはずなのだが……。

しかし、解説によると、これからの情報化社会では、高学歴の人間が集中して、絶えず世界の情報を集め検討することが必須条件となる。市場や商品をつくり出すのは人間の頭脳である。その点から見ると、高学歴化が進むアジアがこの条件にもっとも叶っている、ということらしい。いくら資源があっても資源の豊かさに頼っている限り、人間のレベルアップがなく、全体としての発展はないのだそうだ。ブラジルにはなかなか耳の痛い論である。

もう一つ、アジアが成長する理由として、儒教の影響を指摘する論が最近多くなってきている。

日本をはじめ、韓国、台湾、香港、シンガポールのＮＩＥＳ（新興工業経済群）諸国、それに必ずしも儒教の影響が強いとは言えないが、タイ、フィリピン、インドネシア、ブルネイのアセアン（東南アジア諸国連合）諸国も順調に伸びている。

日本やＮＩＥＳの経済成長で、儒教文化圏が注目されているわけだが、その経済発展をもたらしたものは、勤勉、教育熱心という儒教の特性だと言われている。また、キリスト教、仏教は、神や仏の前での平等を説くが、儒教は平

等ではなく、公平を説く。つまり、自分の能力や力量にふさわしい義務、役割を果たすことだ。儒教文化圏の国々が経済発展をなし得たのは、その根本に公平を説く儒教の思想があって、働く態度や人の評価などに反映し、勤勉さや努力を引き出し、集団性、協調性を最大に活かすからなのだそうだ。

ブラジルではなかなか受入れにくい思想だ。特別に意識したわけではないが、この方式を取り入れて成功したのが、コチア産業組合やスールブラジル農業共同組合中央会などの日系産業組合である。日本の農協のような共同組合がいつ法制化されたのかは知らぬ。が、オリジンが江戸時代に発達した「講」であることは間違いあるまい。現代でも民間に根強く浸透しており、ブラジル日系社会にも一般的に見られる「頼母子講」もその仲間だし、沖縄には古くから「模合い」という、講の形の相互扶助システムがある。韓国の「契」中国の「結」も同じこと。

「頼母子」の言葉でわかるように、講の本質は人間と人間の信頼が基本になっている。講は互助組織であり、加入者が出し合った金を毎月誰かが低利で借りるシステムである。貸した金が回収不能になっては講は成立しない。そこで江戸末期の財政立て直しの大家、二宮尊徳（金次郎）は、講に厳しい倫理的なワクをはめた。尊徳の講を「五常講」と言う。五常は儒教の仁、義、礼、智、信の五つの徳であ

る。この五常の実践によって、人間の道義と信頼を基本とし、しかも相互に規制して連帯責任を負う「講」をつくったのである。

現代流に言えば信用組合だろう。

日系の産業組合が、日系人小農の互助組織として発生したことは歴史の示す通りである。日系組合の果たした役割は、従来とかく経済面だけが重視されたが、実は擬制的な「ムラ社会」の役割りの方が比重が大きい。ムラ社会といえば、戦前は日系社会全体がムラ的構造を持っていた。しかし、組合の場合は、もっと直接的に日々の生活に直結しており、一種の運命共同体だったのである。組合員には「家」「血縁」意識からくる集団性が強かった。当然のことながら「和」が重視され、協調的な人間関係が確立されていく。中心にあるのはもちろん、儒教の五常の徳目である。

ブラジルでは儒教の精神を取り入れた組織はつくりがたい。ブラジルにもコンソルシオという、一種の講は存在する。しかし、信と義とかの観念が薄いから、周囲の情勢が変化すれば、それを理由に約束を履行しないことがしばしば生ずる。組織や集団の成員として行動することは、ブラジル人が本質的に苦手とするところなのだ。

条件良かったポルトガル

ブラジルは良かれ、悪しかれポルトガル文化の強い影響を受けている。他に、アフリカやインジオの文化、それに近世は外国移民の文化も入るから、かなり変化してはいるが、それでもブラジルの基層文化がポルトガル文化であることは疑いもない事実である。

すべての出来事は歴史の産物である、というテーゼからすると、現在のブラジルの混乱も歴史にその原因がなければならぬ。とすれば、ブラジルが発見された大航海時代のポルトガルの活躍を展望してみる必要がありそうである。そしてどうやら、この辺にもブラジルを解く鍵の一つが隠されているようなのだ。とにかく歴史を振り返ってみよう。

スペイン、ポルトガルという国は、甚だ失礼な言い方だが、ヨーロッパの一流国ではない。スペインはオリンピックの開催地にもなったし、最近、経済発展も著しいが、やはりまだ、ヨーロッパ周辺の二流国との印象は免れない。これは中世時代からそうだった。

その、どちらかといえば後進国のイベリア二国が、他のヨーロッパ諸国に先駆けて大航海時代の主役になったのはどうしてだったのだろうか。特に小国ポルトガルが先陣を切って華々しい活躍をした理由なり原因は何だったのだろ

うか。まあこれは、一口に言ってしまえば、ポルトガルの置かれた条件が良かったのである。

イベリア半島は八世紀からイスラムの侵入を受け、サラセンの支配下に入る。これからキリスト教徒の長い、苦難に満ちたレコンキスタ（失地回復）運動がはじまる。最終的に、スペインのカスティーリャ王国が、グラナダのイスラム軍を破ってレコンキスタを完成させるのは一四九二年、コロンブスがアメリカ大陸を発見した年だが、ポルトガルはそれより二四〇年も早く、既に一二五〇年には国内のイスラム勢力を一掃している。

つまり、国内の統一がスペインよりはるかに早かったのだ。ポルトガルの大航海時代への序幕は一四八一年、エンリッケ航海王子の活躍からはじまるが、この時代、ヨーロッパの他の国は戦争に明け暮れていたのである。イギリスとフランスは百年戦争をやるし、イギリスの国内ではバラ戦争の内紛もあった。東ヨーロッパは蒙古軍に席捲されたし、北・中部イタリアにはドイツ皇帝が居座るなど、国際紛争は絶えなかった。またその後遺症も大きかったのである。更に、ポルトガルはもともと海洋国で、海上活動が得意だった上、一四世紀の半ばにはベネチァ、ジェノバからドイツ、イギリス、フランスに向う航路の中継点という地の利を占めていた。

エンリッケ航海王子の存在も大きかった。セウタ攻略で

勇名を馳せたエンリッケは、サグレス岬に居を構え、航海経験者を集めて、組織的に大西洋やアフリカ沿岸の探検を進めた。生涯不犯で独身だったエンリッケ親王は、自分自身が航海に出ることはなかったが、彼の派遣した探検隊は、マディラ島、アソーレス諸島、ベルデ岬、その他アフリカ沿岸を次々に発見して成果をあげる。一四一八年から、エンリッケ親王の亡くなる一四六〇年までのポルトガル航海熱はすばらしく、この時代に次の大航海時代への下準備がすべて整う。

エンリッケがこれだけ活躍できたのは、この頃ポルトガル王室には財政的余裕があったからである。財源はかってのテンプル騎士団の持っていた豊富な資金だ。テンプル騎士団は十字軍時代につくられた騎士団で、エルサレムにおけるソロモン宮殿の警護が任務だったが、他に軍資金調達の任にも当たっていた。この騎士団は、イスラムとの戦いで回復した土地を恩賞として貰ったから、大地主であり、大金持ちだった。詳しいことは省略するが、この莫大な財産を持つテンプル騎士団を継承したのが、一三一九年につくられたキリスト騎士団で、一四一五年以降はドン・ジョン一世の親王であるエンリッケが団長となる。

私利、私欲を持たず、地理、航海の研究と宗教的情熱に燃えたエンリッケの手に莫大な資産の管理、運用権のあったことは、ポルトガルにとって幸運これに過ぎるものはな

かった。エンリッケ親王を中心とするポルトガルの探検隊は、地中海を経由せずにインドに到達するという、極めて具体的、現実的な目的を持っていた。特に一四五三年、新興のオスマン・トルコによって東ローマ帝国が滅ぼされ、地中海の交通が難しくなってからは、その目的は一層切実で、明確そのものになってくる。そして、一四八六年、バルトロメ・ディアスが希望峰を廻ってインドに行く可能性を開いたことは、まさに画期的な出来事だった。インド航路の発見は一四八九年、ヴァスコ・ダ・ガマによって行われるが、これは世紀の大発見だった。

放置されていたブラジル

一八二二年、ブラジルが独立するまで、ポルトガルにとってブラジルは最大の海外植民地であった。しかし、面積的に最大の植民地だったということと、本国のために一番重要な植民地だったということとは違う。ここのところを多くのブラジル人はカン違いをしている。たしかに一八〇八年にはナポレオンに追われたポルトガルのドン・ジョン六世が、ブラジルに王室政府を移したくらいだから、後半はポルトガルにとってもっとも重要な植民地となったことは間違いない。だが、ブラジルが本格的に注目されるようになったのは一七世紀の終わりから一八世紀の半ばに

かけて起こった、内陸部の金（キン）ブームからであり、それ以前はポルトガルにとってそう魅力ある土地ではなかった。

一五〇〇年、カブラルによって発見されてから三〇年間、ブラジルはほとんど放置された状態だった。一四九八年、ヴァスコ・ダ・ガマによって発見されたインド航路による東方貿易が忙しかったのである。なにしろインドやモルッカ諸島からの香料、絹、茶、象牙、宝石などの貿易で、莫大な富がポルトガルに入ってくるのである。とてもブラジル経営に手を出すほどの余裕も人手もなかった。

ポルトガルは一五〇三年、インド東岸のカレク（カリカット）を占領、インド副王となったアルメイダがアラブ勢力を一掃する（一五〇九年）。ついでアルブケルケがインドのゴアを占領（一五一〇年）、マラッカ、モルッカ諸島を傘下に収め（一五一一年）香料貿易を独占する。一五一七年には広東でシナ貿易を開始、一五四三年、種子島到着、一五四九年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に着く。一五七〇年、長崎開港。

年表風に書けば以上のようになるわけだが、ともかくインド航路が発見されてから、一五二七年までの三〇年間に、ポルトガルからインドをはじめとする南アジアに向かった船は合計三二〇隻、船で渡った人間は船員を含め八

万人、このうちポルトガルに戻ったのは八〇〇〇人しかいなかった。

当時のポルトガルの最大の弱点というか、泣き所は人間がいないことだ。ポルトガル本国は一〇〇万人そこそこの人口しかないのだ。ポルトガルの海外進出は、最初からこの問題が付き纏っていた。一五〇六年に、トリスタン・デ・クーニャの艦隊をインドに派遣した時は、刑務所の囚人を釈放して船員にした。また、「ウス・ルジアダス」の著者カンモエスは、宮廷の職員に傷を負わせ、刑務所入りしていたが、一五五三年、インド行きを志望して釈放されている。

放置していたブラジルには一五二六年頃からフランスが入り、パウ・ブラジルの伐採、密輸を開始する。放っておくわけにもいかないので、ポルトガルはマルチン・アフォンソ・ダ・ソウザに一〇〇〇人の植民者をつけ、一五三〇年、ブラジルでカピタニア制を採用する。一〇〇〇人の植民者は、ポルトガルがブラジルに送れる人数のリミットで、これも相当に無理をして各地から人間を集めねばならなかった。未知のブラジルなど誰も行きたがらないのである。

今でこそ、ブラジルを発見したカブラルの名は有名で、各地に銅像が建てられている。サンパウロ市のイビラプエーラ公園内の池の畔にもある。象徴的な帆船を背後に

し、カブラルが両手を上げてブラジル発見を神に感謝している像である。数年前につくられた新しい作品だが、なかなかセンスは良い。しかし、実際のカブラルは、自分が発見したのは島だと思っていたから、この土地を〝サンタ・クルースの土地〟と名づけ、僅か一一日滞在しただけでインドのゴアに向かう。カブラルはインドでしこたま香料を仕入れてポルトガルに帰り、ポルトガルに富みをもたらしたことで有名になる。カブラルは一五二〇年、五二才で割合早く亡くなるから、自分の発見したブラジルの価値は遂に知らずじまいで終わった。それでもカブラルの場合は、ブラジル発見の栄誉が自分のものになったからまだ良い。実はブラジルを発見したのは、スペイン人のビセンチ・ヤネス・ピンゾンの方が早く、カブラルに先立つこと三カ月の一五〇〇年一月二六日にブラジル東北海岸を発見している。場所については学者の間で諸説があるが、ブラジルを発見したことでは一致している。

ただピンゾンは上陸しなかった。一四九四年のトリデシリヤス条約で、この土地がポルトガル領になることを知っていたのだ。ピンゾンはコロンブス第一回航海時のニナン号の船長で、優れた船乗りだったが、余り運には恵まれていなかった。

現在、ブラジルと仏領ギアナとの境界の河をブラジルではオイアポッケ河と言うが、ギアナ側では「ビセンテ・ピ

ンゾン河」と言う。

機を見るに敏のオランダ

大航海時代に華々しく世界に乗り出し、世界の植民地を二分して独占したスペインとポルトガルは、その後一〇〇年を経ずしてフランス、オランダ、イギリスの新興勢力に追いつかれ、追い越され、遂にはヨーロッパの二流国に没落する。

この原因はいろいろあるが、かんたんに言えば、スペイン、ポルトガルの王室は絶対主義という、中世の古い理念しか持っておらず、近代化された国家に対抗出来なかったからである。言い換えれば、頑固で、中世的で、宗教的に不寛容で、自己の権力だけを過信するハプスブルグ家の古い体質がもたらした当然の結果なのである。

スペインは一五六〇年、ハプスブルグ家の嫡流フィリッペ二世の時代に、ポルトガルを併合する。

このフィリッペ二世という王様は、史上まれに見る強運の持主で、最強、最大のスペイン国王だった。なにしろ、現在のオランダであるネーデルランドとイタリアの一部を含む領土を領有していたし、ポルトガル王も兼任していた。レバントの海戦でトルコを破って、地中海を勢力範囲にもしたし、新大陸の植民地からは銀が発見され、大量の

銀が流入して財政的にも豊かという幸運が続いたのである。時あたかも宗教改革直後の混乱時代で、キリスト教は新、旧二つに分かれ抗争を続けていた。

フィリッペはスペインの王権強化のため、カトリックによる世界布教を意図し、プロテスタントと激しく対立する。対立することによって、自国の団結を固めようとの狙いもあった。長い、イスラムとの抗争で培われたスペイン、ポルトガル王室の、カトリックに対する宗教的情熱は大したものだった。新大陸やアジアへの進出も、カトリックの布教が一つの目的であったことは、数多くの宣教師の派遣でも明らかである。だが、スペイン、ポルトガルの王室は、カトリックを絶対視するあまり、思想的にはますます閉鎖的、封建的になり、時代の動きに逆行してしまった。

ルターやカルビンの宗教改革運動は、単なるカトリックからの離脱だけではなく、新しい、民族的、階級的、政治的自由と独立の理念にもつながっている。むろん、すぐに近代思想と結びついたわけではないが、少なくとも近代思想の萌芽であることはたしかだ。

また、スペインやポルトガルの王室は、カトリックの絶対性を信ずるあまり、宗教というものが、世界を取り巻く種々の政治的、経済的要因の中で、それほど重要なものではなくなっていく、時代の推移に気がつかなかった。その

ため、スペイン、ポルトガルの植民、貿易政策は、宗教と抱き合わせで、まず宣教師による布教からはじめるワンパターンの政策をいつまでも続けていた。

その点、遅れて世界貿易に乗り出したイギリス、オランダ、フランスは機を見るに敏で、宗教を前面に押し立てる政策はとらなかった。日本では主としてポルトガルが交易をしていたが、次第にキリシタンが秀吉や徳川幕府の忌諱に触れるようになり、キリシタン禁令が出される。最終的には一五三三年から三九年まで、五度にわたる鎖国令が出て、スペインもポルトガルも閉め出されるが、

後発のオランダだけは、宗教と経済の分離をはかって生き残り、対日貿易の独占権を獲得する。オランダとイギリスは一六二〇年、平戸駐在の商館員に「スペイン、ポルトガルの侵略的植民政策とカトリック伝達の不可分な関係」を詳細に記した上申書を作成させ、これを幕府に提出させている。

自分たちだって同じキリスト教なのだが、そういうことは口を拭って一切言わない。ずるいと言えばずるいが、イギリス、オランダの方は世界の動き、推移を敏感に察知し、冷静な理性で対応しているのだ。

スペイン、ポルトガルの後進性を示すものはまだある。両国は王室そのものが大商人なのである。

そのため、国の利益より王室、つまりハプスブルグ家の

利益を重視した。アジアの香料貿易もポルトガル王室の独占、ブラジルのパウ・ブラジル材もキン（金）も木材も王室の独占事業なのだ。いかに規模が大きくても、商人でしかない王室は、植民地は収奪の土地と考えていたから、徹底的な搾取だけを行った。

スペイン、ポルトガルの王室は、商人としても古い体質の持主で、合理化された商取引ではなく、前資本主義的な詐欺と掠奪で、植民地に投資して開発するなどとの考えは毛頭なかった。カトリックという、宗教的動機は初期においてはかなりあったが、次第に現実的利益の前に退潮していく。

この傾向はブラジルで顕著で、一八世紀半ば、イエズス会が解散、追放されてからは教会は無力になる。

新大陸の原住民は文化の程度が低く、宣教師たちも日本や中国におけるような、宗教的情熱を傾注できなかったことも理由の一つであった。

世界に分布の日本人奴隷

大航海時代と、それに続く植民地進出時代のポルトガルの泣きどころが、人口の少なさにあることは前に触れた。少ない人間でいかに海外の植民地を維持し、収奪するかは

ポルトガル王室の直面する歴史的命題だった。そのため、囚人だろうが捕虜だろうが、どんどん海外に送った。ところが送った人間のほとんどすべては男だったから、たちまち現地女性との雑婚がはじまり、混血が増えてくる。ポルトガル人が特別に好色だったわけではない。他に方法がなかっただけのことである。

ブラジルのハンデランテスたちの「インジオ狩り」が「女狩り」を兼ねていたことは良く知られている。

海外進出に武力はつきものだが、ポルトガルは兵隊の数も足りなかった。そのため、現地では傭兵を募集した。アジア各地では日本人の傭兵が多かった。日本人は勇猛果敢で強かったから、傭兵には最適だったのである。また、ポルトガル人の特徴に現地適応化の能力がある食べ物をはじめ、すべての生活様式を現地式にして、すぐ慣れるということだが、これも必要に迫られてのことだろう。だいいち、海外のポルトガル人は、配偶者のほとんどが現地女性なのだから、生活様式が現地式になるのはあたり前なのだ。

人口過少に悩むポルトガルは、一二五〇年にイスラム勢力を駆逐して、国家統一を成し遂げても多くのムーア人を奴隷として国内に残した。ついでエンリッケ親王時代にアフリカからかなりの黒人が輸入され、肉体労働に従事する。大航海時代、ポルトガル人についてきた黒人は、既に

ポルトガルにいた黒人なのである。

奴隷制度は日本人には感覚としてわからぬところがある。日本にも古代社会においては、奴稗と称する奴隷が存在した。法令制度に定められた賤民である。しかし、一〇世紀頃になくなり、以後制度的には奴隷という身分は出てこない。むろん、人買いはいつの世にもあった。一五五〇年から一六〇〇年までの一五年間、戦火に追われた多くの難民、貧民がポルトガル人に奴隷として買われ、海外に運ばれていった。数について、日本側の記録がないのでわからぬが、ポルトガルにはいろいろな記録が断片的に残されている。以下は外交官でラテン・アメリカ協会理事長も勤めた故井沢実氏の「大航海夜話」に記載されていること。

「インドのノーバ・ゴア発行の『東洋ポルトガル古記録』の中に日本人奴隷関係で、まだ訳されていない重要文書が含まれている。ゴアにはポルトガル人の数よりも日本人奴隷の方がより多いなどということはショッキングである」

日本人奴隷は男よりも女が好まれた。行先はゴアを中心とする東南アジアだが、ポルトガル本国にも相当数が入っている。日本に駐在しているポルトガル人宣教師は、ポルトガル商人の日本人奴隷の買いつけをひどく嫌い、本国に取締方を要請する。このため、一五七一年には童貞王ドン・セバスチョンによる禁止令も出されるが、一向に効き目はなかった。なにしろ儲かるのだ。

この現象を嘆いて、ポルトガルの碩学、アントニオ・ビェイラはこう言っている。

「法律というものはあっても、違反者は絶えないものである。例えば日本人を奴隷にすることを禁止する法律が制定されているにも拘らず、ポルトガル国内には多数の日本人奴隷の存在する事実によって、これを証することが出来る」どうやら、法律を守らないブラジル人の原型はポルトガル社会にあるのかも知れない。

日本人奴隷は遠くメキシコやアルゼンチンにも売られている。これも井沢氏の著書に出ているがアルゼンチンのコルドバ市の歴史古文書館には、日本人奴隷を売買した公正証書が残されている。アルゼンチンには数は不明だが、日本人奴隷がかなり入っているらしく、田尻鉄也氏もそういう記録を見つけている。

日本人奴隷についての数は記録にないものの、推測する手がかりはある。ポルトガルの貿易船はシナの生糸を積んで日本に入り、銀を持ち帰るのを常とした。銀を船倉一杯持って帰るわけはないから、帰りの船倉はガラ空きになる。ここへ奴隷を入れるのだ。

秀吉の側近だった大村由己（ゆうこ）は「日本人男女数百名の多数を黒船に買取り、手足に鎖をつけて舟底に追い込み、地獄の責苦をあたえ……」と憤慨して書いているから、一船当たり、二〇〇名位は積んだらしい。

南蛮船の来航は季節風の関係で、一年に一度しか来れない。南蛮船は五〇年間に約一〇〇隻ぐらい入ったと推定されている。全部が全部、奴隷を積んで帰ったわけでもあるまいが、その他にシナのジャンクも入港して奴隷を積んでいるから、やはり二万人ぐらい出たと考えてよさそうだ。

日本人に驚嘆した宣教師

イエズス会のフランシスコ・ザビエルが、ヤジロウの案内で、コスモ・デ・トーレス、ガスバル・ビエラの二人の宣教師を従えて鹿児島に到着したのは一五四九年の八月である。同じ年、ブラジルに総督府制がしかれ、初代総督としてトメ・デ・ソウザが赴任しているが、この時、ブラジル初代の教区長として同行したのが、イエズス会士マノエル・ダ・ノブレガである。つまり、日本とブラジルは、カトリックの布教ということでは、同時に出発したということになる。とはいえ、イエズス会の布教にかける情熱、使命感ということでは、圧倒的に日本に比重がかかっていた。大航海時代の海外進出は、貿易と布教がセットになっているのだが、貿易でも布教でも、未開のブラジルと日本とでは比較にならなかった。

ポルトガルと日本の交易は、中国のマカオに拠点を築いたポルトガルが中国の生糸や絹織物を日本に運び、代価と

して銀を受け取る仲介貿易だった。日本からの商品は、奴隷以外はほとんどなかったらしい。日本の銀は品質が良かったし、この当時は競争相手もいなかったから、仲介貿易でのポルトガルの儲けは大きかった。その利益はイエズス会にも廻り、宣教師達は潤沢な資金で宣教活動に乗り出すことが出来た。

日本と中国が直接交易出来なかったのは、一六世紀の前半、いわゆる「後期倭冠」と呼ばれる日本の密貿易船の活動が激しくなり、明が日本に対する厳重な海禁政策をとっていたためである。

フランシスコ・ザビエルは教科書などにはスペイン人と記されている。たしかに現在の国でいえばスペインになるのだが、実はザビエルはフランスに近いナバラ国出身のバスク人なのである。しかも、バスク地方のザビエル城主の子として生まれているから、この地方では名門の貴族なのだ。

これはイエズス会創立の中心人物、イグナシオ・ロヨラも同じことである。ロヨラもバスクの貴族で、ザビエルより一五才年長の大先輩、しかも、パリのソルボンヌ大学でもザビエルの先輩という間柄だった。

一五三四年、ロヨラ、ザビエルら七人の同志がイエズス会を創設、一五四〇年には法王の正式な認可を受ける。イエズス会は堕落したカトリックを救済、再建するのが目的

だから、倫理感が非常に強く、純正キリスト教を説き、清貧、貞操、法王への絶対服従を誓い、世界の異端者と戦おうという軍隊組織の強烈な宗教団体だった。また、布教の対象をヨーロッパ以外の世界においたところも他の会派とは違っている。行動派のザビエルは一五四二年、インドのゴアに赴任するが、立場はもちろん、イエズス会アジア地区の最高責任者である。一五四九年、日本を訪れたザビエルは、優れた日本文化と日本人の資質の高さに驚嘆して、「この国の国民は、これまで自分が接したどの国の住民よりも優れており、日本人に比肩出来る異教徒は他にはいない」という意味の手紙を送っている。こうした驚きは、程度の差こそあれ、すべての宣教師が感じたところで、オルガンチーノなどは「我らヨーロッパ人より彼ら日本人の方が優れている」と絶賛しているほど。

ただし、中にはフランシスコ・カブラルのような日本人嫌いもいたし、「日本覚書」など、多くの著書を書いたルイス・フロイスのように、日本の僧侶を徹底的に非難、攻撃するものもいた。いったいに宣教師は僧侶をこきおろしているが、これは立場上むしろ当然かも知れない。

信長の面前で行われたフロイスと日蓮宗の僧、朝山日乗の論争は有名だが、キリシタンたちは日蓮宗や一向宗より学問的、論理的な禅宗の方を主たる論敵と見ていたようで

ある。

とにかく、こうした文化程度の高い日本で、異教徒を教化してキリスト教の世界を築いていくことに、宣教師たちはほとんど法悦に近い喜びと情熱、それに闘志を燃やしていた。イエズス会も若く、純粋で、理想的に燃えていたのだ。

そこへいくと、南米の原住民であるインジオは相対的に未開であり、派遣された宣教師は、さっぱり張り合いがなかった。だからインジオに対しては強圧的な一方的命令の態度で臨んだ。ブラジルにはなかったが、スペイン領には教化部落がつくられた。部落の建物は教会と教会前の大広場を中心に、インジオの住宅が左右対称に、いささかの狂いもなく整然とつくられた。規律と道徳が重視され、厳格に守られた。ある部落では夜半一二時の鐘を合図に、住民のインジオは起きて夫婦の交わりをすべしと定めたところもあった。

こうしたラテン・アメリカの布教と比べると、追放を余儀なくされたとはいえ、一世紀におよぶキリシタン文化（南蛮文化）が日本文化に与えた影響は極めて大きい。

明暗さまざまスペインとの合併

ポルトガルは一五八〇年、スペインのフィリッペ二世によって併合され、一六四〇年、再独立してブラガンサ王朝が成立するまでの六〇年間、スペインの支配下に置かれた。支配下といっても、国王が同一人物というだけで、ポルトガルの独自性は一応尊重され、行政、軍事、司法、教会もポルトガル独自のものがそのまま認められていた。

六〇年間の併合時代は、ポルトガルにとっては屈辱の歴史であり、自尊心や名誉を大いに傷つけられた時代であったことは間違いない。しかし、そういう感情の問題はさておいて、併合がポルトガルにとってどういう結果をもたらしたかということは興味がある。つまり、併合のプラス面とマイナス面は何かということだ。

プラス面は、新大陸におけるポルトガルの植民地、ブラジルの領土がとてつもない大きさに拡大したことである。この時代、ブラジルは生命知らずの冒険家、サンパウロ出身のバンデランテスたちが活躍した時代で、インジオ狩りと金やダイヤ探しを目的に、奥地へ奥地へと足を伸ばしていた。

一四九四年にローマ法王が裁定したトルデシリャス条約によって、現在のブラジル領土の七〇％は本来ならスペイン領のはずなのだが、バンデランテスはそういう制約をまったく無視して奥地へ入り込んだ。バンデランテスの動きはスペイン側も承知していた。しかし、あえて咎めだて

はしなかった。なにしろ国王が同じなのだから文句がつけられない。あるいは、そのうちポルトガルは完全に合併されると予測していたのかも知れない。とにかくスペインが手出しをしなかったおかげで、ブラジル領土は飛躍的に拡大し、一七五〇年、南米の国境を定めたマドリッド条約では、一部を除いてほぼ現在のブラジルがポルトガル領と認められた。未知の土地の領有権は早いもの勝ちで、最初に足跡を印した方に権利があるのだ。ポルトガルや後に独立するブラジルにとって、これにすぎる幸運はなかったと言ってよいだろう。

数多くのバンデランテスの中で、特に貢献したのは、アントニオ・ラポーゾ・タバーレスで、インジオ狩りで勇名を馳せ、グワラニー族から〝悪魔の化身〟と怖れられた人物。

タバーレスはパラグワイ河を遡り、パレシス山脈を越えてアマゾン水系に入り、グワボレー、マモレー、マディラ河を経てアマゾン本流に出て、河口のパラーに抜けた。パラーからは海路サンビセンテに帰っている。一六四八年から五一年にかけて行った大冒険旅行である。この大遠征が後の国境設定で、ポルトガル側に断然有利に評価されたのだから、ラポーゾ・タバーレスはブラジルのまさに大恩人である。

一方、極東の日本においては、イベリア二国の併合な

ど、既得権のあるポルトガルにとって、迷惑以外の何ものでもなかった。長らく独占していた日本との交易に、スペインが参入するのを止めることが出来ないのだ。それにスペインが後援したフランシスコ会の宣教師は、ポルトガルの後援したイエズス会と違って、日本での経験もなく、日本に対する認識も甘かった。

一五八二年、信長に代わって天下をとった豊臣秀吉は、最初はそうでもなかったが、一五八七年、突然バテレン追放令を発し、はっきりとキリシタン禁教を打ち出す。貿易は大いに奨励するが、キリスト教の布教活動は絶対に認めないという、貿易と宗教の分離でこの基本方針は後の徳川幕府にも引き継がれる。禁教令後のイエズス会士は国外に出たり、キリシタン大名に匿われたりして、ひっそりと地下活動に入ったりする。ところが事情のわからない、フランシスコ会士はスペイン船でマニラから使節と称してやってきては日本に留まり、半ば公然と伝導活動を行い、秀吉の怒りを買う。

一五九六年、秀吉は漂着したスペイン船の水先案内人が喋った失言を契機に、日本にいた六名のフランシスコ会士と二〇名の日本人イエズス会士、信者をとらえ、長崎に運んで処刑する。世に言う「二六聖人殉教」である。

スペイン、ポルトガルの海外進出は、経済活動と同時にカトリックの布教が目的で、宗経の分離が出来ない。日本

のように禁教処分を受け、厳しく弾圧されると、貿易活動も弱体化せざるを得ない。一六三九年のポルトガル船の追放と鎖国の完成で一世紀近く続いたキリシタン時代は終わる。

日本におけるイベリア勢力の没落は、宗教的迫害も原因の一つだが、むろんそれだけではない。両国の中世的な古い体制が、時代の変化に対応出来なかったことが根本。

皮肉なことに、ポルトガルは日本から追放された翌年の一六四〇年、長年にわたるスペインの桎梏を逃れ、再独立をする。スペインの存在はポルトガルにとって、明暗さまざまだった。

多民族国家で共通の米、伯

ブラジルの形成が、旧宗主国のポルトガルと深くかかわっている以上、ポルトガルの歴史や文化を展望するのは当然である。しかし、ブラジルはポルトガル人だけで形成されたわけではない。もともと土着のインジオはいたのだし、アフリカから連れてこられた黒人も大きな部分を占めている。

また一九世紀後半からは、世界各国の移民を受け入れている。つまり、ブラジルを構成しているブラジル人は、人

種的、民族的に大変複雑かつ多様なのである。

移民してきたエスニック・グループ（民族集団）は、最初のうちこそ同じエスニック同志のコミュニティを維持しているが、時間が経って何代かが経過すると、民族集団の境界は次第にあいまいになってくる。

その一番の原因は、各民族グループ間のインターマリッジ（雑婚）が進むからで、こうなると国の民族構成は、多様性を通り越して、混沌の様相を呈してくる。今のところ、日系社会はまだまだエスニックの特徴を強く残しているものの、他民族との結婚は着実に増加しており、将来どうなるかの予測はつかない。人種的、民族的に、これだけ多様に富む国は、世界でもアメリカとブラジルだけである。といえば、新大陸の旧植民地はみなそうではないかとの反論が出るかも知れぬ。が、それは違う。ラテンアメリカの他の国は、インジオが圧倒的に多い国、黒人が多数を占める国、白人の数的優位が確立している国、変わったところではインド系が住民の半分を占めている国というように、かなりはっきりした人種的、民族的特徴を持っている。

例えば、アルゼンチンは、受け入れた外国移民の数からいえば、ブラジルよりはるかに多い七〇〇万人が入っている。ところがアルゼンチンは、イタリア、スペインからの移住だけで九〇％以上となり、他の国からはごく僅かなの

だ。おまけにインジオもごく少なく、黒人に至ってはほとんどいない。だからアルゼンチンは、隣のチリと共に多様性よりも均質性が目立つ国なのだ。

そこへいくと、ブラジルとアメリカは万華鏡のような華やかさである。昔の統計に一八八四年から一九三九年までの四五年間に、ブラジルが受け入れた送出国別の一覧表があるのだが、数えたらなんと五三カ国あった。これに第二次大戦後に入った日本を除くアジアの国を加えると、優に六〇カ国を超すに違いない。インジオもいるし、国籍のないジプシーまでブラジルに入国している。

まあ、しかし、人種や民族の多様性ということでは、正直言ってアメリカの方がすごい。なにしろ受け入れた移民の数がケタ違いに多いのだ。ブラジルは今日まで、五〇〇万人の外国移民を入れたが、アメリカはその一〇倍の五〇〇〇万人が入り、しかも現在でも非合法を含めると、年間一〇〇〇万人の移民が入っているから、まさにケタが違う。

移民の出自は最初はイギリス、ドイツなど、北西ヨーロッパが主体だったが、次第にヨーロッパ全体にひろがる。移民出身国の数としてはブラジルの場合と変わりないが、一国当たりの数が多い。

アメリカも国内に土着のインデァンを抱えており、アラスカ合併後はイヌイットも自国を構成する民族となるのだが、アフリカ黒人に関して言えば予想よりずっと少ない。

アメリカは奴隷問題がきっかけで、南北戦争という史上最大の内戦が起きるが、実際には、全時代を通じて入った黒人は四〇万人で、ブラジルの三六〇万、各国領カリブ諸島の三八〇万に比べると一〇％にすぎない。これはアメリカがイギリスの影響で比較的早い時期に奴隷の輸入を止めたこと、および黒人奴隷に代替する労働力として中国人のクーリー（苦力）を移民させたことに原因がある。一九世紀半ばから起こったカリフォルニアのゴールドラッシュ以降、一八八一年までに三四万人、ほとんど全時代の黒人輸入に匹敵する中国人を入れている。いかにすさまじい流入だったかである。

このように、ブラジルとアメリカでは違いはあるにせよ、どちらも新天地で、国土が広く、多様な世界中の移民を受け入れて、多人種、多民族国家をつくったことでは共通している。更に興味のあることは、ブラジルは中国移民こそ入らなかったが、ブラジルもアメリカも相当数の日本移民を入れたことである。第二次大戦前にブラジルに入った日本移民は一九万人、これはイタリア、ポルトガル、スペインにつぐ四番目の数字となる。

多くのヨーロッパ移民の中で、明らかに文化の異なる日本移民をどのように受容し、どのように排斥したか、アメリカとブラジルの日本移民に対する対応の仕方を検討してみよう。ただ、日本移民を比較の題材に用いると、ブラジ

ル論になると同時に、日本論、日本人論にもなってしまう。その辺はあらかじめお含み願いたい。

入れそこなった〝苦力移民〟

移民としては最低のクラスにランクされた中国からの苦力（クーリー）移民は、アメリカはじめ、キューバ、英領ギアナ、スリナム、トリニダード・トバコ、ペルーなどに入るが、ブラジルには入らなかった。中国移民は低賃金で、どんな過酷な労働条件にも堪えるという評判のため、黒人奴隷の代替労働力として各地に導入された。それでは何故、この安価な労働力である中国移民がブラジルに入らなかったのだろうか。

一見、不思議なようだが、時代を検証すると、これは入らないのがあたり前、アメリカとブラジルでは、奴隷貿易をやめた時期に四〇年の差があるのだ。つまり、いつまでも黒人奴隷にこだわっていたブラジルは、苦力移民受入れのバスに乗り遅れてしまったのである。

アメリカはイギリスの強い働きかけもあって、一八〇八年、いち早く奴隷貿易を廃止する。代わって登場するのがヨーロッパからの自由移民で、一八二〇年代からはじまり、一八四〇年代からブームとなる。中国移民もこの時代、一八四〇年代からはじまっている。ところが、この中

国移民、ヨーロッパ移民とまったく色合いが異なった。アメリカ社会に同化しないのである。弁髪の風俗も天秤棒を担ぐ習慣も改めないし、もちろん食事、言語、宗教も自分の文化のままだった。中にはアヘン吸引者もおり、その数も少なくなかった。

そして中国移民はまさに、この自己文化を捨てなかったが故に、アメリカ社会から蔑視され、差別され、排斥されたのである。一八七七年にはサンフランシスコで、中国人排斥の暴動が起き、一八八二年には、遂に連邦政府によって、中国人排斥法が制定され、中国移民全面禁止の事態になる。

中国移民の後を継いだアジア人が日本移民で、後に排斥されることは歴史の示す通りである。これがアメリカにおける奴隷貿易の終焉と外国移民導入、および排斥の流れだが、ブラジルでは様相が違った。いつまで経っても奴隷貿易をやめようとはしないのである　当時、世界の警察官であるイギリスは、各国に働きかけ、奴隷貿易の廃止を取り決める。ポルトガルも一八一五年と一七年に条約を調印して、黒人奴隷貿易廃止を約束するものの、実際は一八二〇年から三〇年にかけて、年平均六万人と逆に増えたのである。この辺りはいかにもブラジル的で、条約違反などまったく意に介さない。だいたいブラジルの奴隷輸入は一九世紀が最高一六〇万人で、過去のどの世紀よりも多いのだ。

もちろん、サンパウロ州を中心とするコーヒー栽培が本格化して、労働力を必要としたからである。

一向に約束を守らないブラジルに、業を煮やしたイギリスは、一八五〇年四月、ブラジル領海の奴隷輸送船を海賊船と見なして拿捕する最後通告をブラジル政府に突きつける。

これでさしもしたたかなブラジルも折れ、しぶしぶ奴隷貿易の廃止に踏み切る。

ブラジルの奴隷解放は世界でもっとも遅く、一八八八年だが、奴隷解放が避けられない情勢となった一八七八年、サンパウロのコーヒー農場主が中心になって、中国の苦力移民を受入れる動きが出てくる。しかし、この時代には既にカリフォルニアで中国人排斥運動も起きており、ブラジルの王室政府は、ブラジルに同化しない中国移民の受入れは好ましくないとして認めなかった。しかし、苦力労働者の低賃金と、一日一六時間の労働も可能という魅力に抗し切れないサンパウロの農場主たちは、自分たちで移民会社を設立、実際に香港やマカオに赴いて、中国移民を募集し、契約して乗船させようとする。これも実現しなかった。イギリスの官憲は香港からの乗船を禁じたし、マカオのポルトガル政庁もイギリスに遠慮して、マカオからの乗船も許可しなかった。かくてブラジルに中国移民を入れる計画は、計画倒れに終わってしまう。

どうもこの時代からブラジルは時代の趨勢を読むのが遅く、世界の動きにもワンテンポずれる傾向があったようだ。目先の欲が先に立つのである。

ブラジルに中国移民が入らなかったことの利害得失は、正直言ってわからぬ。ただ、日本移民の特徴が祖国に対する求心性（回帰性）であるのに対し、華僑の場合は祖国からの遠心性（拡散性）に特徴があるのだから、日本移民とは違う行動をとったに違いない。

中国には歴史的に人民を大切にする政治体制が出来ず、むしろ人民にとって苛斂誅求を行う役所や役人は、憎悪の対象でしかなかった。このため中国人は移住先に定住し、現地社会に溶け込んでいく方法を講じたのだ。だから中国人だったら、戦後、ブラジルの日系社会で起きた、祖国の勝ち負けを巡る抗争は起きない。ただし中国文化の伝承は強固に維持するのはたしか。

厳しさに欠けた排日政策

第二次世界大戦前からブラジルにいる日系人にとって、ミゲール・コウト父子は不愉快極まりない存在で、日系社会としては史上もっとも嫌いなブラジル人かも知れぬ。それもそのはず、黄禍論（イエローペリル）をぶち上げ、日

本移民排斥運動を起こした張本人なのだ。父親のミゲール・デ・オリベイラ・コウト博士は一八六五年生まれ。リオの医大を卒業した病理学者で、学士院長の顕職を経て、後には政治家になった人物。

本人の名誉のために言っておくと、この人は病理学者としては優れた業績を残しており、黄熱病など、吸血昆虫による伝染性疾患の研究では当時の第一人者。専門著書も多く残している。後年政治家になってからは、連邦政府の歳入の一〇%は教育予算に当てるべしとのユニークな発言をし、「国民の教育」「ブラジルには国内問題が最重要」というような本も書いた。

ミゲール・コウトは一九三四年六月に亡くなるが、一カ月後に公布された「移民二分制限法」の生みの親であり、熱烈な日本移民排斥論者だった。息子のミゲール・コウト・フィーリョも政治家となり、父親の遺志を継ぎ、一九四六年八月の新憲法制定審議国会で「日本人移民入国禁止」の条項を入れるべく、激しい排日運動を展開する。日系社会にとってはまさに時期が悪かった。日本の敗戦をめぐる勝ち負け抗争の真っ只中で、テロ行為による犠牲者が続出している時代であり、ブラジルの反日感情も極度に悪化していた。そこへミゲール・コウトが煽動したものだから、多くの議員の賛同があり、票決の結果は九九対九九の同数というきわどさだった。結局議長のメーロ・ビアナが

決定票を反対に投じ、日本移民禁止の憲法修正案は否決される。ミゲール・コウト父子の日本移民排斥運動は、明らかにアメリカの排日運動を手本としている。

アメリカでは、一八八二年の中国移民禁止令により、入国を禁じられた中国人に代わって、日本人移民が登場する。しばらくは良かったが、日本が日露戦争に勝ってから、急速に排日熱が高まり、黄禍論が叫ばれるようになる。一九〇七～八年には日米間の話合いが持たれ、アメリカの要求により、日本政府は日本人労働者の旅券発給停止に合意する。要するに、労働を目的とした日本移民のアメリカ渡航は締め出されたのだ。

一九〇八年六月、笠戸丸が初の日本移民を乗せてサントスに到着するが、日本としては、閉ざされたアメリカの代わりにブラジルを見つけたということになる。

アメリカではその後、一九一三年、カリフォルニア州で日本人の土地所有を禁止する法令が出されたのを皮切りに、各地で日本人の土地所有が禁じられるようになる。排日法の最後は一九二四年の日本移民の全面禁止で、移民制限の中にこの旨がはっきり明記され、一九六五年の新移民法成立まで、日本移民は完全に止まる。

ブラジルにおける移民制限は、黒人と唯一のアジア人である日本移民に対して向けられたが、これはまったくアメリカの物真似。ミゲール・コウトの熱心な運動で、一九二

三年には、はじめて日本移民を規制するレイス法案が準備されるし、一九三四年には「外国移民規制」が可決され、憲法の中に入れられる。しかし、ブラジルの移民制限法はアメリカのような厳しさがなく、ばかに緩やかだった。

例えばアメリカの制限法は「一八九〇年の国勢調査による、移民の出身国別居住者の二%」が枠なのだが、ブラジルのは「過去五〇年に入国、定着した数の二%」が割当て枠となる。たしかにこれでも、この当時、急激にブラジル向け移民の増えていた日本にとっては、不利には違いないが、締め出されたわけではない。日本移民の数は、外国移民の中では四位である。上位三位までの国とは大きな隔たりはあるものの、移民の割当て数はどこの国も一律二%なのだから、日本は依然四位の割当てを保つことになり、特に不当とも言えない。おまけに、これは前にも述べたが、実際には割当て数をはるかに上廻る日本移民が入ったのだから、結果においてこの法律はザル法になった。

ミゲール・コウトは優生学的な立場から、アジア人種が劣等だとは言ったが、ゴビノーの人種不平等論やダーウィンの優勝劣敗論までは持出さなかった。

実はアメリカの一九二四年の移民制限法は、日本移民に限られたものではなく、スペイン、ポルトガル、イタリアをはじめとする、南・東ヨーロッパ移民も対象としており、ラテン系がアングロサクソン系に劣る証拠としてゴビ

ノーやダーウィンが利用されていたのだ。ブラジルにはアメリカのように原理原則にもとづく厳しさがない。似たような施策を講じても、どこか不徹底で尻抜けのところがある。まあ、それで助かることもあるから文句も言えない。

実行されない国外追放令

第二次世界大戦後のブラジル日系社会で起きた、敗戦をめぐる勝組（信念派）と負組（認識派）の対立、抗争事件はブラジルの日本移民史上、最大の不祥事だった。なにしろテロによる暗殺だけで二三件、襲撃、傷害八六件、テロ行為に直接加わった者四五名、この事件で警察に取り調べを受けた日本人は、全国で五〇〇〇人に達した。この事件によって、これまで一枚岩的同質社会だった日系社会――当時は同胞社会と呼んだが――は完全に分裂してしまう。この分裂と対立は、その後も長く続き、地方によっては両派の日本人会が出来て、お互いに反目しながら並存する状態が比較的最近まで続いた。戦後五〇年近く経った今日、この事件の多くの関係者は既に泉下に入り、かつての激しい対立はもう見られないが、現在においても、両者の溝が完全に埋まったとはまだ言えないのである。

この事件は規模が大きく、またテロによる殺人という犯

罪行為であったため、日系社会内部の問題だけにとどめることが出来ず、ブラジル社会にも大きく報道され、多大な反響を引き起こした。

戦後、ブラジルで起きた排日運動は、この事件が直接の引金となっている。中でもブラジル人の神経を逆撫でし、日本人に対する悪感情を決定的なものにしたのは、一九四六年七月一九日、サンパウロ政庁カンポス・エリゼオス宮で行われた、州執政官マセド・ソアーレスの勝組説得の際に示した勝組メンバーの態度だった。

この時期、ブラジルはたまたま政権交替期にあり、新大統領による州知事任命まで、連邦政府派遣の執政官が州の最高責任者になっていた。ソアーレス執政官は、日系社会に続発するテロ行為と、勝ち負けをめぐる混乱を収拾するため、勝組の強硬派六〇〇名を州政庁に呼び、州政府長官、スウェーデン公使、サンパウロ大司教立ち会いの下に異例の説得を行った。記録を読み返してみると、この時のマセド・ソアーレスの説得は立派だった。誠心誠意、条理を尽くして時局を説明し、一九四五年八月一四日の終戦詔書が間違いないものであること、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏したことを告げる。また、ブラジル国内で起きている日本人同士の同胞抗争を諄々と諌め、ブラジルの法律を守り、秩序と平静を保って、養国ブラジルの発展のため、生産に励んで欲しいと要請する。

戦勝国側であるサンパウロ州最高責任者の態度としては、誠に立派、非の打ちようがない。しかし、日本の勝利を頭から信じている勝組にはソアーレス執政官の説得も通用しなかった。それどころか、議事録中に記載されている「無条件降伏」や「敗戦」の字句がけしからぬと、文字の削除を求める有様だった。事態収拾のため、ソアーレスが文字の削除を了解すると、自分たちの要求が認められたのは自分たちが正しいから、つまり日本が勝ったからだと勝手に解釈し、大喚声を上げる。

この時の勝組の出席者は、完全に集団パラノイア（偏執狂）症状を呈しており、自分たちに都合の良い解釈しかできない精神状態に陥っていた。かくてソアーレスの説得は失敗する。

この会見の模様は、直ちにブラジルのマスコミに報じられ、無礼で、野蛮で、ブラジルの法律を無視する極悪非道の日本人に対して、怒りの集中砲火が浴びせられる。ソアーレスの説得が丁寧で、条理をつくしたものだっただけに、排日反日感情は一夜にして頂点に達してしまった。根っからの排日論者であるミゲール・コウト・フィーリョが、この千載一遇のチャンスを見逃すはずはない。

既に述べた、九九対九九の票決となった日本移民禁止条例は、こうした反日の雰囲気の中で、ミゲール・コウトが議会に上程したものなのである。ともかくブラジル側は、

ソアーレスの説得失敗を機会に、日本人勝組を弾圧方針に転じ、臣道連盟会員の行動派を片っ端から検束する。検束された者のうち、起訴された勝組は三八七人、この中にはテロ行為の実行犯およびその共犯者八〇名も入っている。一九四六年八月一一日の大統領令で、三八七名全員が国外追放処分と決まる。ブラジル司法当局は、このうちのテロ実行犯と共犯者および臣道連盟幹部の約一七〇名を、サンパウロ州の海岸近くにあるアンシェッタ島の懲治監送りとする。これが事件の〝処分〟である。

では、三八七名の国外追放は実行されたのだろうか。一人も国外追放されたものはいないし、島に収監されていた一七〇名も数年のうちになしくずしに釈放されてしまった。そして、一九五八年八月、国外追放の時効が成立、「可罰性の消滅」宣告を受ける。

たしかにブラジルは良い国である。これがアメリカなら、間違いなく何百人かは殺されただろうし、外国人嫌いの日本ならなおさらである。

勝ち負け抗争、日本的現象

勝組、負組の事件は、ブラジル日本移民史上最大の事件であり、しかも戦後のことゆえに、この問題を解説した記述は多い。ブラジルの日本人も、日本の日本人も書いてい

るし、ブラジル人の書いているものもある。資料も豊富、生き証人にもことかかない。だからいずれも事件の発生や経過、登場人物の動きや思想などは詳しいデータを用いて克明に書いている。したがって事実関係では疑点がない。

また、最近出版された「日本移民八〇年史」に記載されているこの項目は、公正な資料を豊富に駆使した宮尾進氏の労作で、これによって事件の全貌は解明されている。まずは、決定版といってよい。おかげで事件の全貌はわかったのだが、この事件の性格というか、位置付けがもひとつわからないのである。将来、歴史家はこの事件をどのように定義するのだろうか。この問題は永年、筆者を悩ませた。そして達した結論は「この事件は、ブラジルの日系社会に発生した、特殊な出来事ではなく、平均的な日本人なら、いつでも、どこでも発生し得る普遍的な現象である」というもの。

ヒントは和光大学岸田秀教授の唱える「日本、精神分裂病論」である。

心理学者で、精神分析学が専門の岸田氏は、これまで人間個人を対象にしてきた精神分析を、国家や社会に当てはめて考察する、ユニークな方法論をとっている。岸田理論をかんたんに紹介してみる。

日本はもともと精神分裂病的体質で、重大な危険状況が発生すると、危機を回避するため、現実に適応しようとす

る派と、現実を無視し、誇大妄想的な誇りを維持する派に分裂する。心理的用語で言えば、前者が外的自己で後者が内的自己。

まず、日本は幕末にアメリカから開国を迫られた時に、やむを得ず国を開こうという開国派と、絶対反対の尊皇攘夷派に分裂、激しく対立する。その後、日清、日露の戦争を経て、国粋主義の軍部がリベラルな勢力を抑えて支配するが、第二次大戦に敗れ、マッカーサーが進駐すると、アメリカに迎合する外的自己の時代となる。とはいうものの反米感情も衰えず、六〇年安保騒動のような反米活動も起きる。最近は日米構造協議における米の輸入をめぐって「輸入やむなし」とする派と「一粒たりとも入れぬ」との強硬派が対立している。いわば日本は、外的自己と内的自己が複雑に入り組んで、精神分裂症状を依然続けているというもの。もちろん、岸田氏は、ブラジルの勝組、負組などについては触れていないが、岸田理論を援用すれば、日本の敗戦を認めた認識派は外的自己で、神洲不滅、日本の敗戦を認めない信念派が内的自己であることははっきりしている。

ブラジル在住の日系人のほとんどは、日本敗戦の報が信じられなかった。なにしろ、つい先頃まで短波ラジオで受信出来た、赫々たる戦果の大本営発表のニュースと敗戦は、論理的にも結びつかない。また、戦前、戦中を通じて

受けてきた日本寄りの一方的情報や昭和一〇年代に移住した人たちの持ち込んだ軍国思想も影響している。更に、現実に移民が置かれている苦しい状況や日本に勝って欲しいと願う移民心理が絡み、神洲不滅、神国不敗の信念が醸成されていく。この移民心理を的確につかみ、移民に狂喜して受け入れられるような理論体系を示して、日系社会の主導権を握ったのが臣道連盟をはじめとする右翼団体で、これらの団体は、精神病理学でいえば、パラノイア（偏執狂）の集団だった。

パラノイアという病気は、一般的に言えば「あり得ない内容を真実と信じる思考の異常」で、体系化され、理論化された妄想を確固として信じるのが特徴である。分裂症と似ているが、分裂症のような幻覚は伴わず、妄想と関係のない思考や情意はまったく正常なのである。真面目で、頑固で、思い込みの激しい人がなりやすく、職業的には軍人、教師、僧侶のように、組織の命令に従うタイプが多い。

勝組、つまり信念派の多くは、一過性の「疑似パラノイア」だったが、「真正パラノイア」である臣道連盟らの妄想体系に影響されたり、便乗詐欺師たちの天才的な勝利工作のおかげで迷わされる。むろん、一過性だから、時が経って情報が豊富に入ってくると、信念派から認識派への転向組が多くなる。しかし、真正パラノイアは、この病気の特徴である、妄想体系の絶対信奉症状のため、いかなる

説得も受け入れなかった。この結果、世界の歴史でも大変珍しい、日本移民の「集団パラノイア現象」が発生したわけだが、この事件はブラジルの事件というより「日本の歴史」の範疇に属する事件として、日本的コンテクストでとらえた方がわかりやすい。同じような事件は、ペルー、ハワイ、アメリカでも起きているのだ。

排日は移民側にも原因が

アメリカという国は、純粋な理念を新天地に持ち込んでつくった人工国家である。ヨーロッパから生まれた国ではあるが、国王とか法王とか、封建性の強い、政治的、宗教的な束縛を一切持っていない。万人が神の前に平等であり、神への信仰に仲介者である法王とか神父は不要、また、権威主義の象徴である荘厳華麗な教会などもいらない。キリスト教徒は直接、神とつながって魂の救済が得られるという、プロテスタント、それも特に厳格なカルビニズムの理想の下に成立した国である。アメリカ建国の精神は自由、平等、正義、デモクラシーで、これは現在に至るまで変わることなく続いている。

アメリカは本質的に自分が即、世界であり、自分の価値観は世界に通用する普遍的なものとの信念を持っている。

だからお節介でもある。自分の価値観を押し売りし、従わないと腕づくでも従わそうとする。外国に対してさえもそうなのだから、国内ではもっとひどく、あれだけ多い外国移民に対しても「お前らは直ちに出身国の文化を捨て、すべからくアメリカ文化に同化すべし」と強要する。いわゆるメルティングポット（坩堝）理論である。そしてこの場合の「アメリカ文化」は、言うまでもなくＷＡＳＰ（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）の文化なのである。

このアメリカの考え方が一九三〇年代、ゼツリオ・バルガスの大統領時代にブラジルに伝染、波及してきた。ところがアメリカの理論はアメリカでこそ通用するが、ブラジルではどうもしっくりこない。同じ日本移民排斥にしても、アメリカ流の、コーカソイド以外の人種を排除する人種差別をブラジルが取り入れたら、ポルトガル人さえも排斥しなくてはならぬ矛盾にぶつかる。また、「アメリカ文化」の向こうをはって「ルーゾ・ブラジル文化」を謳歌したところで、世界には通用しないし、誰も感心しない。このため、ブラジルの日本移民排斥論は、ミゲール・コウト博士といえども、積極的な人種優劣論を展開するわけにはいかず、日本人非同化論と日本移民帝国主義先兵論で攻撃せざるを得なかった。ブラジルにはアメリカのようなＷＡ

ＳＰ中心の強烈で純粋な理念がないから仕方がないのだが、これではアメリカのような徹底さは望めない。

しかし、この当時、ブラジルの日本移民自身は気がついていないが、日本移民の方にも排日を起こされてもやむを得ないところがあったのである。戦前の日本移民は、日本からブラジルの中の「小日本」に移り住んだだけで、本当の意味で国境を越えたわけではない。そしてこの「小日本」に住む日本人の思考と行動は、海外に出た日本人の歴史の軌跡が示す通り、日本人そのものだった。

つまり日本に対する求心性が非常に高いのである。これは取りも直さず、相手国の文化には容易に同化しないことを意味している。どういう状況だったか山田宙子氏の論文「昭和前期ブラジル移民の諸問題」に記されている外務省記録の中から引用してみよう。

「本邦移民ハ伯国ニ於テ多少ノ貯金ヲ為シタル後、帰国スルヲ一ノ希望ト為スカ故ニ、常ニ腰掛ケ気分ニテ其経営セル事業モ皆一時苟且ノモノニ過キス特ニ其家屋ノ如キハ陋隘極マル茅屋ニシテ漸ク雨露ヲ凌クニ足ルノミ、家具ナトハ皆無ニシテ其貧窶ノ有様ハ見ル人ヲシテ厭悪ノ念ヲ生セシムル程ナリ、而カモ彼レ移民等ハ日ク早晩帰国セント欲スルモノナルカ故ニ仮小屋ニ仮住ス、ソノ陋隘ナルハ当然ノ事ノミ（中略）我移民ハ家ニ在リテモ家庭的団欒ニ慰安快楽ヲ得ルノ道ナク、出テテ隣保ト交リテ放歌舞踊ノ感興

ヲ共ニスルヲ得ス、物質的ニモ精神的ニモ彼等ノ生活ハ極メテ荒涼寂莫ナリ、如此キ凄涼ナル四囲ノ情況ハ更ニ彼等ヲシテ一層ソノ帰心ヲ鋭ナラシムル亦其故ナシトス」

（一九二四年、堀口公使報告書）

もう一つ引用する。これは一九三五年、三浦文夫書記官が本省に報告した、ブラジル新聞（と思われる）に報道された日本人移民評である。

「サンパウロ州及アマゾン流域ニ二十万ニ近イ日本人ヵ殆ト伯国人ト没交渉ナ集団ヲ形成シテ居ル、其処テハ日本人医師ヵ居リ日本語学校カアリ日本式ノ娯楽機関ヲ持チ日本人ノミノ図書館ヲ持チ日本人同志テ結婚シ、出生、死亡、婚姻等ハ凡テ日本政府ノ役人ニ届ケ出テ日本政府ノ代表者ノ命令ニ服従シ且ツ其指導援助ノモトニ産業施設ヲ完備シ棉花、米、芋、茶、桑其他ノ栽培ニ優秀ナ成績ヲ示シ多大ノ利益ヲ挙ケテ居ルカ其販売ハ全部日本人ノ組合テ行ヒ利益ハ日本人ノミテ独占シ伯国人ハ何等之ニ均霑シナイ」

（後略）どんなブラジル人が書いたのか知らぬが、実によく見ている。これでは日本移民は同化しないとの非難も無理ではない。

農地取得は世界的例外

マラニオン州奥地の小さな集落を歩いていたら、ひどい

茅屋から出てきた黒人の老農夫が、聞き取りにくい言葉で話しかけてきた。なんでも六〇数年前のむかし、サンパウロ州奥地のコーヒー農場に五年ほど季節労働者として行ったことがあり、そこで日本人移民の労働者と一緒に働いたことがあるのだそうだ。「いやぁ、ジャポン（日本人の意）はカルピ（除草作業）がのろくてね、並んでカルピをはじめるんだが、こっちが一畝終わってもジャポンはまだ半分もやっていないんだ。まったく気の毒なものだったよ」。

臭いタバコの煙を当方に吹きかけて得意そうだった。すさまじい小屋に住んでいる老カボクロに同情されて、なんだかおかしかったが、言っていることは事実である。

だいたい、新来の日本移民が雇用農として農場に入り、不慣れな農作業をしても、年季の入った黒人労働者にかなう道理がない。戦前、ブラジルに来た日本移民はたしかに苦労した。気候、風土の異なる環境での肉体労働はきつく、収入は少なかった。そのうえ、ブラジル最初のアジア移民であったため、カルチャーショックも大きく、精神的に不安定だった。とはいうものの、世界の移民、あるいは各国に入った日本移民というマクロの立場で比較考察すると、ブラジルに入った日本移民ほど恵まれた移民は珍しいのである。なにより、二〇世紀のはじめという時期と、サンパウロ州奥地のコーヒー園という場所が良かった。

ブラジルのコーヒー栽培は一九世紀半ばからはじまる。

最初のコーヒー農場は、古典的な砂糖キビ農場のやり方をそのまま踏襲した農場だった。つまり、何でも農場内で自給し、農場主は荘園領主のような絶対権力を持ち、多くの奴隷労働者の上に君臨する方法である。

ところが、奴隷解放が決定的になる一九世紀後半からは、従来の奴隷労働に代わって、外国移民による請負契約労働者（コロノ）が、コーヒー園労働力の主力となる。この時代はまた、鉄道敷設全盛時代でもあった。奥地のコーヒーをサントス港に運ぶため、サンパウロ州の内陸地方にどんどん鉄道網が伸びていった。これで農村の経営形態が一変する。鉄道のおかげで、都市と農村部の交易が容易になり、農村は自給体制をとらなくても必要物資は鉄道で入ってくるようになる。もはや荘園的な大農場に隷属しなくても生活が出来るのである。

当時はまだ、サンパウロ州の奥地や北パラナなどは原始林が多く、国有地、州有地のような公有地が多かった。これに目をつけた鉄道会社や内外の土地開発会社は、政府から土地の払い下げを受け、小ロットにし、分譲地として売り出す。日本の県海外協会が土地を一括購入、移住地として造成、分譲、後にブラジル拓殖組合（ブラ拓）に統一された移住地も同様にしてつくられたものである。ブラ拓の移住地は、日本で土地を買い、最初から地主として移民したが、初期の移民はブラ拓方式ではなく、コロノとして入

るものが多かった。コロノから出発しても、四年なり六年の契約期間を終えれば、二五～四〇ｈａ程度の原始林は買え、小地主として独立出来たのだ。ブラジルは広く、土地も安かった。こんな恵まれた条件のところは他の国にはない。アメリカなどは一九一三年、カリフォルニアで日本人土地所有禁止法が出されて以来、法的に土地を持つことが出来なかった。

ペルーはブラジルより九年早く、一八九九年に日本移民が入ったが、やはり土地が持てなかった。

ペルーの場合は、法律で禁じられたわけではないのだが、買える土地がないのである。ペルーは国土の大部分をアンデス山脈が占め、可耕地がもともと限られている上に、可耕地の九〇％がラチフンジオ（大土地所有）で、少数の大地主に握られているからどうにもならない。コロノ時代の労働の辛さは、ペルーもブラジルも変わりはないが、ペルーの場合は契約期間が終わっても、土地がないため自作農として独立することが不可能なのだ。ペルーの日本移民はやむなく商業に転身する。

現在、ブラジルの日系人の多くは都市居住者である。しかし、日系社会の経済基盤は疑いもなく農業によって培われたものであり、その農業は日本人が土地を持てたからこそ、成果を上げ得たのだ。これは歴史的事実として注目してよい。

もう一つ、ブラジルの日本移民にとって良かったことは、ほとんどすべての移民が農業移民として入ったことである。何故、農業移民で良かったかといえば、農村に失業はなく、貧困ではあっても、働いていれば食べることはなんとかなったからである。ここがニューヨークのイーストサイドのスラム街で、失業、飢餓、絶望を味わねばならなかった、ヨーロッパ移民との違いである。

寛大な日本移民戦時措置

これはブラジルの日系社会に限ったことではないのだが、古くから日本移民が入ったところでは、どこの国でも今や「モデル・マイノリティ」（模範的少数集団）を形成している。アメリカでもペルーでもブラジルでも、日系社会の所得水準は、その国の平均所得水準をはるかに上廻っている。

もちろん、数の中にはドロップアウトしたのもいるだろうが、かつて社会の最底辺から出発した日系人は、時間の経過と共に着実に階層上昇を続け、現在は大部分が中産階級に位置している。勤労意欲が強く、真面目で教育熱心という、国民的資質のおかげであるのはたしかだ。

しかし、日系社会がマイノリティであり、移住先国の基層文化と異なる文化を持っている以上、ある程度の摩擦も

これまた避けられない。特に第二次大戦時のように、日本と移住先国が敵対関係になった場合は、日本人が異文化なるが故に、いわれのない差別や偏見が表面化し、憎しみや攻撃の対象になることがよくあった。戦時中はブラジルの日系人も、かなりの迫害と弾圧を受けた。記録にはこういうひどいこともあった、ああいうこともあったと、悲憤慷慨して、いろいろな例があげられている。しかし、公平に判断すると、直接の交戦国となったアメリカはもちろんのこと、ペルーに比べても、ブラジル政府のとった対日移民向けの措置は寛大だった。

ペルーの場合、日系社会の有力者は家族ごとアメリカに連行され、キャンプに収容された。ペルーの国籍があろうがなかろうが、そういうことは一切顧慮されなかった。そして終戦後、日本国籍の者はペルーに帰るのを許されず、日本に強制送還される。また、今でもほとんど一般に知られていないが、アメリカやブラジル、ペルーなどの日本移民よりもっとマイナー（少数）な移民集団が、戦争で苛酷な取り扱いを受けた例もあるのだ。それは、南太平洋のオーストラリアに近い、フランス領にニューカレドニア島に渡った日本移民たちである。

ニューカレドニアの日本移民の歴史は古く、一八九二年（明治二五年）に外務大臣の榎本武揚が、ニッケル鉱山の採鉱夫として、熊本県出身者六〇〇名を移民として送った

のがはじまり。以後、一九一八年まで約五四〇〇人の日本人が鉱山労働者としてこの島に渡った。移民の半分は熊本出身者である。この島は一八五三年にフランス領となるが、一九世紀中はフランスの流刑地として用いられたにすぎなかった。こんな島に何故日本移民が入ったかというと、世界最大級のニッケル鉱山があって、戦前は日本もここに投資していたのだ。日本移民は鉱山労働者という性質上、独身男子が多かったから、ほとんどの者が現地女性と結婚して、フランス国籍の子供が出来、移民自身もすっかり島の人間になってしまう。ところが一九四一年、太平洋戦争が勃発するやいなや、フランス政府は日本国籍の全移民を逮捕、オーストラリアの強制収容所に入れてしまった。この日本人は、終戦後日本に送還され、長い間、帰島することが許されなかった。家族はばらばらになり、夫婦はお互いに会えぬまま再婚のケースが多い。現在、この島の日系人は四〇〇〇人、三世、四世が中心だが、日本語の話せる者は一人もいない。

この話はニューカレドニア日本移民百年祭協会日本委員会の村山素夫代表が書いているが、こういう例は、数十人、数百人の単位でなら、各地にあったことなのだ。

さて、ブラジルの「穏やかで寛大」な態度が、極端を好まぬ「ブラジル的性格」から由来しているのは間違いないが、一つにはブラジルの日系社会が農業を基盤としてお

り、しかもかなりの実績を上げていたことも理由になっている。おかしな言い方だが、農業は移民の生業としてはもっとも摩擦の少ない職業で、日本移民のように小農地を取得して家族労働で勤勉に働き、生産に励んでいる限り、移住先国の人たちから文句を言われたり、非難されたりすることはない。

そこへいくと、他の国は違う。例えばアメリカだが、アメリカに渡った移民が、中西部のフロンティアで農地を取得出来たのは一八八〇年代までで、それもイギリス移民とドイツ移民に限られていた。だから、アメリカに渡ったものすごい数の移民は、腕におぼえのある職人以外、鉄道、道路、トンネル工事の現場労働者や、食肉加工、紡績業、衣料製造業などの未熟練労働者として、低賃金で糊口を凌ぐより方法がなかった。おまけに新しい移民が次々と入るため、低賃金に加えて失業の危険が常にあり、移民同士の反目、競合が激しく、とてもブラジルの移民のように、農業でゆっくりとはいかないのである。

一業種集中は摩擦のタネ

もう一〇数年前になるが、懇意になった韓国コロニアの長老が、しきりに韓国コロニアの将来を心配していた。

ちょうど、パラグワイ経由の韓国人不法入国者が増え、大きな社会問題になっていた時期である。今は既に故人となったが、元軍人で、しかもかなりの高位者だった。この人が、このままいくと韓国コロニアはブラジル社会から嫌われ、排斥されると言うのである。どうしてかと聞いたら、自分の着ているシャツを引っ張り、「こればっかりやっているからさ」と答えた。これとはブラジルの韓国人がメーンの職業としている衣料産業のことである。

たしかにこの時代から韓国コロニアの衣料産業への躍進は目覚ましいものがあった。だが、ブラジルの韓国移民を語るには、まず一九六五年のアメリカの移民法改正に触れる必要がある。

アメリカはジョンソン大統領時代の一九六四年、公民権法を通過させ、次いで六五年新しい移民法を制定する。公民権法というのは、教育、雇用、住居、選挙、公共施設の利用などにおける人権差別の撤廃を法律で定めたもので、全アメリカ人に衝撃を与えた歴史に残る画期的な法律だった。

なにしろ暗黙の了解事項であり、社会通念でもあった人種差別が法律ではっきり禁じられたのだ。

以後「白人専用」「黒人用」などの表示は消滅してしまう。翌年の移民法改正も人種差別撤廃の一連の流れに沿ったもので、これによって、従来実質的に禁止されていた、

アジア、アフリカ諸国や、厳しく制限されていた南東ヨーロッパの国からも、一国一年二万人を上限に、移民を受け入れることになった。こういうところはさすがアメリカで、原理原則に徹底している。人種差別が悪いということを認めれば、人種差別にもとづいて、国別に差をつけていたこれまでの移民法も民主主義のルールに反するということで、改正したのである。半端ではない。とにかくこの移民法の改正で、台湾、韓国、フィリッピンなどのアジア移民がどっとアメリカに流入した。この結果、それまでアジア系では一位だった日系人口は、中国、フィリピンに追い抜かれ、やがて韓国にも抜かれようとしている。

このアメリカの移民改正法はブラジルにも影響をおよぼし、この時代から韓国や台湾と個別に移住協定を結び、移民を受け入れるようになった。むろん移住許可の枠は決まっているのだが、韓国からの移民はこの枠を越えてどんどん入ってきた。パラグワイ経由の密入国が後を絶たないのである。韓国人の不法入国者は、一九七〇年から八〇年代前半にかけて、ブラジル、特にサンパウロで大きな社会問題に発展した。とにかく不法入国者が何万人もいるのだ。不法入国者はブラジルのビザがないから外国人登録が出来ないし、身分証明書も貰えない。身分証明書がないと労働手帳の取得が出来ず、正規に就労は出来ない。

それでは不法労働者はどうして生活したかというと、同

胞韓国人の主として衣料品店や縫製工場にもぐりで働いたのである。当然低賃金だが、他に働くところがないのだからやむを得ない。不法入国者問題は厄介な問題で、在伯韓国大使館を通じてブラジル政府との折衝が続けられた。そしていろいろ紆余曲折があり、時間もかかったが、結局ブラジル政府が特例を認め、外国人登録をすることで、不法入国者を救済した。

前述の韓国コロニア長老の心配は、不法入国者問題ももちろんだが、不法労働者という、低賃金の労働力を得て、それでなくても一業種集中を強めている韓国系の衣料業界がますます肥大することだった。

「この業界はもともとユダヤ人やアラブ人の得意の分野だからね。韓系が強くなりすぎてシェアをどんどんひろげると、連中の危機感をあおり、摩擦が生じるし、反発を買うことになる。ブラジルの韓国コロニアは、まだ浅く、本当の基盤が出来ていないから、反韓、排韓の動きが出るとまずいんだ。本当は日本移民のように農業から出発すれはよいのだが、我々には無理なのだ。時代が違うし、いろいろな条件が異なっているからね」どうやら長老の懸念は不幸なことに現実になりつつある。韓国勢に押されるユダヤ人、アラブ人衣料業界の反感、反発はかなり高まっている。

一九九二年四月二九日、アメリカのロスアンゼルスで黒

人による暴動が発生、韓国人商店に対する焼き討ちや掠奪が起きた。この事件の背景には、韓国人の急進出によって職を奪われる、黒人のブラジルの場合、マイノリティー同志の反目が暴動にまでエスカレートすることはまずない。その点は安心してよいだろうが、多人種、多民族国家にあっては、相手の立場も尊重しないと、とんだ結果になるということも自戒すべきである。

国境を越える移民の子弟

ペルーのアルベルト・フジモリ氏が大統領に立候補した直後、サンパウロを訪れたペルーの日系二世の女性と会ったことがある。五〇才ぐらいのこの女性は、涙を流してフジモリ氏の〝暴挙〟を怒っていた。

「いったいなんてことをするんでしょう。九五年の年月をかけてやっと育ててきた日系社会を潰す気なんですか。私たちはあの戦時中の迫害はもうたくさんです。何故フジモリさんはペルー人に無用の刺激を与え、日系社会を危機に追い込むのでしょうか」

わからない人がいるかも知れないが、こういうことだ。

現在のペルーはセンデロ・ルミノソのテロが横行、経済はどん底、政治は腐敗しているという、最悪の状態にあ

る。こういう状況下ではどんな優秀な人物が大統領になってもうまくいきっこない。

早晩失敗して失脚するに決まっている。フジモリが大統領になっても、間違いなく失敗する。失敗すれば、フジモリが悪いのはもちろんだが、フジモリは日系人だから、一蓮托生で日系人もすべて悪いことになり、日系社会への憎悪、迫害が高まるというもの。二世女性の個人的意見ではなく、ペルー日系人の代表的意見だった。彼女は続けて言った。

「フジモリさんはだいたい日系社会とつきあいがないんです。フジモリさんのお父さんからして、あまり日系社会とのつきあいがなかったんです」

彼女の心情、即ちペルー日系人の心情は、同じ移民である当方には痛いほどよくわかる。ブラジルでは日系人が大統領に立候補する可能性は、実際問題として当分ありそうにないが、もし現時点で立候補すれば、日系社会からの猛烈な反対論が出ることはたしか。

敵性国民、異文化民族であったが故に、第二次大戦中、日系社会が受けた弾圧や迫害の記憶は、まだ風化されたわけではない。アメリカの場合と異なり、人種差別、民族蔑視の風潮の少ないブラジルではあるが、それでも日本人のように、明らかに毛色の違う民族に対しては、間歇的にではあるにせよ、排日、反日の動きが起こることがある。

一九九二年、フジモリ大統領が強権を発動し、ペルー議会の機能を一時停止した時も、ブラジルの一流紙に、人種攻撃としか思えぬ、激烈な「黄禍論」「黄熱病論」が掲載された。残念ながらこれも現実なのである。一般に外国の日系社会では、日系人同志が肩を寄せ合い、お互い助け合って生活していくケースが多かった。日本人あるいは日系人であることに自分のアイデンティティをおく人たちである。これに対し数は少ないが、アメリカなりペルーなりブラジルなり、そこの国の人たちになり切って生きて行くことを志向した人たちもいる。この人たちは多くの場合、日本的思考をやめ、日本語も話さず、日系社会ともつきあわず、ひたすらその国の人間として生きる途を選んだのである。こちらを選択した人には比較的インテリ二世が多かった。不思議なことに、こういう生き方を選んだ日系人は、逆に日系人であることの制約を受けない故に、自分の才能を充分に発揮して活動している例が多い。フジモリ大統領もそうである。

こうなると「フジモリさんのお父さんからして日系社会とはつきあいがなかった」との証言は、重要な意味を持ってくる。フジモリさんは日系社会とかかわらなかったからこそ大統領になれたのだ。一世の日本人移民は、どこの国に移住しても、結局本当の意味で国境を越えることは出来ない。

それが次第に年月を経るにしたがい、国境を越えられる日系人が出てきたということなのだ。そして、この新しいタイプの日系人は、国境を越えてその国の人間になっても、自分のルーツは日本人であることをはっきり自覚していることが特徴なのである。

アメリカやブラジルのような、多民族、多文化の移民国家では「アメリカ人（ブラジル人）はかくあるべし」という、モデルパターン（理想像）を常に掲げておく必要があった。

戦前から戦後の一時期にかけては、メルティングポット（坩堝）論である。坩堝とは古めかしい表現だが、要するにミキサー論で、いくつもの異なる原料（民族）を投入して、原形をとどめぬジュース（アメリカ人、ブラジル人）をつくろうというもの。これもアメリカで起こり、後にブラジルに導入された論である。現在はミキサー論は後退し、代わってサラダボウル論が登場一般に浸透している。アレックス・ヘイリーの「ルーツ」が評判になり出してからのことだ。かんたんに言えば、黒人がアフリカ文化を、日系人が日本文化を継承して何が悪い。トマト、キュウリ、レタス、人参、ジャガイモなど、サラダはそのまま一つの容器に盛りつければ、素材の持味を生かしたままで、立派な料理になるではないかというもの。

〝出稼ぎ〟は送出国側が損

日本の近代における海外移民は、明治元年（一八六八年）ハワイに渡った「元年組」にはじまり、以後年を追って盛んになる。非合法の娘子軍「からゆきさん」も東南アジアや中国、ロシア方面に急進出する。移民が盛んになると、移民仲介を業とする移民会社が雨後の筍のごとく出てくる。中にはずいぶん怪しげで、いかがわしい会社もあり、移民と受入先とのトラブルが続出した。

そこで日本政府は一八九四年「移民保護規制」という法令を出し、移民斡旋業者を取り締まる。

この法令の第一条に「本令に於いて移民と称するは労働を目的として外国に渡航する者を言い、移民取扱人と称するは何等の名義を以てするに拘らず、移民を募集し、又移民を周旋するを以て営業する者を言う」と定義している。

今日、ブラジルの日系社会でもここ数年の出稼ぎブームにのって、旅行社と称する出稼ぎ斡旋業者が爆発的に増えた。何百という数である。おもしろいことに、一世紀前につくられた「移民保護規制」第一条の〝移民〟という言葉を〝出稼ぎ〟に置き換えたら、そっくりそのまま現在の日系社会に当てはまる。移民と出稼ぎがどう違うのか知らぬ。出稼ぎは生活の本拠を働き先に移さず、必ず帰るもの

で、就労期間も比較的短期である、などと定義してもはじまらぬ、戦前の日本移民は出稼ぎのつもりでブラジルに来て、結局帰れなかった。単身、短期が出稼ぎといっても、現在の例でもわかるように、家族同伴、長期に移行し、やがては定住になってしまう。出稼ぎと移民の境界など、本来ないのではあるまいか。ただ、英語ではイミグレーションとエミグレーションを一応分けている。イミグレーションは一つの国家体制から他の国家体制に移ることを言い、エミグレーションは一つの国家体制の中で場所を変えることを言う。ブラジルも外国移民が入ることをイミグラソン、内国移住をエミグラソンと言っていた。ブラジルは永年移民受入れ大国で、もっぱら受入れだけだったから、この呼称で良かったのだが近年のように逆に大量のブラジル人が外国に出稼ぎに行くようになると、出稼ぎに対してなんらかの呼称が必要になる。そこで現在は、外国も国内も関係なく、入る方をイミグラソン、出る方をエミグラソンにした。バイア州からサンパウロ州に入る内国移民も、外国から入る移民もイミグランテなのだ。反対に外国だろうと国内だろうと、出ていく移動はエミグラソンになる。つまり国内移住でも、受け入れるサンパウロにとってはイミグランテだが、送り出すバイアから見ればエミグランテなのである。

理屈が過ぎた。さて、海外への出稼ぎ、あるいは移住の

メリットは、個人的にはもちろん収入の増加である。技術の習得とか異文化の吸収といった面もないではないが、それは結果であって、より良い報酬を得られるというのがほとんど絶対的な条件になっている。では、出稼ぎを送り出す国のメリットは何かということになれば、これは失業対策と、出稼ぎ先から送られてくる外貨送金があげられる。日本に出稼ぎに行っている日系人が、ブラジルに送金または持ち帰る金は年間約二〇億ドルとの試算も出ているほどで、国にとっては大きな数字。出稼ぎの本人と家族が満足し、送出国も潤い、受入国も必要労働力を得て満足するなら、すべて良しでいうことはないようだが、ことはそう単純なものではない。出稼ぎに伴う家庭崩壊の危機や、社会の空洞化現象については別問題として触れないが、送出国と受入国とのバランスを見ると、明らかに送出国側の損なのである。優秀な人材が流出することで送出国の発展が遅れると、ますます人材の流出に拍車がかかる。大学を出ても職がなく、能力に見合う収入が得られないからである。

極端な例をあげると、ブラジルの国公立大学の授業料はタダである。国や州の教育予算の大きな部分は国公立大学に向けられる。国を背負って立つ優秀な人材を養成するためにとられた措置なのだ。一種の先行投資と言ってよい。そんな巨額の投資をしながら、大学を卒業してさっさと出稼ぎに行かれたのではブラジルが損をする。私立大学にし

ても事情は同じである。

これを受入国側から見れば、基礎学習の出来た、もう教育に金のかからない人材を得ることになるのだからこんなうまい話はない。

出稼ぎの長期化、定住化は避けられない情勢である。その結果、ブラジルの経済発展は鈍化し、先進国との格差はますます開いていく。本当はこういう人材は国内に温存しておいて、人的資源にならない貧民が出稼ぎに行くのが良いのだが、ブラジルの貧民を受け入れてくれる国など世界中どこにもない。

海外同胞にも冷たい日本人

ブラジル人の些事にこだわらぬ大らかさ、寛容さ、温かさ、明るさが、時としていい加減さの裏返しの場合であるにしても、それがブラジルの居心地の良さの大きな理由になっていることはたしかである。言うならば、休日にうつらうつらと惰眠を貪る心地好さである。これは政治のデタラメさ、経済のひどさ、治安の悪さのマイナス要因をカバーして余りがある。少々行儀は悪いが、人間味豊かなホスピタリティー、他人は他人、我は我で、余計な気を遣わ

ずに済む対人関係、やはりブラジルは住みやすい。ここが日本ともアメリカとも違うところなのだ。

筆者は一年に一度か二度、所用で日本に行く。もともと日本で生まれ、育った日本人だから、日本文化に対する違和感はない。何の抵抗もなく日本の生活に溶け込める。おそらく日本の日本人が筆者を観察しても、三〇数年ブラジルに住んでいる人間だと見破れる人はいないはずだ。しかし、日本に暮らして一〇日経ち、一五日経つとだんだん疲れてくるのである。肩が凝ると言った方がより適切かも知れぬ。ちょうど「気をつけ！」の号令をかけられっ放っしの気分になるのだ。そして日本でのスケジュールを終え、ブラジルに帰る成田の空港で、出稼ぎ帰りらしい日系人やブラジル人のブラジル語に接すると、緊張が緩むのである。日本の日本人は気がつかないと思うが、世界的に見て、日本という国はかなり特殊な社会である。こういう強固な同質文化の社会は珍しいが、困ることに、異質文化に対しては閉鎖的で、拒絶反応を呈することである。この頃は、国際的な交流も多いから、開かれた部分もないではないが、長い歴史の産物である国民性がそうかんたんに変わるわけがない。おかしなことに日本人の拒絶反応は、外国人だけではなく、海外に出た同胞にも向けられるのだ。ブラジル学とは離れるが、海外の日本人と日本との関係に触れてみる。

海を渡って外国に出た日本人は、昔から数えるとかなりの数になる。特に一六世紀から一七世紀前半の倭寇や朱印船時代には数万の日本人が南方に進出している。鎖国時代はさすがに漂流者以外はないが、明治に入るとどっと出る。ハワイやカリフォルニア移民の他にも南洋諸島、ペルー、ブラジル移民が多くなる。非合法の娘子軍、からゆきさん二万人も各地に進出する。海外に出た日本人の特性は、まず日本人だけのエスニック・グループを形成し、「自分は日本人である」という強烈なアイデンティティを、自分を取り巻く異文化に対するアンチテーゼとして持っていることだ。

もう一つの特性は、日本に対する求心性の強さである。日本への限りなき望郷の想いと、日本に対する愛国心は、ひとしく海外の日本人に共通している特性で、からゆきさんとて例外ではない。

ところが、ここが肝腎なところなのだが、海外日本人の日本に対する熱い想いとは逆に、日本の海外日本人に対する態度はごく冷淡なのである。なにも今にはじまったことではない。寛永の鎖国令は一六三二年から三九年まで五回にわたって出されるが、三五年の第三回鎖国令で、海外にいる日本人の帰国を禁じ、帰国した者は死罪と定めた。

キリシタンであろうがなかろうが、海外の日本人が帰国したら死刑にするというのだから、大変な法律である。こ

れで約二万人の日本人が帰れなくなった。また、大黒屋光太夫のケースも悲劇だ。

一七八二年、漂流してカムチャッカ近くの島に流された大黒屋光太夫の一行一七名は一〇年にわたるロシア滞在を余儀なくされ、やっとの思いで光太夫ら三人が帰国する。だが、幕府は光太夫を故郷には帰さず、江戸に軟禁して、一生幽囚生活を送らせた。外国の事情を喋られるのを怖れたのだ。

明治以後でも、ラグーザ玉のように、イタリア人と結婚してイタリアに渡ったために、日本への帰国を仲々認めて貰えなかった例もある。現代に入ってからでも移民に対する無責任さと冷淡さはあったし、現在でも長期駐在員に対する企業側の冷遇、帰国子女に対するいじめ、出稼ぎ日系人に対する蔑視がある。これらはすべて日本人の拒絶反応なのである。では何故日本人はもともと同根であるはずの海外日本人にまで拒絶反応を起こすのだろうか、どうやらこれは、海外の日本人が知らず知らずに身につける異文化の匂いを敏感に察知するからしい。海外生活三年や四年の駐在員なら、日本に帰っても適合出来るだろうが、駐在員の子弟の方はそうはいかない。人格形成期を海外で過ごせば、そこの文化に影響されるのは避けられない。出稼ぎ日系人のカルチャーショックも大変なものだろうが、妙案はない。ただ慣れるのみである。

〝喜捨精神〟の思わぬ効用

世界にはずいぶん数多くの日本企業が進出しており、駐在員の数も相当なものである。単身赴任もあれば、家族で行っているケースもある。駐在員は現地会社の代表であり、幹部であるわけだから、家族で赴任する場合などは、会社の体面もあって一応ちゃんとした住宅に住むし、会社の代表者ともなれば専用の運転手がつくことにもなる。また日本と違って外国の高級住宅は広いから、駐在員の奥さん一人では家の雑用が間に合わない。そこで女中を雇う。住込みの場合もあれば、通いもあるだろう。また週に一日とか二日とかの契約もあるだろう。だが日本の駐在員の奥さん方は、おしなべて女中の使い方が下手である。下手なのは日本式の「お手伝いさん」の扱いをするからである。

女中という言葉は差別語で、「お手伝いさん」と言わねばならぬそうだが、こういう妙にふやけた、得体の知れぬ言葉を使うからダメなのだ。「手伝う」というのは、主体であるAにBが協力することで、AとBは同格な横の関係である。しかし、雇主と使用人が同格などということはあり得ない。上下関係に決まっている。「女中」が使えないのは日本の事情も影響している。

現在、日本の平均的主婦は、掃除、洗濯、炊事、育児、

買物といった、外国の富裕階層にあっては女中のする仕事を自分でやっている。だから外国に来て女中を雇っても、女中にばかり仕事をさせるのが悪い気がして、掃除を手伝ったり、着物や食料をやったりして気を遣う。要するに貧乏性なのだ。こういうことをするから、女中にナメられ、本来女中を使うことでラクにならねばならないのに、逆に女中の来る日は精神的にも肉体的にも疲れはてる、という本末転倒の〝マンガ〟的現象が起こる。

その点、ポルトガル人は世界に冠たる奴隷使用の大ベテランだから、女中を上手に使うノウハウを身につけている。言うなればこれはキャリアの差である。偉そうなことを言ったが、筆者も日本人だから、この問題ではさんざん苦い目に遭っている。筆者はアマゾン時代、僻地の木材工場に赴任していた。日本の企業のことだから、現地に家族の住めるような住宅などつくってくれはしない。飯場の仮設小屋みたいな寮をつくり、幹部社員は全員そこに泊まるのだ。通いの女中が五人ほどいて、掃除、洗濯、炊事をする。

ある日一人の女中がやってきて、自分以外の女中が、毎日食料を持ち出していると密告した。ここは島だから、労働者は会社の舟で対岸の大陸側から通ってくる。終業のサイレンが鳴ると、少しでも早く帰ろうと桟橋に集まってくる。女中たちもなにやら布で包んだ荷物を抱えてやってく

る。

女中を脇に連れ出し、荷物を調べたら鍋に一杯の肉が出てきた。それもご丁寧にシュラスコ用に切り、塩、胡椒で味付けした肉なのだ。この女中たちは毎日味付け肉を持ち帰り、自分の家で焼いて売っていたのである。密告したのは仲間外れにされた女中だった。こういうことは女中だけでは出来ないはずだと調べたら、食料購買係がからんでいた。購買係はまず町で買物をする。三〇〇人の労働者の給食があるから大きな買物となる。小型トラックに食料を積んだ購買係は自分の家に寄り、自分の家族と親戚の家族に必要な食料を下ろす。肉は会社の必要量の倍ぐらい買い、会社に持ち込んで四人の女中に切り分けさせ、味付けさせる。こうして毎日一〇kgの肉を盗んで売っていたのである。

関係者をクビにし、新しく入れ替え、監視を厳重にしたら大分良くなった。だが一〇%か一五%ぐらいはどうしてもごまかされるのである。たとえ一〇%でも、ごまかされるのはおもしろくない。

そこで知り合いの大地主で、材木の供給もしているポルトガル人にこの話しをして、どうしたらごまかされないか聞いてみた。するとこの大地主、まったく呆れたという顔をして、こう言った。

「日本人は変わっているんだね。いいかい、どんな仕事で

も役得というものはあるんだよ。使用人がごまかすと言うけど、ごまかさない使用人なんているかね。それが度外れてひどかったら、怒鳴りつけもするし、クビにもするけど、一〇％や一五％なら寄付だと思って目をつぶるんだよ。連中は貧乏なんだからね」

ごまかしを見逃せと言うのだからびっくりしたが、同時に目の鱗が落ちる思いだった。

そうなのだ。これもイスラム流に言えば神へのザカート（喜捨）なのだ。使用人にいくばくかの喜捨をすることによって神の恩籠を受けられるのだと考えれば、それほど腹も立たないし、気もラクになる。以後はもっぱら「ザカート精神」でいくことにしている。

駐在員の奥さん方も「頭にくる……」などと言わず、ザカートと思うこと。そして余り口出ししないこと。その方が精神衛生にもずっとよい。

材木の好みにも文化の差

流れ千里のアマゾンの岸の大樹を伐り払い
筏造りて日の丸立てて墨田川まで流したい

希望に燃える二三才の青年、香山六郎が一九〇八年、笠戸丸の船中でつくった「新ラッパ節」である。その意気や

よしだ。

たしかにアマゾン材を何百本と伐って、筏に仕立てて日本に運ぶという雄大な構想はおもしろい。

しかし、折角の香山青年のアイデアに水を差すようで申し訳ないが、実現は不可能である。いや、別に筏を動かす動力がどうの、波の抵抗がどうのという、技術的な問題ではない。現実にアマゾン材の八割は水に沈むシンカー（沈木）で筏につくれない。水に浮かぶ木もないわけではないが、これは概して下級材、銘木類はほとんどすべて沈木と言ってよい。だからアマゾンでは銘木の運送はすべてバージ（はしけ）を使う。

アマゾン材を筏にして運ぶという発想は、木は水に浮かぶものとの常識が日本人にあるからである。無理もないことで、日本の木なら水に浮く。木曾の檜や杉の良材を天龍川や木曾川に流して運ぶ筏流しは、あの辺の風物詩だったし、東京深川の貯木場、木場も堀に材木を浮かべて貯木した。

日本の常識はブラジルでは通用しないが、逆に木に対するブラジル的感覚も、日本には通用しない。

精神風土が違うのである。

木材はどこの国でもその土地に生えている樹を利用している。この木はこう使うというように、その国独自の木の文化が培われてきたのである。これは文化の伝統だから、

そうかんたんには変わらない。筆者はアマゾンで材木を扱っていた時代イヤというほど、この精神風土の差を思い知らされたことがある。アマゾン材は種類が多く、銘木、珍木も沢山ある。用材として使われる木を出来るだけ集めてみた。見本として集まったのは、一五〇種ぐらいあった。

このころ、日本から木材の専門家がぶらりとやって来る。何代か続く、木場の古い材木屋の主人である。そこで収集していた木の見本を見せたら非常に興味を持って、ひとつひとつ丹念に鑑定していった。ずいぶん時間をかけた鑑定だったが「すばらしい木ばかりですが残念ながら日本では使えません」との結論を出したのにはびっくりした。この人の説明はこうだ。日本では檜、杉、松、カヤ、イチイなどの針葉樹をはじめ、広葉樹のカツラ、ホオ、シナ、セン、タモ、シオジ、ナラ、ブナ、ケヤキなど、使用する木材も用途も決まっている。しかし、資源が少なくなり、入手が難しくなったので、カツラなりセンなり、シオジなりの代用材、模擬材になる木を世界に求めている。

アマゾン材にはたしかにすばらしい銘木があるが、日本の材木の代用材にはならない。代用材にならなければ使えない。

「大体、色調と木目が日本人には合わないんです。例えばこのジャカランダ(ブラジリアン・ローズウッド)ですが、

これを薄くスライスして化粧合板にし、壁に貼るとします、もちろんすごい高級の壁が出来ます。ところが、日本人はまず一年で飽きがきます。神経の繊細な人なら三カ月保たないかも知れない。極端な場合は、気が狂いそうになると言うかも知れません。こういう赤系統の色調と、リップルマーク（波状紋）といわれる乱れ模様は、日本の風土に合わないんです。それにジャカランダは磨くと金属的な光沢が出るでしょう。これがまた神経に触るんです」

いや驚いた。こういう文化論を展開されると、たかが木材とも言っていられなくなる。この日本の材木屋は、ブラジルで内装材や家具材として賞用されているマホガニーにも、セレジェイラにも首をタテに振らなかった。マホガニーは赤すぎるし、セレジェイラは濃淡の木目がきつすぎると言うのだ。

ついでに言うと、筆者はこの材木屋さんをアマゾンからパラナのクリチーバに案内し、パラナ松（本当は松ではなく、ナンヨウスギ）の製材工場を見せたら目の色が変わった。

「これですよ、これ。この白木なら間違いなく日本人に合います」

どうやら日本人は白木のもつ清浄感に特別な関心を抱くらしい。神社の神殿、願かけの絵馬もすべて白木だし、すし屋のカウンターもそうだ。風呂桶もヒノキ、スギの白木

を自慢する。それに日本人はことのほか、木の温かさ、手になじむ感触、香りを大切にする。

そういえばマナ板もこれまではヤナギと相場が決まっていた。こういう白木文化を大切にする国は、日本以外は北欧で、北欧の家具は白木のままが原則である。これは針葉樹だからで、広葉樹の場合は、導管、仮導管が太いから、塗装しないとうまく仕上がらないということもある。

季節感乏しいブラジル人

ブラジルは国土が広いから、地域によって植生や地形がずいぶん違う。アマゾンの原生林と砂漠一歩手前の東北ブラジルのセルトンは、まるで異質である。中央ブラジルに多いサバンナ（セラード）と起伏の激しい海岸山脈やマンチケイラ山脈も共通点はない。マットグロッソの大湿原パンタナールもユニークな存在だ。このように、ブラジルの中でも場所によって景観は異なるのだが、いずれも日本では見られないというか、日本にはない異質の自然である。それにとにかく大きい。アマゾン河口の幅などは日本の川ならタテに入ってしまう。マットグロッソには三六〇度地平線が見渡せるところだってある。ブラジルの地形は地理学用語でいう、構造地形で、地殻の変動によって出来た大

地形だからスケールが大きい。こういう人間の視野をはみ出す巨大な自然に対すると、人間は圧倒され恐怖を感じてしまう。日本のような、花咲き鳥うたい、人間をやさしく包み込んでくれる母なる自然のイメージはない。それにブラジルの自然は四季がはっきりしていない。だから季節に対する感覚が鈍い。

そこへいくと、日本のように四季のはっきりしているところでは季節に敏感である。なにしろ春夏秋冬の四季のほかに、立春から大寒まで一年を二十四の節気に分けて、季節を区分しているのだから、日本人の季節に対する感覚は大したものだ。しかし、二十四節気ぐらいで驚いてはいけない。

一つの節気を更に三つに区分して、雀始巣（雀始めて巣をつくる）とか桜始開（桜咲きはじめる）とか、七十二候に分ける区分もあるのだ。二十四節気は一五日ごとだが、七十二候だと五日ごとの気候区分となる。二十四節気は中国から入ったものだが、七十二候は日本人が更に細分したもの。農耕民族であることと大いに関係があるに違いない。今でも日本人は衣更えの日になると、夏衣裳、冬衣裳に着替える。夏衣裳に衣更えした後、うすら寒い日があっても再び冬衣裳を着るようなことはしない。それが季節に対する礼儀だと心得ているようなところがある。

こういう感覚がブラジルにはない。ブラジルでもサンパ

ウロ以南は冬（六～八月）になって、南極からの寒波が北上するとかなり冷え込む。男性はオーバーコートなど、たいてい持っていないからやむを得ないが、おしゃれな女性はこの時とばかり、オーバーを着込んで街を歩く。ブラジルの場合、寒い日でも天気が良くて陽がさせば、日中の気温は上がりかなり暑くなる。夕方になればまた冷えるのだが、日中街を歩いている人の服装がこれまた千差万別なのである。オーバーやジャンパーに身を固め、手袋やマフラーをした人間から半袖シャツやTシャツだけの人間まで、色とりどり、各人勝手な格好で歩いている。ここでは日本のように季節を大切にする感覚はない。寒ければ着るし、暑ければ脱ぐだけのことである。これは風土の違いだからやむを得ない。「もののあわれ」は「うつろうものにこめた日本人の情緒」と解釈してよかろうが、四季のはっきりしている日本だからこそ出てくるので、ブラジルでは無理。

「花のいのちは短い」のが日本の相場で、桜はパッと散る。ところがブラジルの花はなかなかうつろわないから困ってしまう。イペーは八月から一一月まで、種類は違うが四カ月もだらだら咲くし、青い花を咲かせるジャカランダは一〇月から一二月まで二度咲き、三度咲きする。パイネイラの花も綺麗だが、一度咲くと一カ月以上咲いている。ノボタン科のクアレズメイラは、カルナバル後の四旬節ごろ満

開になるのでこの名があるのだが、たいてい年中、少しではあるが咲いている。

どうもブラジルの自然は「もののあわれ」や「無情」を感じにくい。むろんブラジルの動植物も自然の法則によって生きているから、季はあるに決まっているのだが、その年によるズレもあって、日本のようなわけにはいかない。

国民性や気質がその国の風土によっても醸成されることは良く知られている。ブラジル人は怠け者といわれるが、アマゾン地方や内陸低地のように酷熱で湿度の高いところでは実際問題として、肉体労働など出来るものではない。過酷な自然条件の下で土地を耕す作業は大変な苦痛を伴う。だからブラジルでは苦労の多い生産活動より、掠奪活動の方が好まれる。ブラジルの伝統的農法は掠奪農法で、決して土地を耕すことはしない。カルチベイト（耕作）の観念がなく、農具にも犂（すき）がはじめからなかった。もちろん文化である国民性は風土だけで形成されるものではないが、少なくとも一つの大きな要因であることもたしかなのだ。

歴史の珍事、王室のブラジル移転

新大陸の植民地の中では、アメリカの独立（一七七六

年）が一番早い。これに刺激を受けたラテンアメリカの各植民地で独立運動が盛んになり、一九世紀のはじめに革命運動は最高潮に達する。

そしてほとんどの植民地が一八三〇年までに独立する。植民地の独立は、宗主国、つまり本国の支配、収奪、桎梏を逃れることである。ラテンアメリカの場合、植民地の大半はスペイン領だったが、他にもブラジルを持っているポルトガルやカリブ海の島を持っているイギリス、フランスも宗主国もともと植民地は本国で富を収奪するために存在するもの。植民地を搾取し、重税をかけるのは当然なのである。その植民地に民主主義思想が芽生え、独立運動が起きることなど、本国としては到底認められない。この対立は構造的対立であり、妥協、和解の余地がない。だから植民地の独立は、どこでも武装峰起の形になって、本国軍との流血の対決となる。ラテンアメリカ諸国の独立は、ほとんどが血で購ったものである。それにこうした革命は一朝一夕に成功するものではない。最初立ち上がった革命運動はたいてい潰され、本国政府のために革命の志士は殺されるのが定石だ。

この独立運動が何度か繰り返されているうちに、革命勢力も大きくなり、機運も次第に高まってくる。そして、植民地側の革命機運が完全に醸成されたところで、シモン・ボリバルやホセ・サンマルチンのような独立の英雄が現

れ、一気に独立にもってゆく。場所による個々の違いはあるにしろ、このパターンは変わらない。ラテンアメリカ諸国の独立は、歴史のタイム・スケジュールにしたがって、シナリオ通りに進行したと言ってよい。ただし、ブラジルの例外を除けば、である。

そのブラジルも、一八世紀の末までは他のラテンアメリカ同様、パターン化された革命―独立劇が着々と進行していた。一七八九年発覚した、チラデンテスによるミナスの陰謀はその例だ。ブラジルではこの事件が独立運動としてはもっとも早い。しかし〝ミナスの陰謀〟は、チラデンテスをはじめとする独立指向派の仲間が、酒場などで半ば公然とブラジル独立を議論していただけで、具体的なプログラムがあったわけでもなく、また行動も起こしていない。それでも密告によって逮捕され、一七九二年、リオで絞首刑にされ、更に首と手足をばらばらにされ、首は〝ミナスの陰謀〟のあったビラリッカに晒された。明らかに見せしめである。この後も、一七九四年にはリオで、九八年にはバイアでも独立の運動が発覚している。バイアのは〝仕立屋の反乱〟と言われるが、首謀者の四人が処刑されている。

歴史にイフ（ｉｆ、もしも……だったら）は禁句である。しかし、ブラジルがこの時このまま推移していれば、他のラテンアメリカ同様の経過を辿り、一八二〇年前後に共和

国として独立していたことは間違いない。これは一〇〇％に近い確率で、そうなったと断言してよい。だが、実際はそうならなかった。一八〇八年、ナポレオンに追われたポルトガルのブラガンサ王室が、国を捨て、人民を捨て、一家一族あげてブラジルに逃げてきてしまったのだ。少々の人数ではない。ブラガンサ王室を形成する王族、貴族と側近、その家族一万五〇〇〇人が三〇隻の船に便乗、イギリス艦隊の護衛でブラジルに脱出したのである。

歴史の本ではこの事件を「ポルトガル王室のブラジル移転」と言う。まったくものは言いようである。ジュノー将軍がポルトガルに侵入、首都リスボンを占領するのが一八〇七年一一月三〇日、王室の脱出はその前日の二九日なのである。歴史家ロッシャ・ポンボの記述によると「三〇日午前九時、ジュノー将軍がリスボン入りをした時、脱出した王室の最後の船の煙が、今まさに洋上に消えんとするところであった」とのことだ。移転と言えば聞こえはよいが、なんのことはない、これでは敵前逃亡ではないか。こんな例は史上にない。まさに前代未聞、空前絶後の大珍事なのである。

ついでにその後のポルトガルに触れておくと、ナポレオン軍は一八〇七年一一月、一八〇九年三月、一八一一年四月と、三度にわたってポルトガル侵攻を行うが、残されたポルトガル軍はイギリス海軍の協力で懸命な防衛戦を敢

行、遂にフランス軍を追出し、祖国防衛に成功する。こうなると、第一回の侵攻で尻に帆かけて逃げ出した王室に対しての風当たりが強くなり、「卑怯な逃走」「恥知らずの脱出」などのレッテルが貼られることになる。

プラガンサ王室のブラジル脱出は、ブラジルの独立運動、革命運動も根底からひっくり返してしまう。ブラジルの混沌、矛盾の原型は既にここに見られるのである。

時代錯誤の再植民地計画

少しブラジル独立時代の歴史を概観してみる。歴史の解説は教科書風の記述にならざるを得ないから、おもしろくはないのだが、やはりここをきっちり抑えておかないと、今日のブラジルとの関連がわからない。

ナポレオンのポルトガル侵略などは、世界史的に見れば大した事件ではない。風雲児ナポレオンが行った数多くの冒険の一つにすぎないからである。しかし、侵略されたポルトガルにとっては大変な出来事だった。既に述べたように、まず王室一家がブラジルに逃げてしまう。これで一八〇七年の暮れから一八二一年五月までの一四年間、ポルトガルは王室不在の異常事態となり、国民の不信、不満を買う。実際、これはどう解釈しても王室側のだらしなさと身

勝手さとしか考えられない。

「ブラガンサ王室の安泰と引き替えにポルトガルを捨てた」とポルトガル国民が思ったのも無理はない。そこまでされても、ポルトガルの国民は王室に反旗をひるがえすことはせず、ブラジルから帰ってきた王室をすんなり受け入れてしまう。ここがスペインとポルトガルの性格の違いで、ポルトガルでは国民が人民軍を組織して人民運動を起こすことがない。ポルトガルがブラガンサ王朝を倒して共和制になるのは一九一〇年だから、ブラジルから帰った王室を九〇年間も戴いていたことになる。よほど辛抱強い性格を持っていると言えそうだ。

これが隣のスペインだと、かなり様相が違ってくる。ナポレオン時代のフランスとスペインの関係はなかなか複雑、微妙なのだが、一八〇八年、ナポレオンはポルトガルに続いてスペインにも侵攻する。スペイン、ブルボン王朝の内紛に乗じて、ナポレオンの兄ジョセフ・ボナパルトをスペイン王にし、スペインをフランスの支配下に置こうとした。ナポレオン軍は首府のマドリッドをまず制圧し、支配下に置く。これに対し、スペインの市民、農民は直ちに人民軍を組織し、フランス軍に抵抗、以後六年にわたり各地でゲリラ戦を展開、遂にフランス軍を追い出す。〝ゲリラ〟はスペイン語で小戦闘のことだが、この言葉はこの時の市街戦に由来している。スペインの画家ゴヤの作品「五

月二日」「五月三日」は、マドリッド市民の抵抗に対するフランス軍の残虐な報復場面が描かれている国民的名画。この絵はスペイン人民の果敢なレジスタンス精神と愛国心を表したものとして有名である。ただ、逃げ出さなかったスペインのブルボン王朝はフランスの侵略で壊滅してしまう。

さて、ブラジルに渡ったブラガンサ王室である。この時王位にあったのはドナ・マリア一世女王であるが、老齢の上、病弱だったので、息子のドン・ジョン王子が摂政になっていた。一八一六年ドナ・マリアの死去で、ドン・ジョン六世が正式にポルトガル、ブラジルの両王になる。ブラジルの初代皇帝は独立宣言をしたドン・ペドロ一世だが、ブラジル国王は父親のドン・ジョン六世で、ただ一人だけのブラジル国王である。

王と皇帝がどう違うのか知らぬ。おそらくその国の慣例的な呼称であり、本質的な違いではなさそうだ。とにかく、同じブラガンサ王朝でも、ポルトガルは王、ブラジルは皇帝を用いている。ドン・ジョン六世は一八二一年四月、二三年四カ月のブラジル滞在を終えて多くの側近と共にポルトガルに引き揚げる。ブラジルには二三才の摂政王子、ドン・ペドロが残る。このドン・ペドロが翌一八二二年九月七日、サンパウロのイピランガの丘で〝独立か死か〟と叫び、歴史的な独立宣言を発してポルトガルから離

脱、ブラジル帝国初代皇帝になったのはよく知られていること。父親のドン・ジョン六世が帰国してから僅か一年半で、ポルトガルとブラジルの仲がこれ程険悪になったのは、どこに原因があるのだろうか。これは、無能無策のポルトガル王室が採用した、時代錯誤の「ブラジル再植民地政策」が原因となっている。

ポルトガルは一七世紀の終わりから発見されたブラジルの金で、財政的に豊かになる。一八世紀は金の世紀で、ポルトガル史上もっとも威信に満ち、文化面でも充実した時代となった。ドン・ジョン五世（一七〇七年～一七五〇年）の全盛時代もポンバル侯爵の宰相時代（一七五〇年～一七七七年）もブラジルからの収奪の上に成り立っていたのである。本国に引き揚げたポルトガル王室は、財政の窮乏状態にびっくりする。ナポレオン軍に荒らされたのだから、それも当然なのだが、この窮状を打開するにはブラジルを再び植民地にして、収奪する以外にないと考えた。まったく単細胞的発想である。そしてブラジルにいるドン・ペドロに召還命令を出したのである。時計の針を逆に廻そうというのだから、どだい無理なハナシ。

皇帝の行動原理は王家の存続

三六才で若死にするのだが、ドン・ペドロ一世ほど波乱

に満ちた生涯を送った君主はポルトガルにはいない。一〇才でポルトガルからブラジルに移り、一九才でポルトガルとブラジルの王子になり、二三才でブラジルの摂政王子、二四才でブラジルを独立させ、初代皇帝となる。ポルトガルの支配と圧政を跳ね除け、ブラジルの独立を達成したということで、進歩的な開明君主の印象を与えるが、どうしてどうして、実際はガチガチの専制君主。

皇帝は一八二三年六月、ブラジル帝国憲法を制定する議会を招集する。この時選ばれた代議員は、大地主、役人、軍人、大商人という、ポルトガル系の支配階級ばかりで、保守、反動勢力だけで議会が固められる。一八二四年四月、初のブラジル憲法が発布されたが、この憲法は絶対君主制を強く打ち出したもので、司法、立法、行政の三権のほかに統帥権（Ｐｏｄｅｒ　Ｍｏｄｅｒａｄｏｒ）のあるのが特徴である。四権のうち、皇帝に属するのが行政権と統帥権で、この二権を占有することにより、皇帝は議会を通過した法案に対しても拒否権を持つことができた。また、下院は有資格者による直接選挙で選ばれるが、上院は皇帝の命令による終身、世襲制の議員なのである。これでは権力が皇帝に集中するのは当然。皇帝独裁体制に対してブラジル派から強い反対が起きる。皇帝はこれを強硬に弾圧、ブラジル派のジョゼー・ボニファシオ議員らをヨーロッパに追放してしまう。こうした独裁政治に対する反対

運動も発生、一八二四年七月には、独自の共和国を目指した、東北諸県による「赤道連合」の独立運動なども起きるが、ドン・ペドロはあくまで強気で、首謀者を捕え処刑してしまう。こうした状況下の一八二六年三月、皇帝の父親であるポルトガル王ドン・ジョン六世が亡くなる。そして次のポルトガル王に選ばれたのが、なんとブラジル皇帝のドン・ペドロだった。

権力欲の権化のようなドン・ペドロはこれを受け、ブラジルに居ながらポルトガル国王ドン・ペドロ四世として即位する。これにはさすがに側近から強い反対が起きた。

ブラジルの独立は、本国ポルトガルの支配、くびきを逃れるためである。ブラジル皇帝がポルトガル国王を兼ねたのでは、いったいなんのためにブラジルが独立したのかわからないというのが反対の理由。この理屈にはドン・ペドロも納得せざるを得ず、すぐに退位するのだが、その前にポルトガルに憲法を押しつけ、自分で裁可してしまった。転んでもタダでは起きない人である。憲法は一八二四年のブラジル憲法とほとんど同じもので、自由主義精神のかけらもない、おそろしく反動的な憲法だった。もちろん、王の統帥権はついている。ドン・ペドロは自分が退位する代わりとして、僅か七才の長女マリアをポルトガル女王とする。これがドナ・マリア二世である。七才の幼女ではどうにもならぬ。そこでドン・ペドロは自分の弟のミゲルをマ

リアと結婚させ、摂政とした。叔父、姪の関係だが、とにかく七才なのだから形式だけの結婚だった。ところが、ドン・ペドロも相当な策士なのだが、ドン・ミゲルもしたたかだった。二年間は摂政として政務をとったが、そのうち摂政の地位に満足しなくなる。そこで一八二八年、九才のマリア妃を離婚してブラジルに追い返し、自分が勝手にポルトガル王になってしまった。このドン・ミゲルの国王時代は一八三四年まで続く。

ドン・ペドロにしてみれば恨み骨髄である。一八三一年四月七日、ドン・ペドロはブラジル皇帝を五才の末子ペドロ二世に譲り、ブラジルを去る。余りの専制ぶりに側近からも愛想をつかされ、追い出されたのだ。ヨーロッパに渡りブラガンサ侯爵を名のったドン・ペドロ一世は、弟のミゲル国王追い落としに心血を注ぐ。ミゲルとの抗争は一八三四年まで続くが、遂に勝ってミゲルを島流しにする。大した執念である。そして弟を島流しにした時点で、再度ポルトガル国王ドン・ペドロ四世に戻り、すぐさまその地位を一五才のドナ・マリア二世に渡す。既に重い肺病を患っており、譲位直後の一八三四年九月、三六才で波乱の生涯を終える。ポルトガルの正史には一八二六年から三四年までを「ドン・ペドロ四世の治政」としている。ドン・ミゲルはＵｓｕｒｐａｄｏｒ（強奪者）であり、正式の国王とは認められないということらしい。いずれにしても、ド

ン・ペドロ一世の一生を貫いた行動原理は、ブラガンサ家の存続であり、ポルトガルやブラジル国民などは眼中になかった。

ブラガンサ家を主体に考えれば、ポルトガルとブラジル両国の王となることも別に矛盾ではない。お家の伝統に忠実だっただけかも知れぬ。

強運の持主ペドロ一世

それにしても、ドン・ペドロ一世は精力絶倫でこれにはつくづく感心させられる。一八一七年、一九才の王子ペドロはまず、オーストリアの王女レオポルジーナと結婚する。レオポルジーナの方が一才年長なのだが、彼女は九年間に七人の子供を産む。この末子が後のドン・ペドロ二世になるわけだ。ところがレオポルジーナ妃は一八二六年、僅か二九才の若さで亡くなってしまう。後妻に来たのがドナ・アメリアで、こちらの方はナポレオンの最初の妻だったジョセフィーヌの孫に当たる。このアメリア妃は一子しか産んでいない。しかし、ドン・ペドロは、既にレオポルジーナと結婚した直後から、ドミチラ・デ・カストロという、公認の愛人をサン・クリストボン宮に住まわせており、ドミチラとの間に五人の子供が出来ている。ドン・ペ

ドロはドミチラに侯爵を授爵し、サントス侯爵夫人と名乗らせ、秘書にしてしまった。このサントス侯爵夫人の問題は、側近の間でも評判が悪く、ドン・ペドロがブラジルを去る一つの理由になっている。更にドン・ペドロは、フランス女性のノエミ・チェリとの間にも五人の子供を設けており、判っている子供だけでも計一八人に達している。

ドン・ペドロは一八三四年、三六才で亡くなるのだが、早逝して一八人だから、これが息子のドン・ペドロ二世のように、六六才まで長生きしたら、徳川一一代将軍、家斉の五五人といい勝負だったかも知れない。ドン・ペドロ一世が「ブラジル独立の立役者」であり「植民地解放の英雄」と言われるのは、多分に後世つくり上げられた虚像である。しかし、このイメージは、イピランガ独立記念公園内に、独立を記念したパウリスタ博物館と、壮大な独立記念塔をつくることによって、すっかり国民に定着した。今やここはサンパウロの名所である以上に、ブラジルの〝聖域〟で、毎年九月七日の独立記念日の式典はここで行われるし、いろいろな国家の式典や行事もここを舞台にすることが多い。一八八五年に完成したネオクラシック風の博物館には、画家ペドロ・アメリコの名作「イピランガの雄叫び」も展示されている。例の、ドン・ペドロが剣を頭上に上げ〝独立か死か〟と叫んでいる情景である。これはもう、名画というより聖画と言った方がふさわしい。独立記念塔の

方も、規模の壮大さ、彫刻の精巧さで、まずブラジル随一の銅像だろう。イタリアの彫刻家エトーレ・シメネスの手になるもので、一九二二年の独立百年祭を記念してつくられたもの。一三二の銅像を組み合わせ、中央に馬に乗ったドン・ペドロがいるのは言うまでもない。記念塔の地下は霊廟になっていて、ドン・ペドロの遺骨も祀られている。

つまり、他の南米諸国における植民地解放の英雄シモン・ボリバルやホセ・サンマルチンの役をブラジルではドン・ペドロ一世が担っているというわけだ。別にケチをつけるつもりは毛頭ない。ブラジルのような新興国家で、しかも多民族によって構成されている国では、人心を収攬するためには、何か求心性の強いシンボル、象徴を必要とする。国旗や国歌も国のシンボルとしての性格を持っているが、やはり〝救国の英雄〟という、具体的人物が存在しないと迫力に欠ける、そこで起用されたのがドン・ペドロ一世なのだ。実像の方のドン・ペドロ一世が色好みであろうが、専制君主であろうが、ポルトガルの王になろうが、あるいはブラジル国民から愛想を尽かされた人物であろうが、それは関係ない。

ポルトガル本国の召還命令を断固拒否し〝独立か死か〟と叫び、ブラジルを独立させたという、その事実だけに脚光を浴びせればよいのである。かくて、ブラジル建国の神話が出来上がる。とはいうものの、ドン・ペドロ一世だけ

で、この神話が出来たわけではない。これは二代目のペドロ二世の人柄の良さに負うところが大きい。

いくらブラジル人がお人好しでも、ドン・ペドロ一世のように、勝手なことばかりして国民に愛想を尽かされ、国外追放になった人間を、そのままでは英雄にはしない。それが復権出来たのは、五才のペドロ二世がブラジルに残り、九年の摂政期間を終え一四才で二代目皇帝に就任、五〇年の長きにわたって一応の善政を敷き、国民を納得させたからこそ、帝政が評価され、ペドロ一世の神話も出来たのだ。考えるとペドロ一世は強運の持主で、ブラジルでは独立の英雄になった上、息子の二世が帝政崩壊まで五九年も在位した。

一方ポルトガルでは、自分自身も王位に就いたし、その後は長女のマリア二世、その次はマリアの息子ペドロ五世というように、一九一〇年の共和制まで、ブラガンサ王朝を自分の直系で連続させることが出来た。

まかり通った奴隷密輸

一八八八年五月一三日、ドン・ペドロ二世の摂政イザベル王女の署名によって発令された奴隷解放令をレイ・アウレア（黄金令、輝かしき法令）と言う。たしかに輝かしき

法令ではあるが、こう呼ばれるのは、ドナ・イザベルが署名に用いたペンが、宝石をちりばめた黄金のペンであったことにも由来している。誰の演出かは知らぬが、なかなか手の込んだやり方をする。他国の歴史を一切知らずに、ブラジルの奴隷解放のくだりを読むと、ブラジルはなんと民主主義の進んだ国かと思ってしまう。イザベル王女の署名した奴隷解放令など、その最たるものだ。この法令、たった二条で簡にして要を得ている。

第一条、ブラジルにおける奴隷制消滅を宣言する。
第二条、これに反するいかなる規定も無効とする。

「この法令により、七二万人の黒人がその手足から重い鉄鎖を解かれ、喜びと感激と涙とともに、解放令に署名したドン・ペドロ二世の王女ドナ・イザベルを〝レデントーラ〟（救世王）と絶叫し、狂喜した」のだそうだ。これだけ読むと、奴隷解放がいかにブラジル国民に受け入れられ、解放令に署名したイザベルやドン・ペドロ二世の人気はすごかったのだな、とつい思ってしまう。ところが実際には、翌年の一八八九年一一月に共和革命が起き、ペドロ二世もイザベル王女も国外追放になり、ヨーロッパに亡命する。それから二年後、ペドロ二世はパリのホテルで淋しく客死する。おやおや一体どうなっているんだと、頭が混乱

してしまう。あの一年前の国民の熱狂的感動と国外追放はどうもすっきりと結びつかない。言うならば、これもドン・ペドロ一世の虚像と実像みたいなもので、冷静に歴史を分析してみれば、ブラジルの奴隷解放などは、時期的に世界でもっとも遅く、また協定違反や密輸の連続で、最低、最悪だったのである。少しここのところを眺めてみよう。

一七世紀から一八世紀の前半にかけ、イギリスが、イギリス／西アフリカ／西インド諸島を結ぶ三角貿易で巨利を博したことは周知の事実。いわゆる「奴隷貿易」である。それが一八世紀後半になると、アメリカの独立（一七七六年）を契機として、奴隷貿易や奴隷制そのものに対する反対運動がイギリスで起こってくる。特に積極的、精力的に運動を展開したのはクェーカー教徒だった。イギリスで「奴隷貿易廃止法」が制定されたのは一八〇七年、「奴隷廃止法」の方は一八三八年に成立している。どちらも世界で一番早い。

これに対してブラジルは、それぞれ一八三一年と一八八八年で、世界でもっとも遅い奴隷解放である。ブラジルの特色は、一八三一年の奴隷貿易禁止法以後に、密輸として大量の黒人が入ったことである。コーヒーの世界的需要が高まる中、ブラジルのコーヒー園労働者としての黒人奴隷の需要はほとんど無限だった。「必要なんだから仕方ない

だろう」という、ブラジル的な官民なれ合い方式で、年間三万人から六万人の黒人が〝非合法〟に密輸された。

怒ったのは世界の警察官を任ずるイギリスである。一八五〇年四月、奴隷輸送の疑いのある船舶を拿捕するため、ブラジル領海内にイギリスの軍艦を派遣することを通告してきた。ブラジルは反発し、一触即発の空気になったが、いくらブラジルが強気でも、世界最強のイギリス海軍に立ち向かうわけにはいかない。しぶしぶ圧力に屈し、一八五〇年九月、奴隷貿易を海賊行為と見なす法律を発令した。これでさしもの密輸王国ブラジルも、奴隷密輸が激減するが、それでも根絶するまでには五年もかかっている。奴隷の密輸に関してブラジルはとにかくしぶとい。ブラジルが世界のどん尻で奴隷解放した直後に帝政が崩壊し、共和制に移行したのは、旧奴隷層以外に帝政を支持する基盤がなかったからである。軍部内には以前から共和主義思想が台頭していたし、教会も皇帝とは仲が悪かった。

また、それ以上に、貴重な労働力である奴隷を奪われた地主の恨みはひどかった。奴隷の価格は当時の米ドルで、一〇〇〇ドルを超えていたのである。大変な財産だが、帝国政府はまったく補償しなかったし、またその財源もなかった。まあ、帝政は倒れるべくして倒れたのだが、皇帝一族を国外追放にしたのはいきすぎだろう。ドン・ペドロ一世と違ってブラジル生まれのペドロ二世やイザベル王女

はブラジル人なのである。リオのサン・クリストボン宮に住ませるのは無理だろうが、ペトロポリスの離宮に移ってもらい、終生年金を払って、政治と無縁に優雅に暮らしてもらった方が良かったような気がするのだが……。

多大な思恵、二人の画家

ブラガンサ王朝のブラジル移転については、かなり辛口の批評をしたが、王室のブラジル移転によって生じたメリットもむろんある。その最たるものは学術、文化面における貢献だろう。それまでの植民地ブラジルは、本国の収奪のためにのみ存在する土地であり、学術とか文化は無縁だった。

スペインの植民地と異なり、大学はもちろん、一軒の印刷所すらなかった。しかし、一万五千人もの王室、貴族や側近メンバーが大挙して移転したとなればそうはいかない。王室にふさわしい体裁を整える必要が出てくる。近衛兵も軍楽隊もいるし、それには士官学校もつくらねばならない。子弟教育の学校も病院も必要になってくる。音楽、絵画、彫刻、建設のアカデミーもいるし、印刷所も当然必要となる。こうして王室移転後のブラジルは雨後の筍のように各種アカデミーが設立され、これがブラジルにおける

学術、文化の発祥につながる。

この現象をとらえて、ブラジルのルネッサンスと評する人がいるが、これは違うだろう。ルネッサンスは市民運動であり、学問、芸術の独立や個人の思想、信仰の自由をめざした社会革命の運動で、近代社会への萌芽の動きなのだ。ブラガンサ王室のブラジル移転により、学問、芸術が振興したのは事実だが、これはいわば王室を飾る衣裳や装飾品として出発したもので、ルネッサンスとは関係ない。

さて、ブラガンサ王室は学術、文化の振興策を掲げてみたものの、慌てて逃げてきたものだかち、いろいろな教師になる人材が当然不足した。そこで後の明治維新後の日本政府が採用したように、外人のお抱え教師とか、学問調査の専門家を招待して、この任に当たらせる。こうしてブラジルに招待された外人専門家の中に二人の画家がいた。一人は王立芸術アカデミーをつくるために来たフランス芸術教師団の一員であるジェーン・バチスタ・ドブレー（一七六八～一八四八年）で、この人は一八一六年ブラジルに来て一五年滞在した。もう一人はブラジル学術調査隊のデッサン担当として来たドイツ人ヨハン・モリッツ・ルゲンダスで一八二一年から二五年までと、一八四五年～四六年の二回にわたってブラジルに滞在している。

ドブレーもルゲンダスも知的好奇心が強かったから、ブラジルの風景、風俗、人種、職業などについて、片っ端か

ら描きまくった。二人が描き残した多くの絵のおかげで、ブラジルははかり知れない恩恵を蒙る。絵は視覚から捕らえるから良くわかる。例えばドン・ペドロ時代の大臣や高等裁判官の制服について、言葉で説明するのはほとんど不可能だが、絵なら瞬時に理解出来る。二人の画家のうち、どちらが後世のためになっているかと言えば、ドブレーの方だろう。ルゲンダスは調査隊長が精神異常になったため、現地解散となり、以後は自費で旅行しなければならなかったし、絵も散佚しているのが多い。ルゲンダスの絵は奴隷を描いたものに傑作が多い。「船艙の奴隷」「新来の奴隷」「リオの黒人女」「農場の黒人男女」などはこの人の代表作である。特に「新来の奴隷」は、豊満な乳房を晒け出した若い黒人女に、白人の監督が好色の一瞥をくれている絵で、まさに出色の出来栄え。

ただ、ルゲンダスの場合、風景の点景としての動物の描き方に問題がある。ジャガーだか犬だかわからないし、魚かワニかの区別も判然としない。ヒラメには両側に目がついているし、飛んでいるトリの種類もわからない。もう一つ気になるのは、海岸山脈の森の中にフラミンゴが描かれていることである。この当時、フラミンゴが本当にリオに飛来した可能性もないことはないのだが、現在の動物分布の常識からするとあり得ないことなのだ。ルゲンダスは絵はうまいのだが、動植物にはあまり関心がなかったのかも

知れない。そういえば彼の描いたインジオに紅毛碧眼があったのにはびっくりした。

その点、ドブレーの絵はすべてに観察が行き届いている。皇室のお抱え絵師だから、皇室の肖像画も多く「レオポルジーナ妃の到着」などの名画もあるが、ドブレーの本領は路上観察者としての才能だろう。奴隷の物売り、敷石工事のやり方、製材の仕方、黒人の着物、子供の背負い方など、とにかく風俗描写がうまい。それにドブレーは動植物、果物、インジオの道具なども詳細に観察して描いている。

一九世紀初期のブラジルを知る意味において、二人の絵にまさるものはない。二人共、解説つきの画集を出版している。ドブレーのは〝ブラジル、歴史と絵の旅〟でルゲンダスのは〝ブラジル絵の旅〟である。どちらもブラジル語に翻訳されており、画集だけのと、紀行文つきの二種類がある。

茶栽培はブラジルが最初

ルゲンダスの画集の中に、リオでシナ人がお茶を栽培している絵がある。リオ低地の森の中で、シナ服を着て独特のクーリーハットをかぶったシナ人が二人描かれている。

一人は黒人の労働者を指導して茶の苗を植えており、もう一人は政府の役人とおぼしき二人の白人に何やら説明している。

一人の役人は椅子に座って図面をひろげているが、高官らしく、従者が後から日傘をさしかけている。この絵の標題は「シナ人による茶の栽培」（リオ植物園にて）となっている。何年に描いたのかの記入はないが、ルゲンダスの第一回目の滞在時だから、一八二一年から二五年までの間であることはたしか。

ブラジルにおける茶の栽培の歴史はそんなに古いかと、改めて調べたら本当だった。ブラジルは新大陸はもとより、中国、インド、日本以外で茶を栽培した最初の土地なのである。後に茶の産地として知られるジャワ、スマトラ、セイロンなどの東南アジアよりも早い。もっとも、一六八四年にドイツ人が日本茶をジャワに持ち込んだことがあったが、これは失敗している。

茶は一六世紀からヨーロッパで知られるようになり、一七、一八世紀と急速に世界中に普及する。

初期にはオランダの東インド会社が貿易を独占するものの、一七世紀後半からはイギリスが専売権を獲得、巨利を得る。たかだか嗜好飲料にすぎないお茶なのだが、これがどうして、歴史的にいろいろな、それも大きな事件を引き起こしている。アメリカ独立のきっかけとなった、ボスト

ン茶会事件（一七七三年）もそうだし、史上もっとも非人道的動機の戦争といわれるアヘン戦争（一八四〇年～四二年）も、イギリスが買いつけ中国茶の代金として、アヘンを押しつけたことから起きたものなのだ。

ブラジルに茶の種子が入ったのは一八一二年、ドン・ジョン二世の時代。もちろん王室政府関係者は、茶の世界的地位と商品価値を熟知していた。

そもそもお茶がヨーロッパにひろまったきっかけは、一六六二年、イギリス国王チャールス二世に嫁いだポルトガル、プラガンサ家の王女カタリーナ（キャサリン）が中国茶をイギリス王室に持ち込み、喫茶の風習を伝えたからなのである。

ブラジル王室政府の茶栽培にかけた熱意は大したもので、リオの植物園に専用の茶畑をつくり、一八一四年には、栽培、製茶のためにシナ移民導入を開始する。一八二四年までに入ったシナ移民の数は約三〇〇人に達したが、定着率ははなはだ悪く、茶栽培や製茶の作業を嫌い、行商人や料理人になるものが続出した。また、茶の栽培の方もあまりうまくいかなかった。育つことは育つのだが製茶しても香りもなく、味もなんとなく刺激のある、いがらっぽい味になってしまうのだ。そこで、リオから国内各地への移植がはじまる。各地といっても、茶の栽培は気候条件が難しく、どこでもというわけにはいかない。選ばれたのは

サンパウロやミナスの高地である。中国種だから涼しい土地を好むとされていた。

サンパウロ州でいえばアチバイア、ブラガンサ、サンロッケ、イツーやサンパウロ市内のモルンビー、アニャンガバウの丘など。市の中心地にあるビアヅット・デ・シャー（お茶の橋）の名称はその時代の名残り。今の市立劇場側の丘が一面の茶畑だったのである。

一八七〇年代になると、ブラジル茶の品質も向上、一八七八年に開かれたウィーンの品評会では、インド産を抜き、中国産につぐ評価を得る。とはいうものの、品質の良い茶はごく少量で、栽培本数こそ二〇〇万本を超すものの、輸出できる製品は年間三トンに満たなかった。このためブラジルの茶は次第に衰退していく。現在ブラジルは年間四万二〇〇〇トンの茶葉を生産、輸出も盛んに行われている。一世紀ぶりに盛り返したわけだが、ブラジルの茶再興に果たした、日本人移民岡本寅蔵の功績は大きい。

奈良県出身の岡本は、大正八年（一九一九年）サンパウロ州の海岸地帯、レジストロに入植する。

ここで岡本は在来種の茶を品種改良、まずまずの品質の紅茶をつくるが、世界に出せるものがつくれなかった。研究熱心な岡本は、一九三四年、日本に里帰りし、茶の挿木法を習得する。そして日本よりの帰途、セイロンに立ち寄り、リプトン紅茶の工場を見学、この際にアッサム種の茶

種一〇〇個を懐中にして持ち出す。最初から狙ったわけではなく、まったくの偶然である。港では食パンをくり抜いた中に隠し、監督の厳重なチェックを逃れて乗船、船中で発芽させ、発芽した六一本の苗を無事ブラジルに持ち帰る。この六一本の苗と、岡本が日本で習得した挿木法がブラジル紅茶の発展のもとになる。岡本寅蔵はブラジル茶業界に多大な功績を残し、一九八二年八九才で生涯を終える。

〝現地調達方式〟の植民者

ブラジルに比べて、ポルトガルがはるかに小さい国であることぐらい誰でも知っている。では具体的数字で示したら、ポルトガルはブラジルの何分の一なのだろうか。これを計算してみたら答えは九二・五分の一だった。つまり国土面積八五〇万平方kmのブラジルは九万二〇〇〇平方kmのポルトガルの九二・五倍あるということである。ブラジルの小州サンタ・カタリーナ州よりもまだ小さい。ポルトガルが小さいのは国土だけではない。人口も少ないのだ。現在、ポルトガルの人口はやっと大台の一〇〇〇万人にのせたが、ブラジルを発見した当時は一〇〇万人とも、一二〇万人とも言われている。この数字は、現在のブラジルの日系人の人口一三〇万人より少ない。サンタ・カタリーナ州

より小さい国土で、僅か一〇〇万の人口のポルトガルが、大航海時代のトップを切って冒険に乗り出したのだから大したもの。まず世紀の偉業、破天荒の大事業と言ってよかろう。

インドを抑え、香料列島を握り、マカオを手中にし、極東の日本にまで乗り込んで交易を独占した。その上、新大陸のブラジルまで経営したのだから立派なもの。ただしポルトガルはどこでも、人間の不足に悩む。

筆者はポルトガルの抱える歴史的な課題は、人口問題だったのではないかと考えている。伝統的な奴隷制度も、人口政策の一環として捉えると理解が早いし、ブラジルにおけるインジオ狩りも同様である。大航海時代に海外に出たポルトガル人の生活様式は、すべて「現地調達方式」で、衣食住から女性まで、すべて現地でまかなった。本国からの調達が望めないのだからやむを得ない。ブラジルに来たポルトガル人は、ハンモックで快適に寝る方法をすぐ覚え、マンジョカ（キャッサバ）の品質について、インジオ並みの識別眼を持ち、平気でインジオ女性を抱いた。

ブラジルにおける初期の植民が海岸に限られ、奥地に入ることが禁じられていたのも、奥地に植民地をつくるほどの人数がいなかったからで、海岸なら、インジオの襲撃を受けても船で逃げられると考えたのだ。ここがスペインと違うところで、面積五〇万平方km、一五〇〇年当時で六五

〇万人のスペインはやはり大国だったし、なにより世界一の海軍力を有していた。

スペインとポルトガルの違いの例として、よく引き合いに出されるのが、新大陸の町づくりである。スペイン領の都市は、どこでも最初から都市計画にもとづき整然と幾何学的につくられているが、ブラジルの町は無計画で、雑然と、勝手気ままにつくられているというもの。たしかに、性格の違いもあるのだろうが、それよりも町づくりの専門家がブラジルにはいなかったのである。地形に合わせて適当に家をつくっていくから、家並も道路も不揃いで曲がりくねるのは避けられない。

ところで、これはかなり以前から気づいているのだが、ブラジルの基層文化はポルトガル色の強い、ルーゾ・ブラジル文化であるにも拘らず、食べ物というか、料理にポルトガル固有のものが少ない。ポルトガル料理といえば、バカリャウ（干鱈）が真先にあげられるが、本来ポルトガル固有とは言えない鱈料理を除いたら、ポルトガル料理などは、ブラジルの中でごくマイナーな料理になってしまう。これはどういうことかと言えば、明らかにポルトガル食、ポルトガル料理をつくる人間がブラジルに少なかったことを意味している。ブラジルにおいて、ポルトガル人の食事を用意したのは、最初はインジオ女性であり、ついで黒人女性に代わる。ポルトガル系女性は数が少なかったし、ま

た自分で食事をつくる習慣もなく、黒人女性に任せた。

インジオの場合、マンジョカ（キャッサバ）やトウモロコシ、各種のイモ、マメなど、食品素材としての作物は栽培していたが、それを料理にまで高めるほどの文化はまだ持っていなかった。したがってインジオの食べ物は、マンジョカのすべてを、毒も含めて完全利用したことや、保存食として開発したピラクイ（魚粉）のようなユニークな食品をつくったことで、料理としては大したものではない。インジオは、ブラジルにこれだけ多い油料植物を利用して油をとることをしなかった。

そのためインジオの食べ物には油で揚げたり、妙めたりするものがない。

そこへいくと、アフリカの黒人は紀元前五千年前から、ニゼル河流域に発生した、サバンナ農耕文化の長い歴史があり、料理があった。ブラジルでもこの伝統が充分に活かされる。なにしろ料理は黒人女性の担当なのである。この結果、黒人料理の伝統とバイアの風土がミックスした「アフロ・バイア料理」がブラジル料理の典型となる。食生活や料理に果たした黒人の役割は非常に大きい。

不可欠だった黒人料理人

黒人にはたしかに料理の才能がある。東北ブラジルの砂

糖キビ単作地帯に入れられた黒人奴隷は、劣悪な環境の中で、自分たちの体力保持のために栄養価の高い料理をつくっている。バイア料理に代表される「アフロ・ブラジリアン料理」は、基本が奴隷料理だから、一つの鍋を使っていろいろな材料を煮るごった煮で、どろどろの濃いスープにするのが特徴である。奴隷という身分では、いくつもの鍋を使い分けて調理するような贅沢は許されない。また、食べる時でも皿を何枚も使うわけにはいかない。例外はあるだろうが、一つの鍋、一枚の皿というのが、はじめから奴隷料理に課せられた制約なのである。こういう状況の下では、料理は当然「ごった煮」的なものになってくる。

バイア料理のシンシン、カルルー、バタパを筆頭に、フェイジョアーダ、サラパテル、マニソバ、ペイシャーダなど、みなそうである。

ブラジルの「ごった煮」料理は、いろいろな素材のうま味や香辛料が混然と溶け合っているから、食べて大変うまい。ただし、用いる油や香辛料がどれも似たりよったりだから、味の方も似通ってくるのはやむを得ない。日本のようにひとつひとつの素材の持味を生かすことに主眼を置く料理とはまさに対照的。しかし、これはこれで結構な味である。こうした食べ物は、いずれも強い、というか、しつこい料理であることは共通しているのだが、その中で一番強いのはバタパかも知れない。

つくり方を紹介してみよう。

まず、マンジョカの粉を水で溶いたものに、タマネギ、ニンニク、コエントロ、干エビ、ゴマ、カジューナッツ、ピーナツを磨りつぶして入れ、デンデ油（パーム油）とココヤシの胚乳を加え、かき混ぜながらじっくり煮込む。いい加減煮えたら、この中に生エビのむき身や白身魚の切身を入れて更に煮、水分を飛ばしてしまう。この煮詰まった汁を白いご飯にかけ、強烈なトウガラシ・ソースを加えて食べるのである。こういうきつい食べ物は、フェイジョアーダも同様だが、ひどく腹持ちする。したがって、バタパは昼食に食べるものであり、バイア州の人間でもバタパを晩に食べるようなことはしない。「ごった煮」形態の料理は、一旦つくってしまえばつくり置きがきく。次は温めるだけで良い。それに食べる時に皿が一皿で済む。奴隷はフォークやスプーンを使わず、指先でこねて食べていた。指でこねられるような状態にするのが生活の知恵なのである。

黒人奴隷と共に、アフリカからブラジルにもたらされた食用植物には、キャーボ（オクラ）、ビナグレイラ（ローゼル）、サトイモ、アニス、ショウガ、サフラン、ゴマ、スイカ、ニガウリ、デンデ椰子などがある。いずれも優れた食用植物だが、中でもデンデ椰子の果たした役割はひとき

わ飛び抜けている。デンデはアンゴラで〝デンデン〟というヤシで、日本ではアブラヤシまたはオイル・パームと言う。熱帯アフリカ原産で、樹高は一〇～二〇m、鶏卵大の果実がびっしり、房のようについている。果実の中果皮には五〇～六〇％油があり、これを圧縮してパーム油をとる。パーム油、つまりデンデ油はベーターカロチン（ビタミンA）を高単位に含有しているため、油そのものが赤黄色の色調を呈している。それに独特の匂いがある。

日本人がバイア料理を苦手とするのは、料理に必ずデンデ油が用いられており、この匂いにどうしても馴染めないからである。そうは言うが、デンデ油はアフリカから連れて来られた黒人にとって、必要不可欠の油だった。黒人たちは、劣悪な食事をデンデ油でカバーし、夜盲症、結膜炎、角膜炎などの眼病を予防したのである。また黒人たちは、デンデ油と共に現地のインジオが用いていたトウガラシをふんだんに用いた。ブラジルのトウガラシは実に多彩で種類も多い。

トウガラシにはアスコルビン酸（ビタミンC）が豊富である。黒人に栄養学の知識があったわけではないが、彼らは本能的にデンデ油とトウガラシ、それにカジューの果実のジュースが、自分たちの身体を維持するために必要であることを知っていた。黒人奴隷が入手出来る材料でつくる料理は、パトロンであるポルトガル人にも大いに恩恵をお

よぼした。以後、富裕階層の家庭では、腕の良い黒人女性の料理人が不可欠となる。

ポルトガル人で感心するのは、黒人の作る「アフロ・ブラジリアン料理」を喜んで食べ、自分の好きな料理に入れてしまうことである。もっとも自分が料理をつくらないのだから、当然といえば当然なのだが、やはりその現地適応能力は大したもの。世界のどこへ行っても日本食に固執する日本人とは大変な違いだ。

多彩な黒人の米食文化

ブラジルの料理には意外に米が多く使われている。ブラジルにおける稲の栽培の歴史は古いから、日本移民が移住してきた時には既に米はあった。米が食えるということは、日本移民にとっては嬉しいことで、たとえその米が陸稲で粘りの少ない長粒のインジカ型であっても、米は米であり、炊き方を工夫することにより、日本の水田米の代用を果たすことができた。あまり知られていない事実だが、現在ブラジルの米の生産量は一一〇〇万トン（籾）で、これは中国、インド、パキスタン、日本、インドネシア、タイ、ビルマにつぐ世界第八位で、アジア以外では問題なく世界一なのである。

新大陸に栽培種の稲、オリバ・サチバ種が入ったのはブラジルが一番早く、ブラジル発見から五〇年経った一六世紀の半ばにバイアのレコンカーボ地方に小規模ながら導入されている。本格的に栽培がはじまるのは一六六〇年、サンパウロ州の海岸地帯、イグアペに植えられる。ここは高温多湿の湿地帯で水田に適している。そして一八世紀に入ると、東北ブラジルのマラニオン州低地で大規模な米の栽培が開始される。米作がブラジルで定着していくのは、気候風土が稲作に適しているからであるのはもちろんだが、その他にブラジルを構成したポルトガル人、黒人が既に米を知っており、利用していたことを示している。

実はブラジルのインジオも野生イネを利用していたのだが、これは一応省略する。浮き稲やマコモの仲間の穂を集めて食用にしたことは事実にしても、量的に少なく、とても主食の地位になるようなものではなかった。しかし、奴隷としてブラジルに連れてこられた黒人には、アフリカでの米食文化の伝統があった。西アフリカのニジェール河沿岸には昔からオリザ・サチバ種以外の唯一の栽培稲である、オリザ・グラベリマがあり、現地の住民が栽培していた。これは今でもごく僅かに栽培されているが、一六世紀以降にはサチバ種もイスラム経由で西アフリカに持ち込まれ、栽培されるようになった。

こうして、黒人奴隷の輸出全盛時代には、現在のコン

ゴ、カメルーン、ナイジェリア、ガボン、ベニン、ガーナ、セネガルなどのイスラム文化の影響を受けた地域では、かなり多彩な米食文化が開化していた。こうした米食文化を身につけた黒人が、ブラジルで米に出会えば、彼等の伝統を生かした米料理をつくるのは当然である。マラニオンの名物料理「アロース・ダ・クシャ」はアフリカ直来の料理だし、バイアの「アロース・デ・ハウサ」もそうである。ハウサという言葉は聞き慣れぬと見え、大抵の人は知らないが、これは現在のナイジェリアの一地方の名称で、ここに住むのがハウサ族なのだ。米を好む民族で、イスラム文化の影響を受けた独特の米料理をつくっていた。

この他、バタパ、カルルー、マニソバ、バイオン・デ・ドイス、サラパテルなど、インジオの食べ物を利用して、黒人は独特の米料理を完成した。フェイジョアーダを入れてもよい。

「奴隷がパトロンの捨てた豚の尻尾や耳、ひずめ、鼻、その他屑肉を集めてフェイジョン豆と煮たところ、大変旨かったので、やがてパトロンの賞味するところとなり、ブラジルの代表料理になった」というのが、フェイジョアーダ起源説の定番。あえて異を唱えるほどのことはないが、少々ひっかかる。それでもフェイジョアーダが黒人奴隷のつくった料理であることは間違いない。というよりも、この当時は黒人、特に女性以外に料理をする人間はいないの

である。パトロン階層の白人主婦がたとえいたとしても、料理には手を出さなかった。料理文化にかけては、ポルトガル人より黒人の方がはるかに上なのである。したがってフェイジョアーダも、パトロンが捨てた材料云々とは関係なく、黒人の創意工夫により出現した料理なのだ。

フェイジョン豆（インゲン豆）の利用が東北ブラジルを中心にひろがるのは一七世紀の中頃である。最初の利用方法は豆を塩と水で煮るやり方だった。そのうちに、塩と水で煮るより、油や牛、豚の脂身、干肉、腸詰め肉を加えて煮た方がずっと旨いことに気がつく。ここまでくればフェイジョアーダの完成まであと一息である。要するにフェイジョアーダはフェイジョン豆の利用が進めば、当然行きつく料理で、各地に自然発生的にできたものだろう。この料理、必ずしも米料理とは言えぬが、米がつかぬと間が抜ける。フェイジョアーダがレストランに登場するのは二〇世紀、それも一九二〇年からだと民族学者でブラジル一の大碩学カマラ・カスタードは書いている。そう言われればたしかにこれは田舎のファゼンダの家庭料理の性格が強い。

中南米にはない魔女狩り

一五世紀から一七世紀の終わりまでヨーロッパに吹き荒

れた魔女狩り施風で、殺された〝魔女〟の数は三〇万とも一〇〇万人とも言われている。ものすごい数である。この魔女狩り、もともとはローマ・カトリック教会がキリスト教異端者撲滅のため採用した、一種の宗教裁判であり、異端審問なのである。

一三一八年に、ローマ法王が「魔女はキリストの敵、悪魔と結託して悪を行うもの」という、旧い神学観念を復活させ、異端審問を認めたため、異端の取り締まりに目を光らせている宗教裁判官を勢いづけてしまった。異端審問は一方的であり、一旦魔女の容疑をかけられた者はまず逃れられなかった。拷問による自白が得られるように仕組まれていたのである。魔女狩りの推進者は、法王、神父、国王、貴族、学者、文化人で、カトリックだけでなく、プロテスタントの牧師も魔女狩りにはことのほか熱心だった。宗教改革の立て役者であるルターやカルバンも例外ではない。まったくパスカルではないが「人間は宗教的信念を持ってする時ほど、喜び勇んで、徹底的に悪を行うことはない」(パンセ)というのはその通りだ。魔女狩りをする方は、この世から魔女を一掃し、異端者をなくすことが神のみ心を叶うと信じているのだからどうにもならぬ。どんな残虐なことでも平気で行う。魔女狩りはヨーロッパだけではなく、新大陸のアメリカにも飛び火する。有名なのは一六九二年、セーレムで起こった魔女狩りで、狂信的なプロテス

タントの牧師の煽動で、二〇人の〝魔女〟が絞殺される。魔女狩りは南ドイツで一番多かったが、これはカトリックとプロテスタントの勢力が拮抗しており、お互いに異端者として魔女に仕立てたことも要因になっている。この魔女狩り施風、もちろんポルトガルでも起きたし、ポルトガル領であるインドのゴアでも起きている。

一六七四年、ゴアで行われた大量処刑の「死の祭典」の状況を描いた有名な絵が残っている。

ところで、ラテンアメリカでは、ブラジルを含めて、魔女狩りが一件も起きていない。これはおもしろい。何故ラテンアメリカには魔女狩りがなかったのだろうか。よく考えると、これはむしろ当然で、ラテンアメリカには魔女狩りの動機も条件もなく、魔女に仕立てる相手がいないのである。

ヨーロッパの魔女狩りは異端審問が主たる動機だが、エスカレートしてくると、教会や国王の権力維持の方法にもなってくる。敵対する相手を魔女にして抹殺するやり方だ。それと、魔女の財産は没収だから、財産目当ての魔女狩りも盛んになる。

ところが、ラテンアメリカの場合、いかなる条件も当てはまらないのだ。カトリックに対抗するプロテスタントは入らなかったし、原住民のインジオや黒人奴隷が相手では異端審問も財産没収もあったものではない。そうでなくて

も人間が少ないのに、それ以上人間を減らすようなバカな真似は出来ない。それにこれはブラジルについて言えるのだが、同じカトリック教国でもブラジルは規制の弱い、もっとも寛容な国なのである。

ブラジルと対極にあるイントレランス（不寛容）な国のチャンピオンはやはりプロテスタントのアメリカだろう。セーレムの魔女狩りは昔のことにしても、一九二〇年にはじまるパーマー司法長官の赤狩りや、一九五〇年から数年続いた、やはり赤狩りのマッカーシー施風は記憶に新しい。また一九二〇年から三三年まで続いた禁酒法、今も根強い組織を持っているＫＫＫ（クー・クラックス・クラン）のようなワスプ優先の人種差別団体の動きなどもその例である。アメリカには理念を高く掲げ、原理、原則に徹し、自己の信念、信条に少しでも外れる者は容赦しないという、プロテスタント流の不寛容の精神が流れている。

「諸悪の根源は酒だから、酒を禁止しなくてはいけない」という、単純明快な論理がそのまま通ってしまう国なのだ。ブラジルでは禁酒法など出来るわけはないが、出来たって誰も守りはしない。

実はブラジルにも、カーニバルの期間中や選挙の当日はアルコール飲料を売ってはいけないとの規則はある。酔っ払って不測の事故を起こすのを防ぐための措置なのだが、まったくのザル法。アルコール抜きのカーニバルなどある

わけがない。
　ついでに言うと、リオのエスコーラ・デ・サンバのディスフィーレで披露される、乳房丸出しの裸も、むろん公序良俗法では禁止されている。しかし、それをテレビを含めれば何千万の人間が見ているわけだが、カトリックの神父から時折文句が出るくらいで、ついぞお咎めのあったことがない。それにしてもブラジル女性は脱ぎたがり、見せたがるものと、つくづく感心する。

激しさ欠くブラジルのテロ行為

　民族問題はどこでも複雑微妙で、常に紛争の種になる。そして、一旦紛争が起きると徹底的に相手を憎悪し、殺し合うという、陰惨な要素を基本的に持っている。民族集団は、文化的アイデンティティを共有することで、エスニシティ（民族への帰属性）を保っているから、いきおい他の民族に対しては排他的となり、自分たちだけの民族で国家をつくりたいという願望が強い。東欧、中東、アジアなどで起きている民族紛争も、理由や原因はいろいろあるが、煎じつめればそこに行きつく。
　ところが、植民地だった新大陸には世界中から多くの人種や民族が集まっているにも拘らず、自分の帰属する民族

だけで国家をつくる動きはあまり見られない。もちろんないわけではなく、フランス系住民の多いカナダのケベックの独立運動もあるし、イヌイット（エスキモー）の独立運動もある。また、ブラジルだって、今のところ大きな政治問題にはなっていないものの、南部三州による分離独立の動きもあるのだ。

そういう動きがあるにしても、全体から見れば新大陸の民族紛争は微弱で、とるに足らない。もともとが植民地で、父祖伝来の土地ではなく、移民あるいは強制的に連れてこられた民衆が多いから、土着的性格を持つ民族紛争は起きにくい。ラテンアメリカには深刻な民族紛争はないが、その代わり、政治、経済体制の危機的状況からくる凄惨なゲリラや内紛がある。典型的な例は中米だろう。

ここはＡ・Ｇ・フランクが一九六〇年代後半に唱えた「第三世界従属国家論」の諸条件が、実にぴたりと当てはまる。この中米は南北アメリカを結ぶ地峡部に位置しており、現在の国名で言えばグァテマラ、ベリーズ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグァ、コスタリカ、パナマの七カ国である。いずれもごく一部の富裕階層と大多数の貧困階層という、二極構造の小国で構成されている。面積は七カ国全部合わせても五二万平方km、人口二〇〇〇万足らずでしかない。小さな面積と少ない人口、長期独裁政権、モノカルチャー産業、富の偏在、それにアメリカに近

いという地政学的要因が、現在の中米危機の悲劇につながっている。

悪名高いニカラグァのソモサ一族による長期独裁政権は、一九三六年から七九年まで続いた。三代目のソモサは八〇年、亡命先のパラグワイで暗殺されるが、アメリカはサンジニスタ革命政権を嫌い、旧ソモサ派への武器援助を公然と行っている。アメリカはエルサルバドルでもグァテマラでも武力介入している。なんとしても第二のキューバ化は避けねばならぬと、なりふりかまわず、政治にも干渉するし、経済も抑えてしまう。

ユナイテッド・ブランズ社（旧名ユナイテッド・フルーツ社）ら、多国籍企業のバナナ会社の実力が、中米諸国より大きいことはよく知られた事実である。中米の場合は、特殊な状況下にあるから特別なのかも知れないが、ブラジルは中米以外のラテンアメリカと比較しても、ファナチックなところが少ない。つまり激しさに欠けるのだ。むろん内乱や武力抗争は何度も起きているし、パラグワイ戦争という、対外戦争も体験している。個々の戦闘行為ではずいぶん残虐なこともしているし、インジオに対する仕打ちも、とても人道的と言えたものではない。

しかし、それでもラテンアメリカの他の国よりはずっと穏健なのだ。ペルーのセンデロ・ルミノソやコロンビアのＭ１９などゲリラ組織による無差別テロもない。麻薬はブ

ラジルにも相当入っているものの、メデリン・カルテルとか、カリ・カルテルのようなきっちりした武装麻薬組織のようなネットワークは持っていない。ブラジルにも都市ゲリラはあり、一九六九年から七〇年にかけて、外交官の誘拐事件が相ついだ。六九年のアメリカ大使、七〇年の大口信夫サンパウロ総領事、西独大使と立て続けに三人の外交官が誘拐されている。

テロ団は人民革命戦線と呼ばれる左翼ゲリラで、日系人もメンバーに入っていた。テロ団の要求は政治犯の釈放と亡命で、ブラジル政府当局が要求を容れたことにより、人質は無事帰された。テロに良いも悪いもないものだが、どうもブラジルのテロは凶悪さが感じられない。

そういえばブラジルには伝統的に、反対勢力を文字通り抹殺する恐怖の独裁政治は遂に出現しなかった。説明としてはいろいろ原因があげられる。スペインとポルトガルの文化の違いもあるだろうし、気候、風土といった自然条件の差も影響しているのかも知れない。だが、筆者はこの違いは案外、国土の広さと人口の多さに負うところが大きいと思っている。ブラジルで恐怖型の独裁政治体制をとっても、国の隅々まで行き渡らないから効果がないのである。

失敗に終わったポプリズモ

イタマール・フランコ大統領は、ポプリズモを評榜するポプリスタと評されるし、自分でもそう認めている。このポプリズモ、英語ならポピュリズム、日本語なら人民主義、大衆主義と訳せるから、言葉自体は難しいわけではない。一部富裕階層のためだけではなく、人民大衆をも含め、広く国民一般を基盤とする政治思想であり、政治運動である。

中南米では一九二〇年代後半から五〇年代にかけて出現している。しかし、国によっていろいろな違いがあるから、これがポプリズモだという共通のモデルを示すのは難しい。なにしろ、カリスマ的リーグであるペロン（アルゼンチン）、バルガス（ブラジル）、カルデナス（メキシコ）、アヤー（ペルー）などが典型例としてあげられるのだが、それぞれ微妙に違うし、キューバのカストロだって初期はポプリスタだったのだ。

ブラジルにおけるポプリズモは、一九三〇年の革命で臨時大統領になったゼッリオ・バルガスが唱導したもの。バルガスと言えば、ブラジルの日系社会では、移民の松原安太郎と旧知の仲で、その縁で第二次大戦後、辻小太郎に五千家族、松原安太郎に四千家族の移民導入枠が認められたことが知られている。それはその通りで間違いはないが、バルガスは別に親日家でも知日家でもなく、むしろ有色人種の入国を禁ずるファッショ色の強い憲法を制定（一九三

四年)、日本移民の入国制限を行った張本人なのである。

バルガスは、一九三七年、議会を閉鎖し、新国家(エスタード・ノーボ)体制を樹立、独裁政権を囲める。この「エスタード・ノーボ」はバルガスの独創によるものではない。一九三二年から六八年まで、長期独裁政権を築いたポルトガルのサラザールが、強権的な統一国家体制である「エスタード・ノーボ」を採用したのを真似たもの。そのサラザールも新国家体制の範をイタリアのファシズムやスペインのリベリズムにとっている。

要するに「エスタード・ノーボ」は、この時代の流行みたいなものだが、この権威主義的国家体制の中で、政府指導の下につくられたのが各種労働組合なのだ。現在のブラジルはやたらにストがある。港湾労組のスト、バス、地下鉄のスト、学校、病院のスト、それにあってはならないはずの公務員のスト、警官のストｅｔｃ……。公務員は別として、こういう職業別の労働組合を束ねているのが、統一労働者センター(ＣＵＴ)とか、全国労働者センター(ＣＧＴ)といった連合組織である。

はじめてブラジルに来て、サンパウロのパウリスタ大通りをデモする大衆を見ると「労働運動も盛んだし、政治意識も高い労働者だな」とつい思いがちである。ところが、ブラジルの労働組合の実態は、バルガス大統領時代に中央集権強化のためにつくられた官製の労働組合なのである。

バルガスがめざしたのは、サンジカリズム（組合国家主義）の一種で労働者を取り込んで組織化することにより、ポプリズモ、つまり人民主義色を打ち出そうとしたのだ。第二次大戦前、ドイツやイタリアが採用していた労働戦線と共通する部分もあるのだが、バルガスのポプリズモは結局ナチズムやファシズムの方向には向かわなかった。

ポプリズモは一種の民族主義だから、外国による経済支配には猛反発する。そこで輸入代替工業化が進み、自前で基幹産業をつくることになる。基幹産業は巨大な投資を必要とするため、政府出資の公企業となり、政府は外国から借りる。方法として間違っているわけではないが、ブラジルの場合、やたら多くの公営企業をつくってしまった。まるで社会主義の国である。公営企業の効率の悪さ、生産性の低さはお話にならぬ。加えて過剰人員や幹部の超高給、不正、汚職がつきまとうのだから世界経済に太刀打ち出来るはずがない。

労働組合も官製で、他の先進諸国のように労働者が資本家と対決し、ひとつひとつ自分たちの権利を獲得していったわけではないため、どうも頼りない。ばかに政治的でご都合主義なのだ。もちろん、抗議のマニフェストは組合の音頭取りで行なわれる。時によっては何万、何十万の人間が動員され、大変な盛り上がりを見せることもあるのだが、なんかお祭り的な要素が強い。

ブラジル大衆のエネルギーは一過性で、サッカーの試合やカーニバルでわかるように、衝動的な情熱なのだ。主義主張のもとに粘り強く組織的な運動を続けていくことが出来ない。ブラジルは失敗したポプリズモの尻尾を、まだ引きずって歩いている。一刻も早く断ち切らねばならないのに、今頃になってポプリズモの亡霊とは合点がいかぬ。気の利いた幽霊ならとっくに引っ込んでいる時間のはず……。

モラル低い東北ブラジル体質

マット・グロッソ州の田舎町でタクシーに乗った。人口二万ばかりの小さな町である。運転手に景気はどうかと尋ねたら、さっぱりだという。この町の人間は何の仕事をしている人が多いのかと重ねて聞いたら、その答えがふるっている。

「そうだなぁ……。いろいろあるけど、やっぱりフンショナリオ・プブリコ（公務員）だろうね。オレだって一応は市役所の職員だからね」

「ほう、何をやっているのかね」

「運転手さ。市役所の。もっとも市役所には二台しか乗用車がないのに、運転手は一四人もいるから仕事なんかない

し、オレは行きもしない」
「月給はもらっているの……？」
「ああ、最低給料だけどね。これが遅配、遅配でさっぱり当てにならないのさ。まぁ、仕事してるわけじゃないから文句言えないけどね」
パーキンソンの法則に「役人は仕事とは関係なく増え続ける」というのがある。詳しくは「役人の数は、仕事の量とは無関係に、時には仕事がなくても、一定の割合で増え続ける」である。先進国にあっても行政機構の膨脹は止まらない、これには各国も悩み〃小さな政府〃の運動が起きているが、なかなか実績は上がらない。先進国でさえそうなのだから、ブラジルのように情実や縁故採用が半ば公然となっている国では一族主義の原理がはたらくだけに、ひどいことになってしまう。
この田舎町では警察官を採用しすぎて、仕事に困り、街の道路の交差点という交差点に一人ずつ警察官を配置、交通整理をさせている。以前テレビのニュースで、どこかの町の市長が八四才になる自分の母親を市の最高顧問にして、高給を払っているケースが紹介されたことがある。テレビの話題になるくらいだから、いかにブラジルでも珍しい例なのだろうが、その時に市長の弁明が傑作「自分は常日頃、それそこ身命を賭して市民のために職務を遂行している。多くの市民も、これまでにない立派な市長と評価し

ている。それなら立派な市長を生んだ母親は更に偉大ではないか。その偉大な母親に少々の金を払って報いることがなんで悪い……」

いや、ご立派、ひたすら恐れ入るのみ。このケースは八四才の母親だったから話題になったので、政治家が自分の妻子を秘書やその他の要職に登用するのは常識である。言い訳も決まっていて「なんといっても身内が一番信用出来るからね」である。

市長が職員を大幅増員し、大盤ぶるまいをすることをトレン・アレグレ（喜びの電車）と言う。

たいてい、任期切れ間近な市長が人気取りに行う方法だ。これは採用しても、月給を払うのは次期市長であって自分は関係ないから、予算があろうとなかろうと一向に気にならないのである。

ブラジル最貧州の代表である、東北ブラジル、ピアウイ州の州知事は、自分の在任中、首府のテレジーナに大レジャー施設をつくった。アイススケート場と人工波を起こす大プールが目玉である。

テレジーナは、東北ブラジルの州のうち、唯一海岸に面していない首府で、かなり内陸に位置している。暑いことでもブラジルで一、二を争う町である。州知事は、海に行けない市民のために人工波の大プールを、炎暑に喘ぐ市民のためにアイススケート場をつくったのだそうだ。なん

とも行き届いた〝親心〟ではないか。このレジャー施設、現在でもポチ河の対岸に偉容を誇っている。知事の在任時代は家族や側近の一族が利用したが、今は単なる記念建造物。この知事が辞め、後任の知事が就任した時、州政府の金庫には五〇〇〇クルゼイロ札が一枚だけ入っていたという話は余りにも有名。これはもちろん、政治家のモラルの問題なのだが、どういうわけか極端にモラル・ハザード（節度の低下）のひどいのは、東北ブラジル諸州の政治家に多い。

やはり、伝統的な地主階層のボスが閉鎖的に地方政治を牛耳っているところでは、自分勝手な悪意や専断がまかり通ってしまうのである。こういう封建的な支配体制は、ブラジル全土からするとかなり異質で、どちらかというと、中米の小国によく似ている。ごく一部の富裕階級層が、大多数の貧民を支配する二極構造だ。こういう古い体質は伝統の中で出来上がったものだから、一朝一夕に変えられない。この体質がドイツ、イタリア移民の多い南部三州や工業化の進んだサンパウロ州にはおもしろくない。はっきり言えば迷惑なのだ。南部の分離、独立の動きは、ドン・ペドロ一世時代から続いている、根の古いものだが、最近の動きはやや様相が異なる。人種、民族問題以外に中世的な封建体質を脱し切れない東北ブラジルの政治家に対する嫌悪感、反感が大きな動機になっているのが特徴。

一八世紀まではインジオ語が主流

ブラジルは国が広いから自然環境も多様である。赤道直下のアマゾンから雪の降る南部まで、気候もさまざまだし、東北ブラジルで旱魃の悲劇が報じられる一方で、南部では洪水による災害が発生している。植生もアマゾン型の原始林から、中央部に多いサバンナ、東北ブラジルの砂漠一歩手前のセルトン、海岸山脈の山地型森林や南部のパンパ、それにユニークなパンタナール（世界最大の湿原）など、それぞれに異なっている。

多様なのは自然環境だけではない。政治的、経済的要因による地方格差もひどいし、生活様式、文化による地方差も相当なものだ。また、人種、民族も場所によって比較的分離されており、どの地方にもまんべんなく同一人種や民族がいるわけではない。以上がブラジルが持つ多様性である。

その逆に、北はアマゾンから南はリオ・グランデ・ド・スールまで、共通している同質性も当然ある。カトリックの普及、言語の統一性、サッカー愛好、カーニバルの情熱、フェイジョン豆と米への嗜好などである。

言語について取り上げると、ポルトガル人の話すポルトガル語とブラジル人の話すポルトガル語では、発音やイン

トネーションにかなりの違いのあることが知られている。ポルトガル人はブラジル人の話す言葉はポルトガル語ではなく、ブラジル語だと言う。もちろん、揶揄と軽蔑をこめて言っているわけだが、これはやむを得ない。ブラジルのように多民族、多人種で構成されている国では、ポルトガル人を除けば、本来の母国語以外の共通語としてポルトガル語を使っているのだから、長い間には変形してブラジル語になるのは避けられない。しかし、そのおかげで、カボクロ（インジオの血を引いた奥地住人）と日本人一世移民とでも対話が出来るのだ。どちらも耳から覚えたブラジル語で、ボキャブラリーがおそろしく少ないから、かんたんに意志疎通が出来てしまう。

実は、ブラジルでは一八世紀のはじめまで、ポルトガル人やその子孫を含めて、ほとんどの人間がインジオの共通語であるツピー・グワラニー語を喋っていた。そう感心することもない。例によってボキャブラリー（語彙）が少ない上に、抽象的な言い廻しがないから、ポルトガル語よりはるかに習得が楽なのだ。

もう一つ、ツピー・グワラニー語を喋ったのは、地名や動植物名がほとんどすべてインジオ語で、ポルトガル語に言い換えられないことも大きな理由になっている。新大陸の動植物は、旧大陸とは著しく異なっているため、侵略者のポルトガル人もこればかりはインジオの呼称に従わざる

を得ない。

動植物名で、ツピー・グワラニー語が世界語になった例はたくさんある。ジャガー、カピバラ、パッカ、クチアがそうだし、ピラルク、ピラニャ、ピライーバ、ツクナレ、タンバキなど、皆そうだ。新大陸の淡水魚で、旧大陸との共通種はただの一種もない。植物もイペー、ジャカランダ、薬草のジャボランジがインジオ語だし、マンジョカの澱粉であるタピオカも今や世界語である。

タピオカの語源はタピ（底から）オカ（取り出したもの）で、原料のマンジョカを磨砕して水に沈め、澱粉だけを採取する製法をあらわしている。しかし、タピオカがツピー語と知る人はほとんどいないだろう。かつてこれほどツピー語が話されていたのに、どういうわけか現在ツピー・グワラニー／ポルトガル語辞典には、それほど詳しいものが見当たらない。もっともポピュラーなのは一九八二年に第一刷の出た、シルベイラ・ブエノの辞典で、この辞典には一八五八年に出たゴンサルベス・ディアスのツピー／ポ語辞典が合本されている。もう一つは「ポルトガル語にあらわれたツピー語歴史辞典」で、一九七六年にアントニオ・ダ・クーニャが書いた労作。どちらもそれなりに使えるのだが、どうもいささか物足りぬ。不思議に思うことは、ツピー・グワラニー語をインジオ共通語までひろめたのはイエズス会士の功績によるところ大きいのに、イエズ

ス会士の書いた辞書がないことだ。

日本において大部な日葡辞典をつくり、日本史、日本覚書、日本要録のようなすばらしい本を書き、語学の才能を示したイエズス会士たちが、単純な言語構造のツピー・グワラニー語に精通していなかったわけはない。辞書として出版されたものはなかったかも知れないが、ツピー語の詳細な研究はなされていたはずである。

思うにこれは、一七五七年にポルトガルの宰相ポンバル侯爵が、全ポルトガル領からすべてのイエズス会士を追放した折、散佚あるいは焼失、廃棄されたのではあるまいか。二〇世紀の初頭、サレジアーノ会士はマット・グロッソのポロロ族を徹底的に調査、尨大な「ポロロ百科」をつくっている。

認知されぬブラジル文学

数年ほど前の講談社の読書誌「本」に三浦雅士、今福龍太両氏による対談「ラテンアメリカ文学」が、上下二回にわたって掲載されていた。久しぶりに読み応えのある対談で興味深かった。ラテンアメリカを植民地と規定し、植民地という枠組みの中で政治はもちろん、文学や社会科学の構造を透視する視点がひどく新鮮だった。ところが、この

「ラテンアメリカ文学」対談、上下一七頁におよぶ相当な量にもかかわらず、最後までブラジル文学はまったく出てこないのである。これにはいささかならず驚いた。

ラテンアメリカ文学といえば、むろん、イスパノ・アメリカ文学とブラジル文学に大別される。

スペイン語圏とポルトガル語圏の違いである。この両方が出てこなければ、ラテンアメリカ文学を語ることにはならないと思うのだが、この対談ではきれいさっぱり、ものの見事にブラジルには触れていない。今福氏は若手で現代日本有数のラテンアメリカ研究者だし、三浦氏も文学、歴史、思想の評論家であり、共にイスパノ・アメリカ文学の本質をよく把握している。バルガス・リョサ（ペルー）、ガルシア・マルケス（コロンビア）、オクタビオ・パス（メキシコ）、コルタサル・フリオ（アルゼンチン）の他、キューバ組のカルペンティエル、ギレルモ・カブレラ、レイナルド・アレナス、レサマ・リマなどを取り上げて論じている。だが、ブラジルに関しては、最高峰のマッシャード・デ・アシスも、「大いなる奥地」のギマランエス・ローザも、詩人のカルロス・ドゥルモン・デ・アンドラーゼも、とにかく一人も出てこない。完全な無視である。

どうしてこういうことになるのか、いろいろ推理を働かせてみたり、検討をしてみたら、どうもこれはやむを得ないのではないかという結論に残念ながらなってしまった。

つまり、イスパノ・アメリカ文学の方がブラジル文学より質、量ともに優れていること、およびブラジル文学作品の日本語による翻訳が非常に少ないこと、という二つの事実を認めざるを得ないのである。

少し背景を説明してみよう。ラテンアメリカの文学は、一九六〇年代に入ると動きが急に活発になる。これはこの時代、スペイン内戦による弾圧により、多くの作家や知識人がラテンアメリカのスペイン語圏の国々に亡命してきたことによるものである。イスパノ・アメリカの国で文学活動が盛んになったのは、こうした亡命作家の出版を助け、バルセロナを中心とするアンチ・フランコ派のスペイン出版業界の積極的な応援も大きく影響している。

また、一般には信じられないかも知れないが、社会主義革命を成し遂げたキューバのカストロ首相が文芸興隆に力を入れ、スペイン語圏各国との文芸交流を促進したことも、間違いなく理由の一つになっている。カストロのスポーツ興隆政策はよく知られているが、文芸部門でもそうなので、実は一九八二年のノーベル文学賞を受けたコロンビアのガルシア・マルケスは、長年、一貫してカストロのアミーゴなのである。

さて、もう一つのブラジル文学作品の置かれた状況について説明すると、まず指摘出来るのは、ブラジル文学は欧米はもちろんのこと、他のラテンアメリカに比較しても、

著書と著者が少ないことである。なにしろブラジルには一八〇八年、ブラガンサ王室が逃げてくるまで印刷機がなかった。

というよりも、印刷そのものが禁止されており、本の出版は不可能だった。植民地政策の一つのやり方だが、なに、本国のポルトガル自体、ヨーロッパでは一番識字率の低い国で、文学とは余り縁がなかったのである。

ブラジルで独自の文学活動がはじまるのは一九世紀の半ばからで、初期の作者にはゴンサルベス・ディアス、カストロ・アルベスのような詩人や、ジョアキン・マセド、ジョゼ・アレンカール、マノエル・アントニオ・デ・アルメイダなどがいて、作品を発表している。しかし、この時代、ブラジル総人口の八五%は文盲なのだから、民衆の間に文芸作品が広く浸透したわけではない。これは基本的に現在にも当てはまること。

それにブラジル文学の特徴は土俗性と地方色が濃いことである。例えば、マッシャード・デ・アシスはリオ州、ギマランエス・デ・ソウザはミナス州、エウクリデス・ダ・クーニャ、ジョルジ・アマド、グラシアーノ・ラモスは東北ブラジルという具合だ。こうした作品は、その地方独特の風土と、クレオール（混血人）としてのブラジル人の精神風土を背景にしているから、これがわからないと、いくらポルトガル語に精通していても、簡単に翻訳出来るもの

ではない。ブラジル文学が広く世界で読まれていないのはやはり、それなりの理由があるのだ。

抵抗の文学〝民衆本〟の世界

一九九一年の国勢調査によるブラジル全国の文盲率は一九・六％となっている。一八九〇年の調査における文盲率が八五％だから、この百年間で識字率は飛躍的に高まったと言ってよい。ただ、ブラジルの場合、地域差と人種差によるバラツキがひどく、現在でも東北ブラジルの文盲率は三九・一％、更にこの地方の黒人に限っていえば五〇・四％とかなりの高率になってしまう。

こういう識字率の低い地域では、文字に書かれた文芸作品は当然ながら浸透しない。この地方では口承詩による民衆本である、リテラツーラ・デ・コルデル（紐の文字）が幅を利かせている。最近はテレビがかなり奥地にまで普及したから、民衆本も衰えているが、まだまだ大衆には根強い人気を持っている。

リテラツーラ・デ・コルデルと書いたが、これはインテリ側から見た呼称で、愛好者である民衆はそんな理屈っぽい名前など使わず、単に〝フォリエット〟（小冊子）と言うだけ。

オリジンはブラジルではなくヨーロッパで、一八世紀から一九世紀にかけてポルトガル、スペイン、フランス、ドイツなどにあったもの。紐の文字というのは、小冊子を紐に吊したり、首から紐で吊した箱に小冊子を入れて売り歩いたからである。識字率の低いポルトガルの大衆には特に人気があったが、二〇世紀に入るとそれがブラジルに入って来た。

例外はあるが、体裁は大体決まっており、一六cm×一一cmの大きさで、ページ数は八頁が基準。字が読めないのにこんなものを買っても仕方ないと思うかも知れないが、ちゃんと字の読める専門の「語り手」というか「唄い手」がいて、ギターなどの弦楽器を弾きながら民衆を集めて語って聞かせるのだ。「語り手」が二人いて、かけ合いで聞かせる方法もある。詩は調子のよい七音節六行形式が一番多く、世界の口承詩のすべてがそうであるように韻を踏んでいる。韻を踏んでいるから、字の読めない民衆も容易に暗記することが出来る。「語り」の題材は、神話、英雄もの、政治家への揶揄、ロマンスものというように、あらゆる分野にわたっている。要するに話題になるものなら何でもよいのだ。

小冊子の表紙は粗末な木版画が多い。これは小冊子の内容をあらわしており、表紙の絵を見れば盗賊ものか好色ものかがわかるようになっている。文盲の大衆にわからせる

のが目的だから、詩の内容も理屈っぽい論理的な表現ではなく、極めてビジュアル（視覚的）かつイマジナブル（想像をかきたてやすいもの）につくられている。いわばこれは日本の紙芝居や無声映画時代の活弁の名調子と思えばよい。

ブラジルにおけるリテラツーラ・デ・コルデルの研究はジョセフ・M・ルイセン（筑波大学客員教授）の詳細な著書「ブラジル民衆本の世界」があり、日本で出版されている（御茶の水書房刊）。

この人は一一才の時、ブラジルに移住したオランダ人で、現在日本に住んでいる変わり種。原文はポルトガル語だが、日本語の本をつくるために書き下ろした論文が多いから、かなりの異色の本である。訳は中牧弘允ら五人が担当している。以前、日本語翻訳の拙劣さについて苦言を呈したことがあるが、この本の翻訳は立派なもの。最近は若手のブラジル研究者が着実に育っている。

さて、民衆本の愛好者である字の読めない貧しい大衆は、地方のボスに牛耳られ、選挙の時には一票の権利を利用されるだけの存在にすぎないのだが、民衆自身は案外醒めていて、冷静に判断を下している。前述の「ブラジル民衆本の世界」から一つだけ例を引用してみよう。民衆詩人タイッカ・デ・サントアマーロの「扇動政治家と無言の大衆」だ。

貧乏人はその時だけ求められる
あらゆる機会をとらえて
街のあらゆる区域で
ありとあらゆる方角で
その時だけだ、読者の皆さん
選挙の前の晩だけだ

選挙が済んでしまえば
わかりきったことさ
貧乏人はなぶられ
貧乏人は押し潰され
貧乏人は吸い取られ

貧乏人は忘れられる

このように民衆本は明らかに抵抗の文学で、アンチ権力の姿勢がはっきりしているのが特徴である。作者である民衆詩人は、直接的な表現が危険な場合はアレゴリック（寓意的）な表現で諷刺する技術にも長けている。

しかし、ブラジルの民衆は歴史的に連帯とか組織という観念が欠落しているから、いくら民衆本に焚きつけられて

も小農連合とか、プロレタリアート連盟のような階級意識にもとづく抵抗組織はつくれない。彼等の基本は常に個であり、せいぜい家庭の単位でしかものが考えられない。残念ながらブラジルではこの階層から社会革命の起きる可能性は今のところあり得ない。

こわい民衆の衝動的怒り

ブラジルの民衆は、階級意識にもとづく連帯とか団結は出来ないが、衝動的な怒りで直接行動に出ることは珍しくない。道路を破壊し、交通を止めることもその一例である。自分たちの住んでいる奥地にも舗装道路が出来、車の往来が激しくなると、それまで交通事故とは縁のなかった地方の集落でも事故が増え、人身事故も発生する。

筆者の経験と観察から言うと、地方、特に東北ブラジルの奥地で起きる事故は車の側ではなく、車社会を理解せずルールを守らない住民側に問題のある場合が多い。なにしろ道路を遊び場と心得ているのだ。しかし、路上でサッカーをしていた子供が車に跳ねられて死亡したりすると、住民は激昂し、多くの人数を繰り出して道路を掘り返したり、障害物を置いたりして、実力行動に出る。

民衆のこういう衝動的な怒りは、時にとんでもない結果を

もたらすから怖い。

この頃は田舎町でもいろいろな犯罪が起きるが、少女を強姦殺人した犯人は、捕まればまず命がない。留置場が一番危険である。囚人には囚人の掟があり、少女を強姦して殺した犯罪者と、悪党仲間を警察に密告する「警察の犬」は絶対に許さず、殺してしまう。誰がやったのか、判明することはまずない。警察の方もそんなことは百も承知だから、こういう犯罪者は独房に入れるのだが、警察側に憎まれると知らん顔をして雑居房に入れられ、始末されることもある。ブラジルは死刑がないなどと安心しているわけにはいかないのだ。

また、首尾よく独房に入れられても、怒り狂った群衆が警察を襲い、留置場を破って犯人を連れ出し、リンチで殺してしまうケースもある。タクシー強盗も捕まると危ない。運転手仲間が大挙して警察に押しかけ、犯人を奪取して凄惨なリンチにかけ、殺してしまうからである。強姦殺人犯やタクシー運転手殺しで、民衆の怒りが爆発するのは心情的に理解出来るが、時にはとんでもない誤解や神懸かりの呪術で、無実の人間が生命の危険に晒されることだってあるのだ。

もうかなり以前のことだが、筆者の知人で、アマゾンのベレン市郊外で小農を営む日本人移民のYさんが、いきなり自宅で逮捕され、警察に連行、留置されたことがある。

Yさんは年寄りで、ブラジル語をほとんど解しないから、一体自分がなんで警察に捕まったのか、まったく分からない。

ところが夜になると、田舎の小さな警察を大勢の群衆が取り囲み、「ジャボネースを殺せ！」「ジャボネースをリンチしろ！」と口々に叫んで大変な騒ぎになった。外の空気を察したYさんは震え上がって、まんじりともせず一夜を過ごした。幸い警察のガードが固かったので留置場破りは防げたが、Yさんは生きた心地がしなかった。

翌日、家族の奔走で日系の弁護士が警察に赴き、やっと事情が判明したが、常識では考えられない無茶苦茶な容疑で捕まったのである。Yさんの隣に住むカボクロ（土着の住民）の幼女がひどい下痢をした。カボクロが呪術師に拝んでもらったところ、下痢の原因は日本人が井戸に毒を入れたからとお告げが出たそうだ。カボクロは警察にYさんを訴えると共に、近所の仲間にこのことを触れ廻り、怒りにかられた仲間が報復に押しかけたのである。Yさんを逮捕する警察も警察だが、この場合は怪我の功名で、留置場だったから助かったので、自宅にいれば、激昂した群衆にリンチされたことは間違いない。ひとりひとりは人の良い無知なカボクロだが、こういう怖さも併せ持つのである。民衆の怒りの衝動は長時間は持続しないから、うまくタイミングを外されると、それきりになってしまうことが多

い。

話は少し違うが、奥地の道路でトラックが事故で転覆し、積荷が散乱した場合でも、民衆の掠奪を防ぐ手立てはない。積荷の内容にもよりけりだが、運べるものはすべて持っていく。住民にとってもっとも嬉しいのは、スーパーマーケットに食料品を運ぶトラックがひっくり返ることで、筆者は何度かこういう現場を見ているが、年寄りや女、子供も加わって喜々として掠奪作業に熱中する。

また、驚かされるのはトラック転覆の情報の早さで、付近に人家のない淋しいところなのに、たちまち黒山の人が集まる。中には小型のトラックでやってくるのも、馬車や手押し車で駆けつけるのもいる。

この連中にとって、この種の事故は天が与え給うたお恵みなのである。いわば神様からのプレゼントなのだから、誰も罪の意識など毫も持っていないのが特徴。ブラジルの貧しい大衆は、持てる者から物を奪ることにそれほど罪の意識は持っていない。比較的かんたんに商店の掠奪などを行うのだ。

権威に反発する母系社会

ラテンアメリカについて、ユニークなとらえ方をする異色の文化人類学者、今福龍太の著書に「クレオール主義」

がある。この本には「異種交配するロシア＝ブラジル」などという、興味ある一章もあって、ロシアとラテンアメリカの文化的共通性が論じられているが、ここでは別な一章「父を忘却する」を取り上げてみよう。

この章で今福は祖国の概念について述べ「祖国（パトリア）とは、父親の存在によってその正統性を与えられた何かなのである」と規定し、続いて次のように述べている。

「植民地の現実は西欧人の父と現地人の母との間に無数の『混血児』を産み落としていった。原住民の女の過剰な搾取によって産み出されたあまたの混血児は、最初からその父親の認知や特定に関して極めてあいまいな要素をはらんでいる。（中略）

彼ら混血児にとっては『父を知ること』は事実上不可能となる。そしてその不可能の上に立ちつつ彼らはむしろ意図的に父親を『忘却』することによって、母としての大地にまっすぐ接続された存在であることを自ら確認しようとする戦略をいつの間にか身につけることになったのである」

いいところを衝いている。これはブラジルの場合、とくに良く当てはまる。既に何度か触れたが、一六世紀のはじめ、一〇〇万そこそこの人口しか持たぬポルトガルは、地の果てのブラジルに男女同数の植民者を送る余裕などなかった。一七世紀になってもブラジルにおけるポルトガル

系の男女の比は三〇対一というように極端なアンバランス状態だった。

参考までに記しておくと、ブラジルで男女の数がほぼ同数になって、バランスが取れてくるのは、やっと一九四〇年になってからである。四〇〇年以上ブラジルは慢性の〝女ひでり〟だったのだ。

ポルトガルからの入植者は、最初はインジオ女性、黒人奴隷が入るようになってからは黒人女性と交わり、多くの混血児をつくっていく。なるほど生まれた子供にとってたしかなのは母親だけで、父親は関係ない。この傾向は基本的には現在でも変わっていない。地方の貧困階層にあっては、父親のわからぬ方がわかっているよりはるかに多い。このことについても既に書いた。明らかに奴隷制遺制であり、植民地体制の名残りなのである。奴隷制や植民地体制の名残りは、下層階級にだけ残っているのではなけ。上流階層や支配者層における離婚や風紀の紊乱はカトリック教国としては異例の多さである。

上院、下院の国会議員のうち、何％が離婚経験者か、プライバシーの問題が絡むので数字が公表されたことはないが、おそらくかなりの高率になるはずである。植民地時代の農場主は白人の妻を持ってはいたが、多くは飾りで、魅惑的なモレーナ（混血女）をとっかえひっかえ情婦にしていたのが通例だった。これはむしろ支配者階層の特権でも

あったのである。

今福龍太は、ラテンアメリカ的文化風土の中で、女性はファロス（男根）的原理によって、「母親」「処女（尼僧）」「非処女（娼婦）」の三通りの位相において等しく封じ込められるという説を紹介している。この人の言い廻しは独特だから、慣れないとわかりにくいが、要するに植民地の女性は、混血児を産み出す母親であり、父親不在だから処女懐胎の聖性も持っており、同時に多くの男性と交わる娼婦性をも有しているということだ。

筆者は全国的に、まるで蝗の群れのように大発生する娼婦の数の多さが不思議でならなかった。それもコールガールのような、都会の洗練された売春ではない。奥地で発生するのである。ブラジルでは大きな工事の建設現場では必ず売春婦が集まる。それも少々の人数ではない。工事に従事する労働者の数の女が集まるのだ。アマゾンのツクルイにトカンチンス河を堰止めてダムを造り、ツクルイ発電所を建設した。この時、労働者として現場で採用された人間が四〇〇〇人、集まった娼婦も四〇〇〇人だった。壮観である。また、現在アマゾン全域にいるガリンペイロは四〇万人である。これに家族、金買付人、運搬人、食料供給業者、売春婦を加えると、ガリンペイロ関連産業は一〇〇万人に達する。そのうち売春婦は五万人、一大勢力である。

貧困が原因の一つであることは間違いない。だがそれだ

けでこの現象は説明出来ない。やはりブラジルは植民地であり、女性は犯され、混血を生み出す存在であったことと無関係ではあるまい。そして、そこから父親拒否というか、父親に象徴される、例えば命令、秩序、支配、法律、規則といった権威に対する嫌悪と反発が出てくる。規則や規律、約束ごとが一向に守られないブラジル人の国民性も、案外こんなところに原因の一つがあるのかも知れない。

現在も続く〝植民地〟体制

あまり大上段に構えてブラジルを論ずるのは好みではないのだが、一応ブラジルを含めたラテンアメリカの特質を政治構造の面から捕らえておく必要があるようだ。言うまでもなく、かつての植民地ラテンアメリカは、一九世紀のはじめに独立してから既に一七〇年の歴史を持っている。しかし、ラテンアメリカは現在でもまだ〝植民地〟なのである。ただ、違いは植民地体制を維持する支配者が、スペインやポルトガルの王室個人から、現地を直接支配する封建土地貴族に移っただけのもともとスペイン、ポルトガルというイベリア半島の国は中世的な王権国家であり、国内でさえ、ごく最近まで市民階層の台頭しない封建国家だっ

たのである。ここがより近代化された国家として成長するオランダ、フランス、イギリスと違うところなのである。つまり、スペイン、ポルトガルは、国王そのものが商人であることをやめようとしなかった。植民地貿易は大商人としての王室の独占で、そのやり方は平たく言えばやらずぶったくりの一方的な収奪で、植民地の開発には何の関心も努力も払わず、資本を投下することもなかったのである。

一五二一年、マヤ文明を滅ぼし、莫大な黄金を得た、典型的なコンキスタドールのエルナン・コルテスは「われわれは農夫のように働くために、やって来たのではない」という有名な言葉を吐く。

コルテスにしろ、インカを滅ぼしたピサロにしろ、イベリア半島からの征服者たちは、一獲千金、エルドラードを求めて新大陸に来たので、それ以外のなにものでもなかった。この伝統は脈々として現在まで続く。一九世紀のはじめ、ラテンアメリカが次々と独立したのは、現地生まれの封建土地貴族を中心とするグループが「これ以上、本国王室にふんだくられるのは叶わぬ。これからは本国抜きで、自分たちが儲けよう」と考えたからなのである。だから独立しても、収奪体制はなにひとつ変えなかった。為政者が本国王室から、現地の支配者に代わっただけで、まだまだ植民地の本質は変わっていない。

ラテンアメリカ全体に話をひろげるとややこしくなるから、ブラジルについて言うことにするが、こういう植民地型の国では、すべての人間活動が政治に従属する。政治が万能であり、経済も社会も文化も学術も政治に従う。そして政治権力を握る者は、地方でも中央でも常に大地主を中心とする古いタイプの支配者層なのである。大地主が政権を掌握している国で、地主にマイナスになるような徹底した農地解放など出来る道理がない。これは特に東北ブラジルや中西ブラジルにあてはまる。

ブラジルの支配層だって、国の停滞の原因が所得配分の不公平なこと、農地解放をしないこと、教育制度、社会制度の改革を怠っていること、および汚職や利権、特権あさりを含めた自分たちの腐敗構造にあることぐらい知っている。知っているが、長年、植民地の収奪体制の中でうま味を享受していた連中は、おいそれとその特権を放棄するようなことはしない。旱魃に喘ぐ東北ブラジルで、公共の金で自分の土地に掘り抜き井戸を掘らせた下院議員がいるが、こういうことは支配者層、すなわち政治家が長年受けてきたあたり前の権利なので「なんでこんなことが非難されなきゃならないんだ」というのが支配者層の本音だろう。植民地体制の本質が支配者層の収奪にあることは事実だが、時代と共に収奪の方法が変わってくる。かつてのモノカルチャー時代のような、奴隷労働による経済収奪はも

う出来ない。金を持たぬ多くの貧民が相手では収奪のしょうがない。 そこで今度は国の予算を頂こうという発想が出てくる。あらゆる公共施設、制度を利用する方法だ。公共企業、設備、制度を立法化し、制度化し、予算をつけて運営するのが市会議員から国会議員あるいは行政区の長である政治家なのである。この過程でどういうことになるのか改めて言うまでもないだろう。コレラがはやれば消毒器納入で汚職が起きるし、エイズが蔓延すればコンドームの配付で不正が起きる。つい最近、男を帝王切開して、その手術代と出産費用を国に請求したケースがあって、モノ笑いのタネになったが、何が起こっても不思議でないのがブラジルなのだ。

汚職や不正、利権あさりはどこの国にもあり、珍しくはない。しかし、ラテンアメリカのように旧支配層がそのまま政治家になっている国では、政治家の力は強大、かつオールマイティなのである。また、それだからこそ政治家は選挙の時には、どんな手段を用いてでも当選しようとする。文盲の貧民にも、一六才の子供にも選挙権を与える。一六才に正当な判断が下せるわけはないのだが・・・・。

反米感情の弱いブラジル

アマゾンにリオ・ルーズベルトという名の河がある。現

在のロンドニア州のビリェナ市近くに源を発し、マット・グロッソ州を通り、アマゾナス州に入って、マディラ河の支流アリプアナン河と合流する全長一〇〇九kmのかなりの大河である。この名前はアメリカの元大統領だった、セオドア・ルーズベルトが一九一四年二月二七日から四月二六日まで、ブラジルの誇る探検家で職業軍人のロンドン大佐（後に元帥）と共に行った大冒険旅行に因んでつけられたものである。この河は今でも未開の状態を保っているが、当時は調査も探検もまったくなされておらず、〝疑惑の河〟という名称がつけられていた。

この辺りの地理に詳しいロンドン大佐も、この時までこの河がアリプアナン河と合流するのか、ジパラナ河と合流するのか、はたまたマデイラ河に直接流れ込むのかわからなかったのである。河下りの冒険は六隻のカヌーで五九日間かけて行われ、無事アリプアナン河との合流点に達したのだが、現職でないとはいえ、アメリカの元大統領がこんな危険を冒したことに驚かされる。前代未聞だろう。

この辺は未開のインジオが多い上、浅瀬や急流が多く、どんな危険があるのか、案内のロンドン大佐でさえはじめての旅で予測がつかなかった。T・ルーズベルトはこの時の冒険旅行をＴｈｒｏｕｇｈ　ｔｈｅ　Ｂｒａｓｉｌｉａｎ　ｗｉｌｄｅｒｎｅｓｓ（ブラジルの荒野を旅して）という本に書いている。ルーズベルトは多芸な人で、伝記作

家、歴史家としてもいくつかの著作を残している。

筆者はルーズベルトの冒険にも感心するが、それよりもよくブラジルが招待し、最高の待遇でもてなしたことの方が不思議だった。T・ルーズベルトはラテンアメリカではもっとも好まれない人物の一人だからである。ラテンアメリカの反米感情やアメリカ嫌いは現在でも相当なものだが、これは多分にルーズベルト大統領がモンロー主義の拡大解釈をひっ下げて登場したことが発端になっている。このところを説明しょう。

モンロー主義、モンロー・ドクトリンというのは、一八二三年一二月、アメリカ合衆国の第五代大統領ジェームス・モンローが、議会に対する年頭教書の形で示した一種の外交方針宣言である。

内容は二つの骨子から成っている。

①ヨーロッパ諸国はアメリカ大陸にこれ以上新しい領土を持つべきではない。

②ヨーロッパ諸国はアメリカ大陸諸国の内政に干渉すべきでない。

①の方は当時アラスカを領有していたロシアの南下を防ぐためであり②は独立したばかりのラテンアメリカ諸国にヨーロッパ諸国が介入するのを防ぐための警告なのである。

この時代、アメリカにそれほど実力があったわけではな

く、単なる一方的な外交宣言にすぎなかったのだが、イギリスがこの宣言を認めたために、他の国もなんとなく黙認する形になってしまった。

これでアメリカは一応新大陸における盟主みたいな立場に立つのだが、その後アメリカはメキシコとの戦争、南北戦争、スペイン戦争と内外の戦争が相つぎ、二〇世紀に入るまで自分のことで手一杯だった。

一九〇一年、第二六代の大統領となったセオドア・ルーズベルトは、新しいモンロー主義を打ち出し次々とそれを実行に移していく。一九〇三年、パナマをコロンビアから独立させパナマ運河地帯の租借権を得たり、債務不履行に陥ったベネズエラにイギリス、ドイツ、イタリアが干渉すると、武力をちらつかせて牽制する。また、一九〇四年にはドミニカ、ハイチ、キューバ、ニカラグァに軍事介入もしている。ルーズベルトの論は「ルーズベルト原理」として知られているが、要約すれば次のようになる。

「モンロー主義によって新大陸を守ったのであるから、ラテンアメリカ地域内で問題が発生した時はアメリカがすべての責任を負う義務がある。そのためには警察力を行使することもやむを得ない」

かなり露骨なアメリカの権益擁護政策である。これに対して多くのラテンアメリカ諸国は猛反発をするが、アメリカは実力行使で抑えてしまう。ところがブラジルだけは、

一八八九年の共和制移行以来、アメリカとの関係が良くなり、一九一〇年、リオで開かれた第四回汎米会議では、アメリカのモンロー主義を称賛する決議案を提出したほどだった。さすがにこれは通らない。

T・ルーズベルトのアマゾン冒険旅行は、こうした背景の中で実現したものである。なるほど歴史というものは因果関係があるものだ。ブラジルは第二次世界大戦中も、フェルナンド・デ・ノロニャ島をアメリカ軍の基地として提供している。ブラジルにも反米感情はかなり見られるが、他の中南米諸国ほど強くはない。軍事介入されたことがないからかも知れない。

愛国心薄い〝よそもの〟集団

これはよく、ブラジルの古い日系人が議論することなのだが、「ブラジルは昔と比べて、良くなったか、悪くなったか」という話題がある。いろいろな意見が出てくるが、悪くなったという人がほとんどで、その一つの例証として治安の悪化を指摘する。そして「三〇年前は酔っ払って、夜中にサンパウロの街をうろついても、別に危険はなかった」というようなことをつけ加える。

たしかに、治安という面だけに限って言えば、現在の惨

状は目を覆うばかりである。あらゆる犯罪が、あらゆる場所で横行、跋扈している。都市型の犯罪（誘拐、強盗、ひったくり）は、かつてはサンパウロやリオのような大都会だけのものだったが、最近は全国的に拡散しており、田舎の町だからと油断しているとひどい目に遭う。特にこの頃は、貧民、難民の流れ込んでいるアマゾンの都市が危ない。

一九九三年二月、アマゾンのロンドニア州の首府、ポルトベーリョ市で警察官のストが起きた。

無警察状態になり、治安維持の見通しが立たなくなったため、州知事は大統領に軍隊の出動を要請、大統領はこれを受けて国境守備隊をポルトベーリョに急行させ、軍隊に治安維持を移管した。軍隊と警察では所属も命令系統も違うのだから、この措置は無茶な話なのだが、一種の超法規措置であり、やむを得ない。最近のポルトベーリョの治安は最低で、特に未成年による集団犯罪がひどい。

この町には五〇人を単位とする少年犯罪グループが一〇組あって、手当たり次第、通行人を襲ったり、商店を掠奪したりする。取締りは当然警察の役目だが、ここの警察官たち、安給料の上、二カ月も三カ月も遅配となっているから、さっぱりやる気が起きない。相手は未成年とはいえ、武器を持った、餓狼のような少年たち。いつ警官がやられるかわかったものではない。こんな危険な相手に、月給も

ロクに貰わぬ警官が命を張って立ち向かう道理がない。
ロンドニア州は、ブラジルでも有数な危険地帯だが、パラー州南部も無法地帯。セーラ・ペラーダ金鉱やカラジャス鉱山に近い地方のレデンソン、リオ・マリア、シングアーラ、ラーゴ・アズール、ツクマンなどの町だ。いずれもガリンペイロ（金堀り人夫）が集まり、人口が一挙に膨れ上ったところ。こういう町は行政機能が人口増加に追いつかないから、無法、無秩序状態になるのは避けられない。
ブラジルが悪くなったという論者は、治安の悪さだけでなく、政治家のモラルの低下と、そんなブラジルに愛想をつかして外国に出ていったり、あるいは帰国する人間の多さを指摘する。なるほど統計が出ないからはっきりした数字はわからないが、現在ブラジルから外国に出稼ぎに行っている人間の数は大変なものだろう。中には再びブラジルに帰ってこない人間もかなりの数に達するに違いない。もともと多民族国家のラテンアメリカは、旧世界において見られるような、憎悪と敵意をむき出しにした民族抗争もない代わりに、民族国家のような強い愛国心も持っていない。言うなれば、ラテンアメリカでは、ネイティブのインジオ以外はすべて「よそもの」で、それぞれ独自の文化を持って外部から来た人間なのである。
一九世紀の半ばから、ブラジルには各国移民が入る。移民の目的は、はっきり言って金儲けである。イタリア人だ

ろうと、ドイツ人だろうと、日本人だろうと、これは等しく同じ。ブラジルにいるどの民族にとっても、ブラジルは「父祖の地」ではないから、ブラジルが経済不況で先の見通しが立たない、となれば、比較的容易に移民や移民の子弟はかつての父祖の国にUターンしてしまう。

現在、ブラジルから日本に出稼ぎに行っている者の数は一五万人、そのうち半数は定住希望と言われている。二世や三世が日本に定住しても、逆カルチャーショックに苦しむことは自明の理。しかし、その連中が日本で結婚して生まれる子供が成人すれば、これは正真正銘の日本人になる。戦前、一世移民が出稼ぎのつもりでブラジルへ来て、果たせなかった日本への帰国を二代、三代、四代と継ぎ足して完結させるということだ。

ブラジルはまだ本当のブラジル人をつくっていない。ブラジル生まれの各民族子弟をブラジル人と称したところで、共通の価値観を持つブラジル人はかんたんにはつくれない。カーニバルやサッカーだけではダメなのだ。まあ、しかし、こういう植民地体質だからこそ、各民族同士、干渉はしないし、異文化も認めているから、何をしようと文句は言われない。これが日本のような同質社会の息苦しさ、煩わしさと比べて、かけがえのない良さにもなってくる。ブラジルが良い、悪いと言っても、植民地体質という、一つの貨幣の表と裏にすぎない。

市民層抬頭で変化の兆し

一年一年の変化は大したことはないが、一〇年、二〇年を一つの単位として捕らえると、ブラジルもかなり変わっている。

ＩＢＧＥ（ブラジル地理統計院）の年鑑でも、一〇年単位で数字を拾うとその変化がよくわかる。

例えば一〇年前に義務教育である初等教育を卒業する生徒は、第一学年に入学した生徒の一五％だった。二〇年前は一〇％にすぎなかった。ところが一九九〇年の第八学年卒業者は一年に入学した生徒の二六％となっている。これは全国平均だから、当然、地域によるバラつきは出てくる。サンパウロ州を含む南東ブラジルだけなら、四〇％に達するのに対し、東北ブラジルは一八％にすぎないという具合である。変化がないように見えても、初等教育は、少しずつではあるが確実に国民の間に浸透しつつある。

この種の統計のうち、識字率調査の数字は、正直言ってあまり当てにはならない。字が読める、書けると言っても、一体どの程度の文章が読めるのか、書けるのか、よく分からないからである。

そこへいくと、第八学年の義務教育を卒業した者が何人で、全国民の何％に相当するという数字は、明らかに一つ

の指標となる。第八学年を卒業した人間なら、どの程度の教育水準を有するか、客観的にはっきりしているからである。ついでに言うと、ＩＢＧＥの統計は人種別にも出ており、白人、黒人、褐色（混血）、黄色その他の４種に分けられている。アメリカでこんな人種差別につながる公式統計を発表したらえらいことになる。それに人種間の雑婚化が進んでいる現在、こんな分け方で整理できるはずがない。ずい分いい加減な分類だが、おかげで少数民族であるアジア人種についての数字は、かなり正確につかめる。

アジア人種を他の人種と混同することはあまりあるまい。アジア人種には、中国（台湾）系、韓国系と圧倒的多数の日系が入る。参考までに数字の一部を紹介すると、幼稚園から大学院までの在学者総数三七〇〇万人の〇・六％しか占めない黄色人種の、大学以上の在学率は三・六％で、断然群を抜いている。また、二四才から二九才までのすべての人間が学校で履習した年数は、白人七・七年、黒人五年、褐色五・四年、黄色一二・六年と、これまた飛び抜けて高学歴となっている。日本民族は貧乏から出発しても、旧奴隷層のような意識の低いマージナルな労働者にはならなかった。

それは基本的に勤勉、上昇志向という資質があり、更に伝統文化がしっかりしており、教育重視の理念があったからである。

これは、同じ儒教思想を考え方の中心におく、中国（台湾）、韓国移民にも同様のことが当てはまる。台湾、韓国系の大学進学率も高率だ。しかし、同じ移民でも数的に多い、イタリア移民などは、必ずしも教育重視の考え方は持っておらず、親が子供に進学を強要することはない。

とにかく、筆者の考えでは、八年間の義務教育を終えた者は、ブラジル経済を構成する人的資本としての、有資格だと思う。つまり市民階層として生産にも寄与するし、消費市場も構成する、義務と権利を有した一人前の国民ということである。この層が着実に増えているということは、一方で治安の悪化、貧民の全国拡散というようなマイナス要因があるにせよ、ブラジルの将来に明るさを見込める大きな要素にあげることが出来る。

政治家の腐敗、不正、汚職、利権あさりは、相変わらずマスコミを賑わしているが、これとても、あまり目に余ると現職の大統領でも弾劾裁判にかけて罷免されるようになってきた。ブラジルだけではないから、世界的な風潮かも知れぬが、少なくともこんな例は過去にはなかった。ブラジルでは汚職や不正で政治家が罪に問われることなど考えられないのが〝常識〟だったのだ。

最近リオでアングラ経済のドンである、ビッシェイロ（不法賭博屋）の胴元一二人が一斉に検挙された。これなどもまず前代未聞だろう。ビッシェイロが違法な存在であ

ることぐらい、誰でも知っている。また、リオのカーニバルの華麗なエスコーラ・デ・サンバのディスフィーレも、ビッシェイロの胴元がパトロンとなって、金を出しているのもこれまた周知の事実。警察はこれまで、知っていても手を出さなかった、というより出せなかったのである。だから公然とやっていたし、たまに捕まるのは手先の三下で、胴元に累のおよぶことは決してなかった。今回の胴元の一斉検挙が、どのような情況、背景で強行されたのかは知らぬ。が、なにか大きな流れが時代を変えつつあるのかも知れない。ただ、ブラジルの場合、あまり過大な期待をかけていると、最後にはどんでん返しで、裏切られるケースが多い。旧態依然たる政治家の意識は、そうかんたんに変わるはずはないと考えた方が無難。

〝いけにえ〟に狙われる日本

今どき人種差別など問題にならぬはずなのだが、実際はそうでもない。南アフリカの人種間題は依然深刻だし、ドイツで発生しているニューナチスのトルコ人迫害も大変な問題となっている。ブラジルでも南部で起きているパンパ共和国独立運動は、必ずしも人種差別だけが理由でないにしても、人種間題が根底にあるのは事実。

人種差別は古くて新しい問題で、一八四三年に設立され、人種差別を推進する中心機関となった「ロンドン人類学協会」は、何故白人が優れ、非白人が劣等かを人類学、人種学、骨相学、優生学などを総動員し、「科学的」に証明しようとした。なんら根拠のないバカ気た「学説」であることは、現在、日本をはじめとする東アジア諸国の目覚ましい経済成長ぶりを見ても明らか。劣等の人種がこれだけ経済発展したことを、いったいどう説明するのだろうか。だが、この学説は欧米の白人にはうけた。白人の優越心をくすぐるからである。そして、主にパブリック・スクールの白人教師を中心に信奉されひろまっていく。

ブラジルでは戦前、ミゲル・コウト博士を核とする一派が同様の論議を展開、日本移民排斥を目的とした人種差別をあおったが、遂に一般化しなかった。

ブラジルには欧米におけるような人種差別はない。しかし、日本企業の経済進出や、日本政府の経済協力を「経済侵略」とみなされ、攻撃される危険はある。アンチ日本のグループは世界中どこにでもあるだろうが、ブラジルでもこうしたグループが意図的に煽動するケースはちょいちょいある。一九八四年には「セラード・日本占領」というおそろしく悪意と偏見に満ちた本が出版されたことがある。

大勢としてはこんなものは問題にならぬこと自明の理だが、こういう動きには充分注意する必要がある。

ブラジルの政府はまだまだポプリズモの影響を引きずっている。ポプリズモは一種のナショナリズムだから、常にスケープ・ゴート（いけにえの羊）を用意して「あいつが悪い」「あいつのせいだ」という、対象をつくっておく方が政治家には都合が良い。それが今まではアメリカだった。

「グリンゴ（欧米白人の蔑称）が悪いんだ」というのが、ラテンアメリカ諸国の共通した国民感情である。

たしかにアメリカという国は『嫌われる月光仮面』で、自分だけが正義で、しかも無謬と信じ、その信念を他国に押しつけ、強制しては反発を買っていた。最近はアメリカも財政的に苦しく、これまでのようにラテンアメリカの諸国に対して要らざるお節介をすることが少なくなった。特にブラジルにはそうである。ブラジルは間違っても社会主義革命などの発生する恐れはない。それにいくら経済援助をしようと、投資をしようと底無し沼のように、どこに吸い込まれるかわからない、という状態では、アメリカとしても積極的にかかわりたくないというのが本音。

ブラジルは一九七〇年代から、アマゾン開発に本腰を入れるようになる。マナウス自由貿易地区計画、ＳＵＤＡＭ（アマゾン開発庁）計画で、各種の企業誘致が実現する。八

〇年代に入るとアルミのアルブラス、ツクルイ発電所、カラジャス鉱山、カラジャス～サンルイス鉄道といった、大規模なナショナル・プロジェクトが次々に着手されていく。アメリカも最初は、プロジェクトへの参加意向を示していたのだが、主力のＵＳスチール社が先行きに不安を感じ、一九七七年、一切の権利をブラジル国営企業のリオドーセ社に譲渡、完全に手を引いてしまう。

この後を受けたのが日本である。皮肉なことにＵＳスチールが撤退した直後に、カラジャス鉱山が単に鉄鋼石だけでなく、マンガン、銅、ボーキサイト、ニッケル、錫、金、銀、タングステンなどを埋蔵した『宝の山』であることが判明する。アンチ日本派の政治グループは、ここぞと「今度はグリンゴに代わってジャボネースが出てきた。ジャボネースに気をつけろ」のアジテーションを行う。スケープ・ゴートを求めるポプリズモの常道である。もちろん、こんなものをおそれる必要は毛頭ないが、常に背景に気を配っていることが大切。幼稚な方法ではあっても、人気とり政策として、意外な効果を発揮することもあるのだ。

サンパウロ市の前女性市長は、在任時代、市内のバスをタダにする政策を発表して、貧困階層を喜ばせ、逆に良識ある市民を嘆かせた。幸い、実現しなかったから良かったものの、いったいこの人は「受益者負担」という、経済の

大原則をどの程度理解しているのだろうか。大衆を操作するのに手段を選ばないというのがラテンアメリカにおけるポプリズモで、これは場合によって大変怖い。

貴族趣味志向の上流階層

もう今ではそんなことはなくなったが、以前、ブラジルの大学や専門学校は卒業式に証書と共に宝石（貴石）入りの指輪を授与した。学科別に石の色が違っていて、これをつけていると何科を出た学士様か一目でわかる仕組みになっていた。大学卒業者の少なかった時代のステータス・シンボル（社会的地位の象徴）である。

ブラジルの上流階級は地位や称号に対する執着が強く、地位や身分を誇示する外見、外装の華やかさを尊ぶ。ブラジルでは犯罪者でも大学卒業者は特別扱いで、留置場も一般と異なり個室である。

もう一つ例をあげよう。ブラジルは熱帯、亜熱帯気候圏にあるから、南部や、サンパウロ、ベロオリゾンテ、ブラジリア、ゴヤニヤなどの高地の都市以外は暑い。暑いところでは、とてもスーツ（背広）など着ていられないから、一般の人はシャツだけで過ごす。だいいちスーツなど持っていないのが普通なのである。こういうところでも、スー

ツを常用する〝人種〟がいる。まずは政治家、高級官僚、銀行、大会社の支店長、弁護士などである。暑い地方で背広を常用するためには、オフィースが個室で冷房されていなくてはならない。また出かける時は車だろうが、この車も冷房車であることが必要である。このように、スーツ常用は経費がかかることであり、誰でも出来るというものではない。誰でもが出来ないからこそ、スーツがステータス・シンボルとして機能するのである。

住民はスーツを着ている人を〝ドットール〟（ドクター）と呼ぶ。

かつてブラジルに入植したポルトガル人が、すべて上流階層だったわけではむろんない。むしろ逆で、人口過少に悩むポルトガルは、食いつめ者だろうと、犯罪者だろうと、お構いなしに人を集めて送った。だから、ブラジルに来たポルトガル人は、一部の例外を除けば、下層階級の出身者が多かったのである。ところがおもしろいことに、ポルトガルという国は王制の国でありながら、貴族から貧民に至る社会階層、というか身分制度の壁がきっちり確立していなかった。インドのカースト制や、江戸時代の日本の士農工商的な、生まれついての固定した身分制度がない。そのため低い身分でも金を儲ければ、どんどん階層上昇が出来たのだ。

これがブラジルに持ち込まれた。インジオや黒人奴隷を

酷使することで農場主になったポルトガル入植者は、全員が貴族を志向するようになる。立居振舞いの日常生活から、社会的な行動様式まで、すべて貴族のやり方を模倣、かつての身分を忘れてしまう。つまり成り上がり者なのだ。貴族を志向したファゼンデイロ（大農場主）は当然のことながら、労働とは無縁である。気位は高く、身分にふさわしい外装に凝るようになる。

「重々しさ」「品位のある言葉」「優雅な動作」「威厳」など、貴族的な態度が尊ばれ、自分の意志に重きをおくようになる。反対に、他人から押しつけられたり、規則規律を強制されることをひどく嫌う。怠惰が美徳、規律を守らない、外見を飾る、尊大というブラジル人の特質は、イスラムの影響の他にも、こうした貴族志向趣味が、一つの要因になっている。その代わり、農場主の子弟は、子供の時から自己主張の訓練をさせられる。いかに明瞭、明晰に自己の主張を表現し、相手を説得し、感動させるかの技術を磨くのだ。

現在でもブラジルの政治家は演説がうまい。前の大統領コーロルなどはその典型で、身振り、手振り、拳を握って天を衝き、地を叩いて絶叫するパフォーマンスは抜群だった。こういうことは、子供の時から訓練していないと、とても出来るものではない。まず日本人にはちょっと真似出来ない。ＴＶの討論会を見ていても、出席者は口角泡を飛

ばして論じているが、よく注意して聞いていると、発言者はそれぞれ一方的に自分の主張を述べているだけで、相手の立場や意見などはまったく無視している。

ブラジルのような多民族国家では、はっきり言葉で相手を言い負かすことが大切で、そのためには大声、大仰な身振り、胴喝的態度が有効なのだ。日本のように、相手の立場や意向を〝察する〟ことはしないし、その能力もない。「言外の言」「理外の理」「行間を読む」「以心伝心」などは理解不能なエイリアン（異星人）のたわごとでしかない。この違いは文化の差である。

ブラジル人にとって公私混同は悪ではない。公益と私益は分かちがたく結びついている。公益をもたらさず、私利私欲に走るのは汚職だが、公益があり、それに伴って個人の利益が自然に出てくるのは当然の役得。汚職ではないから、別に非難の対象になるとは考えていない。

浄化変革は二一世紀に期待

さて、そろそろ、ブラジルがこの先どうなるのか、結論めいたものを出さねばならぬが、これがなかなか難しい。広大な可耕地、恵まれた気候、豊富な食糧、鉱物を含めた多様で豊かな自然資源という、プラス面もむろんある。初

等教育も徐々に浸透している。多民族国家でありながら民族紛争のないのもメリットだ。人口一億五千万人というのも国土の広さから見て、まず妥当なところ。

要するにブラジルという容れものは、素材としては決して悪くない。というより、こうしたハード（外的構造）面では、世界の上位にランクされる国といってよい。

問題はハードを動かすソフト。ソフトというのは心であり、基準であり、行動様式である。モラル（道徳）とかエシック（倫理）も大いにかかわってくる。だが残念ながらこの面では早急な改善の見通しは立たない。長年、一獲千金方式を続けてきたブラジルが、急にマックスウェーバー流の、額に汗して働き、コツコツ資本を蓄えるのが神のみ心に叶う、というやり方もとれないし、さりとて儒教思想にもとづく勤勉さも身につかない。それに、もともと労働を嫌うイスラム原理を継承しているから、勤労に対する価値観などはまったく持っていない。

ブラジルは資本主義国というより、どちらかというと社会主義国に近いところがある。その証拠に、やたら国営企業が多い。重要部門はたいてい国営企業だ。現在、七三万人の従業員を抱える一六三社の国営企業（州も含む）は、五〇億ドルの赤字、負債の利子だけでも六〇億ドルという、ひどい状態になっている。おそろしく非効率の企業である。一般の企業ならとっくに破産だが、国営企業の経営

者は平然たるもの。赤字が出れば政府が補填するし、破産の心配がないからである。

国営企業の民営化が叫ばれて久しいが、ウジミナス以外、なかなか進まない。民営化の進まないのは、国営企業で利益を得ている既得権益保有者の反対によるもの。国営企業は規模が大きく、企業の管理権を握る人間は絶大な権力を持っている。給料の査定、人事、資材購入、製品販売など、権力者が一手に動かすことが出来る。これがモラル・ハザード（節度の低下）現象につながり、腐敗、不正、汚職、利権を生む構造に結びつく結果となる。

一部の学者の間では、ブラジルを含めたラテンアメリカは、資本主義でも社会主義でもない、もっと危険な「第三の道」に入るおそれがあると指摘している。資本主義は機会の平等をめざし、社会主義は結果の平等をめざす。ところが、ラテンアメリカは旧植民地なるが故に国家機構が未整備で、それだけに政治家個人の影響力を行使する余地が大きい。これが腐敗、汚職構造の発生原因だが、この傾向が更に進むと、支配者層と結びついた、マフィア的企業による経済支配が起きる危険が生ずる。これが暗黒の「第三の道」というわけだ。

こういう危険性もなきにしも非ずだが、ブラジルの場合、まずそうはなるまい。民主主義が成熟しているなどとは義理にも言えたものではないが、危機に際してフィード

バック・システム（歯止め装置）が作動するぐらいには成長している。コーロル大統領につけ入って、各界を支配し、集金機構を確立しようとしたＰＣ・ファリアスのやり方は、まさにマフィア産業の名にふさわしいが、結局大統領は罷免、ＰＣ・ファリアスも罪に問われた。良識の勝利だ。世界の情勢がリアルタイムでわかる情報社会にあって、ブラジルだけが世界政治、経済の埒外でいられるわけはない。ブラジル発展のために、何らかの方法を講じなければという切実な、浄化、変革運動が起きてくるのも必然なのだ。

ブラジルがこれまで曲がりなりにも発展してこれたのは、一九世紀半ばから入った近代の各国移民と移民の母国からやって来た進出企業の働きに寄るところが大きい。戦後はとくに、日本企業のブラジル社会におよぼした影響は大である。日本からの進出企業は、近代設備の生産効率の良い工場をつくって、実際に稼働するのだから、どんな人間にも優劣さがわかってしまう。ここに働くブラジル人労働者は、こうした企業に職を得ると同時に、日本の生産システムがどんなものかを身をもって体得する。工場の熟練労働者が多ければ多いほど、市民階層、中間階層がひろがり、経済は成長する。しかし誰でもが熟練労働者になれるわけでなく、少なくとも初等教育八年終了程度の教育が必要だ。

結局、ブラジルの向上、発展、改革は教育の普及以外ない。ただ、教育の成果は一〇年、二〇年というロングスパンが必要だから二〇世紀中はまず無理、二一世紀の半ばまでにはなんとかなるかも知れぬ。それまでは微速前進を続けるより方法がない。

あとがき

この長い連載（サンパウロ新聞・九二年三月から九三年七月）の間にブラジルの政治は目まぐるしく変わった。若き大統領だったコーロルが、汚職、不正で弾劾裁判にかけられ、罷免された。大臣が何人変わったのかなどは、もう数えることも出来ない。政治家の不正、堕落は相変わらず、インフレは止まるところを知らず、治安は悪化の一途、通常の銀行強盗など、新聞記事にもならない。

八方塞がりで、良くなる見通しなど、今のところまったく立たない。

ところがである。そんなブラジルなら、さっさと見切りをつけて日本に引き揚げればよいじゃないか、といわれる

と「ちょっと待ってくれ」ということになるから不思議である。「そうは言っても、ブラジルはこれでなかなか良いところがあるんだよ」と、本気で反論したくなる。我ながら矛盾であり、アンビバレンツ（二律背反）だということは承知している。だが、感情などというものは所詮そんなものだろう。すっきり割り切れる方がむしろおかしいのかも知れぬ。矛盾といえば、ブラジルそのものが矛盾だらけで、混沌の世界なのだ。

冒頭にも書いたが、「ブラジル学」をやりはじめてから、ずいぶん長い時間が経つ。「ブラジル学」というのは、「シナ学」同様の謂で、別にパロディではない。ブラジルのように多元的で、わけのわからぬ国は、政治とか経済面からだけでなく、もっと総合的な「ブラジル学」のモノサシを使わないとはかれないのである。この題材で一度ブラジルを書いてみたかった。ブラジルという大きな素材を手をかえ品をかえ、さまざまに料理して、これがブラジルだということを明らかにしたかったのである。多少は自信もあった。長年ブラジルを歩いて体験した現象や現実、あるいは得た知識をつなぐと、それらしきものが見え、漠然とながら歴史の因果関係が読み取れるからである。

そうは言っても、確たる自信だったわけでもなく、またきちんと構造がまとまっていたわけでもない。動きはじめれば何とか成るだろう、いわば見切り発車の形で書きはじめ

たのである。この判断は甘かった。実際に書きはじめると、その難しいこと、次から次にわからないことが出てくるのだ。

これには正直言って音を上げた。こういう大きなテーマに取り組むと、下手をすると八幡の薮知らずに入り込むようなもので迷路をぐるぐる回って出られなくなる危険がある。もっと対象を絞ればよかったなと何度思ったか知れない。

だいたい「ブラジル学」などというタイトルそのものがおこがましいのである。こういうタイトルでものを書くなら、五人か八人ぐらいの書き手が集まり、それぞれの専門分野を執筆するのが一番よい。とは言うものの、このやり方にも問題はある。中心となる編集者が必要なのだ。書き手を集め、文体や書き方の約束を統一するのは、かんたんには出来ないし、時間もかかる。この連載は一人で書いた「ブラジル学」だから、自分の得意でない分野は勝手に外している。こういうところは、一人で書く場合の利点である。

本来なら「ブラジル学」には、音楽とか美術とかは欠かせない分野である。「ブラジルのサッカーはサンバである」と言われるように、アフロリズムは国の隅々にまで浸透している。アフロ音楽をオリジンに持つブラジル音楽が、国民性の形式の上でおよぼした文化的影響は非常に大きいは

ずで
ある。ところが、残念ながらこの方面はさっぱり不案内なのだ。それなら、むしろこうした部門は外し、誰か造詣の深い人が書くのを待った方が良かろうと、勝手に解釈して省略した。

この連載は論文ではないから、一部を除き資料をあげることはしていない。が、取り上げた内容はいずれも裏付けのあるもので、事実関係や数字も原典や資料にあたり、確認している。むろん、間違いがないとは言えぬが、資料として利用出来るよう配慮したつもりである。まあ、精一杯やったつもりで、筆者の能力はこんなところなのだ。多少ともブラジルを識るために役に立てば幸いである。

なお、連載の第一回に「筆者のタイムリミットの問題もあり……」と書いたら「何か病気でも……」と聞かれたのには慌てた。業病か不治の病にかかった患者の印象を与えたらしい。これについて一応釈明しておく。

実は筆者は、生薬学を専門にしている。生薬でわからなければ薬草と言い換えてもよい。フローラ（植物相）が豊かで、先住民族であるインジオがいるブラジルは生薬の宝庫なのである。長年、生薬のフィールドワークをやり、調査した資料も手許に山積している。これを整理して、「ブラジル生薬辞典」とか「ブラジル薬草図鑑」のようなものをまとめねばならぬ仕事が残っている。これは研究者とし

ての責務なのだ。

日本の研究者が、ブラジルの生薬を調べる際、一番のネックは、ブラジル語とツピー・グワラニー語という、二重の言葉の障壁。この壁さえなければ、日本における生薬の研究が飛躍的に進むことはたしかなのだ。生薬辞典をつくる作業は何年かかるかわからぬがまず、最低五年はかかるものと見ている。これに早く取りかからねばならぬから「ブラジル学」を書く時間にタイムリミットがあると言ったまでである。他意はない。

長い間、気紛れの「ブラジル学」につきあって下さった読者に心から感謝の意を表する次第。

また、今回の出版も前回の拙書『パンナタール』同様、無明舎出版の安倍甲さんにお願いすることになった。感謝したい。

ブラジル各都市の人口・気温・降雨量

(IBGE, Anuário Estafistico do Brasil 1990,1991より)

都市	人口(千人)	緯度(南緯)	海抜高度(m)	年平均気温(°C)	平均湿度(%)	年降水量(mm)
ポルトベーリョ	286	8°45′	85	25.3	86	
リオブランコ	196	9°58′	152	24.5	83	
マナウス	1,010	3°06′	92	26.8	82	2,841
ボアビスタ	142	−2°49′	85	28.1	77	
ベレン	1,244	1°27′	10	25.9	87	3,752
マカパ	179	−0°02′	16	26.6	86	2,905
パルマス	24	10°16′	260	24.3	81	
サンルイス	695	2°31′	24	24.4	87	2,786
テレジーナ	598	5°05′	72	26.6	76	1,788
フォルタレザ	1,765	3°43′	27	26.5	80	1,856
ナタル	606	5°47′	30	26.4	77	
ジョンペッソア	497	7°06′	47	26.5	78	
レシフェ	1,296	8°03′	4	25.7	80	2,847
マセイオ	628	9°39′	16	25.0	78	3,147
アラカジュ	401	10°54′	4	26.1	80	1,929
サルバドル	2,072	12°58′	8	25.4	82	2,960
ベロオリゾンテ	2,017	19°49′	858	22.1	68	1,096
ビトリア	258	20°19′	3	24.4	77	1,212
リオデジャネイロ	5,473	22°54′	2	23.9	79	
サンパウロ	9,626	23°32′	760	19.3	77	1,570
クリチバ	1,313	25°25′	934	16.5	83	1,450
フロリアノポリス	254	27°35′	22	20.5	81	1,677
ポルトアルグレ	1,263	30°01′	7	19.4	75	1,225
カンポグランデ	525	20°26′	532	22.3	73	1,473
クヤバ	401	15°35′	176	25.5	78	1,789
ゴヤニア	920	16°46′	749	23.8	62	1,364
ブラジリア	1,598	15°46′	1,171	20.8	66	1,319

ブラジル連邦各州の人口と面積

(IBGE, Anuário Estafistico do Brasil 1990,1991より)

地域	略号	面積(km²)	比率	人口	比率
ブラジル全土		8,511,996.3	100	146,917,459	100
北部		3,851,560.4	45.3	10,257,266	7.0
ロンドニア	RO	238,378.7	2.8	1,130,874	
アクレ	AC	153,697.5	1.8	417,165	
アマゾナス	AM	1,567,953.7	18.4	2,102,901	
ロライマ	RR	225,017.0	2.6	215,950	
パラー	PA	1,246,833.1	14.7	5,181,570	
アマパ	AP	142,358.5	1.7	288,690	
トカンチンス	TO	277,321.9	3.3	920,116	
北東部		1,556,001.1	18.3	42,470,225	29.0
マラニオン	MA	329,555.8	3.9	4,929,029	
ピアウイ	PI	254,655.2	3.0	2,581,215	
セアラ	CE	145,693.9	1.7	6,362,620	
リオグランデドノルテ	RN	53,166.6	0.6	2,414,121	
パライバ	PB	53,958.2	0.6	3,200,677	
ペルナンブコ	PE	101,023.4	1.2	7,122,548	
アラゴアス	AL	29,106.9	0.3	2,512,991	
セルジッペ	SE	21,862.6	0.3	1,491,867	
バイア	BA	566,978.5	6.7	11,855,157	
南東部		924,266.3	10.8	62,660,700	42.6
ミナスジェライス	MG	586,624.3	6.9	15,731,961	
エスピリトサント	ES	45,733.0	0.5	2,598,505	
リオデジャネイロ	RJ	43,653.3	0.5	12,783,761	
サンパウロ	SP	248,255.7	2.9	31,546,473	
南部		575,316.2	6.7	22,117,026	15.0
パラナ	PR	199,323.9	2.3	8,443,299	
サンタカタリーナ	SC	95,318.3	1.1	4,538,248	
リオグランデドスール	RS	280,674.0	3.3	9,135,479	
中西部		1,604,852.3	18.9	9,412,242	6.4
マットグロッソドスール	MS	357,471.5	4.2	1,778,741	
マットグロッソ	MT	901,420.7	10.6	2,022,524	
ゴヤス	GO	340,165.9	4.0	4,012,562	
ブラジリア連邦区	DF	5,794.2	0.1	1,598,415	

●ブラジル歴史年表

年代	事項
一四九二年	コロンブス西インド諸島到着（一〇月一二日）。
一四九四年	トルデシリャス条約により、将来発見される領土に対するスペイン、ポルトガルの分割をとりきめる。
一四九八年	バスコ・ダ・ガマ、インドのカリカットに到着。
一五〇〇年	ペドロ・アルバレス・カブラルの船隊、インドへ赴く途中ブラジルを発見。
一五〇一年	パウ・ブラジル（ブラジルの木）交易で、ポルトガル王室政府、独占を宣言。
一五〇三年	ゴンサロ・コエーリョによる第二次ブラジル遠征隊派遣。
一五〇四年	ポルトガル政府、パウ・ブラジルの交易をフェルナンド・デ・ノロニャ伯爵に請負わす。
一五一五年	スペイン政府、ファン・ディアス・ソリスをブラジルに派遣してパウ・ブラジルを密輸。
一五一六年	ポルトガル政府、クリストボン・ジャックスをブラジル沿岸警備に派遣。
一五三〇年	貴族、マルチン・アフォンソ・デ・ソウザ、四〇〇人を連れてブラジル開拓のため到着。
一五三二年	マルチン・アフォンソ、サンビセンテ村を創設、砂糖キビ栽培開始。
一五三四年	ブラジルを一五のカピタニア（領土）に分割、世襲領主制を採用。
一五四九年	ブラジル初代総督トメ・デ・ソウザ着任。同時にイエズス会士マノエル・ダ・ノブレガ神父、布教のため着任。
一五五四年	マノエル・ダ・ノブレガ神父、ジョゼー・アンシェッタ修道士と共にサンパウロ・デ・ピラチニンガ村創設。
一五五五年	フランス軍リオのグワナバラ湾に侵入、シリジベ島を占領。
一五六七年	総督メン・デ・サーの軍隊、フランス軍を駆逐、この土地をサンセバスチォン・ド・リオ・デ・ジャネイロと命名。
一五七二年	ブラジルを南北二つの総督府に分け、北はサルバドール、南はリオ・デ・ジャネイロを首府とする。
一五七七年	二つの総督府制度を廃止、サルバドールに首府を戻す。
一五八〇年	ポルトガル、アヴィス王朝絶滅、ハプスブルグ王室のフィリップ二世により併合される。
一五八五年	最初のバンデランテス、インジオ狩りに奥地に。
一六一二年	フランス軍、マラニオン島を占領、サンルイス村を創設。
一六一六年	ポルトガル軍、マラニオンのフランス軍を駆逐、アマゾン河口にノッサ・セニョーラ・ド・ベレン要塞を建設。
一六二一年	ブラジルをマラニオン／グラン・パラー州とブラジル州に二分する。
一六二四年	オランダ、西インド会社の軍隊、サルバドール占領。
一六二五年	オランダ軍、ブラジル軍に敗れ、サルバドール撤退。
一六三〇年	オランダ軍、レシフェとオリンダを占領、サルバドールからレシフェ迄の海岸を支配、砂糖キビ栽培、貿易を行う。
一六四〇年	ポルトガル、スペインから再独立、ブラガンサ王朝はじまる。
一六四八年	バンデランテス、ラポーゾ・タバレス、アマゾン地方の大遠征。
一六四九年	第二次グロララベスの戦いでオランダ軍を敗る。
一六九三年	ミナスで金鉱発見。
一六九四年	一六三〇年から続いた逃亡奴隷のキロンボ、「パルマレス黒人共和国」絶滅される。
一七〇五年	一六八〇年にポルトガルがラプラタ河口につくったコロニア・デ・サクラメントをスペイン軍が占領（一〇年間）。
一七〇七年	ミナスでエンボアバスの乱起きる。
一七一〇年	レシフェでマスカッテの乱起きる。ポルトガル人とブラジル人対立。
一七一三年	ポルトガル／フランスのユトレヒト条約締結、アマパ地方、正式にブラジル領へ。
一七一五年	ポルトガル／スペインのユトレヒト条約締結、コロニア・デ・サクラメント、ブラジルに返還。
一七五〇年	マドリッド条約締結、コロニア・デ・サクラメントをスペインに、ミッソンエス地方はポルトガル領となる。

一七五五年　グワラニー戦争。イエズス会士に率いられたミッソンエス教化部落のグワラニー軍とスペイン／ポルトガル連合軍の戦い。インジオ軍全滅。
一七五九年　ポルトガルの首相ポソバル侯爵、ポルトガル領植民地からすべてのイエズス会士を追放。
一七六三年　ブラジル、ポルトガルの副王領となり、首都をリオに移す。
一七七七年　サント・イルデフォンソ条約により、スペイン、ポルトガルの国境を最終的に取り決める。
一七八九年　ミナスの陰謀発覚、二〇名逮捕、主謀者のチラデンテスことジョアキン・ジョゼー・ダ・シルバ・シャビエル一七九二年処刑。
一七九七年　バイアの革命運動発覚（アルファヤッテ革命）。
一八〇八年　ナポレオンに追われたポルトガル王室の一団一万五千人がブラジル移転。
ブラジル、鎖国政策を解き開国。
ブラジル初の新聞刊行（カゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ）。
リオに海軍兵学校設立。
一八〇九年　バイアに医学校設立（後のバイア医科大学）。
一八一〇年　イギリスとの通商条約調印。
一八一三年　リオに医学校設立（後のリオ医科大学）。
一八一五年　ブラジル、ポルトガル／アルガルベス連合王国に。
一八一九年　ポルトガルに憲法革命。
一八二一年　ドン・ジョン六世ポルトガルへ引揚げ。長男のドン・ペドロを摂政王子としてブラジルに残す。
一八二二年　五月一三日、ドン・ペドロ、ポルトガルの召還命令を拒否、ブラジルに留まることを宣言する。（フィコ宣言）
九月七日、ドン・ペドロ、サンパウロのイピランガの丘で独立宣言。一二月一日、ドン・ペドロ初代ブラジル皇帝に即位。
一八二四年　ブラジル帝国憲法発布。
アメリカ、他国に先がけてブラジル独立を承認。

一八二五年　赤道連合の乱（東北ブラジル独立運動）失敗。
一八二八年　ポルトガルとイギリス、ブラジル独立を承認。
一八三一年　最南部のシスプラチナ県、ウルグワイ共和国として独立。
四月七日、ドン・ペドロ一世、退位し、五才の末子アルカンタラ王子に譲位、ポルトガルに引揚げる。
ドン・ペドロ二世即位。三人の執政官による摂政政治。
一八三五年　南部にファロウピーリャ革命戦争起きる。イタリア人ジゥゼッペ・ガリバルジ参加。一〇年後に鎮圧。
パラーでカバナージェンの乱。二年間で死者四万人。
一八三七年　バイアでサビナーダの乱。
一八三八年　マラニオンでバライアーダの乱。
一八四〇年　ドン・ペドロ二世成人式。名実共に皇帝へ。
一八五〇年　二度目の奴隷貿易禁止令。
一八五一年　ウルグワイ戦争勃発。
一八五二年　ヨーロッパからの自由移民ブラジルへ。（最初はドイツ移民）。
一八五四年　ブラジル最初の鉄道（リオ―ペトロポリス）開通。
一八六四年　一一月、パラグワイ戦争はじまる。
一八六六年　パラグワイ戦争参加の奴隷兵士に解放恩典。
一八七〇年　パラグワイ戦争終結（ブラジル、ウルグワイ、アルゼンチン連合軍対パラグワイ軍）ブラジル最大の対外戦争。
一八七一年　ベント・リブレ法（奴隷から生れた子は自由人）成立。
一八八五年　六五才以上の奴隷を解放。
一八八八年　五月一三日、完全奴隷解放令（レイ・アウレア）。
一八八九年　一一月一五日、共和革命。デオドロ・ダ・フォンセッカ共和国臨時政府を組織。

一八九一年　一一月一七日、ドン・ペドロ二世と家族ヨーロッパへ亡命。ブラジル共和国憲法発布。初代大統領デオドロ・ダ・フォンセッカ元帥就任。
一八九六年　ドン・ペドロ二世パリで客死。バイアのカヌードスでアントニオ・コンセレイロを指導者とする住民とブラジル軍との戦い。二年間続く。住民の死者五千人。
一八九七年　リオ州ペトロポリスに日本公使館設置（代理公使珍田捨己）。
一八九九年　ペルー行き日本移民七九〇人、桜丸で横浜出発。二月二七日、スペイン人ルイス・ガルベス〝アクレ共和国〟樹立。一二月崩壊。
一九〇二年　アクレ領有をめぐってボリビアと戦争。
一九〇三年　ペトロポリス条約で、アクレ正式にブラジル領に。
一九〇八年　初の日本移民七八一名、笠戸丸でサントス着。
一九一一年　アマゾンのゴム景気頂点に。以後急速に衰退。
一九一二年　〝悪魔の鉄道〟マデイラ・マモレー鉄道開通。死者一万人を超す。
一九一三年　アメリカ二六代大統領セオドア・ルーズベルト、アマゾンを探検。
一九一四年　第一次世界大戦勃発。ブラジルはドイツに宣戦布告。
一九一五年　サンパウロに日本帝国・総領事館開設（初代総領事松村貞雄）。
一九二二年　ブラジル独立一〇〇年祭。
一九二四年　サンパウロで革命勃発。二四日で鎮圧。アメリカで排日移民の法案が議会を通過。七月一日実施。
一九二八年　リオ―サンパウロ道路開通。
一九二九年　アメリカの経済恐慌の影響でブラジルのコーヒー輸出が止まり不況となる。
一九三〇年　ゼツリオ・バルガス、軍の指示で革命に成功、ワシントン・ルイス政権を倒す。バルガス臨時政府を樹立。第二次共和制発足。
一九三二年　サンパウロ州、バルガスに憲法制定を求めて革命を起こすが、バルガス政府軍に敗れる。（護憲革命）。
一九三三年　憲法制定審議会開かれる。
一九三四年　外国移民二％制限法公布。六月一六日、憲法発布。
一九三七年　バルガス政府発足。バルガス大統領、クーデターで議会を封鎖、新国家体制（エスタード・デ・ノーボ）を宣言。一九四五年一〇月まで独裁政治をとる。
一九三九年　第二次世界大戦勃発。ブラジルは連合軍側で参戦。
一九四二年　一月二九日、ブラジル、日本と国交断絶。
一九四五年　ブラジル、日本へ宣戦布告。
一九四六年　日本の敗戦を信じない臣道連盟特攻隊、同胞テロを開始。
一九五〇年　バルガス三たび大統領に当選。就任は五一年一月。
一九五四年　バルガス大統領、リオのカテテ宮殿で自決。
一九五九年　東北ブラジル開発庁（SUDENE）設立。税制恩典による企業誘致。
一九六〇年　ブラジリア遷都。
一九六二年　アマゾン開発庁（SUDAM）設立。
一九六四年　左翼的なジョン・ゴラール大統領政権を軍部が革命で倒し、軍事革命政権樹立。以後二〇年間軍事政権。
一九六七年　マナウス・フリーゾーン経済特区（SUFRAMA）設立。工業誘致。
一九七四年　アマゾン横断道路一部開通。ブラジル〝奇跡の経済成長〟時代に入る。
一九八二年　財政危機深刻化。
一九八四年　イタイプー発電所、電力供給開始。
一九八五年　二〇年ぶりに民政移行。タンクレード・ネーベス大統領就任直前死亡により、ジョゼー・サルネ

一九八六年	イ副大統領昇格。
一九八七年	「クルザード・プラン」実施、物価凍結、新通貨発行。物価凍結解除、クルザード・プラン失敗。日系人の日本への出稼ぎはじまる。
一九八八年	新憲法制定。
一九八九年	インフレ率、年間五、〇〇〇%に達する。
一九九〇年	コーロル大統領就任、コーロル・プラン発表、預金凍結実施。
一九九一年	国家再建計画発表。民営化推進。
一九九二年	一二月、コーロル大統領、不正問題で弾劾裁判にかけられ罷免。イタマル・フランコ副大統領が昇格就任。
一九九三年	議員汚職、予算局汚職で政界は大揺れ。
一九九四年	レアル経済計画実施。新通貨はレアルになり、フェルナンド・エンリッケ・カルドーゾが大統領に選出される。

著者略歴

中隅　哲郎（なかすみ　てつお）

1936（昭和11）年東京都に生まれる。明治大学政経学部卒業。1959（昭和34）年渡伯。以来、新聞記者、商事会社勤務を経て、現在は㈱ウニペルツール顧問、ブラジル生薬研究所代表。著作に「ブラジルの経済生薬」「ブラジルの民間薬」「アマゾン学のすゝめ」「ブラジルのたべもの考」（以上「サンパウロ新聞」掲載）。研究論文に「パンタナールの動物分類」「ブラジルの民族構成とその文化的影響」「イスラムとブラジル」などがある。著書に『パンタナール』『ブラジル観察学』（共に無明舎出版）。

ブラジル学入門

定価二八〇〇円

一九九四年九月三十日　初版発行
一九九六年一月二十日　二　刷

著　者　中隅哲郎
発行者　安倍甲
発行所　㈲無明舎出版
秋田市広面字川崎一一二―一
振　替／〇二五七〇―五―四四八七
電　話／(018)三二―五六八〇
FAX／(018)三二―五一三七

印刷　株式会社熊谷印刷
製本　時田製本株式会社

© Tetsuo Nakasumi
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4－89544－126－1